



好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究 Ⅲ

2020

近代博物館形成史研究会



## 例 言

1. 本書は、平成 29 年（2017）度から科学研究費で推進している「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究」（基盤研究 B 研究課題番号 17H02025 研究代表 内川隆志）の平成 31 年、令和元年度の研究成果である。
2. 本書の編集は、内川隆志が実施した。
3. 本書に掲載した論文の執筆は、近代博物館形成史研究会メンバーの内川隆志（國學院大學研究開発推進機構教授）、三浦泰之（北海道博物館学芸主幹）、長谷洋一（関西大学文学部教授）、徳田誠志（宮内庁書陵部主席研究官）、鎌形慎太郎（國學院大學博士課程前期終了）による。
4. 本書に掲載した報告「大英博物館所蔵の H. v. シーボルト蒐集日本考古資料について」の執筆は、文中に記している。





## 目次

研究の概要	1
<b>【論文】</b>	
好古家柏木貨一郎の事績 内川隆志	3
近世後期の尾張名古屋博物会について —近代日本の「博物館」前史の一断面— 三浦泰之	30
好古家の図譜・図録 — 古物を写す — 長谷洋	59
『尚古写生』と根岸武香の所蔵品について 徳田誠志	69
古銭蒐集をめぐる明治期好古家の様相 —根岸武香の蒐集とその交友— 鎌形慎太郎	81
<b>【報告】</b>	
大英博物館所蔵の H. v. シーボルト蒐集日本考古資料について	107



## 研究の概要

平成 21 (2009) 年、東京世田谷に所在する静嘉堂文庫で、幕末から明治を生きた好古家松浦武四郎の実像を具体的に明らかにできる新たな資料が出現した。私たちは、同年より静嘉堂文庫のご理解、ご協力の下これらの資料整理を敢行し平成 25 (2013) 年に目録を出版<sup>(註1)</sup> 加えて静嘉堂文庫美術館での展示によって、このコレクションが世に知られるようになった<sup>(註2)</sup>。科研費を得て着手した平成 22 (2009) 年の研究当初から掲げている課題として、武四郎コレクションを核として「近代博物館創設の揺籃期において、文化財行政制度の構築に多大なる影響を及ぼした幕末維新时期から続く国内外の好古家の活動に関して考究する」ことをあげている。近代博物館制度、文化財保護制度が明治政府の号令一下、瞬時に整えられたかの如く評価されているが、実際には近代以前の学問を身につけた数多の好古家の協力と実践なくして実現できるものではなかったのである。これは、近代博物館形成史、文化財行政史のみならず、揺籃期におけるわが国の人文科学そのものの成り立ちを考える上でも重要な視点と考えたのである。加えて、彼らに影響を与えた H.v. シーボルト (1852-1908) 等の外国人の存在があった事についても言及し、平成 27 (2015) 年には、國學院大學において武四郎と古物を通じて交流した彼のコレクションや学問形成に大きな影響を与えた P.F.v. シーボルト (1796-1866) のコレクションを有するヨーロッパの研究者を招聘し、よりグローバルな視点で明治初期の好古家、文化財を考える国際シンポジウム開催した<sup>(註3)</sup>。平成 28 (2016) 年には、オランダ・ライデン民族学博物館に収蔵されている P.F.v. シーボルトコレクションの考古資料調査を敢行、その実像に迫ることが出来たのである<sup>(註4)</sup>。

平成 29 年 (2017) 度から科学研究費で推進している本研究「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究」では、日本近世史・日本近代史・ヨーロッパ近代史・ヨーロッパ考古学・中国考古学・日本考古学・博物館学・文化財学等の多様な専門家による研究体制を整え、総合的観点から① 近世後期の「物産会」から近代博物館制度・文化財行政の構築に到る歴史的・人的基盤を探る。② 好古家蒐集古物の調査研究と国内外における好古家ネットワークの研究を推進している。同年度には、大英博物館が所蔵している H.v. シーボルトコレクションの資料調査を敢行し、本報告に掲載した。

平成 30 (2018) 年、生誕から 200 年を迎えた松浦武四郎は、幕末の北海道を 6 回にわたって踏査し、さまざまな記録を残したばかりではなく、幅広い方面で多彩な活動を行った。そうした武四郎の多様さの中で、特に明治政府の官職を辞した 52 歳から晩年に至るまで熱心に行った古物収集にスポットを当て、これまで知られることのなかった「好古家」としての武四郎の姿に焦点をあてた研究会「松浦武四郎研究の最前線 2018」を三重県生涯学習センターで開催し、その成果を「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究Ⅱ」として刊行した<sup>(註5)</sup>。

平成 31、令和元 (2018) 年度は、海外調査としてドイツ ユーナ大学所蔵の H.v. シーボルトが同大学に寄贈した日本の貨幣コレクション約 1000 点の調査を敢行した。この貨幣コレクションの存在は古くから知られているものの、その実態は不明であったため、資料化を行い具体的な学術的価値を確認したのである。本書に掲載したように本年度の総括として 6 本の論考と平成 29 (2017) 年度に実施した大英博物館所蔵資料調査報告を掲載した。さらに研究成果公開事業として國學院大學博物館において「古物を守り伝えた好古家 Antiquarians」(令和 2 年 1 月 25 日～3 月 15 日) を実施し、令和 2 年 3 月 7 日には、シンポジウム「幕末維新时期の好古家ネットワーク」を実施した。(内川 隆志)

## 註

- (1) 内川隆志編 2015 『静嘉堂文庫蔵 松浦武四郎蒐集古物目録』
- (2) 公益財団法人静嘉堂 2013 『静嘉堂蔵 松浦武四郎コレクション』
- (3) 國學院大學博物館 2016 『國學院大學博物館国際シンポジウム・ワークショップ 2015 博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究報告書』
- (4) 内川隆志編 2018 『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究』Ⅰ 平成 29 年度科学研究費助成事業 基盤研究 B 課題番号 17H02025
- (5) 内川隆志編 2019 『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究』Ⅱ 平成 29 年度科学研究費助成事業 基盤研究 B 課題番号 17H02025



もっと日本を、もっと世界へ。  
国學院大學

2020年1月25日(土)～3月15日(日)

# 好古家柏木貨一郎の事績

内川 隆志

## 緒言

幕末から明治にかけて古美術鑑定家、日本建築家として知られた柏木貨一郎（1841－1898）（諱は政矩、号は探古斎）は、義父柏木因幡から江戸幕府小普請方大工棟梁を継いでまもなく明治維新後をむかえて職を失い乍らも、古美術蒐集家として悠々閑々の日々を過ごした。明治5（1872）年には、蒐集家としての才と画の技量を見込まれ、町田久成（1838－1897）、蛭川式胤（1835－1882）等と共に古社寺宝物調査（壬申検査）に随行し、後に博物館御用掛のポストに就いた。古美術や古書などの鑑定に長じ、国宝「源氏物語絵巻」を所持した高名な美術品蒐集家、民族学、古代史研究者<sup>(1)</sup>、画技に優れた文化財の記録者でもあり、建築家としては、維新後も日本建築に拘り、その作品としては三井有楽町集会場、飛鳥山渋谷邸などが有名である。マルチな才能を覗かせる柏木貨一郎の評価については、先に建築史学の視点から近江栄や大川三雄<sup>(2)</sup>や特に益田孝との関係を詳細に整理した山口昌男の論考<sup>(3)</sup>等が知られるが、本稿では、就中、好古家としての柏木貨一郎を再評価するものである。



写真1 柏木貨一郎（『十二好古家寫真帖』第三集 1927）

## 1. 出生から青年期まで

柏木は、天保12（1841）年6月16日下谷和泉橋通（現東京都台東区東・上野）の加賀藩前田家御用達の糸問屋である辻又四郎の第六子として生を受け、同年夏に入谷の池を浚渫したところ弁財天の木造が現れた慶事に肖って辯吉と名付けられた。8歳の頃より大澤松濤（生没不詳）の門に入り和漢の学を修めると共に、谷文晁（1763－1841）の門弟、鈴木鷺湖（1816－1870）に画を学び、宗偏流の茶道を身につけた。安政5（1858）年、幕府の作事組織である小普請方を務める柏木因幡の養子となり、慶応4（1868）年、27歳で柏木家第九世を継いで若狭と称した<sup>(4)</sup>。佐々木昌孝・中川武らの研究によると柏木家は、元禄2（1689）年に紅葉山台徳院靈廟修営を手がけた柏木伊兵衛の代から続く幕府小普請方大工棟梁の家系である可能性が高い事が指摘されている<sup>(5)</sup>。柏木家歴代の動向は元文5（1740）年の東叡山東照宮の作事に関与した幕府小普請方大工棟梁として柏木日向の名を挙げている文献<sup>(6)</sup>や、元禄12（1699）年正月、幕府が「諸職人肝煎之事」として江戸市中の職人たちを統揃する役割として肝煎を定めた際、大工方の肝二煎として任命された小普請方大工棟梁の中に柏木周防や柏木土佐といった名が見いだせる<sup>(7)</sup>。文政4（1821）年の『武鑑』には小普請方定棟梁として「柏木但馬 十人扶持 三川町新道」と「柏木栄助 百俵 お玉が池」の記載があり<sup>(8)</sup>、文久4（1864）年の『武鑑』（図1）には「柏木因幡」「柏木大隅」「柏木栄助」の名が記され<sup>(9)</sup>、この柏木因幡が養子縁組をした柏木の義父にあたる。養子となって柏木家第九世を継ぎ、若狭と称した慶応4（1868）年の『武鑑』には、家督を継いだはずの若狭の名は見られず、義父柏木因幡の名が掲載されている<sup>(10)</sup>。

柏木が第九世を継いだ慶応4（1868）年は、徳川幕府が瓦解し、元号も明治と改まった年であった。幕府の崩壊と共に家業を失った貨一郎は、代々奥儒者の家柄である成島柳北（1837－1884）、武蔵国の素封家、好古家として知られる根岸武香（1839－1902）、古銭蒐集家として有名な池之端仲町の老舗売薬店主





## 2. 市井の好古家から博物館掛へ

明治になって柏木の名が公に記録された初出は、明治4(1871)年に招魂社境内の兵部省管轄の建物で開催された大学南校物産会の出品目録である<sup>(15)</sup>。これは、同年4月25日の「集古館設立の献言」に呼応し、保護すべき文化財を展覧したもので、ここに柏木は、主催者の町田久成(1838-1897)、田中芳男(1838-1916)ら数多の好古家と共に蒐集品を出陳している。すなわち鑛物門化石之部に「一魚齒化石右柏木政矩出品」、古物之部に「一勾玉雷斧石磐石鋸類九十六品右柏木政矩出品」と記録されているとおり、魚類化石と共に96点に及ぶ石器類などである。堺市博物館には、この時の出品物49点を柏木自らが図化した『石器寫図』<sup>(16)</sup>(図5-3)が寄託資料として収蔵されており、関西大学博物館の本山彦一蒐集資料には、その内『明治四年物産会草木玉類石写真』(図5-2 東京国立博物館蔵)に記録されている独鉆石と両頭石斧(図5-1)など17点の石器が含まれている<sup>(17)</sup>。

また、東京国立博物館には、大学南校物産会の出品物の一部が『明治四年物産会草木玉類石写真』として現存し、石器、勾玉、化石、器械などを記録した27図と植物17図がまとめられ、それぞれの表紙に『明治四年物産会草木玉石類写真』『漢太利産草木写真』と題名が記されている。紙は大学南校の用箋が使用されており、前者の5図と後者17図に博印が認められ、用箋の欄外に、出品者の名前と寸法や色彩などを記したものが多い。12点が柏木、2点が松浦武四郎(1818-1888)、同じく2点が国学者の横山由清(1826-1879)の出品物である<sup>(18)</sup>。この、物産会終了直後に太政官より「古器旧物保存方」が出され、保護すべき文化財が明らかにされたのである。

翌、明治5(1872)年の文部省博覧会出品目録草稿<sup>(19)</sup>には、「一雷斧二ツ連者(朱文) 雷斧ノ造り懸ケニテ一箇 一雷斧鋸 右柏木政矩」「一播磨國極楽寺瓦経并願文三枚 右柏木政矩」と記録

され、石斧や瓦経を出品し、明治6(1873)年の文部省博覧会の出品目録<sup>(20)</sup>には「一古代櫛八枚 柏木政矩」「一播磨極楽寺瓦二 柏木政矩」とみえ、古代の櫛や瓦経を出品している。同年、3月15日から5月15日まで開催された三重県山田大世古町の旧龍大夫邸で開催された伊勢山田博覧会にも「一、鏝牙尺模 岩代國耶麻郡惠日寺所傳柏木貨一郎」「一、同法隆寺所傳 同」「一、神像古鏡 柏木貨一郎」「一、徳

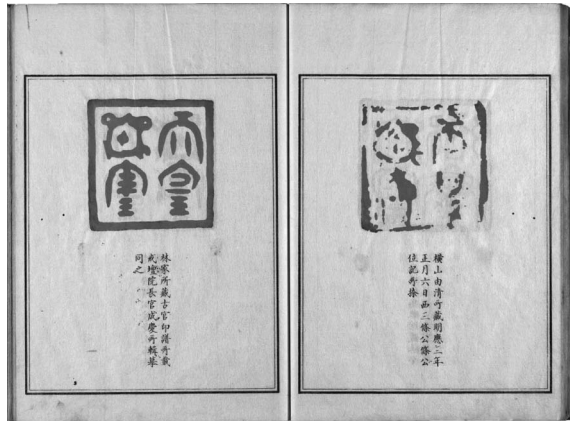


図2 『集古印史』慶応元(1868)年  
(国立国会図書館デジタルライブラリー)

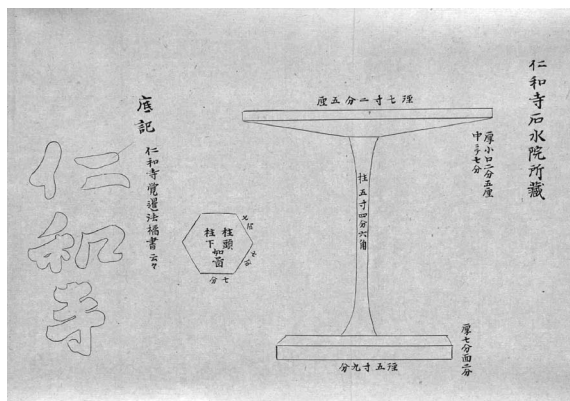


図3 『高坏考』慶応元(1868)年  
(国立国会図書館デジタルライブラリー)



図4 『女装考』年代不詳  
(国立国会図書館デジタルライブラリー)

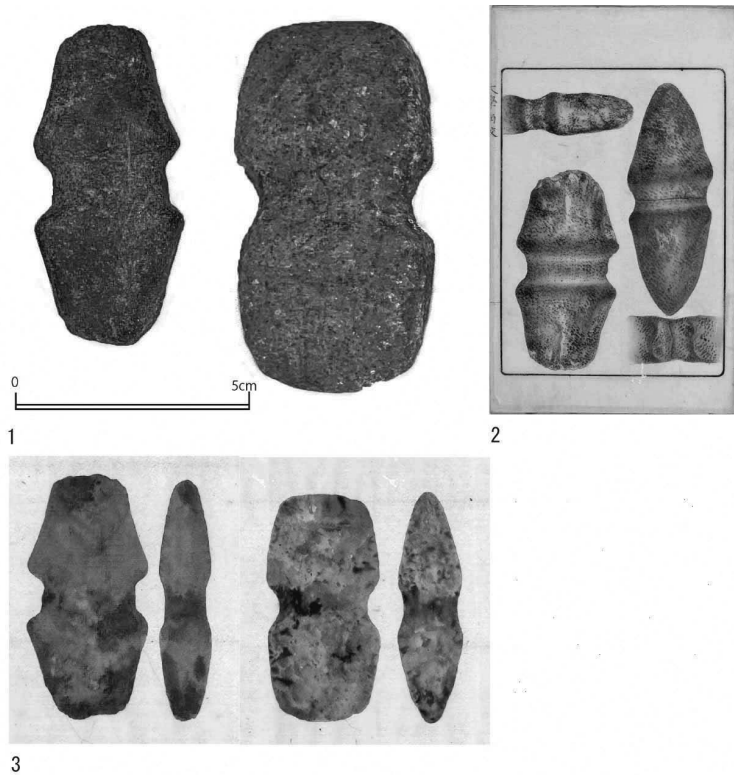


図5 (1) 独銚石・両頭石斧(関西大学博物館) (2) 『明治四年物産  
会草木玉石類写真』(image : TNM Image Archives) (3) 『石器寫図』(部  
分) 柏木貨一郎筆(個人蔵)

調査と勅封開緘をかねて宮内少丞世古延世(1824-1876)、宮内権中録岸光景(1839-1922)に出張が命じられた。加えて写真師横山松三郎(1838-1884)、油絵師高橋由一(1828-1894)、魚鳥などの調査者として笠倉鉄之助(出生不詳)が、そして古器物の写生のために柏木が同行することとなった<sup>(22)</sup>。出張心得には、具体的な指示は認められず、古器旧物の調査ならびに京都、奈良、大阪における博物館の建設推進をめぐる権限委任を与えたものであった。その際の詳細な記録は、蜷川式胤によって残されており、5月27日から10月20日の5ヶ月近くに及ぶ調査の内容が記録されている<sup>(23)</sup>。東京を出立して東海道を西へ向かい、尾張、伊勢、志摩、山城、大和、河内、摂津、近江の社寺を調査し、宝物の名称、数量、法量、素材、伝来などを写真撮影、拓本、模写によって記録し、その要所において柏木の筆による器物の画が残されている。正倉院は8月12日に開扉され、20日まで調査が行われ、成果としては『壬申検査古器物目録』と別編『壬申検査社寺宝物図集』が作成された。

#### 〈仁徳御陵前方部出土品の記録〉

明治5(1872)年、仁徳天皇陵古墳の前方部で竪穴式石槨と長持形石棺、金銅製甲冑、ガラス器などが発見された。この発見にかかる幾つかの文字記録や画像記録が残されており、石棺、甲冑の作画者として柏木が知られている。石棺発見の経緯については、玉利勲が諸説を整理しており<sup>(24)</sup>、内容を要約すると、台風によって墳丘の一部が崩壊し石棺が露出したという自然災害説、堺県令税所篤(1827-1910)による盗掘説に二分される。盗掘説の根拠とされたのは、明治5(1872)年4月15日に税所県令が教部卿に対し、仁徳天皇陵が鳥糞で汚れているので掃除の必要を訴えていることから鳥糞清掃を口実に計画的に盗掘を企てたという仮説である<sup>(25)</sup>。堺市の岡村家と筒井家に伝えられた絵図と文書、『堺県公文録(二)』に所載される9月13日付けの税所篤から教部卿に宛てた「伺」と司令<sup>(26)</sup>から、長持形石棺が発見された

川台徳院所用烟管井銅筒 柏木貨一郎  
「一、北条氏文書同 柏木貨一郎」  
「一、同高辯書性靈集殘卷 柏木貨一郎」  
「一、弘安以下具中曆殘缺 柏木貨一郎」の記録があり、7点の出品、さらに明治7(1874)年開催の聖堂昌平坂書画展には、「上同本阿彌切 柏木探古」「上三島岡麻呂經卷 柏木探古」「上土佐光長地獄寶卷 詞書寂蓮 柏木探古」の3点の出品が認められる<sup>(21)</sup>。

#### 〈古社寺宝物調査(壬申検査)に随行〉

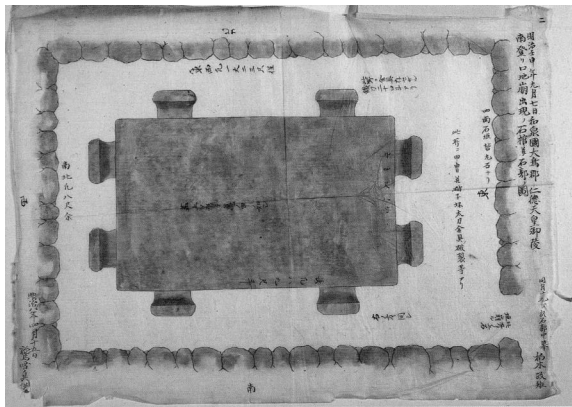
明治5(1872)年の古社寺宝物調査(壬申検査)は、明治6(1873)年に開催されるウィーン万国博覧会に参加、出品するための考証に備えるために具体化した。調査は、文部大丞町田久成、文部省六等出仕内田正雄(1839-1876)、文部省八等出仕蜷川式胤(1835-1882)らと共に、

経緯を整理すると明治5年9月7日に発見、税所県令が教部卿に「伺」を提出したのが6日後の9月13日、柏木が石室の中で絵筆をふるったのが9月19日であったことが判明している。そして教部卿から「仁徳天皇陵掃除についての照会」（堺県公文録460号文書）が出され清掃の中止命令が出されたのが、翌明治6（1873）年5月28日であった。

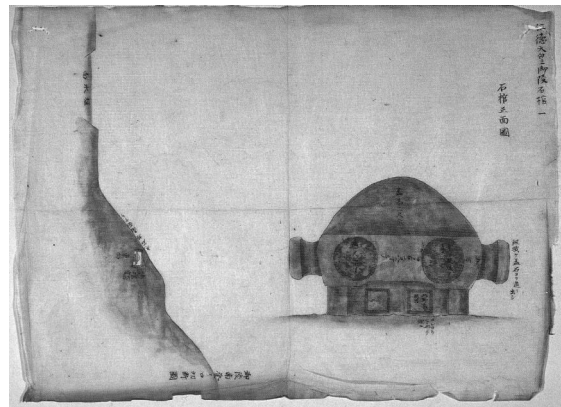
石棺発見時に柏木がその記録の任に就くことになった経緯は、前述した古社寺宝物調査で正倉院の勅封開扉にあたり、京都滞在中の宮内少丞世古延世に、税所県令が使いを送り指示を仰いだ事にある。この時、まさに仁徳陵における石棺発見の報が入り、随行していた柏木貨一郎に直接記録の要請があったのかも知れない<sup>(27)</sup>。

当時の柏木の実際の動向記録として、天理大学附属図書館が蔵する小杉楳邨（1835-1910）編纂の稿本『徴古雑抄』図画一上に収録された『古川躬行大山陵より出でし石槨甲冑刀剣玻璃等の事に就ての考案』に小杉が明治5（1872）年の発見に際し実見する機会を得た顛末を記し、さらに小杉が柏木とともに現地を見たこと、図の写しを柏木に依頼したことが記されている<sup>(28)</sup>。

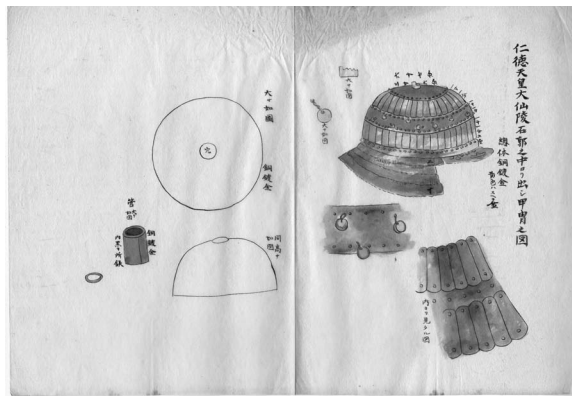
柏木による原図は、依頼者である税所の元にあったはずだが、現在その所在は不明である。岡村家に伝来した写しは大阪歴史博物館に、明治8（1875）年4月15日に国学者の落合直澄（1840-1891）が画家鷺雪に描かせたもの<sup>(29)</sup>が、八王子市郷土資料館に収蔵されており（図6-1・2）、その詳細については小川貴司が両者を比較し、後者が原本に近いことをあきらかにしている<sup>(30)</sup>。図は両者共に2枚一組となっており、1枚目には石棺の正面と墳丘の断面が、2枚目には石槨と石棺の平面図が描かれる。落合直澄旧



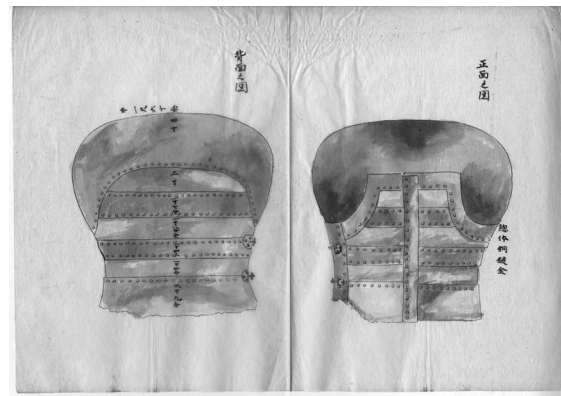
1



2



3



4

図6 1・2「仁徳天皇御陵石棺図」（八王子市郷土資料館蔵） 3・4「仁徳天皇大仙陵石槨之中ヨリ出シ甲冑之圖」（國學院大學博物館蔵）

蔵図の1枚目には右上に「仁徳天皇御陵石棺一」2枚目の右上に「二」と記し、その下に「明治壬申年九月七日和泉國大鳥郡仁徳天皇御陵南登り口地崩出現ノ石棺并石郭ノ圖」さらにその下に「同月十九日於石棺石槨中摹（摸）」「柏木政矩」左下に「明治八年四月十五日 鷲雪真模」とあり。図は、客観的な形状の記録を重視したのであろう、真上、真横からの石棺図に詳細な寸法を書き込んだものである。石棺内から出土した甲冑の正面、背面左右側面と甲の全体と部分を詳細に描写した甲冑図は、筒井家に残されており、作画者の書き込みは無く特定はできないものの、石槨図と同様、柏木の筆による可能性が高い。何れも写しではあるが客観的な情報を正しく写そうとする記録者としての姿勢がみてとれる。

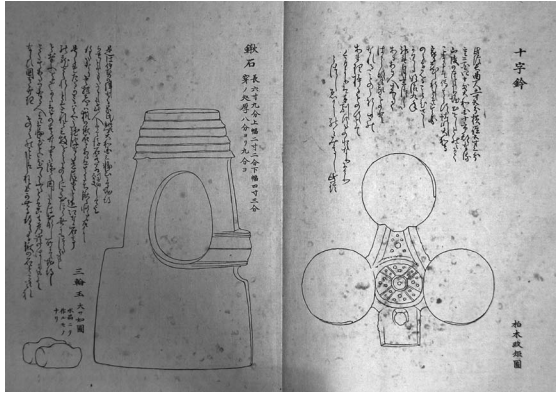
ここに掲載した甲冑図（図6-3・4）は、大正8（1919）年より内務省考査員を務めた柴田常恵（1877-1954）が大正から昭和にかけて模写させたものである。

柏木は、社寺宝物調査を終えた2年後の明治7（1874）年3月18日、正院十四等出仕、同年10月浅草文庫建築御用掛を命じられ、官員に採用、博覧会事務局事務取扱となり、明治16（1883）年6月11日農商務省6等属で退職するまで、博物館に在籍しながら、様々な活動を行っている。官員としての事績を辿ると、明治8（1875）年2月「奈良県正倉院へ出張、同年3月1日から5月20日には東大寺大仏殿内で博覧会を開催する予定があり、奈良県から宮内省に調査要請、博覧会事務局員として参加した。明治9（1876）年内務省十三等出仕、明治10（1877）年1月15日内務省十等属、博物局事務所扱、同年5月21日内務九等属、同年8月27日京都府、大坂府堺県へ出張。明治11（1878）年3月26日群馬県へ出張、同年5月6日内務七等属、同年7月30日神奈川、静岡へ出張。明治12（1879）年12月18日内務六等属。明治13（1880）年2月7日奈良へ出張等の記録が残されている<sup>(31)</sup>。明治12（1879）年5月に、行政施策として建造物の保存をおこなうことを提案した「社寺什宝永世保存之儀ニ付発議」<sup>(32)</sup>が社寺局長桜井能監、図書局長何礼之、博物局長町田久成の連名で提出された。これは、古社寺保存を推進する社寺局と古器旧物保存を軌道に載せようとする博物局の意見一致の成果でもあり、ここには、「千有余年前ノ建物ニシテ木製ノ建築中世界第一之旧物」として法隆寺、薬師寺東塔、唐招提寺金堂、興福寺北円堂、東大寺三月堂、栄山寺三角堂、平等院鳳凰堂をあげ、官費をもって修繕すべき旨を明らかにしている<sup>(33)</sup>。これらの建造物は先の壬申検査時に実見、記録され、すでに建造物保存の必要性は認識されており、その延長上に、この発議が位置づけられる。早稲田大学図書館に残されている『社寺什宝保存規則草案』<sup>(34)</sup>には「柏木探古先生自筆」とあり、博物局町田久成の名原案、つまり博物局サイドの案に朱墨で訂正、書き込みがなされている。古建築物であるが故に、かつて幕府小普請方大工棟梁であった柏木自身も主体的に関わっていた事が理解でき、柏木であればこそ、より具体的に内容の策定がかなったのではなかろうか。この発議は、そのまま取り上げられてはいないが、明治13（1880）年「古社寺保存費」が内務省予算に計上され、「古社寺保存金」の交付制度が成立する事と大いに関係する。

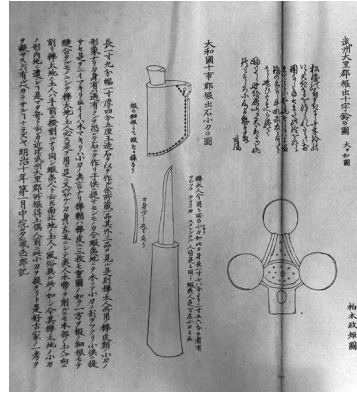
博物館は、明治14（1881）年4月に設置された農商務省に移管され、内務省の社寺行政と分離、明治15（1882）年ジョサイア・コンドル（1852-1920）設計の博物館が完成し、初代館長に町田久成が就任したが、開館からわずか7ヶ月後に農商務省大輔品川弥二郎（1843-1900）は、町田を解任し、2代目館長には田中芳男（1838-1916）が就任した。町田は農商務省御用掛（博物局史傳課長）、明治18（1885）年には元老院議官となって、明治22（1889）年突如官職を辞した。かくして柏木は町田の左遷に呼応するように明治16（1883）年6月11日に農商務省6等属を辞任し、博物館を去ったのである。

### 3. 好古家との交流

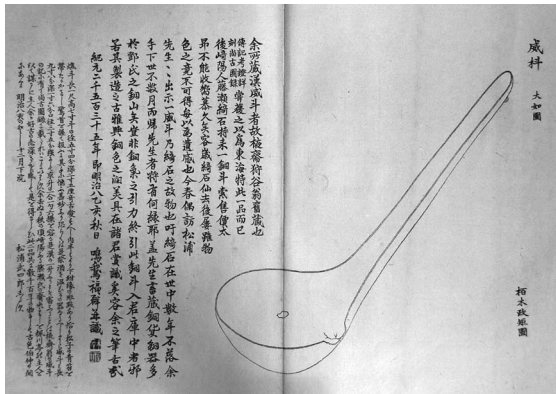
20代頃には古物への造詣が深かった柏木であるが、政府の官員となった明治7（1874）年以降、より多くの好古家との交流をもって、その職務と自身の古物蒐集に邁進している。明治8（1875）年、上大崎の徳川慶喜の実弟である松平主殿旧居で開催されたH.v. シーボルト（1852-1908）主催の「古物会」のチラ



1



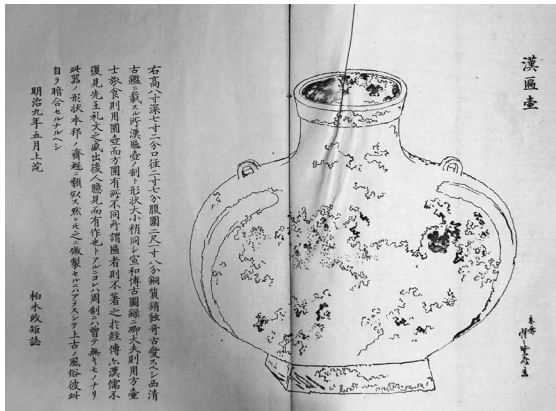
2



3



4



5

- 1「十字鈴・鍬石・三輪玉」
- 2「武州大里郡堀出十字鈴」「大和國十市郡堀出石小刀の圖」
- 3「威科大如圖」
- 4「雙匣蓋」
- 5「漢匱壺」

右高八寸深七寸二分口径二寸七分腹圍二尺一寸八分銅質鎖鉢  
 奇古愛スヘシ西清古鑑ニ載スル所漢匱壺ノ制ト形狀大小稍同  
 シ宣和博古圖録ニ卿大夫則用方壺士旅食則用圈壺而方圈有所  
 不同所謂匱者則不著之於經傳亦漢儒不復見先王禮文之盛出後  
 人臆見而有作也トアルニヨレハ周制ニハ曾テ無キモノナリ此  
 器ノ形狀本邦ノ齋瓶ニ類似ス然レトモ之ニ倣製セルニハアラ  
 スシテ上古ノ風俗彼此自ラ暗合セルナルヘシ

明治九年五月上浣 柏木政矩誌 (翻刻 三浦泰之氏)

図7 松浦武四郎著『撥雲餘興』首卷(明治10年刊)に柏木貨一郎が寄せた挿絵と跋文(「漢匱壺」)



シには貨一郎の他に、蜷川式胤、4代古筆了仲（生年不詳-1891）、西村喆叟（生没年不詳）、松浦馬雨齋（雨は角の誤記）、樋口趨古（生没年不詳）、横山由清（月舎）（1826-1879）、玉川齋（生没年不詳）、愛古堂磐翁（大槻磐溪）（1801-1878）、栗本鋤雲（1822-19187）、金澤蒼夫（生没年不詳）の面々の名が連なっている<sup>(35)</sup>。彼らは他に松浦武四郎が主催した「尚古会」など好古家同志の会合を通じて親交を結び、モノと情報のやり取りが行われたのである。このように志を一にする好古家同志のネットワークの中で柏木が親交を結んだ一人が松浦武四郎である。

「北海道の名付け親」として知られる松浦は、弘化2（1845）年より蝦夷地を目指し、私人として3回、幕府雇いとして3回の蝦夷地調査を敢行し、蝦夷通として知られた。明治2（1869）年には政府から正式に蝦夷開拓御用掛、開拓判官の命を受け開拓大主典の要職に就くも、翌明治3（1870）年には開拓使内部の腐敗を理由に職を辞し、後の人生は、少年期より興味を注いできた古物蒐集に没頭し、数多の好古家達との交流をもって蒐集と研究に明け暮れた。特に古物の蒐集を競った松浦との親交については、古物のやりとりや松浦が自らのコレクションを記録した図譜『撥雲餘興』首巻（明治10年刊）に柏木が挿絵と跋文などを提供するなど<sup>(36)</sup>（図7）その親交の深さが知られていたが、『撥雲餘興』2集（明治15年刊）には、柏木の関与は全く認められなくなっている。この点に関して、古物の貸し借りを通して二人の関係性の悪化を示す史料が残されている<sup>(37)</sup>。

武蔵国の好古家根岸武香（1839-1902）<sup>(38)</sup>との交流も深く、埼玉県立文書館に寄託されている根岸家文書には、明治8（1875）年と推定されている松浦が根岸に宛てた書簡5点は、根岸が熱中していた「古金銀」の斡旋をめぐる話題が中心となっている。また書簡には、根岸の所有する「土偶人」に関する記載が見受けられる<sup>(39)</sup>。

例えば、明治8年12月8日付の書簡（根岸家文書4647〔古金銀外壳買ニ付書状〕）には

土偶人所持人有之候由、是者何卒拙者へ御周旋願上度、何卒御聞濟被下候、とにかく向の申直段ニ而一寸御かり受御遣し願候、大てゐの事ならば頂戴仕候、凡何程ニ申、私共直段相附御取入ニ成候後、外へ御遣しニ相成候様の事ニ而者困り申候間、申上兼候、柏木者最早一ツ所持仕候事故、一ツは私へ御周旋願上度、代料者随分きはり申候、呉々も早々御買受御廻し方願上候、先者早々謹言  
二月八日

松浦武四郎

根岸武香様

とあり、冒頭に「土偶人」の周旋を懇願し、最後に既に柏木が一つ所持しているのも一つは私（松浦）へと念押ししている。このように「土偶人」を周旋する書状は、同年12月13日付（根岸家文書4651〔古金銀外壳買ニ付書状〕）、同12月21日付（根岸家文書4643〔古金銀外壳買ニ付書状〕）、など計4通に及び、必ず引き合いに柏木を引き合い出しては対抗意識を出していることが理解できる。静嘉堂文庫の松浦資料には「七刀鋳鍛ハ道義持参之事」と記された刀子と鉄鋳そのものが武香の書簡と共に収蔵されており、包紙には「大谷村字塚山ニテ掘出ス短刀

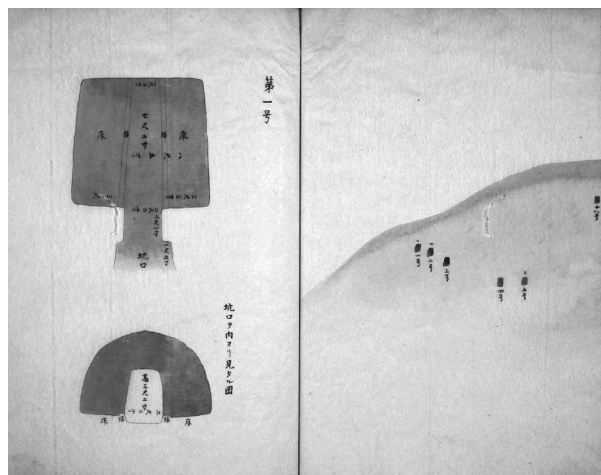


図8 『黒岩村穴居記』（早稲田大学図書館蔵）

鉄鏝 松浦先生根岸武香 明治九年一月七日」と記され、図入りの書状には「明治九年一月三日本区比企郡大谷村字塚山ヲ掘りテ出ル所ノ土偶人ノ図」として、二体の人物埴輪が描かれ、埴輪の説明として、「耳ハ落テ環ノミ残ル」、「腰ヨリ下欠タリ」と書かれ人物埴輪の円筒部と考えられる絵には、「如图無底ノ壺アリ」と書かれており、もう一体の人物埴輪の説明書きとして、「手ノ中ニ如此緒ニテ結ヘル形チ有リ」「木ノ根ニテ体ハ微塵ニ毀チタリ」とある。

さらに、

右は予テ去月奉申上候通り区内大谷  
村土偶人ヲ掘セシ地ニ一月二日人足五 六人引卒土ヲ掘り候得共何分不見当猶  
三日ニ塚ノ廻ヲ掘候処三四軀掘出シ候得共何レモ木ノ根ニテ破リ〈木ノ根始ハサシコミシ細根モ  
年々ニフトリ 大根ト成ルニ随ヒ終陶器ヲ破候也〉全体ハ一軀モナシ漸ク前図ノ如キ首モ胴モ手モ  
離レクノ品ニ軀見出シ候尤頭ノ様子余ホト奇品ニ御坐候此段不取敢申上候右御送り可申哉御問合申  
上候凡土偶人ニハ全体ハ有之間敷ト奉存候矢ノ根小刀ナド掘出シ申候猶又来月頃ハ堀度候得共当ノ  
無キ仕事〈魚ヲ釣ル如ク〉ニテ人足ハ多分ニ掛リ容易ニハ掛リ兼候呵々  
一月七日夜認

根岸武香

松浦君

と記され、松浦に贈る9日前の1月3日に掘出した「土偶人」の速報を伝えている。『撥雲餘興』首巻には、「武州比企郡大谷村堀出埴輪物」として河鍋曉斎（1831-1889）の挿図と大槻盤溪（1801-1878）による漢文の題詞が掲載されている<sup>(40)</sup>。

柏木は武香から前年に直接「土偶人」を譲り受けており、H.v. シーボルトの古物会への参加報告と合わせて埴輪の周旋を依頼した同年12月11日付けの以下の書簡も知られている<sup>(41)</sup>。

土偶人云々御報知被下有かたく奉存候、右價は首手足共全軀の物にて少も損じ無之候はゞ五圓より六七圓 位のものは可有之と存候。もし先年尊家より相願候土偶の如く、手足等損失致候はゞ、二円二分位と存候。其位にて持主売払はゞ、別而面白く且其品も尊く相成候。但し右金高の外、仮箱並運送入費は差出可申候。凡二百疋位歟。この書状篤より可申上の所持金位云々の論と且当月六日シイボルトと申外国人古物会を催し候事に付、周旋仕其ゆへ、大延引之段奉恐入候。右会の広告並に其節独逸人の出品にてボルネヲ島の土人今日相用候雷斧石の図二葉奉差上候。御一笑可被下候。当日出品は益なる事に而、名品も夥しく出申候。余者後便奉申上候。早々頓首。

十二月十一日

柏木貨一郎拜

根岸武香様

柏木は、明治11（1878）年3月30日に根岸家を訪問し、4月1日に吉見百穴、2日に根岸らによって発掘されていた黒岩横穴墓群を踏査している<sup>(42)</sup>。早稲田大学図書館の古典籍データベースには、同年4月5日の日付を記した『黒岩村穴居記』が収蔵されており、16基の横穴について平面、断面、側面について実寸を添えた詳細な記録を残している（図8）。同年4月10日・11日には、柏木が東京大学の温知会で踏査の顛末を報告し、福地源一郎（1841-1906）の手引きで『黒岩村穴居の記』と題して、その見聞記を『東京日日新聞』に寄稿<sup>(43)</sup>し、横穴の概要と横穴住居説、遺物について記している<sup>(44)</sup>。同年4月

22日には、根岸に礼状を兼ねた書簡を送付し、H.v. シーボルトの現地案内を乞うている<sup>(45)</sup>。かくして、H.v. シーボルトは、同年4月25日から同月28日まで、柏木の友人、安達鑛七郎（生没不詳）と洋風画家五姓田芳柳（1827-1892）の次男、五姓田義松（1855-1915）と共に根岸の案内で同地を視察したのである。この時の動向に関しては五姓田義松の日記に詳しく記されている<sup>(46)</sup>。この滞在が縁となって根岸の父根岸有山（1810-1890）の油彩肖像画が五姓田義松によって描かれ、根岸家に現存する。また、明治12（1879）年には、E.S. モース（1838-1925）が同家を訪問しており、何れも根岸家を拠点に吉見百穴や黒岩横穴墓群を踏査している。同家には今も H.v. シーボルトが武香に寄贈したギリシャの土偶や、E.S. モースの直筆の器物画など彼らの訪問を記念する品々が残されている。

#### 4. 柏木貨一郎の美術品蒐集

以上見てきたように明治10年前後までの柏木の子な興味は考古遺物や古銭などの古物を中心としたモノであったことが理解できる。そもそも貨一郎の「貨」の字は、彼が柏木家第九世を継いだ慶応4（1868）年頃から貨幣の歴史に入れあげていたから名乗ったという<sup>(47)</sup>。古銭蒐集については本書に鎌形慎太郎が根岸武香との関連性を明らかにしており、その詳細は委ねる<sup>(48)</sup>が、柏木の名は、明治13（1880）年の『愛泉家一覽』（図9）に前頭として記載されるほど名の通ったコレクターであったことがわかる。国立国会図書館所蔵にかかる青山文庫には晩年に編じた古銭譜稿本類『榎園泉史稿本』・『榎園泉貨譜稿本』が含まれており、古銭の入手経路が明記されている。この記録によって根岸のコレクションを形成した皇朝十二銭の多くが柏木経由のものであったことがわかる（表1）。これらは、柏木が明治31（1898）年、上根岸の自宅から王子の渋沢栄一邸に向かう途中、汽車に接触して急逝した後、柏木家第10代目を相続し不及庵を号した甥の柏木祐三郎が、数回に分けて譲渡したものである。また、古銭そのものの蒐集以外に銭貨の経済学的観点からの研究書として『東大寺物價食功上下』<sup>(49)</sup>や『米價年表』などの著作が知られている。

一方、古物以外のモノへの探究心も強かったことは、慶応2（1866）年頃に編んだ一連の著作や古代史研究者としての活動からも理解できることである。また、明治6（1873）年の伊勢山田博覧会や明治7（1874）年聖堂書画大展開覧には、北条氏文書や『地獄草紙』を出品しており、この段階ですでに書籍、絵画の蒐集家としての土台が出来ていたことがわかる。昭和6（1931）年に国宝に指定された早稲田大学図書館蔵の『玉篇』一卷<sup>(50)</sup>は天下の稀覯書として知られるが、柏木は『玉篇卷一八後分』（國學院大學図書館蔵）（図10）について精緻な写本を自ら立ち上げた「探古書屋」で製作しており、本書に対する並々ならぬ思い入れを感じる出来映えとなっている。明治11（1878）年には黒川真頼（1829-1906）との共著で『工芸志料』蒔絵の部も刊行し、明治12（1879）年の識のある柏木探古稿本『東寺堂塔興廃表并記事等雜記』なども知られている<sup>(51)</sup>。

図9 明治13年 愛泉家一覽部分 (国立国会図書館蔵)

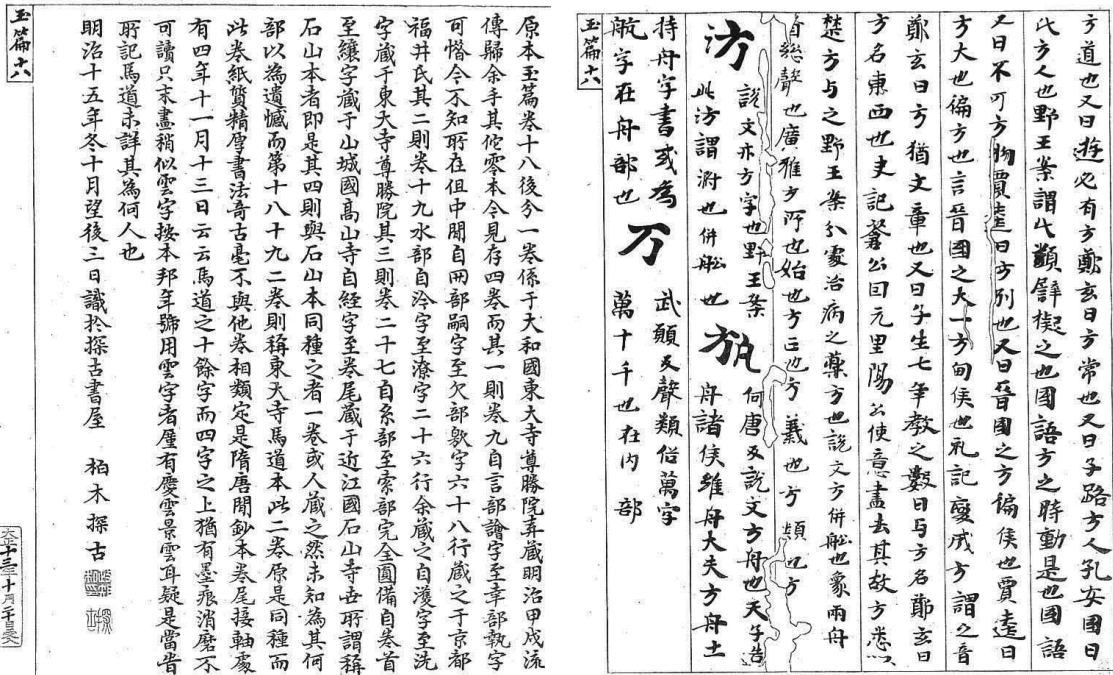


図10 『玉篇卷一八後分』明治15(1882)年 柏木貨一郎写(國學院大學図書館蔵)

表1 根岸武香泉貨譜稿本(未定稿)にみる柏木貨一郎旧蔵銭(作表鎌形慎太郎氏)

(1) 和同開珎

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来 / 備考
1	正字	1匁1分	8分2厘	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榲園錢貨譜未定稿」(『榲園泉貨譜稿本三、四』所収)	愛鷲堂→求古楼→探古楼旧蔵、孔方図鑑掲載原品
2	美制	7分7厘	8分6厘	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)	鉄錆、探古楼旧蔵
3	美制	9分1厘	8分1厘	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)	求古楼→探古楼旧蔵
4	美制	1匁4分9厘	8分	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)	鉄色、柏木政矩模造
5	大字	1匁4分8厘	8分7厘	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榲園泉貨譜未定稿」(『榲園泉貨譜稿本三、四』所収)	寛政年間撰津伊丹・八尾寛満所蔵→求古楼→探古楼旧蔵、 奇品図録・明治泉譜掲載原品
6	大字大様	1匁7分6厘	8分5厘	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榲園泉貨譜未定稿」(『榲園泉貨譜稿本三、四』所収)	古色鉄錆、愛鷲堂→探古楼旧蔵
7	大字	7分6厘	7分6厘	「榲園泉貨譜未定稿」(『榲園泉貨譜稿本三、四』所収)、 「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)	古色濃緑、求古楼→探古楼旧蔵
8	中字	2匁2分7厘	8分	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)	銀錆、尾州西川氏→求古楼→愛鷲堂→探古楼旧蔵、「和字降 り開字短縮ナルモノ」(『榲園古代泉之部』(『榲園錢貨譜稿本 一、二』所収)
9	中字	1匁3分8厘	7分5厘	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)	銀錆、探古楼旧蔵
10	小字	1匁1分7厘	8分5厘	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)	青錆、求古楼→探古楼旧蔵寛政9年7月丹波北之莊土中取得
11	降和	1匁1分8厘	8分	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)	探古楼旧蔵
12	潤字	9分7厘	8分3厘	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)	探古楼旧蔵、近江瀬田川水中取得

(2) 萬年通寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来 / 備考
1	直通	1匁6厘	7分9厘	「榲園古代泉」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)	探古楼旧蔵
2	直通	9分5厘	8分5厘	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)	探古楼旧蔵、明治泉譜一集掲載原品
3	円点	9分3厘	8分5厘	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)	求古楼→探古楼旧蔵
4	円点直通	1匁2分7厘	8分5厘	「榲園錢貨譜未定稿」(『榲園泉貨譜稿本三、四』所収)	求古楼→探古楼旧蔵
5	横点	1匁4分7厘	8分5厘	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榲園泉貨譜未定稿」(『榲園泉貨譜稿本三、四』所収)	求古楼→探古楼旧蔵、奇品図録掲載原品
6	横点	9分8厘	8分5厘	「榲園古代泉之部」(『榲園錢貨譜稿本一、二』所収)、 「榲園泉貨譜未定稿」(『榲園泉貨譜稿本三、四』所収)	宣華堂→求古楼→探古楼旧蔵

## (3) 神功開寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来 / 備考
1	大様	1匁1分4厘	8分8厘	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	求古楼→探古楼旧蔵、孔方図鑑掲載原品
2	大様	8分7厘	9分	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	愛鷺堂→探古楼旧蔵
3	斜功	7分5厘	8分	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)	建皇堂→探古楼旧蔵
4	縮力	1匁3分1厘	8分6厘	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	黒色、求古楼→探古楼旧蔵
5	力功細緑	1匁8厘	8分5厘	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	求古楼→探古楼旧蔵
6	力功潤緑	1匁3分	8分6厘	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	求古楼→探古楼旧蔵

## (4) 隆平永寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来 / 備考
1	大字	1匁4分	8分8厘	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	青斑、求古楼→探古楼旧蔵、孔方図鑑掲載原品
2	大様大字	1匁1分2厘	9分	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	松栗園→混々齋→探古楼旧蔵
3	大様小字	9分5厘	8分6厘	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	宣華堂→探古楼旧蔵
4	長頭永	1匁1分1厘	9分	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	青箱、河野宇齋→求古楼→探古楼旧蔵
5	潤字	9分1厘	8分3厘	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	青緑、求古楼→探古楼旧蔵
6	狭穿	8分7厘	7分8厘	「榊園古代泉」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)	探古楼旧蔵
7	狭穿	7分4厘	8分	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	建皇堂→探古楼旧蔵
8	二水永 大字	9分2厘	8分弱	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	探古楼旧蔵
9	二水永 大字	7分4厘	8分弱	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	求古楼→探古楼旧蔵、奇品図録掲載原品

## (5) 富寿神寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来 / 備考
1	大様	1匁1分7厘	8分3厘	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	浅青、方門齋→愛鷺堂→探古楼旧蔵、奇品図録・明治泉譜掲載原品
2	大様細緑	7分5厘	7分	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	探古楼旧蔵
3	小字	6分4厘	7分4厘	「榊園古代泉」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)	探古楼旧蔵
4	小字	9分4厘	7分5厘	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	建皇堂→探古楼旧蔵、明治泉譜掲載原品
5	寿貫	8分	8分3厘	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	緑欠、求古楼→探古楼旧蔵
6	狭穿	7分9厘	7分9厘	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	青緑、求古楼→探古楼旧蔵

## (6) 承和昌寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来 / 備考
1	大様	9分4厘	7分8厘	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	堤根堂→愛鷺堂→探古楼旧蔵、近江堅田山中取得、明治泉譜二集掲載原品
2	小様	6分5厘	6分8厘	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	建皇堂→探古楼旧蔵、明治泉譜一集掲載原品
3	斜寶	8分2厘	6分7厘	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)	探古楼旧蔵

## (7) 長年大寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来 / 備考
1	大字	8分8厘	7分弱	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	青緑、求古楼→探古楼旧蔵、山城紀伊郡深草任明天皇御陵近傍取得
2	大様	6分6厘	6分9厘	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	古色青白、探古楼旧蔵、山城紀伊郡深草任明天皇御陵近傍取得
3	小様	4分7厘	6分3厘	「榊園古代泉」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)	探古楼旧蔵
4	小様	6分4厘	6分5厘	「榊園古代泉之部」(『榊園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榊園泉貨譜未定稿」(『榊園泉貨譜稿本三、四』所収)	青箱、愛鷺堂→探古楼旧蔵

## (8) 饒益神寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来 / 備考
1	小様	5分5厘	5分8厘	「榲園古代泉」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)	青斑、探古楼旧蔵
2	小様	6分3厘	6分5厘	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榲園泉貨譜未定稿」(『榲園泉貨譜稿本三、四』所収)	青錆、愛鷺堂→探古楼旧蔵、明治泉譜一集掲載原品
3	小様	5分6厘	6分1厘	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榲園泉貨譜未定稿」(『榲園泉貨譜稿本三、四』所収)	浅青、探古楼旧蔵、京都深草観禅原竹林取得

## (9) 貞観永寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来 / 備考
1	大字	3分3厘	6分	「榲園古代泉」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)	鉄錆、探古楼旧蔵
2	大様	6分4厘	6分6厘	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榲園泉貨譜未定稿」(『榲園泉貨譜稿本三、四』所収)	愛鷺堂→探古楼旧蔵、明治泉譜一集掲載原品

## (10) 寛平大寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来 / 備考
1	正様	5分2厘	6分5厘	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榲園泉貨譜未定稿」(『榲園泉貨譜稿本三、四』所収)	愛鷺堂→探古楼旧蔵
2	広穿	5分5厘	5分8厘	「榲園古代泉」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)	青斑、探古楼旧蔵
3	起延	5分5厘	5分8厘	「榲園古代泉」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)	鉄錆、探古楼旧蔵
4	延冠	5分1厘	6分3厘	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榲園泉貨譜未定稿」(『榲園泉貨譜稿本三、四』所収)	浅青朱斑、求古楼→探古楼旧蔵
5	不明	5分2厘	6分6厘弱	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榲園泉貨譜未定稿」(『榲園泉貨譜稿本三、四』所収)	銀錆、不肅齋→探古楼旧蔵、包紙書付「摂津国阿弥陀池境内 楠木ノ際ヨリ掘出」7品の内、明治11年3月 不肅齋手放す

## (11) 延喜通寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来 / 備考
1	大様	8分4厘	6分5厘	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榲園泉貨譜未定稿」(『榲園泉貨譜稿本三、四』所収)	探古楼旧蔵
2	正字	7分6厘	6分5厘	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榲園泉貨譜未定稿」(『榲園泉貨譜稿本三、四』所収)	浅青、愛鷺堂→探古楼旧蔵、「延通ノ二字広ク喜寶ノ二字長し」 「榲園古代泉之部」同右所収

## (12) 乾元大寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来 / 備考
1	接郭	6分1厘	6分3厘	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榲園泉貨譜未定稿」(『榲園泉貨譜稿本三、四』所収)	求古楼→探古楼旧蔵
2	昂元	1匁6厘	7分2厘	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榲園泉貨譜未定稿」(『榲園泉貨譜稿本三、四』所収)	建皇堂→探古楼旧蔵
3	昂元	5分9厘	5分6厘	「榲園古代泉」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)	浅青、探古楼旧蔵
4	長元	6分9厘	6分6厘	「榲園古代泉之部」(『榲園泉貨譜稿本一、二』所収)、 「榲園泉貨譜未定稿」(『榲園泉貨譜稿本三、四』所収)	愛鷺堂→探古楼旧蔵

柏木の多様な蒐集品の記録については、明治11(1878)年に創設された龍池会<sup>(52)</sup>が主催した古美術品の鑑賞会である「観古美術会」の出品目録がある。目録には、柏木が出品した古美術の記録が断片的ながら残されており<sup>(53)</sup>、「観古美術会出品目録第三号(明治13年3月) 四天人形上代彫 一個、硯箱上代蒔絵 一個、辛櫃藤蒔絵一個、散蓮華経画朱塗一個、花瓶青磁、画卷福富長者 一卷」「第三回観古美術会出品目録第三号(明治15年) 古今利鉢、南京十錦手皿、白磁葬式香爐」「第三回観古美術会出品目録第五号(明治15年) 薬師十二神将木像、西方天春属木像」がみえる。また、乙集<sup>(54)</sup>には、貨一郎所蔵文書・地図類の他に、佛物・塔・法物・布薩調度・楽具・僧物・供神・料器・通物・大衆・鋪設など仏具などの器物が含まれていた。さらに、急逝して3年後に遺愛の品々を集めた明治34(1901)年の『柏木探古遺愛品列品目録』(55)には、238点(掛物21点・巻物10点・茶器95点・会席家具112点)の品々が個別具体的に明らかにされている。その内容は以下の通りである。



『柏木探古遺愛品別品目録』

〈懸物之部〉

- 一、道風朝臣 古今集 本阿弥切
- 二、眞名 畠山 牛菴柄 表具中風紫紬地印金
- 三、行成卿公任卿兩筆 法華經 譬喩品 歌古今集秋の上忠岑詠 譯文元致上人 表具中白地印金
- 四、定家卿 名所百首ノ中佐良之奈
- 五、同 大記録
- 六、平相國 三月七日消息文 杉原二枚繼
- 七、寧一山 潤水云々一行五字 表具中舟越廣東箱書了音
- 八、同 本來云々一行五字 王舟和尚 添狀二通 釀愚庵
- 九、一休禪師 宵女夜話七言絶句 詞書アリ
- 十、御着到の歌 題五月雨 宸筆共九者
- 十一、珠光文 古市播磨法師
- 十二、宗旦半切文 六月十九日
- 十三、巨勢金岡 鷺王手阿彌陀 抱一上人箱書 同上人旧藏
- 十四、土佐長隆 鏡山圖 家隆卿歌賛
- 一五、雪壽老圖 安信外題 □信箱書
- 一六、正信 宗祇像
- 一七、興以 山水
- 一八、探幽 水田芦雁圖
- 一九、足利義持公 松下馬上人物圖 義昭公賛尚古圖録所載
- 二〇、常憲院殿 自畫賛
- 二一、古画 羅漢圖

〈卷物之部〉

- 二二、顧野王玉篇 自放部至方部 一卷
- 二三、文館詞林 第六百六十八卷 一卷
- 二四、萬里小路宣房卿”笠置切・法華經第六卷 奥書 正中三年四月十六日署名花押” 一卷
- 二五、源頼朝狀”二月廿一日大佛殿ノ事壽永三年四月三日大佛殿修復用途ノ事” 三卷
- 二六、高山寺古文書 三卷
- 二七、水無頼殿歌合卷 後小松院宸翰□□ 一卷
- 二八、名香合セ卷 判三條西殿 宗養筆 一卷
- 二九、道成寺縁記繪卷 古土佐 一卷
- 三〇、浮世人物繪 常親筆 一卷
- 三一、裂鑑帖 一冊

〈茶器之部〉

- 三二、鶴物耳附丸壺茶入” 遠州所持 後土居家□ 書付遠州袋ニ 紺地金翻 五色笹曳”
- 三三、正信春慶茶入” 銘澆酌 書付遠州袋ニ 金もふる 五色筋金欄”
- 三四、唐物耳付茶入袋 金毛□々留
- 三五、仁清細茶入袋 金欄
- 三六、紹鷗時代黒大棗 ” 蓋裏佐久間不于齋 在判箱書共袋 古金欄大牡丹 天鷲地金欄”
- 三七、竹面取中次 銘此君 杉木善齋歌在判

- 三八、唐物青貝八角茶器 瀟湘八景  
 三九、唐物赤無地古満棗 箱書付遠州  
 四〇、光悦赤筒茶碗 銘下紅葉 箱書付遠州  
 四一、ノンカワ黄樂茶碗角高台 箱如心齋  
 四二、井戸塩筭茶碗 箱書付遠州  
 四三、志野茶碗 歌銘玉露や 遠州書付  
 四四、千種伊羅保茶碗 片身替一文字  
 四五、井戸小カンニウ小服茶碗  
 四六、瀬戸伯菴茶碗  
 四七、黄瀬戸大茶碗 箱書付小堀櫃十郎  
 四八、同 景次茶碗 在判  
 四九、仁清茶碗 銘山の艸  
 五〇、鼈蓋平茶碗  
 五一、白高麗梅の繪茶碗  
 五二、大井戸茶碗  
 五三、熊川茶碗  
 五四、瑠璃祥瑞茶碗  
 五五、雲鶴青磁手平茶碗  
 五六、染付茶碗 豊米箱書付  
 五七、祥瑞湯呑  
 五八、利休象牙茶杓 筒宗旦 替筒直齋箱典  
 五九、幽齋長茶杓 筒古市得齋 箱書付共  
 六〇、宗甫茶杓 歌銘面影 箱書付蓬露  
 六一、佐久間將監茶杓 筒木口ニ佐將ト有リ  
 六二、石州候茶杓ニ伊藤殿ト有 箱口林宗源  
 六三、少菴象牙茶杓 共筒 箱書曾原叟  
 六四、瀬田掃部茶杓 村山長古文添  
 六五、浮線綾蒔書香合  
 六六、青磁雀香合  
 六七、交趾狸繪香合  
 六八、仁清鱈口香合  
 六九、同 絲瓜香合  
 七〇、本地梅蒔繪香合  
 七一、黑蜀葵形香合  
 七二、堆朱樓閣人物彫香合  
 七三、キンマ長角香合  
 七四、山水人物蒔書藤の實形香合  
 七五、十種香箱”遠州所持鼈甲小色紙山水蒔繪”皆具  
 七六、紅葉賀蒔繪十種香箱源平競昌 皆具  
 七七、礎袴腰香爐  
 七八、祥瑞八角香爐 一對

- 七九、伯菴香爐
- 八〇、蒔繪火取香爐
- 八一、青磁三具足
- 八二、青磁下蕪花入 秘色
- 八三、呂宋三足花入
- 八四、鈔張小判形掛花入
- 八五、印度燒花入
- 八六、鈔張經筒花入
- 八七、時代竹組瓢形花入
- 八八、不味侯作花入 中口切 円城寺受口
- 八九、織部一重切花入
- 九〇、竹二重花入” 因判作 浪ニ龜蒔繪文和元壬辰歲五月八日花押”
- 九一、寒雉瓜形釜
- 九二、全 井桁釜 唐鏡蓋
- 九三、道也姥口釜
- 九四、天明罐子釜
- 九五、寒雉阿古多形鉄瓶
- 九六、同 瓢形鉄瓶
- 九七、辻井播磨達磨堂風爐
- 九八、信樂一重口水指
- 九九、鈔張大水指
- 一〇〇、青磁大水指共蓋
- 一〇一、呉州染付水指 共蓋
- 一〇二、瀬戸澁紙手水指
- 一〇三、足利時代水次薬罐
- 一〇四、南蠻内澁灰器
- 一〇五、備前火嚮灰器
- 一〇六、南蠻内澁灰器
- 一〇七、石州好桑柄灰七
- 一〇八、時代鉄灰七
- 一〇九、石州好桑柄灰七
- 一一〇、象眼入火箸” 松花堂所持瀧本坊書付”
- 一一一、伊賀燒建水
- 一一二、備前燒建水
- 一一三、出雲石蓋置
- 一一四、祥瑞輪蓋置 在銘
- 一一五、宗旦竹蓋置 在判
- 一一六、青磁杓立
- 一一七、唐銅手付水鉢
- 一一八、砂張水盤
- 一一九、奥次郎風爐五徳 浄味証書添

- 一二〇、鈴木瓜形釜駒  
 一二一、同 龍象眼釜鉤  
 一二二、外黒塗膝白  
 一二三、大形茶臼  
 一二四、黒風爐大板  
 一二五、古染付筒眞切溜 桑柄眞切付  
 一二六、燈具” 隆慶平製下皿赤繪安南下皿織部油次鶯塚燒雀皿同 懸燈械” 察甫□袴固 □這州沓付  
 〈會席家具之部〉  
 一二七、應量器 妙心寺塔中天祥院常什 六客  
 一二八、同 飯臺 妙心寺塔中天祥院常什 六客  
 一二九、大德寺小飯臺 五客  
 一三〇、唐物青貝花鳥箔繪膳 五枚  
 一三一、白檀膳 鎌倉圓覺寺什 五枚  
 一三二、朱塗櫻小丸吸物膳 十人前  
 一三三、黒根來丸飯汁椀 四人前  
 一三四、溜塗腰糸目吸物椀 十人前  
 一三五、同 酒椀 茶津 六人前  
 一三六、黒青貝椀 蓋盃兼 五人前  
 一三七、金閣寺椀 朱縁黒唐草蒔繪 飯汁二ツ揃 十人前  
 一三八、黒手付割蓋飯鉢  
 一三九、根來朱汁次  
 一四〇、名越汁鍋 石州好  
 一四一、鈔張汁次  
 一四二、春慶塗縁高 大德寺三玄院什器 十人前  
 一四三、朱根來椿皿 十枚  
 一四四、赤繪十斤手猪口向付 十人前  
 一四五、白日紅木瓜形向付 八枚  
 一四六、赤樂硯猪口 吉左衛門共箱 十五人前  
 一四七、古清水柘榴畫皿 十人前  
 一四八、古今利錦手小皿 廿人前  
 一四九、古染付小皿 五人前  
 一五〇、紅毛角形小皿 二枚  
 一五一、古曾部燒海老畫小皿 十枚  
 一五二、繪高麗小鉢  
 一五三、井戸脇小鉢  
 一五四、紅毛平鉢  
 一五五、繪高麗小鉢  
 一五六、奧州赤繪小鉢  
 一五七、古今利金繪草花小鉢  
 一五八、青磁平鉢  
 一五九、道光年製染付大鉢

- 一六〇、古今利鉄扇花畫行燈皿  
一六一、染付花鳥模様皿 成化銘  
一六二、井戸脇皿  
一六三、乾山椿畫蓋茶碗 五人前  
一六四、古今利錦手大蓋茶碗  
一六五、南京三ツ組茶碗  
一六六、井戸酒次  
一六七、井戸脇酒次  
一六八、繪高麗酒次  
一六九、光琳模様德利 善五郎作 一對  
一七〇、和蘭陀盃  
一七一、伊部盃  
一七二、高麗鳥の子盃  
一七三、成窯鬪鷄盃 成化銘  
一七四、赤繪四方盃 嘉靖銘  
一七五、汝窯白瓷盃  
一七六、珠光青磁盃  
一七七、青磁蟹見込盃  
一七八、黄瀬戸盃  
一七九、石盃  
一八〇、根來朱猪口 十人前  
一八一、朱根來酒器 法の物  
一八二、松の木盆 官休菴在判  
一八三、唐物若狹盆  
一八四、同内朱籠目軸盆  
一八五、堆朱軸盆  
一八六、黒塗梅花形盆 金縁 牧村遺物  
一八七、堆朱樓閣人物彫八角盆 桑圓遺物狀添  
一八八、春日盆  
一八九、唐物朱四方盆 金縁 石州候所持箱ニ花押有リ  
一九〇、黒根來菓子鉢  
一九一、根來内朱惣菓子盆  
一九二、黒根來太丸盆  
一九三、同朱胡桃足大丸盆  
一九四、唐物黒内朱平喰籠  
一九五、古鏡寫袋形菓子入  
一九六、黒根來大鉢 三組  
一九七、高臺寺黒鉢の子 四ツ組  
一九八、菊水蒔畫湯桶  
一九九、ハッ橋蒔畫湯桶  
二〇〇、金地巴蒔繪小硯箱 見返刑部梨子地松蒔繪

- 二〇一、竹蒔繪青貝入小硯箱 引出シ付
  - 二〇二、梨子地獅子蒔繪硯箱 見返牡丹
  - 二〇三、古銅釣付水滴
  - 二〇四、唐物菊紅葉色繪乱箱
  - 二〇五、撫子蒔繪錫縁乱箱
  - 二〇六、宗甫好卷物箱
  - 二〇七、芥子圖螺鈿卷物箱
  - 二〇八、朱根來手箱 天文六年六月日四谷齊慶院トアリ
  - 二〇九、時代梨子地秋草蒔繪手箱 引出シ付
  - 二一〇、時代桐紋蒔繪簞笥” 豊大閣ヨリ典藥武田法印ニ給ハル所ノ藥籠ナリ 同家旧蔵”
  - 二一一、時代蒔繪胴乱形印籠 豊公御所持 尚古圖録所載
  - 二一二、柳櫻蒔繪丸茶箱
  - 二一三、春慶青貝入七寶蒔繪茶箱
  - 二一四、張抜蒔繪香箱
  - 二一五、宗品穂屋付火入
  - 二一六、伊部透シ付火入
  - 二一七、青磁獅子臺
  - 二一八、赤繪四方三段重蓋物
  - 二一九、銀南京急須
  - 二二〇、桑手付長角蓑盆
  - 二二一、根來小判形手付蓑盆
  - 二二二、時代木地長角蓑盆
  - 二二三、桑袴腰蓑盆 遠州好
  - 二二四、青貝轡長火鉢
  - 二二五、朱根來四ツ足火鉢
  - 二二六、香棚 遠州所持 袋戸松花堂画
  - 二二七、紫檀扉付水指棚 遠州好 外箱内松花堂反古張
  - 二二八、志野棚
  - 二二九、根來卓
  - 二三〇、卓押板
  - 二三一、赤旃檀釋迦觀音小佛 壹基二面
  - 二三二、古銅觀音立像
  - 二三三、深草焼竊觀音
  - 二三四、法隆寺捏盤土偶
  - 二三五、螺鈿梅散シ時代簞笥
  - 二三六、法隆寺唐櫃 櫃裡寺印有
  - 二三七、古近江作三味線 銘瓢 抱一上人發句並粉字箱書
  - 二三八、時代更紗
- 其他雜品數点

柏木の旧蔵品で最も知られた蜂須賀家本『源氏物語繪卷』（現五島美術館蔵）については、すでに三井財閥を支えた実業家益田孝（鈍翁）（1848－1938）の手に渡った後であるため記録は認められない。茶器、



会席家具の多くは、大川が指摘するように益田孝との交友関係に起因する。

明治13(1880)年に御殿山の益田邸内に禅居庵という茶室の設計や晩年手がけた飛鳥山波澤男爵邸、無心庵などの設計を依頼されるなど、近代初期の数寄者たちの人脈の中にあってその世界に組み込まれていたからに他ならない。明治29(1896)年の茶会「弘法大師法会」にも美術評論家として貨一郎の名が登場しているように特に益田と近い距離にあった<sup>(56)</sup>。益田との密なる関係については、大川三雄<sup>(57)</sup>や鈴木邦夫<sup>(58)</sup>の論考に、特に『源氏物語絵巻』『地獄草紙』をめぐる生々しいやり取りについては山口昌男<sup>(59)</sup>論考に詳らかにされているので参照頂きたい。

終言

以上、幕末維新期から明治の世にあって英明果敢な人生を歩んだ柏木貨一郎の好古家としての事績に触れた。明治の世を迎え、わが国の学問思想、諸制度、風俗習慣などが急変し、西洋の実利主義が蔓り、長い歴史の歩みの中で培った伝統や醇風美俗が過去のものとなりつつある中で生きた柏木は、市井にあって伝統を守り抜いた数少ない識者の一人と言えるだろう。その生活ぶりは、かのE.S. モースがその佇まいのスケッチとともに柏木の好古ぶりを記録している<sup>(60)</sup>。柏木は、時勢の流れの中で自ずと文化財保護の立場に身を置いて、時の要人の右腕として活躍し、晩年には、新興富裕層たちの人脈の中にあって彼らが求めようとした美術品の目利きとして大いに活躍したのである。今日我々が眼にする古美術の幾ばくかは柏木の目利きによって受け継がれている。柏木亡き後、益田孝、富永冬樹、大槻如電らが柏木の戒名に関して交わした記録<sup>(61)</sup>を確認すると、その生前のやり取りから柏木の性質がよくわかる。

(一九六) 柏木貨一郎の法號

柏木貨一郎日本建築に精通して山高信離にの建築法を冷嘲し、益田孝以下数名の家屋を建築して名誉を海内に博す。而して彼れ元と江戸ッ兒風の快男兒、胸裏中外の學を湛へて外觀文學無きが如く、自ら鴨の長明を氣取りて又禪門の妙味を咀嚼したり曾て後水尾天皇御作の偶人を得て愛玩措かず、爲に一室を築きて氣樂坊と名け室内什具の料には殆んど5千餘圓を費したり、然共囊中常に餘裕あるに非ず又一家を傳ふべき子孫のあるにも非ず、朋友時に養子を勸むれば彼は唾然として失笑して曰く『馬鹿ア言ッてらァ、己の子なら仕方ねへが、養子で下手な事でもされた日にやァ親父の御人物が廢ッつちまわァ、己ァ明治年間に柏木貨一郎の云ふ毛色の變つた學者が有つたと云ふ事丈傳はれば夫でいゝのよ』と、其氣樂さ加減概ね此くの如し、没するの日親族等相謀り名僧を迎へて法號を諡らしめんとす、益田孝富永冬樹大槻如電等交も諫て曰く『佛の心事はよく分つてるから、そんな事をしちやあならない』と、三人爲めに協議して『氣樂坊柏園探古禪門』の戒名を附す、氣

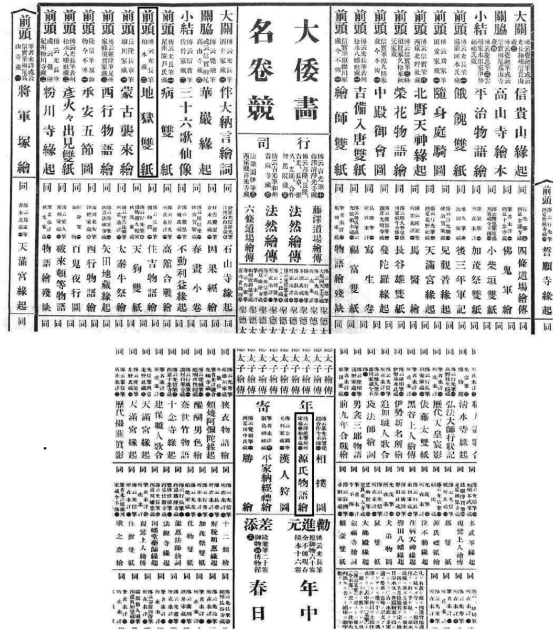


図11 『大倭畫名卷競』(部分) 明治17(1884)年 柏木編纂『高潮』第三号 明治39年所収

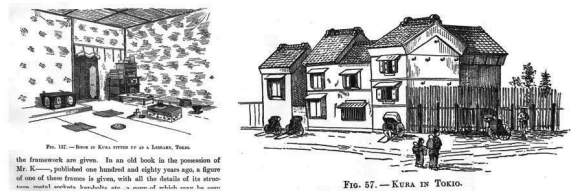


図12 柏木の住居と居室 (モース筆)

樂坊－柏園－探古は皆貨一郎が生前自ら用ひたる別號なり、聞く者三人が友誼の瀟洒たるを賞ず。

尠くも粹に生きた畢生であった。

本稿をまとめるにあたり、史料渉獵に協力頂いた宇野淳子氏、伊藤大祐氏、鎌形慎太郎氏、翻刻の労をおとり頂いた三浦泰之氏、校正のご協力を頂いた鳥越多工摩氏に感謝する次第である。

柏木貨一郎年表（2012年宇野淳子作成年表を2019年6月内川隆志が加筆、修正）

年代	西暦	名前	年齢	月日	出来事	典拠
天保 12	1841	貨一郎	0	正月 16 日	糸物問屋・辻又四郎（加賀前田家の用達を勤める）の第六子として、下谷和泉橋通に生まれる。幼名は辨吉。	嘉々木 1915 鈴木 1958 大川 1994
嘉永 3	1850	貨一郎	8		8歳の頃より大澤松濤の門に入り和漢の学を修め、画を鈴木鷺湖に学び、宗偏流の茶道を身につけた。	嘉々木 1915 鈴木 1958 大川 1994
安政 5	1858	貨一郎	17		幕府の小普請方大工棟梁柏木因幡の養子になる。柏木因幡は文久 4（1864）年の『武鑑』に小普請方大工棟梁とある。	嘉々木 1915 鈴木 1958 大川 1994 深井雅海・藤實 1999
慶応 2	1866	政矩	25	1月 16 日	『集古印史』冊子	国立国会図書館 OPAC 甲山文庫
				7月 13 日	『高坏考』卷子本	国立国会図書館 OPAC
					『女装考』卷子本 この頃の制作か？	国立国会図書館 OPAC
慶応 4	1868	貨一郎	27		因幡の隠居の後、柏木家第九世を継ぎ若狭と称した（MUSEUM590 号には明治 1 年とあり）幕府の崩壊とともに家業を失う	嘉々木 1915 鈴木 1958 大川 1994
明治 1	1868	貨一郎	27	11 月	田口卯吉は旧幕臣飯岡金次方に身を寄せてその骨董品店等を手伝っていた、と杉原四郎・岡田和喜編『田口卯吉と東京経済雑誌』にある。柏木貨一郎はその骨董品の整理にかかわっていたのではないか。	山口 2004
明治 3	1870	政矩	29		[妙法蓮華経卷第二残闕]（柏木が出所。同出所資料群）	
明治 4	1871	政矩	30	4 月	招魂社境内の兵部省管轄の建物にて行われた大学南校物産局の主催による物産会に「柏木政矩 鋳物部門に 1 点、古物部門に 96 点」を出品（東博百年史）。『石器寫図』（大阪府個人蔵）はこの時の出品物を記録したものか。	大川 1994・山口 2010
				5月 14 日 ～5月 20 日	大学南校物産会にて、12 点出品（この時に松浦も）。東京国立博物館蔵の『明治四年物産会草木玉石類写真』『漢太利産草木写真』に出品物の写生図があり、伊藤圭介の『日本産物志』の挿図にそのまま使われた。	木下
				10 月	湯島大成殿にて開催予定の博覧会（経済的理由により中止）の監事を申しつけられる。「この博覧会のために、松浦武四郎、福田敬業、柏木政矩、長井十足、永井休三、樋口光義、市川得庵、板橋貴雄らに対し会期中の博覧会幹事を申し付けた書類等も存している。」（東博百年史）	大川 1994
明治 5	1872	政矩	31	3月 10 日	湯島聖堂で開催された博覧会に「雷斧 播磨国極楽寺瓦経并願文三件」を出品。	大川 1994
				7月 2 日	山城国京浦寺藏額字摺影 拓本、掛軸（仮表装） 107.2cm × 112.8cm	東京国立博物館
				7月 11 日	清閑寺藏琴摺形 拓本、掛軸（仮表装） 57.0cm × 107.5cm	東京国立博物館
				8 月	文部省博物館による関西古社寺宝物調査（壬申検査）に随町田久成・内田正雄・蟻川式胤の三人が私費を出して政矩を古器物模写のために随行させる。「柏木政矩 巡回ノ先々ニ而古器物写し方ノ為ニ、町田・内田・蟻川三人の私費ニテ同行仕り、此園物出来上り候ハ、博物館ノ沿革ニ備フ、路費及日々手当三人より出ス、日当一日二分」	木下 大川 1994 米崎 2005
				9 月	仁徳天皇陵の前方部正面が台風により土砂崩れ、竪穴式石室が露呈。柏木は石室に入り、内部の様子をスケッチ。その図面は大阪市立博物館、八王子市郷土資料館に収蔵。	堺市博物館 2009
					正倉院大笙摺影 正倉院の大笙（楽器）の模写と拓本。当時はばらばらに分解されていた様子がうかがえる。蟻川式胤の書き込みにより、模写は柏木政矩が写したものとわかる。町田久成による朱字の書き込み（考証）も見える。26.9mm × 245.3mm	東京国立博物館
明治 6	1873	政矩	32		大正 8（1919）12 月 8 日発行の東京帝室博物館『東京帝室博物館歴史部第四区＜祭祀宗教＝関スル遺物＞目録』10 ページ 94 に「花籠 竹製。柄付。径凡二寸五分。大和国古野ニテ用フルモノ。 徳川時代 明治六年柏木政矩寄贈 一」	Google Book 慶應義塾図書館所蔵東京帝室博物館『東京帝室博物館歴史部第四区＜祭祀宗教＝関スル遺物＞目録』 <a href="http://books.google.co.jp/books?hl=ja&amp;lr=&amp;id=TdVOC6DfXeu0C&amp;oi=fnd&amp;pg=PA11&amp;dq=%E6%9F%8F%E6%9C%A8%E6%94%BF%E7%9F%A9&amp;ots=hgeJXl584n&amp;sig=UEQkHQvKXQZwvsSEyuuTAAZr5R5fv=onepage&amp;q&amp;f=false">http://books.google.co.jp/books?hl=ja&amp;lr=&amp;id=TdVOC6DfXeu0C&amp;oi=fnd&amp;pg=PA11&amp;dq=%E6%9F%8F%E6%9C%A8%E6%94%BF%E7%9F%A9&amp;ots=hgeJXl584n&amp;sig=UEQkHQvKXQZwvsSEyuuTAAZr5R5fv=onepage&amp;q&amp;f=false</a>



明治14	1881	貨一郎	40		第2回内国勲業博覧会において美術関係の審査員を務める。	大川 1994
				4月	博物館は農商務省に移管される	大川 1994
明治14 ～15頃	1881 ～82	探古	40～41		「当時の好事家たる岸田吟香、関根只誠、柏木探古、仮名垣魯文、竹内久一、大久保紫香、五姓田芳柳等の諸氏と共に探古小集と名づけて持寄品の品評会を催して居られたこともあった。」	青木・佐々木・山本 2007
明治15	1882	探古	41		『玉篇』残巻(1882跋)	NDL-OPAC
				10月	『玉篇』巻十八之後分(1883跋)	早稲田大学 OPAC、國學院大學大学図書館蔵の和本(複製)
明治16	1883	探古	42	1月	市川団十郎が立ち上げた求古会のメンバーとして、岡本綺堂や黒川真頼、岡本純(きよし、岡本綺堂の父)らと共に柏木探古の名がある(典拠不明)。	<a href="http://kidojibutsu.web.fc2.com/contents/engeki.html">http://kidojibutsu.web.fc2.com/contents/engeki.html</a>
				3月	経軼牌(木鐸)1枚<列品番号H1107、『目録』膝工101頁>(挿図39) [目録概要]木製、長6榿、幅2榿、銘「大方等大集経(ママ:写真は「経」)」「初軼大乘部」、柏木貨一郎寄贈 [法量]長6.0cm、幅2.5cm、厚0.45cm [種別/材質・形状]模造/木製、墨書 [銘記]「初軼大乘部」「大方等大集経」(表・裏に墨書。対象宝物にあり) [所見]上々作 [製作]明治 [来歴]明治16年3月 柏木貨一郎氏寄贈 [備考]柏木貨一郎(政矩・探古齋)は元徳川普請方(大工棟梁)の家柄で、美術鑑識・収集家。明治5年の壬申検査に参加し、博物館草創期に奉職(壬申検査の様子を岸光景が描いた扇面画に表された人物の一人に「柏木古印模」と見えるほか、『東京国立博物館百年史』[1973、第一法規]による)。 [対象宝物]中倉 65-4 経軼牌	西川
		貨一郎		6月11日	博物館(農商務省6等属)を退職。その後は日本建築の棟梁と古美術の鑑定家・コレクターとして活躍。	大川 1994
明治17	1884	貨一郎	43	4月14日	『大倭書名巻鏡』出版御届	『高潮』第3号(明治39年4月25日発行)
				6月25日 ～9月中旬	フェロノサが文部省調査団の顧問というかたちで関西調査旅行(古社寺歴訪の旅)を行っている際に岡倉天心などと共に同行	
明治19	1886	貨一郎	45	夏	岩崎彌之助邸の工事開始	
明治19 ～20	1886～ 1887	貨一郎	45～46		「古代玉ノ價值」を著す。	柏木貨一郎 1887「古代玉ノ價值」『東京人類学会』第2巻第12号
明治23	1890	貨一郎	49	12月	岩崎彌之助邸の工事完成	
明治24	1891	探古	50	1月	飯室伊兵衛より気楽坊偶像を譲り受けて、器物調度を附属させる	藤本 2004
明治26 頃	1893	貨一郎	52		『埼玉津賤の芋手巻』写/刊行	
明治26	1893				『徴古文書』乙集	黒板勝美・下村三四吉共編 出版元不詳
明治27	1894	貨一郎	53	10月	有楽町三井集會場が完成	大川 1994
明治31	1898	探古	57	9月6日	飛鳥山に建設中の渋沢邸の現場よりの掃り、踏み切りにて汽車にはねられ死亡。享年58歳、法號を「気楽坊探古柏園垂空禪士」という。火葬後、深川寒光禪寺に埋葬。居住地は根岸。寺は大正の戦火と震災に遭い、墓所を谷中霊園に移す。	広瀬 1973 木下 鈴木邦夫

(年代不明)		政矩			「[狛笛図(町田久成蔵)](墨摺)」を模す	埼玉県立文書館
(年代不明)		政矩			「菅家紅梅殿指図(心蓮院所蔵原図三分之二)」を模す	埼玉県立文書館
(年代不明)		政矩			「[菅家紅梅殿内部図(文書櫃配架図)]」著色、一枚物 34.1cm × 53.3cm	東京国立博物館
(年代不明)		政矩			「[菅家紅梅殿内部図(文書櫃配架図)]」を模す	埼玉県立文書館
(年代不明)		政矩			「妙法蓮華経巻第二残闕」を模す	埼玉県立文書館

昭和8	1933	貨一郎		10月	『建築雑誌』誌上で行われた第3回「明治建築座談会」で貴伸住宅に最も関係の深かった人、系平の家の設計者として柏木の名前が挙がる。	大川 1994
昭和48	1973			4月	芸術新潮の田中比佐夫「戦後美術品移動史-4- 鈍翁・益田孝の蒐集品」に出てくる	広瀬 1973
昭和48	1973				次男の董さんは目白にお住まい	広瀬 1973

(年代不明)					原三溪翁に愛され、お抱えのような形であった	広瀬 1973
(年代不明)					最も有名な話は松浦武四郎氏に古経をかし候處松浦の事故スマシテ中途をきりとて返し候。然るに豫て評判をしる故、探古氏は豫め衝にかけて置きし故忽ち露顯して大に油を絞られしとか。	香取 1976-2

#### 参考文献

- ・柴田常恵 1903「雑筆六則」『東京人類學雜誌』第18巻第207號
- ・鈴木解雄 1958「江戸幕府小普請方について」『日本建築学会論文報告集』第60号 日本建築学会
- ・広瀬千香 1973「探古と気楽坊人形」『山中共古ノート 第二集（未発表稿 私家版）』
- ・香取秀真 1976「柏木探古の履歴」『金工史談』続篇 国書刊行会
- ・大川三郎 1984「数寄屋建築家 柏木貨一郎について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』（関東）
- ・金井塚良一 1975「第一章序章 吉見百穴横穴墓群研究史」『吉見百穴横穴墓群の研究』
- ・近江栄 1991「近代和風建築を支えた工匠に関する史的研究（梗概）」住宅総合研究財団研究年報No.18
- ・杉山莊平 1992「H・シーボルトと吉田正春のこと」『平井尚志先生古稀記念考古学論攷』大阪・郵政考古学会
- ・大川三郎 1994「工匠・柏木貨一郎の経歴とその史的評価について」『日本建築学会計画系論文集』第459号
- ・深井雅海・藤實久美子 1999『江戸幕府役職武鑑編年集成』第三十四巻（文久三年—元治元年）東洋書林
- ・山口昌男 2004『経営者の精神史—近代日本を築いた破天荒な実業家たち』ダイヤモンド社
- ・藤本孝一 2004「柏木探古稿本『東寺塔興廢表并記事等雜記』東京国立博物館『MUSEUM』第590号
- ・塩野博 2004「柏木貨一郎の踏査記」『埼玉の古墳 比企・秩父さきたま出版会
- ・米崎清美 2005『蟠川式胤「奈良の道筋」』中央公論社
- ・青木稔弥・佐々木亨・山本和明校訂 2007『増補 私の見た明治文壇1』（東洋文庫759）平凡社
- ・堺市博物館 2009『仁徳天皇陵築造—百舌鳥・古市の古墳群からさぐる—』堺市博物館
- ・山口卓也 2010「柏木政矩の『石器窺図』」『関西大学博物館蔵 本山彦一蒐集資料目録』関西大学博物館
- ・内川隆志・宇野淳子 2013「明治期における好古家の諸相—松浦武四郎と柏木貨一郎の土個人周旋をめぐって—」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第5号 國學院大學研究開発推進機構
- ・木下直之 「学問のアルケオロジー」 [http://www.um.u-tokyo.ac.jp/publish\\_db/1997Archaeology/01/10700.html](http://www.um.u-tokyo.ac.jp/publish_db/1997Archaeology/01/10700.html)
- ・平野恵 「好古から考古へ—近世から近代へ継承された学問の形態—」 [http://www.um.u-tokyo.ac.jp/museum/ourobros/09\\_03/bunkyo.html](http://www.um.u-tokyo.ac.jp/museum/ourobros/09_03/bunkyo.html)
- ・西川明彦 「『正倉院宝物関係資料紹介』東京国立博物館所蔵木漆工模造品」 <http://shosoin.kunaicho.go.jp/public/pdf/0000000258.pdf>
- ・早稲田大学図書館 [http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ri11/ri11\\_02448/index.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ri11/ri11_02448/index.html)

#### 註

- (1) 山口昌男 1999「日本近代における経営者と美術コレクションの成立：益田孝と柏木貨一郎」『札幌大学文化学部紀要』11 - 12頁に指摘されているように、「日本人種蝦夷人種所有物の区別」（『史海』第17巻 明治25年10月号 1-3頁）、「南北人種分界地図に就て落後氏に答ふ」（『史海』第21巻 明治26年3月号 5-11頁）では「コロボックル論」を展開、加えて同書には「聖徳太子御降誕並御享年」（11・12頁）、「埼玉津賤の芋手巻」（『史海』第23巻 明治26年5月号1-8頁）、「又繰返す賤の芋手巻」（『史海』第24巻 明治26年6月号78-86頁）では「歴史地理学」などの論考が認められる。  
『史海』第21巻 明治26年3月号の貨一郎の論説に対して、坪井正五郎は、「石器時代の遺跡に関する落後生、三溪居士、柏木貨一郎、久米邦武四氏の論説に付き数言を述ぶ」（『史学雑誌』第42号 史学会）をもってその内容について自身の意見を述べている。また、『史海』第23巻 明治26年5月号に掲載された「埼玉津賤の芋手巻」については、貨一郎の稿本が早稲田大学図書館に収蔵されている。
- (2) 近江栄 1991「近代和風建築を支えた工匠に関する史的研究」（梗概）『住宅総合研究財団研究年報』No.18  
大川三郎 1994「工匠・柏木貨一郎の経歴とその史的評価について」『日本建築学会計画系論文集』第459号
- (3) 註(1)
- (4) 嘉々木雪山 1915「近世名匠伝 一三 日本建築家柏木貨一郎」『建築工芸叢誌』第2期第15冊
- (5) 佐々木昌孝・中川武 2005「江戸幕府小普請方大工棟梁「柏木家」について」日本建築学会学術講演梗概集（近畿）2005年9月
- (6) 鈴木解雄 1958「江戸幕府小普請方について」『日本建築学会論文報告集』第60号 日本建築学会
- (7) 註(2)
- (8) 深井雅海・藤實久美子 1998『江戸幕府役職武鑑編年集成』第二十二巻（文化十三年—文政五年）東洋書林99裏
- (9) 深井雅海・藤實久美子 1999『江戸幕府役職武鑑編年集成』第三十四巻（文久三年—元治元年）東洋書林108表
- (10) 深井雅海・藤實久美子 1999『江戸幕府役職武鑑編年集成』第三十六巻（慶応三年—明治元年）東洋書林
- (11) 冨山文庫については『国立国会図書館百科』に「1 古文書田券類 2 武家文書 3 古写経 4 地誌・地図類 5 名家自筆本 6 古銭関係 7 印譜及び古印関係書 8 その他有職故実、茶道関係書・双六・絵暦」とあり、およそ950件3500冊119帖42軸325枚から成る。昭和6（1931）年に帝国図書館に寄贈され、昭和10（1935）年目録が刊行された。『集古印史』を含む古印関係史料は約20種知られている。

- (12) 木邨嘉平は、天明6(1786)年以来5代に亘って木版彫刻の第一人者として不動の名声を得た江戸の字彫り板木師。二代の手による市河米庵『墨場必携』、斎藤月岑『江戸名所図会』、三代の市河米庵『小山林堂書画文房図録』などが知られる。房義は島津斉彬の依頼によって洋式鉛活字の刻字、鋳造に初めて成功し、木邨嘉平関係資料(重要文化財)として現存する。
- (13) 山口昌男 2004『経営者の精神史——近代日本を築いた破天荒な実業家たち』ダイヤモンド社 242頁
- (14) 杉原四郎・岡田和喜編 1995『田口卯吉と東京経済雑誌』日本経済評論社 420頁
- (15) 東京国立博物館 1973『東京国立博物館百年史 資料編』東京国立博物館 603頁
- (16) 『石器寫図』は、大阪堺市在住の考古学資料蒐集家の植田兼司氏が発見し、現在堺市博物館に寄託され保管されている。様々な石器を記録したものの巻紙には「柏木之印」が押された印形が、既知の柏木貨一郎の印と一致することから、柏木貨一郎の手によるものである事が判明している(山口卓也 2010『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』関西大学博物館 10頁)。
- (17) 山口卓也編 2010『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』関西大学博物館 11-13頁
- (18) 木下直之 1997「大学南校物産会について」『学問のアルケオロジー』東京大学出版会 87～88頁
- (19) 註(14) 150～160頁
- (20) 註(15) 172～173頁
- (21) 独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所編 2004『明治期府県博覧会出品目録明治四年～九年』中央公論美術出版
- (22) 町田久成・内田正雄・蜷川式胤の三人が私費を出して政矩を古器物模写のために随行させる。「奈良の道筋」によると「柏木政矩 巡回ノ先々ニ而古器物写し方ノ為ニ、町田・内田・蜷川三人の私費ニテ同行仕り、此圓物出来上り候ハ、博物館ノ沿革ニ備フ、路費及日々手当三人より出ス、日当一日二分」とある(米崎清実 2005『蜷川式胤「奈良の道筋」』中央公論社)。
- (23) 同註(22) 米崎 文献
- (24) 玉利薫 1992「堺県令税所篤の発掘」『墓盗人と贋物づくり』平凡社選書 142 138～185頁
- (25) 堺県公文書に記録はないが、明治5年9月13日の届け出に「当四月十五二伺出候処、御聞届相成」とみえる(白神典之 2011「明治壬申年仁徳御陵前方部石槨発見顛末考」『堺市博物館報』第30号 14頁)。
- (26) 当県管内大島郡仁徳帝御陵ノ義、諸鳥ノ巢窟ト相成汚穢不潔ノ姿ニ立到候処ヨリ鳥糞取除清潔行届候様仕度、当四月十五日伺出候処、御聞届相成、此節掃除取掛り候折、御陵内掃除ノ路筋高サ四間計ノ所ニ至リ、大ナル盤石ノ傍ニ小石等有之取払候処、右大石ノ下タ空穴ニテ覘見候処、甲冑并劍其外陶器類且広大ノ石櫃有之一面ノ石蓋ニテ何レモ貴重御品ト見請、早速掛りノ者ヨリ届出、早々出張現場相改候処申出通無相違、依テ空穴ノ義ハ則嚴重閉塞致シ置候ヘトモ、掃除中兼テ出張申付置候番卒猶護守致サセ置申候。就テハ御見分ニテモ可有之哉、従前之通土石相覆弥清潔致置可然哉、至急御下知被下度候。以上
- 但、世古宮内少蔽亟此節勅封御開封ニ付、京都滞在ノ由ニ付、不取敢官吏差立、本文ニ付事実御検査請度旨不取敢申出候処、何レ山陵ノ事ニテ、正院ヘ伺ノ上、御下知モ可有之トノ事ニ御座候ニ付、此段御届且御伺申上候。以上
- 壬申  
九月十三日  
堺県七等出仕田代 環  
堺県参事 藤井千尋  
堺県令 税所篤
- 教部卿 嵯峨 殿  
教部大輔 穴戸 璣殿
- 今般当省官員諸陵為巡視而不日其地出張候条、諸事其向ヘ打合可伺出候。尤番卒守護無怠様可申付候事 印
- (27) 蜷川式胤の『奈良の筋道』には、「柏木モ用事是迄ト申渡ス也(中略)柏木氏ハ夜船ニテ上京也」とあり、明治5年9月7日にはお役御免となっている。また、17日には「柏木モ今夕ヤ大坂ヘ出立ノ事」とあり、同月19日に仁徳陵で石棺と甲冑の絵を描いている(米崎清実 2005『奈良の筋道』中央公論出版部 294頁 326頁)。

- (28) 白神典之 2012「明治壬申年仁徳御陵前方部石槨顛末考Ⅱ－天理大学附属天理図書館蔵『徴古雜抄』図一上及び『古制徴証』より－」『堺市博物館研究報告』第31号 堺市博物館 83(51)～82(52)頁
- (29) 落合直澄 1889「仁徳御陵器物圖解」『國光』第1巻第4號 545頁
- (30) 小川貴司 1983「落合直澄旧蔵の『仁徳陵古墳石棺図』について」『考古学雑誌』69-2
- (31) 香取秀眞 1976「柏木探古の履歴」「柏木探古の逸事」『金工史談 続編』国書刊行会 627-629頁
- (32) 『東京国立博覧会百年史』1973 東京国立博物館 169-171頁
- (33) 清水重敦 2013「古社寺保存金制度の成立と終焉」『日本建築学会計画系論文集』第78巻 第687号 1227-1228頁
- (34) 早稲田大学図書館古典籍データベース [http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/chi01/chi01\\_05654/](http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/chi01/chi01_05654/)
- (35) 『シーボルト父子の見た日本』1996 ドイツ日本研究所編
- (36) 『撥雲餘興』首巻所載の「十字鈴・鍬石・三輪玉」「武州大里郡堀出十字鈴」「大和國十市郡堀出石小刀の圖」「威料大如図」「夔匱蓋」については、署名入りの挿絵、「漢匱壺」については跋文を寄せている（内川隆志・宇野淳子 2013 「明治前期における好古家の実相－松浦武四郎と柏木貨一郎の土偶人の周旋をめぐる－」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第5号 34-42頁）。
- (37) 會員談叢「福田寒林上人談」1912『集古』集古会  
 「柏木貨一郎といふ人は中々人の物は感心しない人で何を持って行つてもキットけなすので皆んな一番其鼻を折つてやろうと思はないものはなかつたが或時あんまり青瑯玕の講釋を聞かされて癪に障はつたから其次行くとき硝子切を懐中して行つて御話によれば青瑯玕といふものは鑛物中で一番堅いものだ相だが今日は一つその硬度を試めたいから御愛蔵の品を出し給へといふと何をすんだといふから懐中から金剛石入りの硝子切を取り出してこれで一寸障はつて見る積りといふと飛んでもないことをいふと早速片付られたことがあつた柏木氏に品物が這入るとそれが高價に賣れて行くのは不思議な位だつた一例をいふと或入札で畠山如心齋が青瑯玕も曲玉を三分で落とした夫れを十圓で古錢商の鷺田（先代）に賣つた鷺田が柏木に五圓儲うけて納めると夫れが間もなく二百五十圓で某氏に賣れた先つ其人に徳があつたといふのでせう柏木は松浦多氣四郎翁をサンザンに悪口し其著はされた撥雲余興など徹頭徹尾罵倒して居たが何か原因があるんだろうと思つて探ぐつてみると案の如く松浦が撥雲余興の表紙に使ひ度いといふので柏木から古寫経を一巻借りて置いたが返へすとき其中から數寸計り切り取つて返へした然し柏木も柏木だから貸すときに其經巻を目方に掛けて置いたのだから承知しない到頭松浦から切り取つた分を取り返へした夫れが原因だつた。」
- (38) 根岸武香は、父根岸友山（1810-1890）の次男として武蔵国大里郡青山村（現 埼玉県熊谷市青山）の素封家に生まれた。家督相続の後、維新後は大宮県大総代名主を皮切りに浦和県第14区戸長などを務め、明治12（1879）年に埼玉県会議員となり、明治27（1894）年には貴族院議員に選出されるなど中央政界で活躍する一方、明治10（1877）年に吉見町の黒岩横穴群を発掘し16基の横穴墓を開口させるなど好古家としても特筆すべき業績を残した人物である。明治15（1882）年にはE.S. モース（1838－1925）が同家を訪れるなど、H.v. シーボルト、坪井正五郎、神田孝平、黒川真頼、佐藤弘毅、八木英三郎、大野延太郎（雲外）、柴田常恵等多くの知識人が訪問し、近在の青山古墳、三千塚古墳、黒岩横穴墓群、吉見百穴横穴墓群等を訪れている。自宅には「蒐古社」と称する「古器物陳列室」を開設するなど、考古学への熱意は並々ならぬもので、明治19（1886）年に東京人類学会に入会してからは、本格的にその世界に傾倒した人物である。
- (39) 三浦泰之 2011「武蔵国『好古家』根岸武香と松浦武四郎」『松浦武四郎研究序説－幕末明治期における知識人ネットワークの諸相－』研究代表者笹木義友 北海道出版企画センター
- (40) 註(36) 31-34頁
- (41) 柴田常恵 1903「断簡遺墨」（「雑筆六則」のうち）『東京人類学会雑誌』第207号
- (42) 金井塚良一 1977「もう一つの百年目－黒岩横穴墓群の発掘をめぐる－」『考古学研究』第24巻第3・4号 考古学研究会

- (43)・柴田常恵 1903「雑筆六則」『東京人類學雜誌』第18巻 第207号  
「黒岩村穴居畫圖面並に愚考本月七日大學の温知會に差出演説仕候處、一同奇珍なりと賞美仕候、翌八日彼の寫しを福地へ相廻し、日々新聞に掲載仕候、定めし御一覽の事と奉存候」  
・塩野博 2004「柏木貨一郎の踏査記」『埼玉の古墳 比企・秩父さきたま出版会 40頁
- (44) 塩野博 2004「柏木貨一郎の踏査記」『埼玉の古墳 比企・秩父』 さきたま出版会 39-41頁
- (45)「過日古穴居の件をシイボルトに物語候所同氏大によろこび、其事に付拙宅へ再三度参り、是非実地一覽致度旨申。既に今朝八時に小生宅へ参り、弥々明後二十四日出立に取極候間、小生より根岸君へ一封可差出置と依頼に付、不取敢此度御報知仕候間、何卒乍手数彼地へ御案内被下度、外一人は小生友人にて安堂孝七郎（ママ）と申者に御座候」（杉山莊平 1992「H. シーボルトと吉田正春のこと」『平井尚志先生古稀記念考古学論攷』大阪・郵政考古学会 40-41頁）
- (46) 横田洋一 2008「五姓田義松とハインリッヒ・フォン・シーボルト」『五姓田のすべて—近代絵画への架け橋』神奈川県立歴史博物館・岡山県立美術館 210-213頁
- (47) 註(3) 11頁
- (48) 鎌形慎太郎 2020「古銭蒐集をめぐる明治期好古家の様相—根岸武香の蒐集とその交友—」本書『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究Ⅲ』（平成29年度科学研究費助成事業 基盤研究B 研究課題番号17H02025）報告書。47頁
- (49) 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2552103>
- (50)『玉篇』30巻は、顧野王の撰述になるもので、梁の大同年間（535-546）に編まれた。偏・旁により漢字を542部に類別する部首別の字書で、日本にのみ伝世する極めて貴重な史料である。国宝「早稲田大学図書館本」は、卷子装仕立て、法量は26.9×1625.9cm（外寸27.7×1728.4cm）を計る。紙背：金剛界私記（治安元年写）、銭屋総四郎、磯淳、川田剛、田中光顕旧蔵品。
- (51) 藤本孝一 2004 柏木探古稿本『東寺堂塔興廢表并記事等雜記』『MUSEUM 東京国立博物館研究誌』第590号 東京国立博物館事業部事業 企画課出版企画室編集
- (52) 明治11（1878）年、日本美術の衰退を危惧した佐野常民、河瀬秀治、九鬼隆一らによって創設された団体で、古美術品の鑑賞会である「観古美術会」や品評会を催した。明治17（1884）年には、九鬼隆一や岡倉天心が離反し「鑑画会」を発足させた。鑑画会の革新運動に危機感をいだいた龍池会は、明治20（1887）年「日本美術協会」と改称した。「龍池会会員姓名表」によれば貨一郎は、創設期より関わっており『工芸叢談』第1巻（明治13年6月）には、「號号19番 職任書記 柏木貨一郎」とある。
- (53) 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/849467>
- (54) 黒板勝美・下村三四吉共編 1893『徴古文書』乙集 出版元不詳
- (55)『柏木探古遺愛品列品目録』1901 東京帝室博物館
- (56) 註(2) 18-19頁
- (57) 註(2) 149-150頁
- (58) 鈴木邦雄 1998「鈍翁コレクションのアルケオロジー」『鈍翁の眼 益田鈍翁の美の世界』五島美術館 151-154頁
- (59) 註(1) 29-36頁
- (60)「蔵の壁には本棚や置き戸棚が並び、柏木氏はそこに書物や宝物を仕舞っておく。帽幕をかかげると出入り口が出来る。彼は探すものがあるとそこからもぐり込むのであるが、布を通じてかすかに輝く蠟燭の光によって、私は彼がその辺を動いているのか知ることが出来た。」(E.S. モース 石川欣一訳 1970『日本その日その日』平凡社 東洋文庫)
- (61) 増田義一 1900『實業家奇聞録』實業之日本社 253-255頁



# 近世後期の尾張名古屋博物館について

## —近代日本の「博物館」前史の一断面—

三浦 泰之

### はじめに

近代日本の「博物館」前史として、江戸時代に「本草会」、「物産会」、「博物会」などと呼ばれる〈展示会〉が行われていたことはよく知られている。薬用に供する植物や動物、鉱物の考究を主な目的とした本草学の隆盛を背景に、江戸においては宝暦7年(1757)に本草学者田村藍水が開催した「薬品会」がその嚆矢とされ、以後、三都のみならず、地方でも盛んに行われるようになった。「もともとは本草家・医師・薬種商人などが手許の薬物・薬材のなかから貴重な物や疑問のある物を持ち寄って、展示し、その真贋や名称をめぐる質疑応答し、情報交換する会」であったが、やがて一般庶民にも公開されるようになり、出品者自身が集めた、薬物・薬材に限らない「天地自然の珍品・奇品万般」のコレクションを広く観覧に供する場にもなっていた(西村1999年(上)、133～134頁)。

そして、19世紀に入ると、自然物ばかりでなく、人工物も盛んに〈展示〉の対象となる。蘭学の流行を背景にした西洋舶来の珍しいモノに加え、特徴的なモノとしては、「古物」(勾玉や石器、土器、古銭、古鏡、古瓦、古武具、古経、古書画など)が挙げられる。18世紀以降、いにしえの中国や日本の制度・思想・文化・風俗などを研究する考証学や国学の隆盛のもと、儒学者や国学者ばかりでなく、大名クラスの武家から下級の武家、商人、町人、書家、画家、歌人、漢詩人など、身分的にも社会的にも多様な立場の人々の間で古物への興味関心が高まった。それらの人々は「好古家」と呼ばれ、本草家と同様、さまざまなネットワークを通じて集めたモノや情報を定期的な会合の場で披露し合うことも行われたのである。そうした会合は、例えば、幕府の書物奉行であった近藤重蔵が文化年間に江戸日本橋の書斎・擁書城で開いた「花月社」、書誌学者山崎美成が中心となって江戸上野で開いた「耽奇会」のように、特定の会員のみが集まる沙龙的な場から、一般にも公開された「博物会」のような〈展示会〉まで、さまざまであった。

以上のような、18世紀以降盛んになる、自然物・人工物に対する知的好奇心や蒐集熱の高まり、そして、それらのモノを〈展示〉し、〈観覧〉するという経験の蓄積、関係者の間で築かれた幅広いネットワークの存在は、近代日本の「博物館」制度とその全国的な受容を準備した社会的な背景の一つと言える。

そのような問題意識のもと、本稿では、江戸時代に行われた〈展示会〉の一事例として、これまで、断片的にしか言及されていない「尾張名古屋博物館」について紹介する。尾張藩士で本草学者でもあった吉田平九郎〔号：雀巢庵〕(1805～1859)が「会主」(主催者)となり、その自宅にて、天保8年(1837)から安政6年(1859)まで計20回、概ね毎年1回、1月25日に開催された〈展示会〉である。「同好の人々奇品珍物を持寄り、二十六、七日迄一般の観覧に供した」(吉川1993年、12頁)とされるように、沙龙的な集まりであったと同時に、一般に開かれた会でもあったと言える。

### 1 対象とする史料について

本稿で対象とする尾張名古屋博物館の出品目録は、国立国会図書館に、2系統のものが所蔵されている。【表1】として、尾張名古屋博物館の開催一覧と、その出品目録についてまとめた。

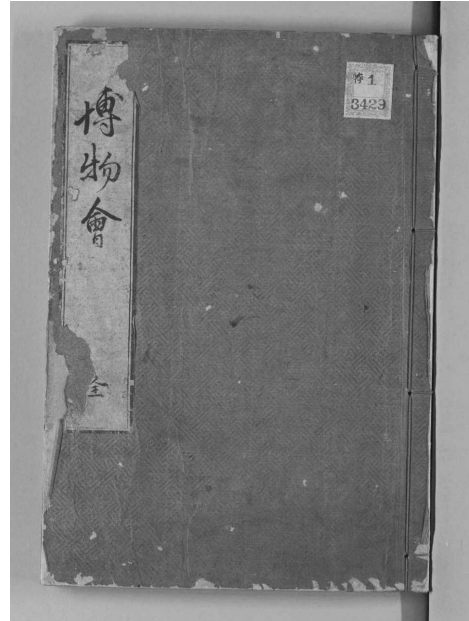
まず、第一に、植物学者白井光太郎(1863～1932)旧蔵の本草学関係コレクション「白井文庫」にある『博物会目録』全17冊である。縦24cmの和装本で、出品物とその出品者名が年ごとで1冊に墨書でまとめられ、巻末には出品物の一部について、その拓本や模写図、縮図が収められている。各冊とも末尾に「雀巢庵」の奥書があり、馬廻組や寄合組を歴任した尾張藩士で本草学者の吉田平九郎の旧蔵書であること

がわかる。先述したように、この博物会は吉田が「会主」であり、いわば主催者自身がまとめた出品目録である。

第二に、やはり尾張藩士で本草学者の伊藤圭介(1803～1901)が収集した本草学関係書のコレクション「伊藤文庫」にある『尾張名古屋博物会目録』全5冊である。縦24cmの和装本で、内容は概ね白井文庫本と同様である。ただ、白井文庫本では拓本である図版が伊藤文庫本では拓本の模写になっていることから、写本と考えられる。この博物会には、伊藤も「修養堂」の名義で全20回の内、17回にわたって出品していることから、欠席した回も含めて、出品目録の〈原本〉から書き写されたものかもしれない。また、伊藤文庫本の出品目録も、年ごとに1冊に墨書でまとめられているが、後世、5冊に合本されている。

なお、白井文庫本と伊藤文庫本を比べると、白井文庫本では天保13年(1842)、天保14年(1843)、安政3年(1856)の出品目録が欠けている。また、嘉永元年(1848)、嘉永2年(1849)、安政2年(1855)の3年分は、白井文庫本にも伊藤文庫本にも出品目録が確認出来ない。この年については、開催されなかったと考えられる。

ちなみに、白井文庫本、伊藤文庫本ともに、国立国会図書館デジタルコレクションにて、カラー画像で閲覧することが出来る。



博物会目録【天保9年】白井文庫本  
国立国会図書館デジタルコレクションより

## 2. 出品物及び出品者について

尾張名古屋博物会の出品目録では、例えば、【表1】の出品目録(2)の一部を例にすると、

一、鏃	三本	長一尺八寸	有図	友水
一、錫ノ矢	三本			会主
万暦九年				
一、銓			有図	千璫
一、古鏡			有図	同
一、勾玉金環銀環			有図	同
一、不詳金物			有図	会主
舶来				
一、耳サラエノ具				同
一、不詳物			有図	中邑氏

のように、出品物1件ごとに、一つ書きで、出品物とその出品者が列挙されている。また、ところどころに記されている「有図」は、巻末に、拓本や模写図、縮図といった図版が掲げられていることを意味している(ただし、「有図」の記載があっても、必ずしも図版が掲げられているとは限らない)。

そこで、【表2】として、出品目録に記載されている、出品物と出品者の原文記載を表形式でまとめた。紙幅の都合上、【表1】の開催一覧の内、①天保8年(1837)～⑤天保12年(1841)、⑩安政6年(1859)、の6回分に限定せざるを得なかったことをお断りしておきたい。ただ、【表2】に掲げた分だけを取り上げ

ても、自然物か人工物か、日本・中国・朝鮮・琉球・蝦夷地・西洋などの地域の別、時代の新旧を問わず、実にさまざまなモノが出品されていることがうかがえよう。

また、出品者の原文記載ごとに、全 20 回それぞれの出品件数についてまとめたものが【表 3】である。表末の出品物総件数と出品者総数から、延べ 2,884 件の出品物があったこと、延べ 265 名の出品者がいたこと（ただし、後述する【表 4】にあるように、複数の名義を使用した人物もいると考えられることから、実数はやや少なくなると思われる）、出品者・出品物ともに最多なのは天保 9 年 (1838) 開催の②で 55 名の出品者から 320 件の出品があったこと、がわかる。

出品者それぞれに着目すると、1 回きりの参加で 1～2 点のみの人もいる一方で、「会主」(No. 42) 570 件、「鉤致堂」もしくは「鉤致」(No. 79) 238 件、「紫山堂」(No. 105) 139 件、「加藤氏」(No. 50) 84 件、「修養堂」もしくは「修養」(No. 113) 74 件のように、複数回にわたって出品し、かつ、出品件数が突出して多い人もいる。

そこで、出品者として具体的にどのような人が名前を連ねているのかを探るために、可能な限り、その略歴をまとめたものが【表 4】である。ただ、出品者の原文記載は名字のみの場合もあり、人物の確定に困難を要する事例も少なくない。自信がない推定の場合は「推定人物名」の欄に「～か？」という注記を付した。【表 2】に掲げた延べ 265 名の出品者の内、比定出来たのは 85 件分で、内、21 件については、例えば、「雀巢」＝「会主」＝吉田平九郎、「花繞書屋」＝「修養堂」＝伊藤圭介、のように複数の名義での出品と推定したので、実数は 64 件分である。その中で、「～か？」を付さず、ある程度確実性が高いと考えているのは、わずか 34 件分（「薜荔菴」(No. 193) は、本草家の大窪昌章と大窪安治が親子二代で用いた号であり、年によってはどちらの出品か判然としないので、1 件で 2 名としたために、実数は 35 名分）に過ぎない。

この 34 件 (35 名) の略歴を見ると、尾張藩士や尾張藩医師が大勢を占めていることがわかる。加えて、特に出品点数が突出して多い人物の内、「会主」(No. 42)＝「雀巢」(No. 112)＝吉田平九郎(計 579 件出品)、「鉤致堂」もしくは「鉤致」(No. 79)＝水谷義三郎(238 件出品)、「花繞書屋」(No. 52)＝「修養堂」(No. 113)＝伊藤圭介(計 80 件出品) は、尾張名古屋における本草学の研究グループ「嘗百社」の一員である。また、「紫山堂」(No. 105)＝「静観堂」もしくは「静観」(No. 128)＝浅井董太郎(計 164 件出品) は、尾張藩の奥医師を務め、医師養成のための講義所「医学館」を主宰した人物で、医学館では、連年、「医学館薬品会」という本草関係を中心とした〈展示会〉が行われていたことが知られる。つまり、尾張名古屋博物会は、主催者である吉田平九郎を核として、本草学に関心を寄せていた尾張藩士や尾張藩医師を中心に催された〈展示会〉であったと言える。ただし、多岐にわたる出品物からは、本草家が中心の会とは言え、出品者の興味関心は、単に本草学ばかりに向けられていたわけではないことがうかがえる。

尾張名古屋では、古物に関心を寄せる人々が「同好会」もしくは「耽古連」という会合を開いていたことが知られている。【表 4】に名前を掲げた人物では、「同好会」に参加しているのは、岡田啓 (No. 37)、鏡島遼山 (No. 43)、平出順益 (No. 84)、神谷三園 (No. 98)、吉田平九郎 (No. 112)、中西龍雄 (No. 9)、都筑泰観 (No. 149)、野口道直 (No. 171)、林穆叟 (No. 175)、平野広臣 (No. 179)、渡辺芸里 (No. 263) の 11 名、「耽古連」に参加しているのは、永坂周二 (No. 18)、平出順益 (No. 84)、松尾屋千瑠 (No. 135)、松井蒼龍 (No. 137)、水野睡蠶 (No. 204) の 5 名である。例えば、尾張藩士で馬廻組、用役などを歴任した神谷三園 (No. 98) は、「嘗百社」の一員であるとともに「同好会」を主宰している。また、尾張藩医師の平出順益 (No. 84) は、「同好会」の一員であるとともに、「耽古連八天狗」の「棟梁」と呼ばれる人物である。

以上のように、尾張名古屋博物会が開催された背景には、本草家関係の、また、好古家関係の、実に幅広く、かつ錯綜した人的ネットワークの存在が想定されるのである。

## おわりに

本稿では、尾張名古屋博物会をめぐって、多岐にわたる出品者と、やはり多岐にわたる出品物の存在について紹介したに過ぎない。

今後、例えば、個々の出品者が抱いていた興味関心の背景、個々の出品者同士における交流の具体的な様相、個々の出品物の入手経路、個々の出品物をめぐる情報流通の具体的な様相、など、出品目録の記載にとどまらない、より具体的な事象について、可能な限り、掘り下げていきたい。その作業を積み重ねることで、近代日本の「博物館」前史において、どのような〈展示会〉が開催され、それはどのような人的ネットワークに支えられていたのか、また、そうした〈展示会〉のあり方や人的ネットワークは、近世と近代では何がつながり、何が断絶しているのか、といった、近代日本の「博物館」制度の成立とその受容をめぐる問題に対して、東京の事例のみならず、地方都市も含めた全国的な視野で、新たな知見を加えられるのではないかと考えている。

いずれにしても、本稿で紹介した事例が、近代日本の「博物館」前史を考える、一つの素材となれば、幸いである。

## 【主な引用・参考文献】

- ・名古屋市役所編『名古屋市史 人物編』上巻・下巻、川瀬書店、1934年（1981年、国書刊行会復刻）
- ・名古屋市博物館編『部門展 名古屋の博覧会』図録、名古屋市博物館、1982年
- ・吉川芳秋『医学・洋学・本草学者の研究—吉川芳秋著作集—』八坂書房、1993年
- ・名古屋市博物館編『企画展 再現江戸時代の博覧会 よみがえる尾張医学館薬品会』図録、名古屋市博物館、1993年
- ・木下直之「大学南校物産会について」東京大学編『学問のアルケオロジー 学問の過去・現在・未来 [1]』東京大学出版会、1997年
- ・西村三郎『文明のなかの博物学 西欧と日本』上・下、紀伊國屋書店、1999年
- ・斎藤忠『郷土の好古家・考古学者たち 東日本編』雄山閣出版、2000年
- ・鈴木廣之『好古家たちの19世紀 幕末明治における〈物〉のアルケオロジー』シリーズ近代美術のゆくえ、吉川弘文館、2003年
- ・遠藤正治『本草学と洋学 小野蘭山学統の研究』思文閣出版、2003年
- ・土井康弘『日本初の理学博士 伊藤圭介の研究』皓星社、2005年
- ・太田正弘編『補訂版 尾張著述家綜覧 附逸事』私家版、2005年
- ・揖斐高『江戸の文人サロン 知識人と芸術家たち』歴史文化ライブラリー 278、吉川弘文館、2009年
- ・磯野直秀・田中誠「尾張の嘗百社とその周辺」『慶應義塾大学日吉紀要 自然科学』No.47、2010年
- ・杉本欣久「江戸時代における古美術コレクションの一樣相 古鏡の収集と出土情報の伝達」『古文化研究』第15号、黒川古文化研究所、2016年

【表 1】 本稿で対象とする「尾張名古屋博覧会」開催一覧

No.	開催年月日	会主	出品目録	
①	天保 8 年 (1837) 1 月 25 日	吉田平九郎 (雀巢庵)	(1)	(18)
②	天保 9 年 (1838) 1 月 25 日	吉田平九郎 (雀巢庵)	(2)	(18)
③	天保 10 年 (1839) 1 月 25 日	吉田平九郎 (雀巢庵)	(3)	(18)
④	天保 11 年 (1840) 1 月 25 日	吉田平九郎 (雀巢庵)	(4)	(19)
⑤	天保 12 年 (1841) 1 月 25 日	吉田平九郎 (雀巢庵)	(5)	(19)
⑥	天保 13 年 (1842) 1 月 25 日	吉田平九郎 (雀巢庵)		(19)
⑦	天保 14 年 (1843) 1 月 25 日	吉田平九郎 (雀巢庵)		(19)
⑧	弘化元年 (1844) 1 月 25 日	吉田平九郎 (雀巢庵)	(6)	(20)
⑨	弘化 2 年 (1845) 1 月 25 日	吉田平九郎 (雀巢庵)	(7)	(20)
⑩	弘化 3 年 (1846) 1 月 25 日	吉田平九郎 (雀巢庵)	(8)	(20)
⑪	弘化 4 年 (1847) 1 月 25 日	吉田平九郎 (雀巢庵)	(9)	(20)
⑫	嘉永 3 年 (1850) 1 月 25 日	吉田平九郎 (雀巢庵)	(10)	(21)
⑬	嘉永 4 年 (1851) 1 月 25 日	吉田平九郎 (雀巢庵)	(11)	(21)
⑭	嘉永 5 年 (1852) 1 月 25 日	吉田平九郎 (雀巢庵)	(12)	(21)
⑮	嘉永 6 年 (1853) 1 月 25 日	吉田平九郎 (雀巢庵)	(13)	(22)
⑯	嘉永 7 年 (1854) 1 月 25 日	吉田平九郎 (雀巢庵)	(14)	(22)
⑰	安政 3 年 (1856) 1 月 25 日	吉田平九郎 (雀巢庵)		(22)
⑱	安政 4 年 (1857) 1 月 25 日	吉田平九郎 (雀巢庵)	(15)	(22)
⑲	安政 5 年 (1858) 1 月 25 日	吉田平九郎 (雀巢庵)	(16)	(22)
⑳	安政 6 年 (1859) 1 月 25 日	吉田平九郎 (雀巢庵)	(17)	(22)

【出品目録一覧】

※所蔵はすべて国立国会図書館で、「国立国会図書館デジタルコレクション」にてカラー画像が公開されている。

No.	資料名	資料番号
(1)	博覧会目録 【天保 8 年】	白井文庫／特 1-3429
(2)	博覧会目録 【天保 9 年】	白井文庫／特 1-3429
(3)	博覧会目録 【天保 10 年】	白井文庫／特 1-3429
(4)	博覧会目録 【天保 11 年】	白井文庫／特 1-3429
(5)	博覧会目録 【天保 12 年】	白井文庫／特 1-3429
(6)	博覧会目録 【弘化元年】	白井文庫／特 1-3429
(7)	博覧会目録 【弘化 2 年】	白井文庫／特 1-3429
(8)	博覧会目録 【弘化 3 年】	白井文庫／特 1-3429
(9)	博覧会目録 【弘化 4 年】	白井文庫／特 1-3429
(10)	博覧会目録 【嘉永 3 年】	白井文庫／特 1-3429
(11)	博覧会目録 【嘉永 4 年】	白井文庫／特 1-3429
(12)	博覧会目録 【嘉永 5 年】	白井文庫／特 1-3429
(13)	博覧会目録 【嘉永 6 年】	白井文庫／特 1-3429
(14)	博覧会目録 【嘉永 7 年】	白井文庫／特 1-3429
(15)	博覧会目録 【安政 4 年】	白井文庫／特 1-3429
(16)	博覧会目録 【安政 5 年】	白井文庫／特 1-3429
(17)	博覧会目録 【安政 6 年】	白井文庫／特 1-3429
(18)	尾張名古屋博覧会目録 一	伊藤文庫／特 7-318
(19)	尾張名古屋博覧会目録 二	伊藤文庫／特 7-318
(20)	尾張名古屋博覧会目録 三	伊藤文庫／特 7-318
(21)	尾張名古屋博覧会目録 四	伊藤文庫／特 7-318
(22)	尾張名古屋博覧会目録 五	伊藤文庫／特 7-318

【表2】尾張名古屋博覧会 出品目録の翻刻

①天保8年(1837)1月25日開催

No.	出品物	図	出品者
1	【中華】枕 マクラ		小林
2	【舶来】布		向庵
3	【中華】人形		津田
4	羅漢之古図		森
5	【中華】風鎮		岩屋
6	【中華】年賀名刺 ナフダ		三村
7	【古渡】金紗羅沙		尾崎
8	【中華】春画 折本		尾崎
9	【西洋】ツホ		間宮
10	【中華】康熙判】懸幅		野間
11	【中華】箒 ソロハン		野間
12	画		平出
13	画		平出
14	明量数之拳書 コメノテガタ		深田
15	孟涵九書 和歌		深田
16	【西洋】硝子文鎮		松本
17	【中華】臘石】人形		松本
18	【中華】銅印		松本
19	【本漢蘭書】懸幅		荒川
20	【中華】桃灯		荒川
21	銜 ハミトヲシカケ		荒川
22	筆筒		荒川
23	【中華】火筋 ヒバシ		三友
24	【中華】扇		三友
25	【琉球】簪		三友
26	【西洋】トリ子ジ		観象
27	胡椒磨 コセウノウス		観象
28	冠物		観象
29	頭巾		観象
30	衣裳		静観
31	筆管 フテナジク		静観
32	足袋		静観
33	冠物		静観
34	手籠		龍屋
35	膏葉		龍屋
36	【琉】尾瓦		龍屋
37	爵 チヨク		龍屋
38	【琉球】鎖鑰 ジャウ		龍屋
39	烟管		龍屋
40	楊枝		龍屋
41	硯		龍屋
42	アツニ アツニノヲリモノ		龍屋
43	織地懸幅		溶々
44	紙鳶 タコ		溶々
45	煙管		溶々
46	筆 連管		溶々
47	曆		溶々
48	皮鞆 ザウリ		溶々
49	曆		溶々
50	頭巾		溶々
51	年賀飾物		溶々
52	団扇		溶々
53	冠物		溶々
54	笠		溶々
55	【朝鮮】草鞋 ワラジ		修養
56	煙管		修養
57	【西洋】加留多		修養
58	【西洋】花簪		修養
59	紙銭		濟生
60	茶藨		濟生

No.	出品物	図	出品者
61	【西洋】釣灯籠		濟生
62	冥紙		濟生
63	硝子鏡		蝸亭
64	煙管		蝸亭
65	【中華】火把 タイマツ		蝸亭
66	掛香		蝸亭
67	【蝦夷】草鞋		蝸亭
68	夜学灯台		鉤致
69	【蝦夷】煙草入		鉤致
70	【蝦夷】雪履		鉤致
71	小刀		鉤致
72	【カラフト】トンコリン ヒナ形		鉤致
73	【朝鮮】鏡		鉤致
74	裳		鉤致
75	見微鏡		鉤致
76	【西洋】烟管		鉤致
77	【大明】五色墨		鉤致
78	【中華】人形		鉤致
79	半弓		鉤致
80	【中華】筋		鉤致
81	【琉球】筋		鉤致
82	【西洋】小刀		鉤致
83	扇鎮		鉤致
84	花席 ハナゴザ		鉤致
85	【蝦夷】小刀		鉤致
86	蠟燭		鉤致
87	【蝦夷】針入		鉤致
88	【中華】扇		鉤致
89	南蛮鉄		鉤致
90	【西洋】印		鉤致
91	【中華】簪		雀巢
92	【中華】月琴		雀巢
93	【中華】胡琴		雀巢
94	【琉球】鎖鑰 ジャウ		雀巢
95	【中華】扇		雀巢
96	烟管		雀巢
97	【中華】掛物		雀巢
98	【琉球】煙管		雀巢
99	蠟燭		雀巢

※①の出品目録には図版が付されていない。

②天保9年(1838)1月25日開催

No.	出品物	図	出品者
1	錢筒ノ煙草盆		友水
2	【元禄十年五月】御茶壺下付稲葉宿所々繕諸色入用帳		五味氏
3	【元禄八年】キンチャクノ花入 焼物		友水
4	【元禄二年】大黒木像		鈴木氏
5	【延享二年】秋葉山瓶子		友水
6	版木煙草盆		友水
7	【明和年中】釣瓶		友水
8	瀬戸焼獅子頭火鉢		友水
9	秋ノノゲン変生		加藤氏
10	東福寺古瓦		水之屋
11	【東福門院御寄附】鴨大神宮御第ノ吹チリノ切レ		三園
12	タ、ミ兜		水之屋
13	古切手鏡 百七十五品		猿猴庵
14	【寛延三年】飼葉藁之通上々紙		猿猴庵
15	異形ノ鞆		鈴木氏
16	【元禄八年】宗門帳		猿猴庵
17	【天和二年】御台所錢小払帳		猿猴庵

No.	出品物	図	出品者
18	瓢箪馬衝		杉街
19	芭蕉翁所持根付		三園
20	象牙環 十		三園
21	古鏡	有図	三園
22	不詳金モノ	有図	香林院
23	【異形】墨斗		三園
24	鈴 二		三園
25	古鈴 五		鶴巢
26	【慶安三年二月】古瓦 瀬戸村長右衛門	有図	会主
27	不詳金具		香林院
28	張子箱		友水
29	義士夜討桃灯ノ弓		岩田氏
30	古鈴 一		香林院
31	水滴		友水
32	天目茶合		友水
33	木偶人 寛保元年ノ物		猿猴庵
34	土器 九品		三園
35	【日供用】大引切・小引切		三園
36	【寛文十三年】古曆		千璫
37	春日土器		三園
38	加茂御箸台		三園
39	松ノ疣茄ノ状ヲナスモノ		友水
40	ドンコツ		友水
41	【尾州中嶋郡妙興寺】伽藍ノ古木		石井氏
42	古面		鉤致堂
43	【寛文六年】名府古米札切手 九分		蒼龍園
44	【寛文七年】名府古米札切手 壹分		蒼龍園
45	【元和二年】八幡放生川橋ギボウシ		会主
46	鑰 六十七品		会主
47	【大須塔ノ地形ヨリ堀出ス】小ズカノ柄		蒼龍園
48	【真鍮】魚ノ形ノコズカ		会主
49	投鎗		友水
50	火繩入		会主
51	蛇ノ形根付		鈴木氏
52	鍬 三本、長サー一尺八寸	有図	友水
53	錫ノ矢 三本		会主
54	【万曆九年】鎗	有図	千璫
55	小鏡	有図	千璫
56	勾玉金環銀環	有図	千璫
57	不詳金物	有図	会主
58	【舶来】耳サラエノ具		会主
59	不詳物	有図	中邑氏
60	【元禄年中】櫛笄		鉤致堂
61	【天下一有銘】金槌	有図	石井氏
62	不詳物	有図	会主
63	古秤 銚ハ土造ノモノ	有図	鉤致堂
64	【貞享元年】槌定木		鉤致堂
65	【蛮国】踏鎧		会主
66	鎖鑰 三十品		会主
67	【番牛角製】不詳器		【アツタ】 深川権右 ヱ門
68	古箱		会主
69	古秘戯図 版		今古園
70	曲玉壺		鉤致堂
71	【上杉謙信】春日盃		石井
72	【古渡】南京鉢 阿弥陀仏ノ文字アリ		香林院
73	舞々ノ像 掛モノ		林氏
74	フリーキ		山中氏
75	雛人形		石原氏
76	【紅毛製】女人形		会主
77	嵯峨人形		今古園

No.	出品物	図	出品者
78	嵯峨人形 八種		鉤致堂
79	嵯峨人形 異種二		翠堂
80	木造ノ宝珠		安井
81	寛永年中天王崎焼失之節彦八ト申商人宅地ヨリ堀出古木偶人		鉤致堂
82	牛黄		又日庵
83	馬ノ玉		又日庵
84	【桜町院様】御扇子		三園
85	鳥薬師焼物像		老銭
86	無文銭	有図	山中氏
87	大閤軍用銀	有図	山中氏
88	雛小判	有図	山中氏
89	鶏銀小判	有図	山中氏
90	甲州朱中金	有図	山中氏
91	口琴	有図	山中氏
92	金環・銀環	有図	山中氏
93	勾玉・管玉	有図	山中氏
94	甲州老分金	有図	龍刀園
95	甲州式朱金	有図	龍刀園
96	甲州老朱金	有図	龍刀園
97	五匁銀	有図	龍刀園
98	胡琴		会主
99	神祖ノ御杖ト云伝		石川氏
100	蘭人ボタン 大小十四		修養堂
101	蘭人縫かざり		修養堂
102	月琴		会主
103	シヤウゴ	有図	鉤致堂
104	東大寺大太鼓ノ鋌		恵日山
105	【舶来】扇		会主
106	【永禄年間古写】和漢朗咏集		三園
107	【文安四年】蝮川新右ヱ門筆歌書		水之屋
108	朝鮮筆		修養堂
109	阿蘭陀ノ不詳箱		修養堂
110	古張子筥		山中氏
111	【元禄六年】召仕ノ請状		猿猴庵
112	古高麗狗		石川氏
113	採薬刀		薛荔菴
114	唐玩物		山中氏
115	古メス 三本	有図	山中氏
116	メス	有図	会主
117	ペン子メス	有図	会主
118	唐人小遣帳		修養堂
119	古ギ龍ノ彫物硯管蓋 延保三年トアリ		友水
120	夜学灯		山中氏
121	唐鏡	有図	山中氏
122	未詳物	有図	山中氏
123	未詳物	有図	山中氏
124	未詳物	有図	山中氏
125	未詳物	有図	山中氏
126	未詳物	有図	山中氏
127	未詳物 裏ニ天長元年八月九日	有図	山中氏
128	朝鮮扇墜		山中氏
129	御上洛膳		友水
130	【伊勢】ヨウダノ扇		鉤致堂
131	【延享三年版】天神掛物		会主
132	【富士見原】三国屋の重		水之屋
133	【享保年間新地かつら町】青楼娼妓名披露杯		長春館
134	【元和年中】琵琶引一卷		五味氏
135	南京置物		水埜氏
136	衣服ニ香焼コム台		会主
137	禁裏御草履		山中氏
138	東寺羅城門ノ古釘ノヨシニテ伝来		深田氏
139	【子持石】自然生ノ石大黒天		【長】林氏

No.	出品物	図	出品者
140	【漢】省藤ノ杖		溶々齋
141	【鎌倉時代】武具ノ切		五味氏
142	禁裏御草履 一隻		加藤氏
143	【正保四年版】絵入浄ルリ本 石橋山七騎落一冊		仙果
144	鶴岡八幡宮古鈴		楳雪菴
145	【延元元年】古鏡	有図	楳雪菴
146	三絃琴		溶々齋
147	古鏡 八花形	有図	杉街
148	古鏡 四面	有図	杉街
149	石罌 四箇		生濟堂
150	古物会目録		修養堂
151	【仁安三年】大般若經 一卷		柳沢氏
152	【天平勝宝書】象熊磨解		柳沢氏
153	【嘉吉元年製】唐招提寺瓦		柳沢氏
154	大徳寺丸瓦		鏡嶋氏
155	菊ノキセワタ		三園
156	古瓦 金字アリ		鏡嶋氏
157	瑪瑙ノ大塊		鏡嶋氏
158	イハツバ		鏡嶋氏
159	懷中蠟燭		三園
160	【古版三條河原】歌舞妓ノ図 一枚ズリ		楳居
161	【名府】御祭礼絵草紙古版本		葦菴
162	【天明年】南部絵曆		葦菴
163	【文化六巳年】南部絵曆		葦菴
164	寛永十三年具注曆		葦菴
165	【天保四年濃州可見郡中ノ郷村ノ堀出ス】石劔		山中氏
166	【唐】算盤		山中氏
167	異体ノ杯台		山中氏
168	古木 高サ四尺五寸余		深田氏
169	足中ノ草履		山中氏
170	【濃州多度山小山村方出】蛤		山中氏
171	【堀出】網ノウキ・ヲモリ		山中氏
172	檜六角笠		山中氏
173	【古キ】片口椀		山中氏
174	鎖 三ツ	有図	山中氏
175	根来膳		山中氏
176	五瀬両宮古図		蒼龍園
177	泉岳寺義士碑古図		蒼龍園
178	堀出琵琶ノ甲		友水
179	古面 瘦男敷		友水
180	猿ノ古面		友水
181	虎ノ彫物		津田氏
182	古鏡		蒼龍園
183	古キ眉刷毛		岩屋氏
184	【永安六年】雲霞集 馬道之書		岩屋氏
185	寛文十三年古曆		葦菴
186	【唐ノ】磁石		間宮氏
187	【寛永六年】百姓ノ日記		会主
188	布袋ノ香爐 陶器、下横ニ穴アリ		友水
189	享保年中新地青楼ニ相用ルスマ よしだやと有		長春館
190	古馬面		友水
191	【万治二年】絵馬 則馬之図		今古園
192	【天和三年写】日吉社図		三園
193	【古画】大津絵 六葉		鶴巢
194	宝曆三年虎ノ面ノ額 大サ一尺余		猿猴菴
195	古大盆 二尺余、嘯ノ字有		友水
196	【享保十四年西八月】名府大丸屋呉服商引札		沢泻屋 勘左エ門
197	茶升	有図	友水

No.	出品物	図	出品者
198	茶升 少々小キ方	有図	葦菴
199	古升 天正五年丑正月吉日三河国何一	有図	友水
200	大閣升ト称スルモノ	有図	山中氏
201	寛永升	有図	森高雅
202	枡 寛文八年	有図	又日菴
203	升 横ニ(印)ノ印焼アリ〔卷末図版に「林藤所持」の注記あり〕	有図	林氏
204	古升		鏡嶋氏
205	古升		猿猴菴
206	田原藤太画古版		猿猴菴
207	古片口 挽物		鶴巢
208	古錦絵二葉 生嶋大吉・佐の川千蔵		石井氏
209	ナタ細工 玄空作		水ノ屋
210	大森彦七木像		猿猴菴
211	太郎菴所持煙草盆		友水
212	【元禄二年正月】祢津斧右エ門射弓		広井八幡
213	大阪卯年落城古図 版行、一枚摺		千瓊
214	【慶長七年】古絵馬 馬画、奉納主 助右衛門	有図	友水
215	蒲葵扇		会主
216	ブリフリ		恵日山
217	ギテウ		今古園
218	高麗狗 形猿ニ似タリ		香林院
219	【長坂血闘九郎所持】籠鞆		荒川氏
220	【古】豊于禪師木像		鉤致堂
221	【古形】月琴		薛荔菴
222	布袋木像		鉤致堂
223	南泉斬猫古木像		葦菴
224	観音木像		鉤致堂
225	人丸木像		鈴木氏
226	般若古面		鉤致堂
227	猿 古物		水之屋
228	木像 古物、猿カ		友水
229	猿 古物、抱子者		香林院
230	法隆寺百万塔 八百年ニ及フモノ		恵日山
231	盈虚ノ大小 大尺余古キ		香林院
232	経名未詳 長尺余 跋文ニ天平宝字四年云々、已下蠹蝕不可識筆者亦不可識可惜筆力遒勁今人不及		修養堂
233	経名 蠹蝕不識 経紙ノ名ヲ穀紙ト云 跋文ニ天平宝字六年ト歳次壬寅四月八日鳥取連億鳥古○三野連大成トアリ但シ非筆者名		修養堂
234	異部宗輪論一 断簡 大和富貴寺道詮筆、延暦遷都延喜比迄ハ経文ニ多ク此ノ尸皮ニ似タル紙ヲ用ユト云フ		修養堂
235	【日光山】東照宮御社彫モノ碎 明和年中御造営ノ節取テ来ル		修養堂
236	古風鈴		山本氏
237	天狗ノ面		鉤致堂
238	犬張子 大形		鉤致堂
239	蛮国ノ衣服類		会主
240	魚版 鯛之形		猿猴菴
241	【石花墨スリ】大和国茜屋半七あげ豆腐看板二		長春館
242	不詳鑲		子治
243	阮咸		薛荔菴
244	ツクツク 白、古物		葦菴
245	猿香爐 鋳物		石川氏
246	シカミ香合 左リ甚五郎作		友水
247	亀置物		加藤氏
248	不詳楽器 洋琴カ		鉤致堂



No.	出品物	図	出品者
249	三番叟ノ面		加藤氏
250	釈迦ノ面 壬生狂言ノ面カ		加藤氏
251	舟ノカイ 古色		香林院
252	馬面 角アリ		高野氏
253	不詳物		修養堂
254	大刀 古物、齒ナシ		恵日山
255	大ナル面 狒々カ		鉤致堂
256	阿蘭陀ノ額 古物		伊藤氏
257	【河内国野中村野中寺釘隠】 聖徳太子作		修養堂
258	キレ雛一対 高サ二尺余		石川氏
259	土釜 牡蠣殻付タルモノ		修養堂
260	食籠 漢舶来		石川氏
261	蛇皮線		会主
262	ブリブリ		今古園
263	瓶子 大サ五寸斗		子洽
264	羽子板 大サ尺余二		会主
265	雛人形一対		鈴木氏
266	同琴		会主
267	磬 異形	有図	水之屋
268	香ダマ		柴田氏
269	鏡 漢舶来		会主
270	唐ノサゲモノ		会主
271	藤ニテ作りタルモノ 唐物		会主
272	十二律ノ竹		会主
273	伊勢上野土師住ヨリ堀出ス土師器		鉤致堂
274	煙草箱ノ様ナルモノ		鉤致堂
275	円キ鎖鑰ノ様ナルモノ 二箇	有図	鉤致堂
276	不詳物 秤玉カ、二品	有図	鉤致堂
277	松樹皮 厚サ二寸バカリ		鉤致堂
278	ス焼土器 中ニアラビヤ国産コツヒイ		鉤致堂
279	城州下加茂社ノ減金ノ金物		鉤致堂
280	鞍馬小判	有図	鉤致堂
281	出雲ノ国大社御殿ノ外御簾ノ上ニ附タル金物		鉤致堂
282	鹿笛		鉤致堂
283	戸隠山女夫茶セン		鉤致堂
284	舶来ノ指環ギョク		鉤致堂
285	扇ノ柄ニ付ル香		鉤致堂
286	鉄ニテ造ル不詳物	有図	鉤致堂
287	表長命寺富貴、裏十二支 古文字有	有図	鉤致堂
288	銅ニテ作ル	有図	鉤致堂
289	牙細工ノモノ		鉤致堂
290	矢ノ根 大形		鉤致堂
291	秤 慶長七年		鉤致堂
292	古鏡		鉤致堂
293	鈴 減金		鉤致堂
294	銀ノ新金		鉤致堂
295	トツコ 大サ三寸斗		鉤致堂
296	城州宇治平等院鳳凰堂扉之釘		鉤致堂
297	鉄ノ不詳モノ	有図	鉤致堂
298	道成寺九輪ノ破レ 緑青ノ浮タルモノ		鉤致堂
299	矢鏃 三本		鉤致堂
300	鉄ノ不詳モノ	有図	鉤致堂
301	瀬田橋ノ釘		鉤致堂
302	京都大仏殿ノ釘		鉤致堂
303	硝子ノ玉 指環		鉤致堂
304	唐銅ノ不詳モノ スカシアリ	有図	鉤致堂
305	江州野洲郡三上山雌山岩屋ノ中ヨリ出ス鉄ノ腐リタルモノ		鉤致堂
306	南蛮鉄ニツ又丸金ヒヤウタンガ子共云		鉤致堂
307	古鈴 ニツ		鉤致堂
308	蛇皮		鉤致堂

No.	出品物	図	出品者
309	舶来古渡蠟燭		鉤致堂
310	薩摩同		鉤致堂
311	投鎗	有図	鉤致堂
312	銅印 三品		鉤致堂
313	古代ノツト 鯨ニテ造ル	有図	鉤致堂
314	江州野洲郡三上山雌山妙光寺山ヨリ出土器		鉤致堂
315	蝦夷ノ針入		鉤致堂
316	香爐ノ頭カ鳩ノ杖ノ頭カ	有図	鉤致堂
317	秤玉 四ツ	有図	鉤致堂
318	鉄ノ不詳物		鉤致堂
319	鈴		鉤致堂
320	若狭小浜木ノ箱		鉤致堂

※目録との対照が不詳で色付けしていない図に、「川合氏蔵」と注記のある古升と考えられる拓本や、錠前類、古鏡、などがある。

### ③天保 10 年 (1839) 1 月 25 日開催

No.	出品物	図	出品者
1	大津画 一軸		垂穂
2	【福嶋自筆】 制札		林藤
3	【諸国名所】 茶碗		葎菴
4	雛人形 藤娘		榊原
5	【延宝八年】 硯		梅雪
6	【天正年中】 イハツ、		荒川氏
7	古升	有図	荒川氏
8	古升	有図	荒川氏
9	【譜厄利亜国 (イギリス) 龍動府 (ロンドン) 製画筆ボトロート】 画料十八種 一匣	有図	修養堂
10	西洋画料 「ウイツケクレイト」「ロードケクレイト」「ズフルトケクレイト」「ホレンチ子ルラツク」「スマルタプライウ」「エラスチケケゴム」「プリーフラツク」「ロンドレイム」		修養堂
11	古櫛八枚		会主
12	不詳 金物	有図	会主
13	【唐繡ト云伝フ】 巾着		山中氏
14	土隅人		角田氏
15	楽焼ノ甲冑		荒川氏
16	三絃子		会主
17	古櫛	有図	会主
18	【瀬戸焼】 蛭子壺		友水
19	多々羅政弘筆連歌切		松柏
20	琉球焼	有図	修養堂
21	【玉野村ノ】 碧瑛		精一
22	【道詮律師筆】 黒部宗輪論 断編 巻卷		柳沢氏
23	九輪 石		梅雪
24	奥州南部曆		柳齋
25	【応仁元年写】 和歌詠方詞心得		今古園
26	大黒天水滴 楽焼 光吉之有印		荒川氏
27	陶印		梅雪
28	水滴 伊万利	有図	梅雪
29	【天長十三年下村主広磨筆】 大般若経 巻帖		柳沢氏
30	狭衣古写本 板本トハイタク異ナリ		今古園
31	大和国櫛庄司解 巻紙		柳沢氏
32	竹帙	有図	柳沢氏
33	【天平十一年光明皇后筆】 新小品 巻張		柳沢氏
34	狭衣古写本		今古園
35	椰樹		紫山堂
36	【興教大師筆】 賢劫経 新編、紺紙 金沢 巻紙		柳沢氏

No.	出品物	図	出品者
37	【元和二年】江戸古図		森川氏
38	大坂安部合戦ノ図		石川氏
39	金山水演図		子洽
40	【大】葫蘆		紫山堂
41	【文治元年信正筆】癩癩治方 一卷		紫山堂
42	【仁治三年】坐禅事儀 一卷		紫山堂
43	【福島左エ門大夫筆】手紙		松柏
44	【元龜三年申五月十八日】持通卿日記		紫山堂
45	聯 笠翁画	有図	濟生堂
46	【琉球】聯	有図	大津氏
47	【寿永二年】従一位行右大臣藤原兼実公筆		菴菴
48	古櫃		有斐軒
49	朝鮮人來朝図ノ板木	有図	眼門
50	駄皮		森川氏
51	【天正年中】茶壺		山中氏
52	【応永十四亥二月日有】古壺 天保十年ニ至ル四百四十年		梅居
53	【木像】大黒		友水
54	大黒		友水
55	【木像】蛭子大黒		友水
56	【ナタ彫】仏像		友水
57	古瓦	有図	石川氏
58	古面		友水
59	古面		友水
60	【藤九郎焼】硯		会主
61	多賀城古瓦		友水
62	【福島左エ門所持】盃		松柏
63	【川崎久右衛門大坂御陣之節】差物		友水
64	【木彫】古猿		梅居
65	張貫之狸々		大津氏
66	【慶安二年丑三月吉日トアリ】古面		梅居
67	大黒 袋ニ弘安ノ年号アリ		山中氏
68	広井天王祭礼之古図		永田氏
69	子ノ日古画		角田氏
70	【延宝八年申孟春】吉原評判記		森川氏
71	【慶安四年板】手鑑目録代付		松柏
72	【弘法大師筆】古経断簡		松柏
73	【覚明筆】古経断簡		松柏
74	【永正年間】古経断簡		山中氏
75	悪源太義平筆大般若経断簡		友水
76	【唐物】省藤組籠		鶴巢
77	守袋 軍中用フル者		榊原氏
78	軍扇 大坂御陣ノ時用フモノ云伝		友水
79	半首 ハツムリ		榊原氏
80	【瀬戸ノ掘】高麗狗		有斐軒
81	【瀬戸焼】獅子香爐		会主
82	水滴 裏ニ彫銘十字五ツアリ		有斐軒
83	魚尾竹		玩易
84	【元禄年戌十二月加藤甚六トアリ】高麗狗		有斐軒
85	【加藤甚兵衛焼トアリ】高麗狗		有斐軒
86	【元和二年七月廿日多治見加藤与四郎トアリ】高麗狗		有斐軒
87	【藤志郎三代目藤九郎ト云伝フ】高麗狗		山中氏
88	狐之骸骨		会主
89	長提琴		会主
90	【常滑】瓶		山中氏
91	水野村ノイハキ		精一
92	古箱		山中氏
93	長汀子木像		荒川氏
94	ハリコ箱		森川氏

No.	出品物	図	出品者
95	嵯峨人形 四ツ		森川氏
96	【元禄年ノ】人形		梅居
97	雛人形		梅雪
98	羽子板二枚		今古園
99	嵯峨時人形 七ツ		静観堂
100	嵯峨人形 布袋		角田氏
101	白沢 久四ノ字アリ		山中氏
102	女蝶男蝶雛菓子器		子洽
103	【蝦夷】テンキ		山中氏
104	【文禄四年巳三月吉日加藤清正トアリ】妙見	有図	静観堂
105	【建武年間】鎌倉極楽寺宝鐸	有図	山中氏
106	【漢渡】古銅印	有図	山中氏
107	【元禄年中ノ】人形		森川氏
108	宋胡録焼		精一
109	【漢】巾着	有図	梅雪
110	筆架		加藤氏
111	【琉球製】煙管	有図	会主
112	【異製】煙管	有図	会主
113	【莫斯可比亜製】巾着	有図	紫山堂
114	巾着 煙管	有図	垂徳
115	【天竺繡ト云伝フ】胴乱		山中氏
116	【木曾】自在コザル	有図	菴菴
117	【永正元年子二月トアリ】竹筒ノ器		山中氏
118	勢州菩提寺経瓦	有図	会主
119	春日盃		森川氏
120	蚺蛇皮ノ太鼓		会主
121	猿之陰門ト云伝モノ		奥平氏
122	矢鎌 金色アリ		会主
123	不詳 金物	有図	会主
124	阿蘭陀ノ印	有図	山中氏
125	【諸桑村堀出】船之木		紫山堂
126	唐扇		会主
127	鍍車 不詳具	有図	沢田氏
128	【正保年中板】年代記		猿猴菴
129	【天文十五年】尾陽大山三重塔婆再興之請状		猿猴菴
130	【三州医王寺】古瓦		有斐軒
131	【曲玉金環入レアルヲ堀出】古器		山中氏
132	曲玉壺		石川氏
133	曲玉壺		石川氏
134	堀陶器 二品		有斐軒
135	曲玉壺		有斐軒
136	曲玉壺		有斐軒
137	勾玉壺		有斐軒
138	勾玉壺		有斐軒
139	勾玉壺		有斐軒
140	堀陶器		有斐軒
141	イハイベ 三ツ		有斐軒
142	イハイベ 二品	有図	有斐軒
143	勾玉壺		有斐軒
144	勾玉壺		有斐軒
145	勾玉壺		有斐軒
146	堀陶器		有斐軒
147	堀陶器		有斐軒
148	勾玉壺		有斐軒
149	瀬戸香炉		有斐軒
150	【江州野洲郡三上山雌山ノ山石屋ヨリ出】堀陶器之蓋		有斐軒
151	古陶 中エゾコツナイ山中ニテ取出夷人之談往古夷人繁華之節之器也		有斐軒
152	都府楼瓦	有図	鈴木氏
153	十玉面		油治
154	小長持		油治
155	【蝦夷】テンキ		今古園

No.	出品物	図	出品者
156	【鉄造】鼠	有図	柳街
157	【唐金】鎮宅靈神 即玄武之図	有図	柳街
158	【本元之印有、左リ文字】夜学灯		有斐軒
159	【瀬戸堀】手瓶		有斐軒
160	勾玉壺		有斐軒
161	【正徳四年曆板】煙草盆	有図	有斐軒
162	交趾之壺		有斐軒
163	琉球之器		有斐軒
164	水滴 北京ノ文字アリ		加藤氏
165	【陶】大黒・【陶】蛭子	有図	友水
166	源空之書板木〔卷末図版の拓本に「佛」「建久七 源空」とあり〕	有図	石川氏
167	古物摺物類		猿猴菴
168	雪笠		有斐軒
169	雪履		有斐軒
170	雪履		有斐軒
171	向掛		有斐軒
172	【王義之墨本】古額		林氏
173	ソリスンベ		有斐軒
174	【水豹（ヒヨウ）皮】蝦夷ノ雪履		有斐軒
175	スンベ 冬常ニ用		有斐軒

※目録との対照が不詳で色付けしていない図に、煙管、などがある。

#### ④天保 11 年 (1840)1 月 25 日開催

No.	出品物	図	出品者
1	海獺皮		紫山堂
2	紫石英		紫山堂
3	白石英		紫山堂
4	含水々精		紫山堂
5	白石英 蝦夷産		紫山堂
6	白石英 東濃苗木山中産		修養堂
7	石英 俗呼ハリ水精		生済堂
8	玉髓		生済堂
9	青玉髓		梅雪
10	紫石英		梅雪
11	玉髓		生済堂
12	銅礦		水之屋
13	白石英 江州菩提寺山産		鉤致堂
14	白石英 濃州小沢村産		鉤致堂
15	白石英 信州飯田産、三稜ノモノ		鉤致堂
16	黒石英 濃州中津産		鉤致堂
17	銅礦胎石英 加州ナタ山産		鉤致堂
18	白石英 本藩赤津産、俗ニ呼ハイシ		鉤致堂
19	白石英 濃州ヌカ村産		鉤致堂
20	石英 濃州小沢村花ナシ山産		鉤致堂
21	黒石英		鉤致堂
22	石英 江州田上産、俗呼ハリ		鉤致堂
23	黒石英 長三尺太サ廻リ一尺五寸		紫山堂
24	白玉 甲州産		会主
25	黒玉		会主
26	黒石英 東濃土岐郡		修養堂
27	石花		生済堂
28	白石英 濃州苗木山中産		修養堂
29	白石英 濃州中津産		修養堂
30	玉髓		生済堂
31	石花		会主
32	水精 飛州産		生済堂
33	黄石英		生済堂
34	クジャク石		水之屋
35	白玉 含草者		松蔵
36	白石英 濃州大井ノ北水精峯産		修養堂
37	木化石 含玉髓者		会主

No.	出品物	図	出品者
38	黒石英		生済堂
39	クジャク石		水之屋
40	黒石英		生済堂
41	黄玉髓 秩父産		生済堂
42	白玉髓		生済堂
43	石英 江州田上羽栗村産、流レ水精		鉤致堂
44	石英		薛荔菴
45	石蛤 含玉髓者		薛荔菴
46	含水々精 微紫色		鉤致堂
47	舍利ボセキ 津軽産		水之屋
48	銅礦		水之屋
49	石英 濃州付知米沢ノ産		会主
50	玉髓		鉤致堂
51	玉髓 甲州産		鉤致堂
52	玉髓		鉤致堂
53	玉髓		鉤致堂
54	玉髓 岩作村産		鉤致堂
55	玉髓 水戸産、方言玉イシ		鉤致堂
56	玉髓		鉤致堂
57	玉髓 尾州境川産		鉤致堂
58	流レ水精		鉤致堂
59	紫石英		鉤致堂
60	白石英 濃州小沢村花ナシ山産		鉤致堂
61	白石英 濃州日吉洞ノ内産		鉤致堂
62	石英		鉤致堂
63	白石英 濃州加治田産		鉤致堂
64	玉髓 秩父産		鉤致堂
65	玉髓 褐色		鉤致堂
66	玉髓 黒色		鉤致堂
67	玉髓 白色		鉤致堂
68	玉髓 薄褐色		鉤致堂
69	玉髓		鉤致堂
70	石英 十七品		薛荔菴
71	銅礦		水之屋
72	銅礦		紫山堂
73	銅礦 アイギント呼者		紫山堂
74	銅礦		紫山堂
75	銅礦		紫山堂
76	銅礦		紫山堂
77	銅礦中胎白石英 加州ナタ山産		水之屋
78	黄玉髓		会主
79	玉髓		会主
80	玉髓 白色		会主
81	玉髓 薄褐色		会主
82	【山ノ上産】玉髓		会主
83	【紀州湯浅山産】石英		会主
84	白石英		会主
85	石品 二十二品宮入		都筑
86	石英 四品		都筑
87	玉髓 四品		都筑
88	石罨 ハツ		都筑
89	風鎮 新製染附	有図	清貞
90	石英 含草者		会主
91	【信州下條産】石英		会主
92	【濃州苗木産】石英		会主
93	石英		会主
94	玉髓 八品		会主
95	石英 ハリ水精ト呼者		会主
96	流水精		会主
97	玉髓		会主
98	石英 五品		梅雪
99	玉髓 三品		梅雪
100	クジャク石		梅雪
101	瑪瑙 ニツ		梅雪

No.	出品物	図	出品者
102	管玉		梅雪
103	辰砂		梅雪
104	口琴		鉤致堂
105	石帯ノ類カ	有図	会主
106	方寸七	有図	天野
107	新渡ボタン		会主
108	【古渡リノ蠟石、鈕ハ清朝ノ細工也】 花扇所持之石印 右天明之比東武新 吉原扇屋宇右エ門抱遊女花扇ハ郭中 ニ上ナキ全盛也、其比之書家東江源 鱗之弟子トナリテ草書ヲ能セリ		同道堂
109	不詳金物	有図	生濟堂
110	唐鏡	有図	会主
111	新渡甌ヒ竹田		梅雪
112	玩ヒ物 二ツ		薜荔菴
113	古キ根付		芳蘭
114	磬	有図	香林院
115	烟管 吸口		万福院
116	烟管 琉球		芳蘭
117	筆管	有図	香林院
118	福祿寿頭 玩ヒ信州松本		鉤致堂
119	大黒土土偶人		鉤致堂
120	椰子皮		鉤致堂
121	鵬頭骨		鉤致堂
122	イサリ魚		鉤致堂
123	壺 津田藤左エ門屋敷ヨリ堀出シ 根付		鉤致堂
124	亀之甲 漢産		鉤致堂
125	オニクサ 富士山産		鉤致堂
126	海鱈之筋 是ヲ以唐弓之弦ヲ製ス		鉤致堂
127	ジャコ		鉤致堂
128	スジトラン		鉤致堂
129	ギハギ		鉤致堂
130	ウシクサエビ 越後産		鉤致堂
131	蜈蚣 文政十年唐船、竹板モ唐山 ヨリ添来		鉤致堂
132	カンバサクラ皮		鉤致堂
133	樺皮		鉤致堂
134	猪牙		鉤致堂
135	アラメ 根付		鉤致堂
136	ミツバノ足		鉤致堂
137	魚竹		鉤致堂
138	蘭製 棟物ノ器共		鉤致堂
139	タイノミチノ如キモノ		鉤致堂
140	クシコ 薩摩産		鉤致堂
141	燕巢菜		鉤致堂
142	古瓦 奥州高城郡市川村多賀城		鉤致堂
143	降真香		鉤致堂
144	碎墨紙		鉤致堂
145	水善寺海苔 肥後		鉤致堂
146	ナコズノ板 裏書ニ巴峽ヨリ給ル 巴七月玉泉トアリ		鉤致堂
147	イゴ 奥州産		鉤致堂
148	浦葵 肥後八代産		鉤致堂
149	木ノワタ		鉤致堂
150	テダス		鉤致堂
151	カラフトノ産ヨシカラキナ		鉤致堂
152	越前フテ草		鉤致堂
153	エゾ産ノコワメ		鉤致堂
154	文化五辰冬橘町宮屋権九郎庭前ニ アリシ櫛ノ大樹ヲ切り置翌年木ヲ ワレハ其中ヨリ出ルモノ		鉤致堂
155	土器 御器所八幡社ヨリ堀出ス		鉤致堂
156	馬尾織切		鉤致堂
157	カンバ皮		鉤致堂

No.	出品物	図	出品者
158	唐線香		鉤致堂
159	箸 三膳 舶来		鉤致堂
160	ヤシヤタケ 濃州産		鉤致堂
161	モノサシ 式寸計 箱入四ツ		鉤致堂
162	人形石 防州岩国		鉤致堂
163	勢州朝熊絵馬		鉤致堂
164	唐銭 二文	有図	鉤致堂
165	阿膠 古渡		鉤致堂
166	阿膠 硯様		鉤致堂
167	阿膠 古渡		会主
168	阿膠 硯様		会主
169	阿膠 ザンギテ		会主
170	阿膠	有図	会主
171	阿膠	有図	会主
172	阿膠	有図	会主
173	榼藤子		会主
174	メミ、		会主
175	豪猪 毛		会主
176	サメノシタ		会主
177	ツボ 朝陽堂ト有	有図	会主
178	ラシヤジルシ 二枚	有図	会主
179	櫛		会主
180	繭 丸キモノ		会主
181	念珠之如キモノ		会主
182	桜石 丹波龜山産		古今園
183	大観香 古渡		井上氏
184	享保証文		井上氏
185	元禄証文		井上氏
186	古瓦硯 橋寺		塚田氏
187	蛎蛇皮		井上氏
188	貞享曆 四冊		水野氏
189	匙 白幽子作		天野氏
190	魯西亜ノ幡		天野氏
191	珠母 二		沢泻屋
192	ツクタ		恵日山
193	シトウ		会主
194	龍足		恵日山
195	観音 陶ノモノ		恵日山
196	大丸屋引札		沢泻屋
197	石炭		大山
198	絵巻物		会主
199	【蝦夷熊祭】絵巻物		会主
200	絵巻物 古		鉤致堂
201	絵巻物		鉤致堂
202	花瓶 古銅		由父齋
203	象歯		梅雪
204	龍鱗竹		紫山堂
205	馬齒		生濟堂
206	太宰府古瓦		嶋彦
207	掛物 宗克書		生濟堂
208	掛物 王元之、めて度かしく		黒田氏
209	古面 ヲトコゼ		万福院
210	イ、タコヲ取ル壺 百五六十一年 前ニ用ユ		鉤致堂
211	木偶人 二		鉤致堂
212	長脚盃盤		生濟堂
213	笠 舶来		会主
214	棋器 鎌倉時代蓋、蝦夷製		友水
215	磬台 法隆寺		嶋彦
216	扇 唐山		会主
217	嵯峨人形 四ツ		芳蘭
218	蝦夷錦		生濟堂
219	縫ツフシタモノ 舶来		生濟堂
220	ホンテイインコンス 西洋		万福院
221	木偶達磨		友水

No.	出品物	図	出品者
222	香几 舶来		生済堂
223	壺 臘石		魯菴
224	喇叭		鉤致堂
225	猪苓		会主

※目録との対照が不詳で色付けしていない図がある。

⑤天保 12 年 (1841)1 月 25 日開催

No.	出品物	図	出品者
1	蠟虎皮		又日菴
2	【凡年数百八十年斗之申伝也】五條町雷電車雲板		篠嶋龍掙子
3	蛇足 蛇長六尺五寸		撫松菴
4	古銭 狐携来ルト云伝フ		山崎氏
5	唐ノフント云物三枚 ピロウトニ縫アリ		安井氏
6	【漢ノ舶来】タイコ		五橋
7	【北越】雪帽		【平安松原通】某
8	暮水翁鍋蓋額		【三ノ丸】吉田氏
9	【洋製】水滴		清貞
10	ベニス、メ		榊原氏
11	【舶来福州寺トアリ】香燭		田辺氏
12	木偶人	有図	飯田氏
13	清人ノ服 背心		修養堂
14	比目魚石	有図	聴濤亭
15	下冷泉祖持為卿筆宴曲集		取田氏
16	鷓鴣〔卷末図版に「鷓鴣 浅野春道蔵」と注記あり〕	有図	鷓鴣
17	石品 六重		某
18	【新渡】百寿懸物		間宮氏
19	珠数袋	有図	間宮氏
20	竹 枝ノ有ルヲ俗ニ蛙子竹ト云		嶋彦
21	【漢黒塗青貝唐草】琵琶		嶋彦
22	藪草 弘法ノ筆ト云モノ		奥平氏
23	玉虫 二種		奥平氏
24	張子箱		黒田氏
25	ブアク		黒田氏
26	海獺皮ノ囊		勝田氏
27	不詳物 背ニヲフ物		勝田氏
28	【貞治】古証文 距天保辛丑四百七十又八年		取田氏
29	【元徳】古証文 距天保辛丑五百十有一年		取田氏
30	馬狩絵巻物		林氏
31	嵯峨人形		林氏
32	洋琴		尾崎氏
33	獅孫眼 大サ弍尺八寸余、巾老尺四寸		尾崎氏
34	蛇皮線		尾崎氏
35	【青磁】観音		桜井氏
36	【漢舶来】ケンビヤウ		桜井氏
37	不詳器		桜井氏
38	ハニグチ〔卷末図版に「鰐口」と注記あり〕	有図	桜井氏
39	琿瑯		再生堂
40	虎頭骨		再生堂
41	旗魚 カジトホシ		再生堂
42	【舶来】偶人		起生堂
43	国姓翁和藤内自画讃		起生堂
44	嵯峨人形		起生堂
45	壘尾 唐ノシ、ノ毛ヲ以テ		今古園
46	角ノ壺 古イマリ		今古園
47	【仁清焼】ツホ		今古園

No.	出品物	図	出品者
48	陽石・陰石 開運石トアリ、安部川名産		今古園
49	【金銅】放幡鎮鐸	有図	三友園
50	鮓荅 重サ八百五十目		三友園
51	海大根		三友園
52	サル 木造、安産ノ守ト云フ		中邨
53	【琉球製】箱		中邨
54	サシエダ囊		中邨
55	古竹杖		万福院
56	舍利塔		万福院
57	【珉山焼】水滴		万福院
58	似像セキ		万福院
59	竹 三岐ヲ為		松架菴
60	紀州御祭礼画卷物		安田氏
61	黒珊瑚		安田氏
62	カゴカキダイ		安田氏
63	ザンギエイノ尾		安田氏
64	海蝦 センボノ簇リ着スルモノ		安田氏
65	蜂 異品		三虎堂
66	トラムシ・カウハコムシ・アオハンメウ		三虎堂
67	天牛 十種		三虎堂
68	ミシマシヤチ		三虎堂
69	【本藩又兵衛新田産】擁剣一種		三虎堂
70	魚品 未詳 二種		三虎堂
71	カミコウオ		三虎堂
72	スキエイ		三虎堂
73	カゴカキタイ		三虎堂
74	魚品 未詳		三虎堂
75	キントキダイ		三虎堂
76	【慶長・承応・寛永】古証文		加藤氏
77	【南都西大寺】古瓦	有図	加藤氏
78	【勢州菩提山】経瓦	有図	加藤氏
79	【大極殿】古瓦〔卷末図版に「大極殿碧料 古瓦」と注記あり〕	有図	加藤氏
80	壺 裏書ニ 多治見竈ニ而ノ元録拾七年作 池田村彦右衛門ノ大ノ申ノ三月廿日ノ御茶坪ニ而御座候	有図	加藤氏
81	【山城伏水城】古瓦	有図	加藤氏
82	【淳和院】古瓦〔卷末図版に「淳和院旧址 古瓦」と注記あり〕	有図	加藤氏
83	【古画】秘戯図 一卷		加藤氏
84	【東大寺】三倉宝物図 五卷		加藤氏
85	【本藩熱田古宮】瓦	有図	加藤氏
86	【古画】平家系図		加藤氏
87	【大和】雪クツ		梅雪
88	貝品 六重		梅雪
89	丸薬入		梅雪
90	【外科ノ】具	有図	梅雪
91	古瓦		梅雪
92	蘭書 一枚		梅雪
93	サメノマモリ		梅雪
94	【古渡リ】阿キヤウ		梅雪
95	箏		薛荔菴
96	【模製】篋		薛荔菴
97	尺八 異形		薛荔菴
98	【古瀬戸】水滴 ヲシドリ		薛荔菴
99	【古瀬戸】根付	有図	薛荔菴
100	安息香		瑠々齋
101	大腹子		瑠々齋
102	【長崎】サルモ、		瑠々齋
103	柳クラゲ		瑠々齋
104	青果膏 六種	有図	瑠々齋
105	鹿角膠 二枚	有図	瑠々齋

No.	出品物	図	出品者
106	練鵲〔巻末図版に「和名フウテウ」 「パラデイスホウケル蘭語」「極楽 鳥」「文化三丙寅年和蘭船積渡ス」 「柴田氏蔵」等の注記あり〕	有図	瑤々齋
107	百葉煎 三品		瑤々齋
108	【アミガサ手】蟾酥	有図	瑤々齋
109	蟲白蠟		瑤々齋
110	【相州ツクイケン産】井泉石		瑤々齋
111	アボウ子〔巻末図版に「アボウシ」 と注記あり〕	有図	瑤々齋
112	霹靂礮 二箇		瑤々齋
113	草菓 枝ヲ連者		瑤々齋
114	越王余筭		瑤々齋
115	烏金紙		瑤々齋
116	狗宝		瑤々齋
117	茶香	有図	瑤々齋
118	蛮銭	有図	瑤々齋
119	燕窠菜		瑤々齋
120	ウニコリコム		瑤々齋
121	散豆斑犀	有図	瑤々齋
122	【中山製】団扇		生濟堂
123	椰葉扇		生濟堂
124	雛鶏 四足モノ		生濟堂
125	承盤		生濟堂
126	【番製】油剤ヲ入レ齋米磁器		生濟堂
127	【阿蘭陀本国焼】人形 一対		生濟堂
128	【洋画ノ】額		生濟堂
129	ナガウヅラ 大者式尺三寸余		生濟堂
130	【舶来】羽扇 二柄		生濟堂
131	嗚蘭		生濟堂
132	【万歴染附】瓶		生濟堂
133	麝香皮 肉條ヲ連者		生濟堂
134	黄茸皮		紫山堂
135	鯢魚 干物		紫山堂
136	【中山】行厨		紫山堂
137	【舶齋】几		紫山堂
138	【鹿ノ】鮮苔		紫山堂
139	潜龍鯨 チウザメ		紫山堂
140	水豹		紫山堂
141	カツタイザメ		紫山堂
142	マンバウ ウキ、		紫山堂
143	魚尾竹		紫山堂
144	鼈 背隆起者		紫山堂
145	亀背 隆起者		紫山堂
146	鮮苔		紫山堂
147	糊孫眼		紫山堂
148	銅像農皇		紫山堂
149	獼猴ノ胎		紫山堂
150	白クチナワ		紫山堂
151	松ノチリ、		紫山堂
152	鯨 カブトカニ		紫山堂
153	岐首蛇		紫山堂
154	骨牌 二品		鉤致堂
155	蓮葉化石	有図	鉤致堂
156	龍齒石ト云モノ		鉤致堂
157	【江州産】冬蟲夏草 ヲガ		鉤致堂
158	白鴛鴦ノ劍羽		鉤致堂
159	【漂着】異果〔巻末図版に「水谷氏 蔵」と注記あり〕	有図	鉤致堂
160	魚石	有図	鉤致堂
161	海馬		鉤致堂
162	冬蟲夏草	有図	鉤致堂
163	麝香子ズミ	有図	鉤致堂
164	紅砒		鉤致堂
165	品字蓮		鉤致堂

No.	出品物	図	出品者
166	奈良人形		鉤致堂
167	鹿足 異品 二箇		鉤致堂
168	蛇足		鉤致堂
169	蟹螯		鉤致堂
170	鯛ムコノ源八	有図	鉤致堂
171	異果		鉤致堂
172	海胆刺	有図	鉤致堂
173	孩児參		鉤致堂
174	狸皮 ハリ子ズミ		鉤致堂
175	【西洋製】笛	有図	会主
176	木琴		会主
177	アツコアテ		会主
178	ガンジキ		会主
179	大アシ		会主
180	【寛永八年】京升		会主
181	石品 五十又六		会主
182	石蠶 ミドリイシ		会主
183	霹靂礮 四品		会主
184	カブトガヒ		会主
185	木葉石	有図	会主
186	樵ノ化石	有図	会主
187	陰陽石 陽石二	有図	会主
188	椰子		会主
189	ウチハエビ		会主
190	マキバシラ		会主
191	木葉石		会主
192	ウミ子ズミ		会主
193	マンヂウ蟹		会主
194	ツチクマリ		会主
195	石梅		会主
196	石梅一種 ビワガライシ		会主
197	石帆		会主
198	カブト介一種		会主
199	銅錢虎図		会主
200	ゴバンノアシ 知多郡師崎海岸ニ 漂着スルモノ		会主
201	阿蘭陀人形		会主

※目録との対照が不詳で色付けしていない図に、化石などがある。

#### ②安政6年(1858)1月25日開催

No.	出品物	図	出品者
1	【舶来】夜学灯台		林氏
2	【舶来】蟲入		林氏
3	双頭蓮		養命堂
4	サメノマモリ〔巻末図版に「サメ マモリ 淡黄色ノ物 中川蔵」の 注記あり〕		中川氏
5	蛇木 杪權心也〔巻末図版に「杪 權 ヘゴ 俗ニ蛇木ト云モノ 又 日菴蔵」の注記あり〕		又日菴
6	エウベルビウム		又日菴
7	【紀州玉ヶ浦産】石卵		又日菴
8	蟻		三友堂
9	【太宰府】ウソカエ		三友堂
10	異人十集		ヤスリヤ
11	当戸曼陀羅之縮図幅		ヤスリヤ
12	古升		渡辺氏
13	象之図〔巻末図版に「享保十四己 酉五月十五日通ル」等の注記あり〕		大田氏
14	象之譜		大田氏
15	吉原遊里之古図		大田氏
16	松羅		森嶋氏
17	春画 二本		森嶋氏

No.	出品物	図	出品者
18	【清朝】器物		森嶋氏
19	器物 朱鑿ニテ作者		森嶋氏
20	【紅毛】壺入		森嶋氏
21	牡丹胡桃		森嶋氏
22	妖魔鏡		富永氏
23	古鈴〔卷末図版に「筑前国宇佐神宝 建保三乙亥八月日」等の注記あり〕		富永氏
24	石芝		精思堂
25	蛇木		精思堂
26	【濃州乙荊村】シブナシガヤ		精思堂
27	熊皮		菊菴
28	水豹皮		菊菴
29	【蝦夷製】織物 二枚		菊菴
30	魚之皮 一枚		菊菴
31	【蝦夷製】鞆		菊菴
32	鵠 頭		菊菴
33	ハシヒロガモ 頭		菊菴
34	カヅラビシ 頭		菊菴
35	【蝦夷製】トンコリン 二〔卷末図版に「トンコリン 生済堂蔵」の注記あり〕		菊菴
36	ドロビシ		菊菴
37	不詳器物〔卷末図版に「朱塗ノ器 生済堂蔵」の注記あり〕		大河内氏
38	【奈良極楽寺】千体地藏 筆作〔卷末図版に「【奈良極楽寺】千体地藏 小野筆作 鈴翁蔵」の注記あり〕		横山氏
39	古鏡		横山氏
40	古面		横山氏
41	アジメ		横山氏
42	【古製】猿像		鳥樹軒
43	獼猴眼 大ナル者		鳥樹軒
44	鐘乳		鳥樹軒
45	【南都元興寺楼欄干也】古木		鳥樹軒

No.	出品物	図	出品者
46	陽石 大ナル者二		鳥樹軒
47	【金城】シヤチノシンキ		鳥樹軒
48	不詳器		三友園
49	白頭翁図		会主
50	箱館通宝		会主
51	【越中】腊葉二十種		会主
52	紅毛器		会主
53	蝸 数品		会主
54	【内ニ有六字名号】石決明		会主
55	馬蹄石		会主
56	空也堂土器		会主
57	男山神竹守筭		会主
58	霹靂帖 三		会主
59	蛇足		会主
60	【長州産】海老同穴		会主
61	鏡写画		会主
62	【古製】羽子板		会主
63	備前壺		会主
64	【筑紫箱崎名産】蕪草筆		会主
65	【舶来】環		会主
66	燭 三州田原樟脂製		会主
67	拂子ガヒ		会主
68	モルモット マルムキノ者		会主
69	【志州戸羽産】ヤキ 紅色者		会主
70	カキヤマブシ		会主
71	【太宰府】ウソカエ		会主
72	【亀井戸】ウソカエ		会主
73	ワカサギ		会主
74	アマノイワフエ		会主
75	ウミ子ツミ		会主
76	エイノマモリ		会主

※目録との対照が不詳で色付けしていない図に、「ケダマ 野崎蔵」、「古渡染付 穆叟蔵」、2丁にわたる拓本類、がある。

#### 【凡例】

- ・出典は、①は【表1】の出品目録(1)、②は出品目録(2)、③は出品目録(3)、④は出品目録(4)、⑤は出品目録(5)、⑩は出品目録(17)である。
- ・「No.」欄では、各回ごとに、便宜上、「一つ書き」で示されている出品物一件に対して翻刻者が付した通し番号を示した。
- ・「出品物」欄では、出品物の原文記載を示した。翻刻にあたって、基本的には旧字・異体字は新字に直した。また、翻刻者による注記は「〔 〕」で示した。「【 】」で括った部分は、頭注的に資料原文に記載されている事項であることを意味している。資料原文に「同」とある場合は、それに対応すると考えられる記載に修正した。ただし、②No.266の「同琴」のように、対応する記載が判然としない場合(この場合、前項の「雛人形一対」の中で、「雛」のみなのか、「雛人形」なのか判然としない)は原文記載にある「同」を活かした。
- ・「有図」欄には、資料原文に「有図」と記載されている場合、「有図」と記した。ただ、本文中に記したように、資料原文に「有図」とあっても図版が掲載されていないものもある。そこで、実際に図版が掲載されているものについては、この欄に網掛けをした。ただ、図版はあっても、出品目録の何と対応しているか不明なものも多く、網掛けは掲載図版すべてを網羅しているわけではない。また、「有図」となくても、図版が掲載されているものもあって、その場合にも網掛けをした。
- ・「出品者」欄では、出品者の原文記載を示した。資料原文に「同」とある場合は、やはりそれに対応すると考えられる記載に修正した。「【 】」で括った部分についても、「出品物」欄と同様である。

【表3】 尾張名古屋博物会 出品者一覧

No.	出品者	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑳	出品件数	
1	赤林														1	1					2	
2	浅井氏								1												1	
3	朝倉氏						1	2		1	1					1					6	
4	浅野氏							1		1			1					6	1		10	
5	跡部氏													2							2	
6	油治			2																	2	
7	天野／天野氏				3						1		1								5	
8	荒川／荒川氏	4	1	6						1											12	
9	飯田氏					1															1	
10	以学堂							9													9	
11	石井／石井氏		4																		4	
12	石川氏		5	5																	10	
13	石河氏						1					4									5	
14	石黒氏																		2		2	
15	石原氏		1																		1	
16	市岡／市岡氏						2		2	2											6	
17	一寿軒												9								9	
18	一桂堂															1	3				4	
19	伊藤氏		1																		1	
20	稲葉氏									1											1	
21	井上氏				4		3														7	
22	今泉氏										1										1	
23	岩田氏		1				2														3	
24	岩屋／岩屋氏	1	2					7	2	1	10	1				2					26	
25	内海屋						3														3	
26	猿猴庵		11	3																	14	
27	鶯橋菴						1														1	
28	鶯谷菴／鶯谷庵							8													8	
29	鶯栖菴											10									10	
30	大河内氏																			1	1	
31	大崎／大崎氏							1								10		1			12	
32	大田氏																	2		3	5	
33	太田氏														10	3					13	
34	大津氏			2							1					1					4	
35	大山				1																1	
36	岡崎氏														2	5		1			8	
37	岡田氏														5						5	
38	奥田氏									2					1						3	
39	奥平氏			1		2				1	2	1									7	
40	尾崎／尾崎氏	2				3										1					6	
41	小塩氏										5	1	1			1					8	
42	会主		30	15	44	27	32	22	32	23	55	48	23	12	67	55	14	30	13		28	570
43	鏡嶋氏		5											1								6
44	鶴巢		3	1																		4
45	覚丸															1						1
46	霞月軒										1											1
47	賀嶋氏															1						1
48	柏屋						1				2											3
49	勝田氏					2																2
50	加藤氏		5	2		11	8		1	14				11		32						84
51	加藤庄左衛門																			1		1
52	花繞書屋											6										6
53	金子氏										1											1
54	川合氏											1										1
55	川崎							1														1
56	河田氏															1						1
57	玩易			1																		1
58	眼円			1																		1
59	観象	4																				4
60	神波氏																		11			11
61	揮雲堂									2												2
62	鬼角亭											2										2



No.	出品者	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑳	出品件数	
63	菊菴																				10	10
64	起生堂					3																3
65	鬼門亭							5			1	8										14
66	九臯										3			3								6
67	汲谷庵												3									3
68	曲鈴館															1						1
69	鉦堂													5				4				9
70	今古園		5	5		4		1			1		1									17
71	蝸亭	5																				5
72	黒田氏				1	2																3
73	桂花堂							4														4
74	恵日山		4		3		2		3	2		3										17
75	元幹						5															5
76	向庵	1																				1
77	高雅													2								2
78	香久											8										8
79	鉤致堂／鉤致	23	65		87	21	20		14	6	1	1										238
80	香実						1															1
81	香林院		8		2																	10
82	光蓮／光蓮寺／ 光蓮坊													9	6	1	3					19
83	五橋					1																1
84	古今園				1																	1
85	小島屋									2				16		18						36
86	小林	1																				1
87	五味氏		3									1										4
88	再生堂					3	6			2												11
89	濟生堂／濟生	4		1			10	3	5													23
90	酒井氏											1										1
91	榊原／榊原氏			3		1	2											1				7
92	桜井氏					4																4
93	佐藤氏													3	1							4
94	左良／左郎											9										9
95	沢泻屋				2																	2
96	沢泻屋勘左工門	1																				1
97	沢田氏			1						2												3
98	三園		15													1						16
99	杉街		3																			3
100	三虎堂					11																11
101	三勿堂							3	16													19
102	三友園／三友	3				3	3			2											1	12
103	三友堂																				2	2
104	子洽		2	2						2												6
105	紫山堂			7	12	20	16	8		21	13	7	1	27	1	5	1					139
106	【瀬戸村】寺僧																		1			1
107	篠嶋龍掬子					1																1
108	柴田氏		1																			1
109	嶋彦				2	2																4
110	志水氏									1												1
111	鶴巢					1	4															5
112	雀巢	9																				9
113	修養堂／修養	4	13	3	5	1	11	1	1	2			2	12	2	8		4	2	3		74
114	種杏園															22	16					38
115	松架菴					1																1
116	常山居											4										4
117	松丹								2													2
118	松柏			6																		6
119	新野氏											3										3
120	醉雨堂													1								1
121	翠堂		1																			1
122	垂徳				2																	2
123	須賀氏											1										1
124	鈴木氏		5	1			2			4	1			2								15
125	素藤													1								1
126	住吉屋									2												2

No.	出品者	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑳	出品件数	
127	精一			3																	3	
128	静観堂／静観	4		2					12		7										25	
129	生济堂		1		18	12				5		2								1	39	
130	精思堂												53	6			5				3	67
131	正心							10														10
132	清貞				1	1																2
133	節斎													1								1
134	仙果		1																			1
135	千璫		5																			5
136	禅友居										6	11		2							1	20
137	蒼龍園／蒼龍		6						2													8
138	大班慶												18									18
139	高野氏		1																			1
140	田中氏									1		1										2
141	田辺氏					1																1
142	種野氏						1															1
143	鳥樹軒														12	6		6	14		6	44
144	長春館		3						1			5										9
145	聴濤亭					1																1
146	長母寺								2													2
147	塚田氏				1																	1
148	津田／津田氏	1	1									1				5	1	1				10
149	都筑				4																	4
150	角田氏			3																		3
151	東月庵												20	12								32
152	藤源								2	1												3
153	東條氏											3										3
154	同道堂				1																	1
155	糖笠															1						1
156	土岐／土岐氏							1						2								3
157	富永氏											4									2	6
158	取田氏					3																3
159	中川氏													2							1	3
160	永坂氏						1															1
161	永田氏			1						1		35										37
162	中野氏								1	5												6
163	中野清右衛門						1															1
164	中邨／中邨氏／ 中邑氏／中村氏		1			3			5						6							15
165	成田屋									1												1
166	西岡氏									1												1
167	西村氏						1															1
168	野崎氏												1									1
169	野間	2																				2
170	野邨氏						1															1
171	梅居／榎居		1	4																		5
172	梅雪／榎雪菴		2	6	10	8	2															28
173	服部氏											1										1
174	早川氏													1								1
175	林氏		2	1		2	2				1			8	7	2	1	1			2	29
176	【長】林氏		1																			1
177	平田							1														1
178	平出／平出氏	2													1							3
179	平野氏					1						4										5
180	広井八幡		1																			1
181	広瀬氏								1											1		2
182	風軒								5													5
183	【アツタ】深川権右 エ門		1																			1
184	深田／深田氏	2	2																			4
185	普救堂															2						2
186	福富氏											1										1
187	藤屋									1												1
188	富春堂								1			5	2		1							9
189	撫松菴					1																1

No.	出品者	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑳	出品件数	
190	復古齋							1	3												4	
191	復古亭								1												1	
192	復古堂										1										1	
193	薛荔菴		3		4	5	4	3	2				2	16			1				40	
194	薛荔堂							1													1	
195	某／某氏／何某					1	2						19	10							32	
196	【平安松原通】某					1															1	
197	芳蘭				3																3	
198	松井氏						7		4	5			1								17	
199	松井五良											1									1	
200	松藏				1																1	
201	松本	3																			3	
202	間宮／間宮氏	1	1			2		1													5	
203	万福院／万福				3	4	1			3											11	
204	水野氏／水埜氏		1		1																2	
205	水之屋／水ノ屋／ 水廻屋／水野屋		7		7							2			1	3					20	
206	御友氏									1											1	
207	三村／三邨	1					1														2	
208	妙光寺																	1			1	
209	無間堂											3									3	
210	夢借舎／無借舎								2				1								3	
211	武藤氏										1										1	
212	村上氏									1											1	
213	森	1																			1	
214	森高雅		1																		1	
215	森川／森川氏			7				1	2		1					1					12	
216	森嶋氏																	13	13		6	32
217	問市														1						1	
218	柳生氏												1								1	
219	安井／安井氏		1			1	1				3		1	2	1						10	
220	安田氏					5	2				1								1		9	
221	安田屋											2									2	
222	安半												1			2					3	
223	ヤスリヤ／やすりや ／ヤスリ屋										6		3	2	2	1	5	3	2		2	26
224	柳沢氏		3	6																	9	
225	柳田氏						4														4	
226	弥平												1								1	
227	八房											3									3	
228	山内氏										1										1	
229	山崎氏					1															1	
230	山田							1													1	
231	山田屋															3					3	
232	山中氏		33	15																	48	
233	山本氏		1																		1	
234	又日庵		3			1				3					2		1	1	1		3	15
235	友水		27	12	2																	41
236	有斐軒			38																		38
237	由父窟				1																	1
238	養命堂																				1	1
239	溶々齋／溶々／ 溶々齋	12	2			22		1														37
240	横井氏											1										1
241	横井次良左衛門											1										1
242	吉川							2														2
243	吉川伊左衛門															4						4
244	【三ノ丸】吉田氏					1																1
245	吉田氏										1			5								6
246	吉原氏										3	23	3	2								31
247	吉藤															1						1
248	蘭雞												1									1
249	葎菴／葎菴		8	3																		11
250	龍屋	9							2									1				12
251	柳街			2																		2

No.	出品者	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑳	出品件数	
252	柳斎			1																	1	
253	龍刀園		4																		4	
254	龍楼												4			1					5	
255	菱太												4	4							8	
256	林藤			1																	1	
257	【岐阜】鈴翁／鈴翁／横山氏														2		2				4	8
258	魯菴				1																1	
259	老銭		1																		1	
260	魯筭													1		1					2	
261	鑪字屋										4										4	
262	若林							2													2	
263	渡辺氏											1					1				1	3
264	渡部氏													3								3
265	渡辺八郎五郎																			1		1

出品物総件数	99	320	175	225	201	178	91	127	125	126	234	170	195	137	210	49	76	62	8	76	2884
出品者総数	23	55	37	28	42	39	26	28	35	25	46	22	36	22	37	12	16	12	6	17	

【凡例】

- ・【表1】の「出品目録」(1)～(17)から作成し、欠けている年代は(19)(22)で補った。
- ・尾張名古屋博物館全20回について、出品者ごとに出品物の件数をまとめた。①～⑳は、【表1】の開催一覧に対応している。
- ・「出品者」欄の記載は、資料原文の記載で、配列は50音順である。例えば、No.7の「天野」「天野氏」など、同一人物と考えられる記載については「/」で区切ってまとめた。
- ・⑬の目録(出品目録(11))の巻末の資料図版に「間屋市兵衛蔵」と注記のある出品物があるが、目録部分の誰に比定されるのか不詳である。
- ・⑱の目録(出品目録(15))の目録部分で、「神波氏」出品の「手鋒」の次にある「人形石 周防岩国錦川産」は出品者名が空白になっている。この1件は出品物総件数には入っていない。
- ・⑲の目録(出品目録(16))には、目録部分がなく、資料図版のみが収められている。よって、正確な出品物数、出品者数は不詳である。ただ、図に出品者名が添えられているものについて表に拾ったが、5件の図版について出品者が不詳である。

【表4】 尾張名古屋博物会 出品者略歴

No.	出品者 (原文記載)	出品 件数	推定人物名	推定人物略歴	出典
2	浅井氏	1	浅井董太郎もしくは浅井樺園か？	→「紫山堂」、「静観堂」、「九草」を参照。	
4	浅野氏	10	浅野春道もしくは浅野昌純か？	【浅野春道】 →「鶴巢」を参照。  【浅野昌純】 生没年等不詳。号は翠園。嘗百社を主催した本草家・水谷豊文の三回忌追薦本草会（天保6年(1835)開催）への出品が確認される。	〈5〉 342 頁
7	天野／天野氏	5	天野恬庵か？	嘉永2年(1849)没 [享年68]。名は定一、通称は久右衛門。儒学者。尾張藩藩校・明倫堂教授。ただし、⑬の時期は没後。	〈2〉 312 頁
11	石井／石井氏	4	石井孝政か？	→「垂穂」、「同道堂」を参照。	
12	石川氏	10	石川嘉貞か？	→「魯庵」を参照。	
14	石黒氏	2	石黒通玄か？	→「富春堂」を参照。	
16	市岡／市岡氏	6	市岡和雄か？	文化5年(1808)～明治4年(1871)。通称は辰五郎、後に犇蔵。号は櫛園。尾張藩士。馬廻組、小納戸格小姓、本丸番などを歴任。歌人としても知られる。	〈2〉 133 頁、 〈3〉 27 頁
18	一桂堂	4	永坂周二	慶応3年(1867)没 [享年60]。名は徳彰。号は一桂堂。尾張藩医師。狂歌人としても知られる。「古書古物を愛し、收藏する所極めて多し」。「耽古連八天狗」の一人。	〈2〉 524 頁
24	岩屋／岩屋氏	26	岩屋平右衛門か？	生没年等不詳。文政12年(1829)に嘗百社関係の採葉行に関わる。嘗百社を主催した本草家・水谷豊文の三回忌追薦本草会（天保6年(1835)開催）への出品が確認される。	〈4〉 33 頁、 〈5〉 342 頁
26	猿猴庵	14	高力種信か？	宝暦6年(1756)～天保2年(1831)。通称は新蔵。号は猿猴庵。尾張藩士。「常に神社仏閣に詣でて法会・開帳・宝物の様を写し、天変・地異・奇事・雜観を尽く写生し」著述に残したことで知られる。ただし、出品年は全て没後。	〈1〉 392 頁
30	大河内氏	1	大河内存真	→「済生堂」、「生濟堂」を参照。 ※⑳に「大河内氏」が出品した「不詳器物」の図に、出品者名前として「生濟堂蔵」という注記がある。	
34	大津氏	4	大津北圃か？	安政6年(1859)没 [享年86]。名は文広。通称は小右衛門。尾張藩士。馬廻組、侍読、中奥小姓、先手物頭格などを歴任。儒学者、漢詩人としても知られる。	〈2〉 303 頁
37	岡田氏	5	岡田啓か？	万延元年(1860)没 [享年81]。通称は六兵衛。号は文園。尾張藩士。国学者。『尾張名所図会』を共編。「好みて異書を蒐め、其蔵する所一万巻に及ぶ」。「同好会」の一員。	〈2〉 134 頁
38	奥田氏	3	奥田又右衛門か？	生没年等不詳。嘗百社を主催した本草家・水谷豊文の三回忌追薦本草会(天保6年(1835)開催)への出品が確認される。	〈5〉 342 頁
41	小塩氏	8	小塩五郎か？	明治27年(1894)没 [享年65]。名は芳賢。号は三居巢。尾張藩士。吉田平九郎門下の本草家で、嘗百社の一員。	〈2〉 525 頁
42	会主	570	吉田平九郎	→「雀巢」を参照。	
43	鏡嶋氏	6	鏡嶋遼山か？	生年不詳～明治13年(1880)。「同好会」の一員。	〈2〉 430 頁 「小寺玉晁」、 〈6〉
44	鶴巢	4	竹村昌成	慶応3年(1867)没 [享年88]。通称は半右衛門。号は鶴叟(鶴巢)、止丘軒など。「尾張の重臣織田氏の家隸」。俳人として知られる。	〈2〉 408 頁、 〈3〉 183 頁
47	賀嶋氏	1	賀嶋近信か？	生没年等不詳。弘化3年(1846)には活動が確認される。「医史に通じ、異国草木会を催す」。	〈3〉 74 頁

No.	出品者 (原文記載)	出品 件数	推定人物名	推定人物略歴	出典
50	加藤氏	84	加藤琵琶彦か？	文化12年(1815)～安政元年(1854)。名は保右。通称は升屋理吉。号は瀧廻屋、便々館など。名古屋の小間物商。狂歌師としても知られる。絵師・森高雅(→「森高雅」を参照)の娘を娶る。	〈2〉432頁、 〈3〉81頁
52	花繞書屋	6	伊藤圭介	→「修養堂」を参照。	
57	玩易	1	佐々木庸綱	嘉永6年(1853)没[享年86]。通称は宗六。号は玩易斎など。京都出身。名古屋で書道塾を開業するなど、書家として知られる。	〈1〉355頁、 〈3〉135頁
59	観象	4	吉雄常三	天保14年(1843)没[享年57]。名は尚貞。号は南阜、観象堂。長崎の阿蘭陀通詞の家に生まれる。尾張藩に仕官し、後に奥医師となる。蘭方医・蘭学者。伊藤圭介(→「修養堂」を参照)の師。	〈2〉506頁、 〈3〉326頁、 〈4〉36頁
60	神波氏	11	神波挺庵か？	天保元年(1830)～明治27年(1894)。名は愨。吉田平九郎門下の本草家で、嘗百社の一員。国立国会図書館伊藤文庫所蔵の『豊文禽譜』(写本)を作成した神波全庵と同一人物の可能性はある。	〈4〉34頁
61	揮雲堂	2	大江尾京	生年不詳～明治6年(1873)。本名は津田三左衛門。俗称は津の国屋。名古屋の筆墨商。狂画・狂歌を嗜む。	〈2〉434頁
66	九阜	6	浅井樺園か？	文政11年(1828)～明治16年(1883)。名は正賛。号は九阜。浅井董太郎(「静観堂」を参照)の長男。父と同様、居所を静観堂とも号す。尾張藩医師。奥医師格、薬園奉行などを歴任。本草家で嘗百社の一員。浅井氏が医学講義を行った講舎は「医学館」と称され、連年「医学館薬品会」が開催された。	〈2〉466頁、 〈3〉5頁、 〈5〉59頁
77	高雅	2	森高雅	→「森高雅」を参照。	
79	鉤致堂／鉤致	238	水谷義三郎	文化3年(1806)～弘化3年(1846)。名は光文、後に豊光。尾張藩士。馬廻組。尾張藩の薬園監守。嘗百社を主催した本草家・水谷豊文の養子として水谷家を継ぐ。嘗百社の一員。ただし、㊦は没後で、義三郎の養子・水谷助六(1840～1917)による出品か？	〈4〉36頁、 〈5〉342頁
80	香実	1	深田正韶	嘉永3年(1850)没[享年78]。通称は増蔵。号は香実、豊坂翁。尾張藩士。藩主侍読、書物奉行などを歴任。儒学、垂加神道を学び、書道・和歌にも通じる。『尾張志』の編纂に関わる。	〈2〉199頁、 〈3〉263頁
82	光蓮／光蓮寺／ 光蓮坊	19	光蓮寺	名古屋の浄土真宗大谷派の寺院。	
84	古今園	1	平出順益	文化6年(1809)～文久元年(1861)。名は延齡。号は鈍阿、古今園亀寿、蓬廻屋など。尾張藩医師。「耽古連八天狗」の「棟梁」。「同好会」の一員。	〈3〉259頁
89	濟生堂／濟生	23	大河内存真	→「生濟堂」を参照。	
92	桜井氏	4	桜井記明か？	生没年等不詳。号は摺霞書室。安政5年(1858)には活動が確認される。『刀剣道標』、『本朝一統志略百卷』などを編著。	〈3〉133頁
97	沢田氏	3	沢田師厚か？	寛政10年(1798)～嘉永6年(1853)。通称は良蔵など。号は眉山など。尾張藩藩校・明倫堂書道師範。書家として知られる。	〈1〉359頁、 〈3〉139頁
98	三園	16	神谷三園	明治4年(1871)没[享年84]。名は克植。通称は喜左衛門。尾張藩士。馬廻組、広敷詰、用役などを歴任。愛書家。「学を好み、博く和漢の群籍に涉り、有職故実に精し、蔵書一万余巻、概ね異本珍籍に非ざるはなし、平生奇書を搜訪し、手親ら模写す」。本草家で嘗百社の一員。「同好会」の「主盟」。	〈2〉145頁、 〈3〉85頁
102	三友園／三友	12	永田敏昌か？	→「三友堂」を参照。	
103	三友堂	2	永田敏昌か？	文化5年(1808)～明治13年(1880)。号は簡斎、三友軒。美濃国出身で、森島家に生まれ、尾張藩士永田敏政の養子となり、関流和算を学ぶ。隠居後、森島姓に戻る。	〈3〉223頁

No.	出品者 (原文記載)	出品 件数	推定人物名	推定人物略歴	出典
105	紫山堂	139	浅井董太郎	→「静観堂」を参照。	
108	柴田氏	1	柴田洞元か？	→「浴々斎」を参照。	
111	鶴巢	5	浅野春道	天保11年(1840)没[享年72]。号は鶴巢、栗亭。居所を思濟堂と号す。尾張藩医師。奥医師などを歴任。小野蘭山門下の本草家で、嘗百社の一員。「古銭癖あり、蔵する所極めて多く、当時収蔵家を以て世に知らる、又古器を弄し、盆栽を愛し、多く異草奇花を聚む」。⑤に「鶴巢」が出品した「鶴巢」の図に、出品者名として「浅野春道蔵」という注記があるが、この時期は没後にあたる。	〈2〉496頁、 〈4〉32頁
112	雀巢	9	吉田平九郎	文化2年(1805)～安政6年(1859)。名は高憲。号は雀巢庵、藪月。尾張藩士。馬廻組、寄合組を歴任。本草家で嘗百社の一員。「同好会」の一員。	〈2〉513頁、 〈3〉327頁、 〈5〉400頁
113	修養堂／修養	74	伊藤圭介	享和3年(1803)～明治34年(1901)。名は清民。号は錦窠、花繞書屋、修養堂など。大河内存真の実弟。長崎に赴いてシーボルトに師事し、後に名古屋で蘭方医を開業、やがて尾張藩医師となる。水谷豊文門下の本草家で、嘗百社の一員。文久元年(1861)には幕府の蕃書調所(洋書調所、開成所と改称)へと招聘(翌々年に辞任)。維新後、明治3年(1870)には新政府より大学出仕、文部省出仕を命じられ、東京に転居。後に東京大学教授(理学部)となる。	〈2〉514頁、 〈3〉32頁、 〈7〉
120	酔雨堂	1	吉原東海か？	明治26年(1893)没[享年75]。通称は竹三郎、後に五郎。号は酔雨、竹意庵。俳人として知られる。	〈2〉417頁、 〈3〉330頁
122	垂穂	2	石井孝政	→「同道堂」を参照。	
128	静観堂／静観	25	浅井董太郎	寛政9年(1797)～万延元年(1860)。名は正翼。号は紫山、希聖斎。尾張藩医師。薬園奉行、奥医師などを歴任。浅井氏が医学講義を行った講舎は「医学館」と称され、連年「医学館薬品会」が開催。本草家としても知られる。	〈2〉464頁、 〈3〉6頁
129	生濟堂	39	大河内存真	寛政8年(1796)～明治16年(1883)。名は重敦、後に重徳。号は恒庵、八松など。尾張藩医師。番医、奥医師などを歴任。伊藤圭介の実兄。水谷豊文門下の本草家で、嘗百社の中心を担った。ただし、年によっては、大河内存真の長男・大河内構斎(安政5年(1858)に33歳)の出品である可能性も考えられる。	〈2〉482頁、 〈3〉48頁、 〈5〉210頁
133	節斎	1	鈴木常明	文化8年(1811)～明治3年(1870)。名は保。通称は容蔵、後に節斎。号は快然堂、清高軒など。尾張藩医師浅井氏の門下となり、後、蘭方医学・蘭学を学ぶ。尾張藩医師。伊藤圭介とともに尾張藩への種痘所を設置に尽力した。	〈2〉523頁
134	仙果	1	高橋広道	文化元年(1804)～慶応4年(1868)。通称は橋屋弥太郎。号は輶斎、古今堂、笠亭、仙果など。和漢の学を修め、絵画・狂歌・戯作にも通じた。	〈2〉432頁、 〈3〉178頁
135	千瓊	5	松尾屋千瓊	生没年等不詳。「耽古連八天狗」の一人。	〈2〉521頁
136	禅友居	20	戸田寿昌	文政6年(1823)～明治20年(1887)。通称は五郎兵衛。号は芹園、禅友居。尾張藩士。本草家で嘗百社の一員。	〈3〉214頁、 〈4〉35頁
137	蒼龍園／蒼龍	8	松井蒼龍か？	生没年等不詳。「耽古連八天狗」の一人。	〈2〉521頁
138	大班塵	18	松井丹右衛門	明治17年(1884)没[享年71]。名は鶴羨。号は雨白、朝寝斎。居所を大班塵、亀望亭と号す。尾張藩士。大番、西洋銃陣調練の火薬締方、書院番などを歴任。本草家で嘗百社の一員。和歌、俳諧、絵画も嗜む。	〈2〉525頁、 〈4〉35頁
144	長春館	9	中西龍雄	生年不詳～安政3年(1856)。号は旦斎、長春館。伊勢国長島町の医師。尾張藩医師柴田龍溪の弟。「同好会」の一員。	〈3〉224頁
148	津田／津田氏	10	津田喜兵衛か？	生没年等不詳。嘗百社を主催した本草家・水谷豊文の三回忌追薦本草会(天保6年(1835)開催)への出品が確認される。	〈5〉342頁
149	都筑	4	都筑泰観か？	生没年等不詳。「同好会」の一員。	〈2〉430頁 「小寺玉晷」

No.	出品者 (原文記載)	出品 件数	推定人物名	推定人物略歴	出典
154	同道堂	1	石井孝政	天保11年(1840)没[享年72]。通称は八郎次、後に九郎左衛門。号は垂穂、二亭、同道堂など。尾張藩士。右筆部屋留役見習、書院番組頭、使番格などを歴任。狂歌を嗜む。	〈2〉425頁、 〈3〉20頁
157	富永氏	6	富永武太夫か?	安政5年(1858)に34歳。没年不詳。名は兼章。号は東岡庵。本草家で嘗百社の一員。	〈4〉35頁、 〈5〉17頁
160	永坂氏	1	永坂周二か?	→「一桂堂」を参照。	
161	永田氏	37	永田敏昌か?	→「三友園」、「三友堂」を参照。	
171	梅居/榎居	5	野口道直	慶応元年(1865)没[享年81]。通称は市兵衛。号は梅居、汲古堂など。名古屋西郊枇杷島の青物問屋。和漢の書を学び、古今の人物の事績を考究し、また、『尾張名所図会』を共編。愛書家で、「同好会」の一員。	〈2〉141頁、 〈3〉242頁
172	梅雪/榎雪菴	28	神墨梅雪	明治12年(1879)没[享年64]。号は梅雪、華陽、経徳堂など。尾張藩の重臣・石河家の家臣の家に生まれる。儒学者。『尾張古今人物誌』などを編著。	〈3〉216頁
175	林氏	29	林穆叟か?	生没年等不詳。「同好会」の一員。	〈2〉430頁
179	平野氏	5	平野広臣か?	生年不詳～嘉永6年(1853)。尾張藩医師。寄合医師、侍医などを歴任。本居宣長の門下で国学を学び、また和歌を嗜む。「同好会」の一員。	〈2〉152頁、 〈2〉430頁 「小寺玉隼」
184	深田/深田氏	4	深田正韶か?	→「香実」を参照。	
185	普救堂	2	平出順益か?	→「古今園」を参照。 ※平出順益に『普救堂漫筆』という著作があることから推定。	〈3〉259頁
188	富春堂	9	石黒通玄	安政5年(1858)に34歳。没年不詳。名は正廉。号は通玄、富春堂など。漢方・蘭方を学んで尾張藩奥医師を務めた石黒濟庵(天保7年(1836)に50歳で没)の子。父と同じく尾張藩医師。また、やはり父と同じく本草家で、嘗百社の一員。	〈3〉22頁、 〈2〉505頁 「石黒濟庵」、 〈4〉33頁、 〈5〉17頁
190	復古斎	4	柳田政矩	安政6年(1859)没[享年63]。通称は良平。号は凌雲、復古斎など。名古屋で医師を開業、後に尾張藩寄合医師。	〈2〉510頁、 〈3〉310頁
193	薛荔菴	40	大窪昌章 大窪安治	【大窪昌章】 天保12年(1841)没[享年40]。通称は舒三郎。号は薛荔菴、蝸牛菴、蝸亭。尾張藩士。馬廻組、大番を歴任。本草家で嘗百社の一員。「本草に精しく写生を巧にし、石黒濟庵、吉田平九郎、大河内存真、伊藤圭介等と共に屢博物の会を開く。又、茶事を好み、手づから陶を製し、採集せる奇木百種を以て茶杓百本を製す」。  【大窪安治】 明治26年(1893)没[享年68]。通称は勘五郎、太兵衛。号は薛荔菴。尾張藩士。馬廻組、小十人組与頭などを歴任。父と同じく、本草家で嘗百社の一員。	〈2〉498頁、 〈2〉499頁、 〈3〉48頁、 〈4〉33頁
198	松井氏	17	松井丹右衛門か?	→「大班塵」を参照。	
203	万福院/万福	11	万福院	名古屋の真言宗智山派の寺院。	
204	水野氏/水埜氏	2	水野睡蠶か?	生没年等不詳。「耽古連八天狗」の一人。	〈2〉521頁
207	三村/三邨	2	三村玄澄か?	寛政4年(1792)～嘉永6年(1853)。名は百穀。号は蕙斎。居所を鑑古と号す。名古屋の薬屋の家に生まれ、後に医師を開業、やがて尾張藩医師となる。奥医師、侍医などを歴任。嘗百社を主催した本草家・水谷豊文の三回忌追薦本草会(天保6年(1835)開催)への出品が確認される。	〈2〉507頁
213	森	1	森高雅か?	→「森高雅」を参照。	
214	森高雅	1	森高雅	元治元年(1864)没[享年74]。通称は右門、蜂助。号は玉僊、素堂、三光堂、紫川亭など。狩野派、後に土佐派を学んだ絵師。『尾張名所図会』の挿絵を描く。	〈1〉395頁、 〈3〉305頁
216	森嶋氏	32	森嶋理右衛門か?	生没年等不詳。嘗百社の一員で、文久2年(1862)3月に伊藤圭介の別邸「旭園」で開催された博物会への出品が確認される。	〈4〉36頁



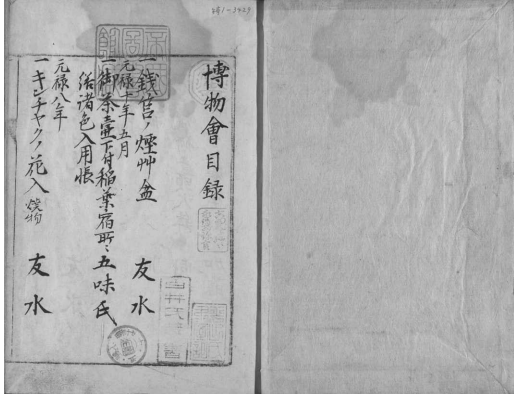
No.	出品者 (原文記載)	出品 件数	推定人物名	推定人物略歴	出典
225	柳田氏	4	柳田政矩か?	→「復古齋」を参照。	
229	山崎氏	1	山崎玄庵か?	嘉永4年(1850)没[享年25]。浅井董太郎の実弟。尾張藩医師。後に蘭学を学ぶ。嘗百社を主催した本草家・水谷豊文の三回忌追薦本草会(天保6年(1835)開催)への出品が確認される。	〈2〉439頁、 〈5〉342頁
232	山中氏	48	山中寛紀	天保11年(1840)没[享年63]。通称は八十郎、九十郎。尾張藩士。徒士以下小普請、勘定方物書、水野代官並手代並、勘定吟味役などを歴任。本草家で嘗百社の一員。「凡地理、水行、物産、本草の学、苟も農政に便なるものは究窮せざる処なし、旁古器古物を好み、其動植の異類奇種は或は之を飼養し、之を培養し、或は之を図し、乾製とし、腊葉とし、筐に盈ち、室に満つ、其遠国の産に係るものは、人に托して之を致し、以て自ら娛みとなす」。	〈2〉500頁、 〈4〉36頁
234	又日庵	15	渡辺規綱	寛政4年(1792)～明治4年(1871)。通称は半蔵。号は又日庵宗甫、一楽園、橋五園千広など。渡辺家は尾張藩の重臣で国家老などを務めた家。規綱も江戸で「加判」などを歴任。文政2年(1819)に隠居、天保6年(1835)には剃髪し、兵庫入道と名乗る。風雅を好み、茶事、狂歌、製陶に通じる。本草家としても知られる。	〈1〉143頁、 〈3〉342頁、 〈5〉437頁
236	有斐軒	38	水谷義三郎か?	→「鉤致堂」を参照。 ※「有斐軒」は、義三郎の養父で嘗百社を主催した本草家・水谷豊文(1779～1833)の号として知られるが、既に没後であり、豊文の旧蔵品を本人名義で出品した可能性も考えられる。	
239	溶々齋/溶々/ 塔々齋	37	柴田洞元	明和4年(1767)～弘化2年(1845)。名は正簡。号は西坡、溶々齋、松坡。尾張藩医師。本居春庭に国学を学び、和歌や絵画にも通じる。『日用薬品考』を著した本草家で、嘗百社の一員。なお、⑤で「塔々齋」が出品した「練鵲」の図に「柴田氏蔵」と注記があることから、「塔々齋」と「溶々齋」は同一人物と推定した。	〈2〉495頁、 〈3〉143頁、 〈5〉256頁
250	龍屋	12	柴田龍溪か?	明治元年(1868)没[享年75]。名は博。号は龍廻屋弘器、龍屋海城、水魚洞、金星軒など。尾張藩医師。狂歌を嗜む。	〈3〉144頁
257	【岐阜】鈴翁/ 鈴翁/横山氏	8	横山鈴翁	享和元年(1801)～明治8年(1875)。名は卓寛。通称は七右衛門。美濃国岐阜の豪商・数奇者。茶道、絵画、製陶に秀で、仏像や古物を好む。⑳で「横山氏」が出品した「奈良極楽寺/千体地藏 摹作」の図に「鈴翁蔵」と注記があることから、「鈴翁」は横山姓であることが分かる。	〈8〉
258	魯菴	1	石川嘉貞	天保12年(1841)没[享年69]。通称は順次。号は魯庵、三已叟。尾張藩士。明倫堂典籍、侍読、学問所総裁、書物奉行などを歴任。	〈2〉63頁、 〈3〉21頁
263	渡辺氏	3	渡辺芸里か?	明治6年(1873)没[享年74]。名は綱雄。通称は善兵衛。号は神仏庵、漲堂など。尾張藩の浮人同心。俳諧を嗜み、仏学を学ぶ。「好みて古書画、古器物を蔵す。「同好会」の一員。	〈2〉412頁

#### 【出典】

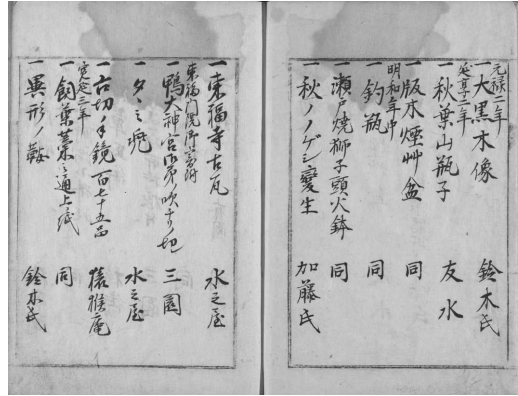
- 〈1〉名古屋市役所編『名古屋市史人物編』上巻、川瀬書店、1934年
- 〈2〉名古屋市役所編『名古屋市史人物編』下巻、川瀬書店、1934年
- 〈3〉太田正弘編『補訂版 尾張著述家総覧 附逸事』私家版、2005年
- 〈4〉磯野直秀・田中誠「尾張の嘗百社とその周辺」『慶應義塾大学日吉紀要 自然科学』No.47、2010年
- 〈5〉吉川芳秋『医学・洋学・本草学者の研究—吉川芳秋著作集—』八坂書房、1993年
- 〈6〉ウェブサイト日本掃菴録「<http://www.soutairoku.com/index.html>」
- 〈7〉土井康弘『日本初の理学博士 伊藤圭介の研究』皓星社、2005年
- 〈8〉ウェブサイト「コトバンク」ほか

#### 【注】

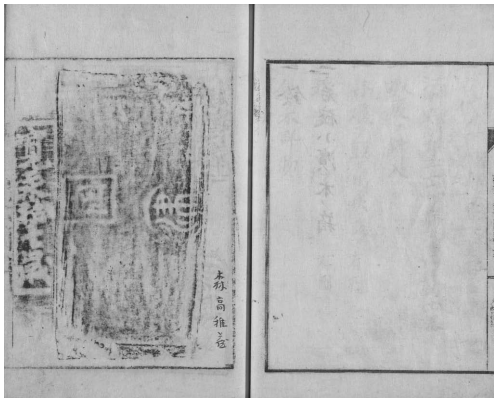
- ・「No.」欄と「出品者(原文記載)」の記載は、【表3】と対応している。



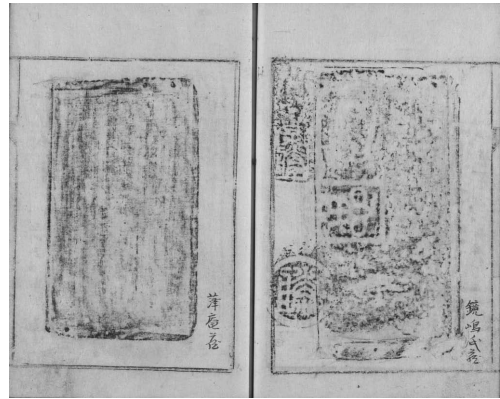
出品目録 (2) より



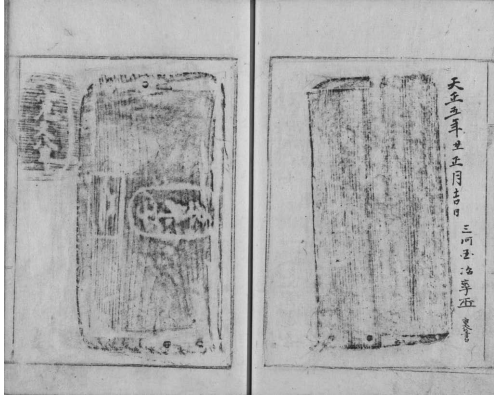
出品目録 (2) より



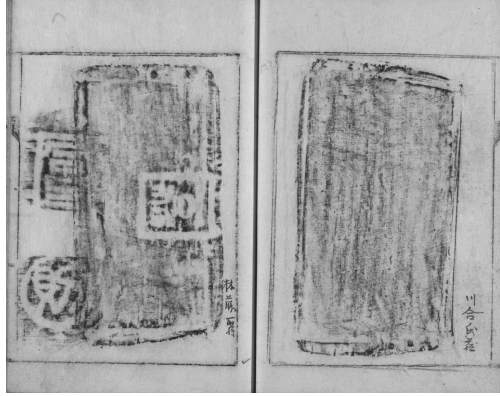
出品目録 (2) より



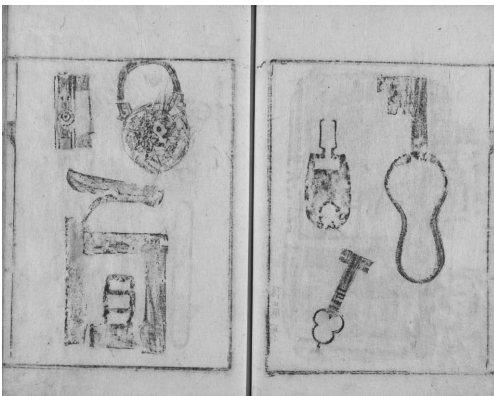
出品目録 (2) より



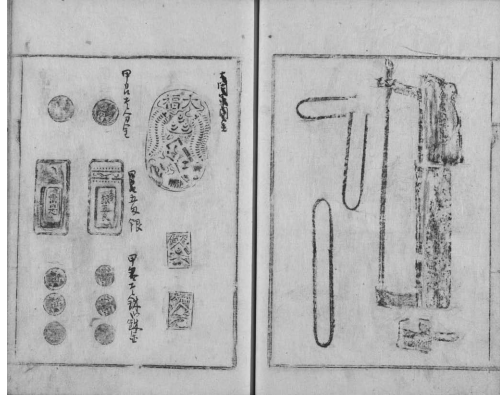
出品目録 (2) より



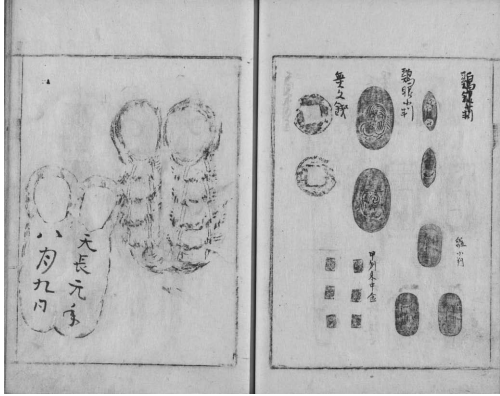
出品目録 (2) より



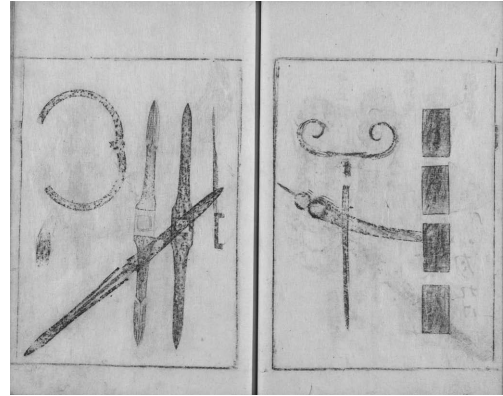
出品目録 (2) より



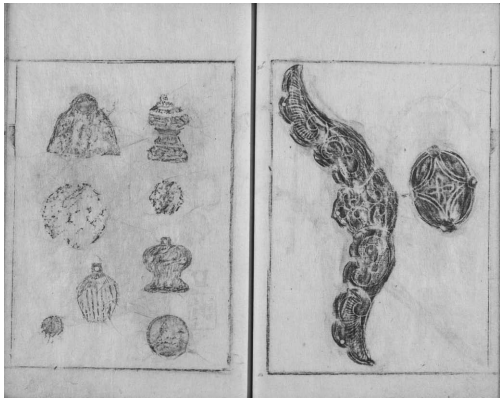
出品目録 (2) より



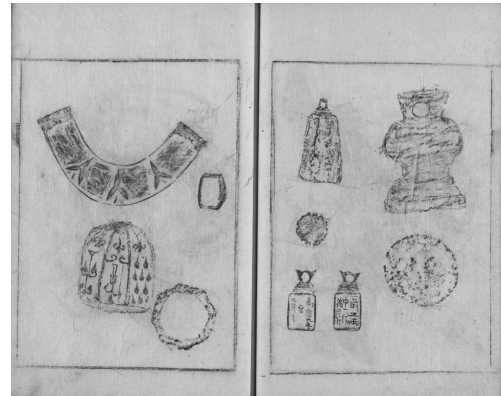
出品目録 (2) より



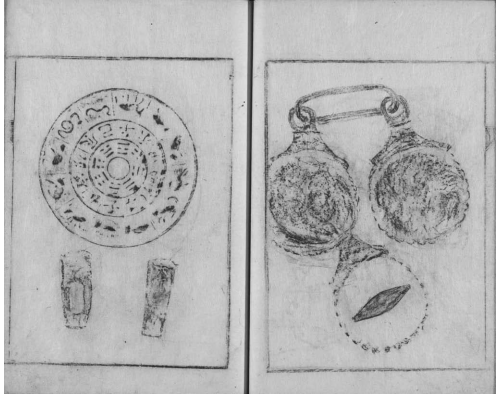
出品目録 (2) より



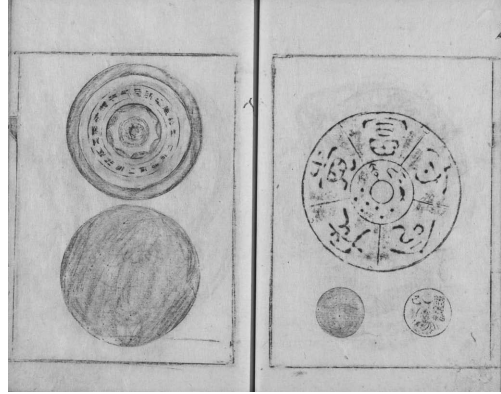
出品目録 (2) より



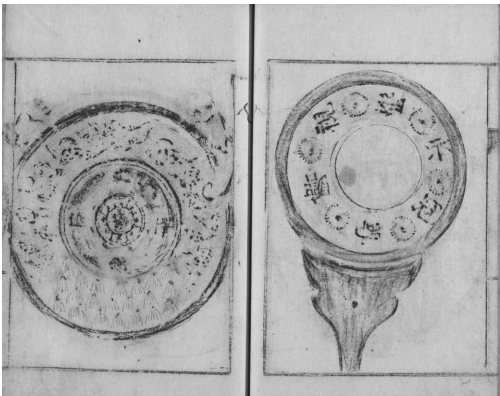
出品目録 (2) より



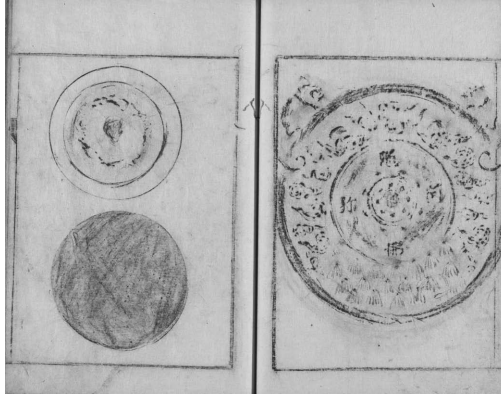
出品目録 (2) より



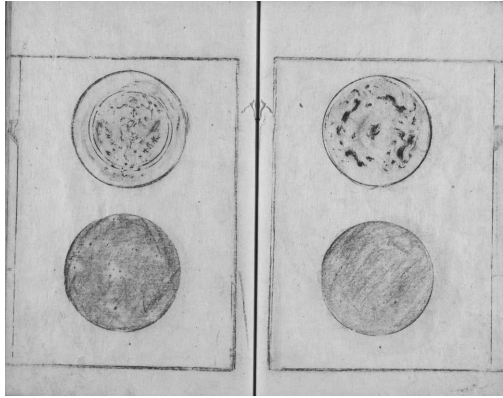
出品目録 (2) より



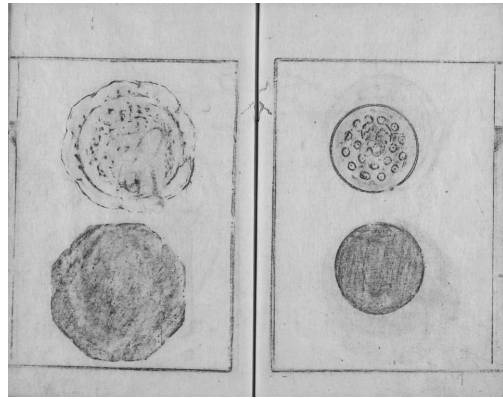
出品目録 (2) より



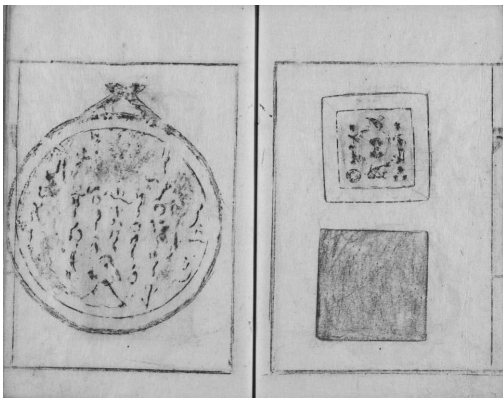
出品目録 (2) より



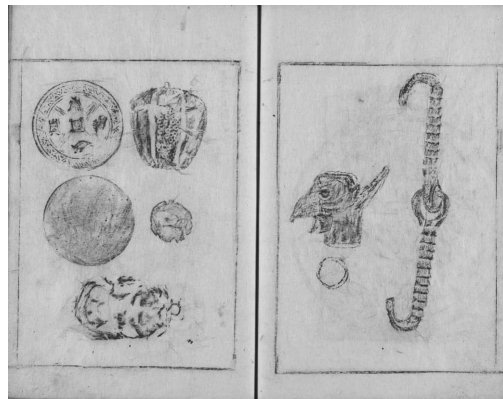
出品目録 (2) より



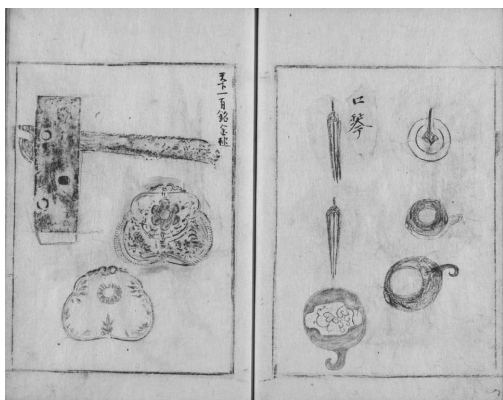
出品目録 (2) より



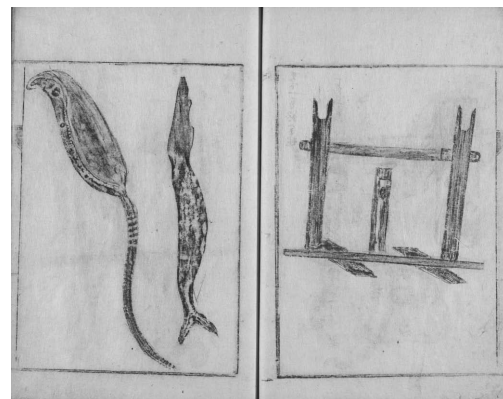
出品目録 (2) より



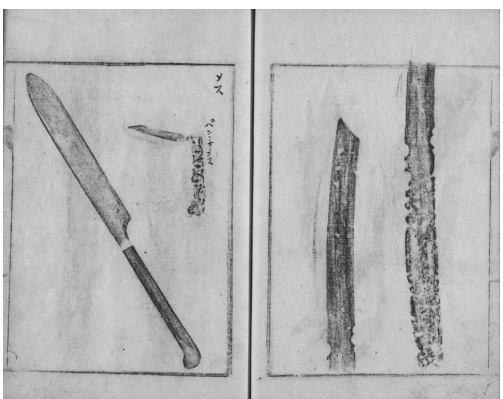
【出品目録 (2) より



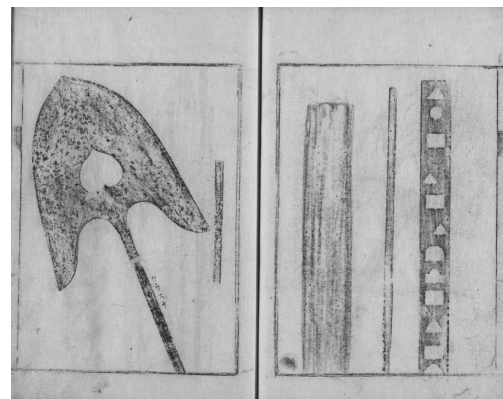
出品目録 (2) より



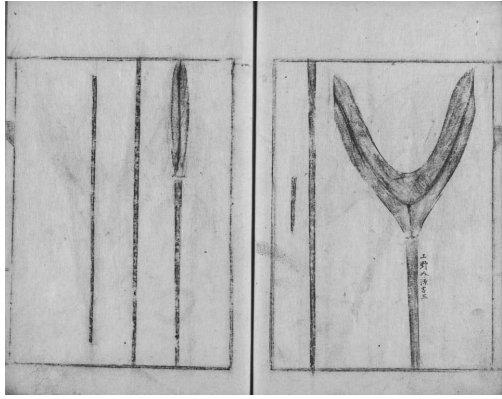
出品目録 (2) より



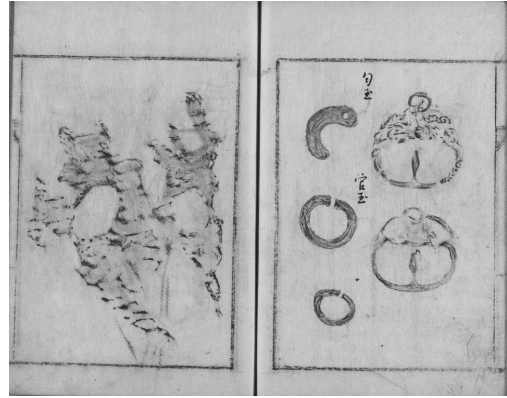
出品目録 (2) より



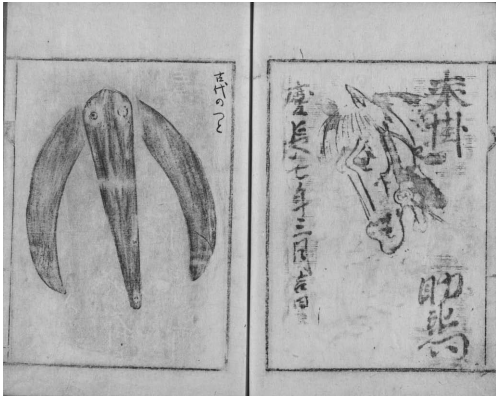
出品目録 (2) より



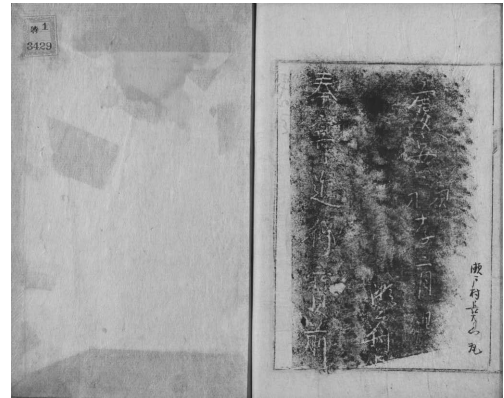
出品目録 (2) より



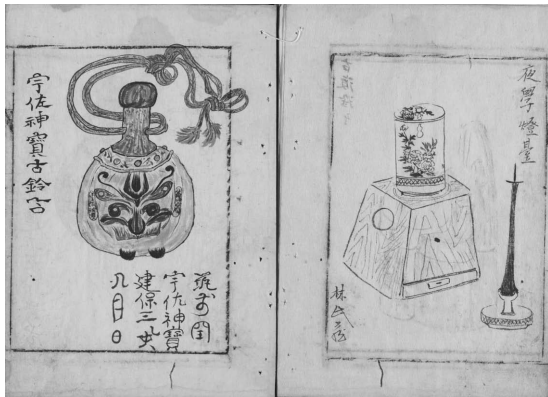
出品目録 (2) より



出品目録 (2) より



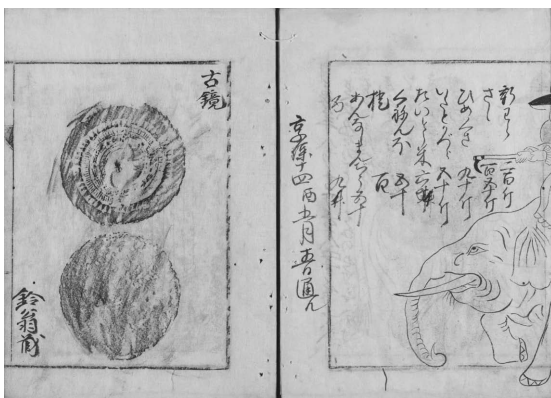
出品目録 (2) より



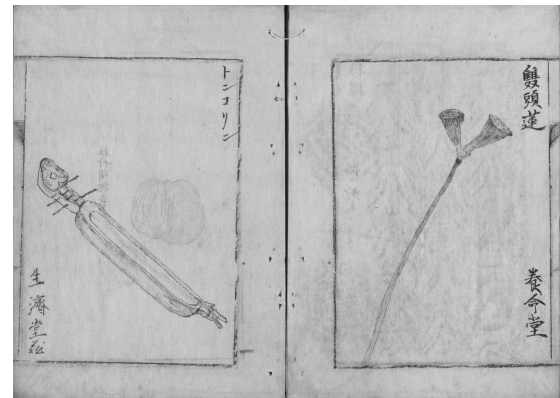
出品目録 (17) より



出品目録 (17) より



出品目録 (17) より



出品目録 (17) より

全て国立国会図書館デジタルコレクションより



# 好古家の図譜・図録－古物を写す－

長谷 洋一

## はじめに

明治前期の好古家たちが刊行した図譜・図録は、彼等の活動を考察するうえで有益な資料である。

モノを写すこと自体は、絵師による古絵巻等の模写、模本を始め、博物学や本草学の発達により動物、植物などを精緻に描いた「図譜」が数多く刊行されるなど古くからさまざまな目的をもって行われた。古物に関しても松平定信を中心に編纂された『集古十種』が有名である。すでに鈴木廣之氏によって『集古十種』(1800年以降)からエドワード・S・モースの『モース日本陶器コレクション』(1901年)に至る近世後期から明治に至る図譜・図録のアウトラインが示されている<sup>(註1)</sup>。

ここでは、近世以降の「好古家」の観点から『集古十種』以前から明治前期までの好古家が編さんしたいくつかの図譜・図録について紹介し、図譜・図録編さんに関わった人びとの交流やその動向についてみていきたい。

## 1. 近世の図譜・図録

### (1) 藤貞幹

『古瓦譜』で知られる京都の考証学者である藤貞幹〈生没年：1732年－1797年、以下同<sup>(註2)</sup>〉は、寛政7(1795)9月に『好古小録』乾・坤、寛政9年4月に『好古日録』(共に25.7センチ×18.5センチ)を刊行している。共に平安書舗の林伊兵衛・小川多左衛門・西田莊兵衛・北村莊助・鷗鷯惣四郎から発行された。序は寛政6年9月付で橋経亮が記している。京都・梅宮神社祀官で和学者でもあった橋(橋本)経亮〈1759年－1805年〉は、藤貞幹に従って広く古物、古籍を蒐集する好古家でもあった。経亮蒐集の典籍、書画、文書、器物などの模写を含むコレクションは『香果遺珍』と総称されている<sup>(註3)</sup>。

『好古小録』は、金石、書画(以上乾)、雑考(坤)の項目に分かれ182点の資料について紹介するが、図を伴うのは金石、雑考の資料のみで、掲載の半数以上を占める103点の書画には全く図が付されていない。寛政9年には姉妹版である『好古日録』2冊(25.7センチ×18.5センチ)が刊行されている。序は寛政丙辰年(寛政8年)1月に藤原資同が記している。『好古日録』は項目を立てずに古印、古銭、古碑、石人、石室、古書画、文様、古器など大きな括りで秦璽、金印(漢委奴国王印)などの119点の資料を適宜図入りで紹介している。なお慶応義塾大学斯道文庫には、考証学者の狩谷掖斎による書入れの『好古小録』『好古日録』を架蔵している<sup>(註4)</sup>。

また貞幹は『集古図』と題した画卷を著している。『好古日録』奥付には「集古図 二冊 嗣出」と予告を掲載しているが未刊となっている。

『集古図』は、寛政元(1789)年頃から病没する寛政9年まで、天文、地理、度量、鈴印、服飾上など「後附」も含めた32項目を1巻ずつ描いた画卷で、写本は各地の機関・図書館に所蔵されている。

西尾市岩瀬文庫本11巻(輿輦)巻末には「寛政二年八月十九日書写 固禪」の元識語が記されている。「固禪」とは有職故実家で『大内裏図考証』を著した裏松光世(固禪)〈1736年－1804年〉である。同19巻巻末には別紙に描いた「奥州ニ而堀出取壺 田口朋良蔵」の図を載せる。別紙は田口朋良〈生没年未詳〉の筆によるもので、説明の末には「浪華梅園主人応需図送之」とあり、冒頭に別筆で「水野殿家臣田口氏蔵文政十年秋余此器物展翫仍被贈此図」と記している。「奥州ニ而堀出取壺」は、後の『尚古図録』に松浦弘(武四郎)蔵「陸前国名取郡某地中所獲斎瓮」として掲載され、松浦武四郎『撥雲余興』2集にも同図が掲載されている。

田口朋良は京都所司代を務めた浜松藩主水野忠邦の家臣で、「浪華梅園主人」は後述するように大坂南組惣年寄の野里梅園である。

田口朋良、野里梅園は共に好古家である。田口朋良の好古家としての事績を示すものに早稲田大学図書館に『田口家蔵古器物図』（外題 浜松藩田口朋良所蔵古器図）、田口朋良蔵本の写本である「鸞図」（南都法隆寺宝蔵鸞鳳図）が所蔵されるほか、西尾市岩瀬文庫に住吉内記（廣行）所蔵の狩野友甫「百馬図」を田口朋良が享和3年（1803）に模写した「百馬図」1帖が架蔵されている。「田口家蔵古器物図」は東大寺所伝聖武天皇御物翳片破押形、大和国内山永久寺御璽篋丹塗面黒塗、名護屋陣大閣へ献する三方台、馬具の各部材など9点が収められている。馬具は朽損著しい状況が描き表されている。

同27巻巻頭には貼紙があり、石川年足墓誌を写し、附記「文政三年（1820）正月始掘出同年四月廿八日於梨陰亭摺写了／撰州嶋上郡真髮郷酒垂山／高槻城主家蔵トナル云々」を添えており、同巻の上野国多胡郡碑の項目には貼紙で石川年足墓誌を補記している。

## （2）松平定信

『集古十種』（39.2センチ×26.7センチ）は、松平定信を中心に柴野栗山・広瀬蒙斎・屋代弘賢・鶴飼貴重らの学者を従事させ、4年の歳月をかけて編さんされた。書名からも窺われるように、碑銘、鐘銘、兵器、銅器、楽器、文房、印璽、扁額、肖像、書画の10種類に分類された1859点の文物について各資料の寸法、所在、特徴を記し、模写図を添えた85冊の大著である。序は寛政12年（1800）に儒臣広瀬蒙斎が記しており、この頃から刊行が始まったとされる<sup>（註5）</sup>。『集古十種』の編さん、模写図に携わった絵師は谷文晁をはじめ、喜多武清・大野文泉（巨野泉祐）・僧白雲・住吉廣行・森川竹窓がいる。

版の寸法は『好古小録』『好古日録』に比べひとまわり大きい。鈴木氏が指摘<sup>（註6）</sup>するように、この判型だと大方の古物が原寸大で表すことが可能である。

絵師は奥州から九州まで全国各地の寺社に赴き、現地で書画や古物を模写している。時には現地調査に赴かずに直接器物を取り寄せたり、模本や写本を利用している。

『集古十種』は刊行後も増補され、明治25年（1892）には、後篇（古画肖像部）32巻が松平康民による大型着色折本で刊行されている。このほか定信は、寛政9年（1797）から文化年間半ばにかけて、奈良時代以降の絵巻物などの古画から主題別に取り出して分類模写し、38巻の巻子にまとめた『古画類聚』を編さんしている。

## （3）野里梅園

先にあげた野里梅園は、文政11年（1828）に『梅園奇賞』を著している。野里梅園〈1785年－？〉については、最近まで旗本の毛利梅園〈1798年－1851年〉と混同されていたが、「古器を愛玩し且つ鑑定法に兼ねて煎茶の技を嗜む」（『大阪人物誌』）と示された梅園は、多治比郁夫氏によって大坂南組惣年寄を務めた野里屋四郎左衛門（四郎右衛門とも）であることが明らかにされた<sup>（註7）</sup>。

『梅園奇賞』1集・2集（31.0センチ×22.6センチ）は、ともに刊記に「文政十一年戊子嘉平月摹勒、上梓森川世黄校合、浪華野梅園蔵板」とあり、森川世黄（竹窓）〈1763年～1830年〉による校合が行われて上梓され、文政11年12月に東都書林の小石川伝通院前大門町鴈金屋青山清吉、京橋通南伝馬町壹丁目の近江屋吉川半七によって刊行された。

野里梅園は天保8年（1837）版『続浪華郷友録』「煎茶」の項に「谷町常磐町 野里四郎右衛門」、森川竹窓は寛政2年（1790）版『浪華郷友録』「書家」の項に森修亮の名で「備後町壹丁メ」、文政6年（1823）版『続浪華郷友録』では「高麗橋井池」と居所が判明する。

『梅園奇賞』1集巻頭の題字の「梅園／奇賞」は松軒主人による。方印2顆のうち下の方印には「源忠邦」

とあり、松軒主人とは後に老中となる水野忠邦である。水野忠邦は西丸老中に就く以前、文政8年(1825)5月より翌年11月まで大坂城代、さらに文政11年11月までは京都所司代に就いているため、忠邦が上方に在住していた時に揮毫されたとみられる。『梅園奇賞』は転写本を合せて15冊が各機関や図書館に所蔵される。

水野忠邦は、野里梅園とも交友があり、天保14年(1843)秋に忠邦が失脚した後に梅園は大坂南組惣年寄を解職されて播州・高砂に隠棲している。

『梅園奇賞』の内容は、冒頭から東大寺八幡宮什八幡形冠甲図、三井寺園城寺什智証大師大法師位勅書、八幡殿軍容図(縮写)、同画上賛辞・画上印、奥州白河大村土中所得古轡、備前児島八幡宮古轡と、『好古小録』や『集古十種』のような項目立てとはなっていない。また奥州中尊寺一切経蔵所置唐櫃、奥州石川村土中所得古鏃や甲州八代郡市川御崎明神別当所伝佩玉二筋、肥前松浦郡松浦神社古鈴など遠隔地の資料も含まれるが、掲載された古物は比較的近畿地方、特に奈良・京都の古物に集中しているのが特徴である。

『梅園奇賞』に先立つ文化6年(1809)、野里梅園は、『標有梅』を著している。岩瀬文庫本には8月18日から間氏父子及び高島豹湖とともに南都を訪れ、その際に拝見した東大寺・興福寺・唐招提寺・薬師寺・長谷寺・法隆寺など南都諸社寺にある仏像・古器・古書画等の図入り記録を収めたところである。また小玉道明氏は、各地の『標有梅』を調査したうえで、東京都立中央図書館加賀文庫本の『標有梅』「九」は谷文晁『大和巡画日記』、また岩瀬文庫本は森川竹窓『大和日記』を、神宮文庫「上」が木内石亭『勾玉問答』をそれぞれ図まで含んで丁寧に書写したものであることを指摘している<sup>(註8)</sup>。

『標有梅』に掲載された法隆寺什物「釣篝」、同懸子、同火蓋蝶は、『集古十種』銅器類に所収の「大和国法隆寺藏風爐図」から引用したもので、また東大寺法華堂閼伽棚図や東大寺南大門狛犬、長谷寺風灯台、石清水社鍔唐櫃、奥州白川大村土中取得古轡(反転図)などは、後の『梅園奇賞』に引用されている。『標有梅』掲載の「尾州名古屋金谷道人所蔵」の鳥型蓋付須恵器壺は文政9年(1826)に遠州浜松藩田口氏が書写したものとされ、「惣高七寸五分」の須恵器長頸壺は浜松藩田口氏蔵となっている。さらに『梅園奇賞』掲載の「山城國木幡山所掘得祝瓮」も「田口氏蔵」とあり、木内石亭『勾玉問答』を収めた早稲田大学図書館本『標有梅』写本の末尾には「文政九戌念初冬需于遠州浜松藩田口氏而写矣、梅園模写」の奥書が認められ、古物を通じた野里梅園と田口朋良との密接な交流関係がうかがわれる。

また鳥型蓋付須恵器壺の所蔵者である「尾州名古屋金谷道人」は、文政7年(1824)に名古屋から故郷近江に戻り大津坂本に草庵を結んで晩年を過ごした文人画家で浄土宗僧の横井金谷(1761年-1832年)であろうか。

#### (4) 水野忠央

紀伊国和歌山藩の付家老で紀伊新宮城主の水野忠央(1814年-1865年)は、嘉永3年(1850)に『千とせのためし』(31.2センチ×22.5センチ)を刊行している。序は幕臣で国学者の前田夏蔭が記し、後跋は国学者の村田春野が執筆した。

水野忠央の嫡男である忠幹の正室八重は水野忠邦の娘で、水野忠邦と水野忠央とは親族の間柄にある。忠央は、徳川家定を巡る将軍継嗣問題にあって家定の従弟である徳川慶福を推す南紀派の主要メンバーのひとりであった。忠央は、家定継嗣に一橋慶喜を推す一橋派と対立したが、井伊直弼が大老となったことで家定の死後、徳川慶福は徳川家14代将軍(家茂)となった。ところが、安政7年(1860)3月、桜田門外の変で井伊直弼が暗殺されると、一橋派の勢力が復帰し南紀派の処罰が行われた。忠央は6月に失脚、家督を嫡男の忠幹に譲り、忠央は隠居謹慎が命じられた。隠居謹慎処分は元治元年(1864年)まで続いた。

丹鶴書院において編さんされた『丹鶴叢書』(弘化4年(1847)~嘉永6年(1845)刊行)の外書である『千とせのためし』は、忠央が隠居謹慎処分中に編纂したものである。



『千とせのためし』は、大型の画帖1帖で、「源俊頼朝臣真蹟」和歌、漢古鏡、「権中納言定家卿真蹟」、「下総國鈴宮古鈴」と続く古筆・古画・古器物22点の模写図を多色刷りで収録している<sup>(註9)</sup>。おおかたの模写図は、出土地を含む名称のみが記されるが、漢古鏡、古銅三耳壺、古銅温壺については名称の後に細かな寸法を記し、下野國鈴宮古鈴については「大如図」として細部寸法を記している。また楠正成卿前立物、伊勢國飯高郡泊村畠地中所得之古鈴は単に「大如図」と記している。

伊勢國飯高郡泊村畠地中所得之古鈴は、松浦武四郎『撥雲余興』第1集掲載の「伊勢國三重郡泊村字田の山畠地中所得之古鈴」と同図である。なお『撥雲余興』第2集によれば、泊村出土の古鈴は3個出土したとされ、第2集にも「伊勢國三重郡泊村掘出鈴其二」が掲載されている。



『撥雲余興』第1集所収の古鈴

## 2. 近世好古家のネットワーク

藤貞幹『好古日録』の序を記した橋経亮は、自身も『香果遺珍』と総称された絵画、器物、文書等の模写資料を有した好古家であった。また『集古図』のうち西尾市岩瀬文庫本には「田口朋良蔵」の土器図があり、「浪華梅園主人応需図送之」と記され、『集古図』を通した浜松藩田口朋良と大坂の野里梅園との関わりが知られる。さらに『集古十種』の絵師のひとり森川世黄（竹窓）は野里梅園の『梅園奇賞』の校合を行っている。小玉氏の指摘<sup>(註10)</sup>によれば、『梅園奇賞』に先立つ『標有梅』のうち西尾市岩瀬文庫本は森川竹窓『大和日記』を筆写したもので、森川世黄（竹窓）と野里梅園は居所も近く親しい仲であった。『梅園奇賞』には、『集古十種』から引用した古物も掲載されており、『集古十種』からの影響がうかがえるほか、『標有梅』の一部には田口朋良の藏品なども描かれていた。

『梅園奇賞』の題字は水野忠邦によるものである。水野忠邦の親族にあたる水野忠央は『千とせのためし』を編さんしている。古物のなかには明治以降、松浦武四郎にわたった古鈴が含まれている。

このように近世の好古家は、古物、図譜・図録を通した広範な人的ネットワークを作り上げ、その継承に努めていった。古物や図譜・図録を通してのネットワークはもちろん、図譜・図録を編さんするにあたり序や題字に関わった人まで含んだネットワークによって、新たな図譜・図録の編さんがなされていく。その背後に弄社や物産会、耽奇会などの同好者が集う結社の存在が大きいことはいうまでもない。

近世の好古家が刊行した図譜・図録は、『好古小録』『好古日録』を除いておおむね縦が30センチを超える大型本である。先述のように1丁を図にあてることで、大方の古物が原寸大で示すことが可能である。また編集については、『集古十種』までは、項目を立てて、あるいは明記せずとも同類の大きな括りで古物を掲載していたが、『集古十種』以降は、『梅園奇賞』や『千とせのためし』のように項目を立てずに順不同のまま古物を掲載している。『梅園奇賞』では、別種の古物でしかも異なる寺社に所在する古物を特に項目をたてずに1丁に複数収めた箇所も見受けられる。古物の寸法の大小を勘案しながら、できるだけ多くの古物を掲載しようとした編さん者野里梅園の意気込みがうかがえる。このスクラップブックのような形式は、『集古十種』以降の好古家が好んだようである。

好古家や古物の交流は、こうした近世の図譜・図録からもうかがうことができ、大型本の図譜・図録の編集も好古家のネットワークを示す要素としてみることもできる。近世の好古家、古物、図譜・図録からなるネットワークは明治に入ってもほぼそのまま継承され、明治の好古家が入ることで新たな展開を迎えたと思われる。

### 3. 明治の博覧会と「古器旧物」

明治に入り古物や図譜・図録はどのように変化したのか見てみたい。

近世好古家のネットワークの背後には同好者が集う結社の存在があった。結社は同好者が集う場であるが、関心の低い者にとっては無縁の存在であった。近世には、寺院の修復や再建を目的とした「開帳」が行われている。開帳に詣でる不特定多数の人を対象に「見世物」が興行される場合も少なくなく、むしろ開帳に出向く人は神仏への信仰よりも「見世物」のほうが参詣の目的であったともされる<sup>(註11)</sup>。

明治に入ると、近世から続く同好者（好古家）が集う結社も存在していたが、一般の人びとを対象にした「博覧会」が登場する。ここでは、明治政府の博覧会の動向と「古器旧物」に対する対応についてみていきたい。なお、この間の好古家の図譜・図録については次章で述べることにする。

#### (1) 大学南校物産会

慶応3年（1867）、パリ万国博覧会に出張した田中芳男と町田久成は、明治維新後に新政府に出仕し、明治2年に田中芳男と町田久成は共に大学南校物産局に勤務となり、博覧会開催の計画が立てられた。

明治4年（1871）3月2日の弁官宛て「大学南校上申書」には、

博覧会ノ主意ハ宇内ノ産物ヲ一場ニ蒐集シテ其名称ヲ正シ其有用ヲ弁シ或ハ博識ノ資トナシ或ハ以テ証徴ノ用ニ供シ人ヲシテ其知見ヲ拡充セシメ寡聞固陋ノ弊ヲ除カントスルモノニアリ然レトモ皇國從來此挙アラサルニヨリ其物品モ亦随テ豊贍ナラス故ニ今者此会ヲ創設シテ百聞ヲ一見ニ易ヘシメント欲スル

と記されている。「産物」を一か所に集め、人びとが実物を見ることで正しい名称や知識を得て「寡聞固陋ノ弊ヲ除カントスルモノニアリ」としており、博覧会を実際にみることで知見を広げる教育の場としての役割を目指していたことがわかる。

同年5月14日から東京・九段の招魂社で大学南校物産会が開かれた。その時の目録である『明治辛未物産会目録』<sup>(註12)</sup>によると、展示区分は「鉱物門」3部、「植物門」5部、「動物門」9部のほか、門を立てずに測量究理器械之部、内外医科器械之部、陶器之部、古物之部、雑之部に分けられていた。総出品数は2247件、そのうち「官品」が462件で、その他はすべて個人から出品である。

近世の好古家が蒐集、関心を寄せた「古物」が展示されたのは古物之部で、出品総数は83件である。174頁からなる『明治辛未物産会目録』のうち「古物之部」はわずか8頁に過ぎない。出品物は石罨、雷斧、天狗ノ飯匙などの石製品が多く、次いで勾玉、古鏡が多い。古物之部への出品者は伊藤圭介、田中芳男、町田久成、蟻川少史（式胤）、横山少史（由清）、松浦弘（武四郎）、長井十足、木村正辞、板橋貫雄、黒川真頼、西宮松宇、鈴木荘司、栗田万次郎、柏木政矩、田中仙永、小野荅庵、竹本要斎、久保熹三郎、池田哲之丞、神田孟恪（孝平）である。

さらに4月25日の大学献言では、次のように記される。

集古館建設ヲ建設致候一大要件ハ既ニ外務省等ヨリ及献言候旨ニ付更ニ贅言不仕候ヘ共、戊辰干戈ノ際以来、天下ノ宝器珍什ノ及遺失候モノ儘有之哉ニ伝承致シ、遺憾ノ至ニ有之候処珠ニ近來世上ニ於テ歐洲ノ情実ヲ悉知不仕候輩ハ彼顔日新開化ノ風ヲ以テ徒ニ新奇發明ノ物耳貴重仕候様誤信致、只管厭旧尚新ノ弊風ヲ生シ経歳累世ノ古器旧物敗壞致候モ不顧既ニ毀滅ニ及候向モ有之哉ニ相聞ヘ考古ノ微抛トモ可成候物逐日消失仕候様成行、実以可借次第ニ有之候。抑西洋各国ニ於テ集古館ノ設有之候ハ古今時勢ノ沿革ハ勿論往昔ノ制度文物ヲ考証仕候要務ニ有之、大学ニ於テモ必要ノ要件

ニ候間何卒右等ノ物品遺失不仕候様致度、併当時内外御用途御多端ノ折柄ニ付、若集古館御建設ノ儀速ニ難被為行儀モ有之候ハバ姑ク府藩県へ御布告相成、歴世相伝仕居候宝器ハ勿論自余ノ雜品ニ有之候共考古ノ徵証ニ可相備品物ハ精々保護相加候様御沙汰有之且夫々専務ノ者被命右器物ヲ図画ニ模写致シ羅集編成ノ儀被仰付候様有之度、

献言の冒頭では、「集古館建設ヲ建設致候一大要件ハ既ニ外務省等ヨリ及献言候旨」が強調された。次に戊辰戦争によって「天下ノ宝器」「珍什」が遺失し遺憾である。ヨーロッパの実情を十分知らない者は日新開化の風潮から新奇発明物のみが貴重であるように誤伝しており、そのため「厭旧尚新」の弊風がはびこり「経歳累世ノ古器旧物」が無くなるうとも一顧だにしない。「考古ノ徵証」となる物が日に日に失われるのは、惜しむべきである。時世の折、集古館建設は早急にでき難く、まずは府藩県に対して、歴世相伝の宝器はもちろん自蔵の雜品でも考古の徵証になるような物は保護を加え、また専従の者に命じて器物を「図画」に模写し、もれなく編集してまとめるように命じられたいとしている。

ここで興味深いのは、「考古ノ徵証」の器物保護に対して「器物ヲ図画ニ模写」し「羅集編成」することが求められた点にある。「考古ノ徵証」の「器物ヲ図画ニ模写」し「羅集編成」することは、これまで見てきた近世好古家による図譜・図録の編さんと何ら変わりはない。『集古十種』にみる朽損著しい刀剣や『梅園奇賞』で破損した古鏡、『千とせのためし』の錆びた古銅器など、決して名物や優品ではないものの図譜・図録に掲載したのは、これらもまた「考古ノ徵証」の器物であることに他ならないことに拠るものであった。大学献言では、集古館建設という新奇な目標を掲げたものの、具体的施策としては未だ近世好古家の理念を受け継いでいるといえる。しかし大学献言では、保護すべき「考古ノ徵証」の器物が自蔵の雜品も含むとしても具体的に何を示すのか明らかにされていない。『梅園奇賞』や『千とせのためし』のように項目を立てずに模写しても何が「考古ノ徵証」たる器物なのかは非常に曖昧であった。

明治4年5月23日には「古器旧物保存方」の太政官布告が出される。布告は「古器舊物ノ類ハ古今時勢ノ變遷制度風俗ノ沿革ヲ考證シ候爲メ其裨益不少候處自然厭舊競新候流弊ヨリ追々遺失毀壞ニ及ヒ候テハ實ニ可愛惜事ニ候條各地方ニ於テ歴世藏貯致シ居候古器舊物類別紙品目ノ通細大ヲ不論厚ク保全可致事」と記し、別紙に31種の項目を掲げた。このうち武器ノ部、古書画ノ部、扁額ノ部、楽器ノ部、鐘銘碑銘墨本ノ部、印章ノ部、文房諸具ノ部が『集古十種』の分類項目に類似しているとする指摘もあり<sup>(註13)</sup>、「考古ノ徵証」たる器物の分類は『集古十種』の立ち位置に戻った感がある。

## (2) 文部省博覧会

明治5年(1872)3月10日に湯島聖堂大成殿を会場として文部省博物局による最初の博覧会が開かれた。文部省博覧会の陳列品は、前年の大学南校物産会の記録を引継ぎ、さらに翌年ウィーンで開催される万国博覧会の参加準備も兼ねたものであった。

『明治五年博覧会出品目録草稿』<sup>(註14)</sup>によると、陳列品は、御物はじめとする古器旧物や剥製・標本など600件余を数える。陳列品で特徴すべきは、大学南校物産会での「古物」に比べ文部省博覧会では圧倒的に「古器旧物」が多い。これは前年の「古器旧物保存方」の太政官布告が大きく影響したと思われる。大学南校物産会の記録を引き継いでいたことから、物産会「古物之部」への出品者で文部省博覧会にも出品した者は、伊藤圭介、町田久成、蜷川式胤、松浦弘(武四郎)、長井十足、木村正辞、柏木政矩、小野職愨(芥庵)である。そのため物産会と重複する陳列品もみられるが、いずれの出品者も物産会の出品物に加えて何らかの追加出品があった。柏木政矩は播磨国極楽寺瓦経并願文、松浦武四郎は古銭などを加えている。

明治4年の大学南校物産会開催以来、同年の京都博覧会をはじめ全国各地で展覧会、博覧会が開催される。明治9年まで42か所(重複を含む)で開催された。文部省博覧会を踏まえてありとあらゆる古今

の古物や作品・資料が展示されて人びとの目に触れた。「大学南校上申書」に記された、人びとがみることで知見を広げる教育の場としての博覧会の機能を実現していたのである。

いっぽうで「古器旧物保存方」太政官布告を受けて、明治政府は明治5年5月から10月にかけて関西古社寺宝物調査、いわゆる壬申検査を実施する。壬申検査には文部省博物局の町田久成、蜷川式胤、奥国博覧会事務局へ出向していた内田正雄、宮内省の世古延世、絵師の岸光景が参加し、写真師横山松三郎、油絵師高橋由一、柏木政矩、博物学者の笠倉鉄之助も同行し、東海・関西地方の古社寺調査にあたらせた。この時の記録として『壬申検査社寺宝物図集』(31.4センチ×45.3センチ 横綴)31冊が編さんされている。

### (3) 明治10年内国勸業博覧会

日本が公式に初めて参加した明治6年のウィーン万国博覧会では、日本各地から集められた日本的モチーフを主体とした精緻な美術工芸品が好評であった。そこで政府は、以後の万国博覧会に出品する際の国内セレクションとして内国勸業博覧会を計画し、明治10年(1877)8月に東京・上野で第1回内国勸業博覧会が開催された。「勸業」を冠することからもこれまでの博覧会とは異なり、国内産業の発展促進と魅力ある輸出品の育成が内国勸業博覧会開催の目的であった。

『東京府下上野公園内内国勸業博覧会諸規則但し出品願書式傍訓付』(明治9年10月17日御届)所収の「明治十年内国勸業博覧会出品者心得」には、「珍敷品物たりとも都てかたわの鳥獣虫魚又は古代の瓦曲玉書画等の類は此会に出すべからず。先づ出品の大概は人々必用の物にて追々繁盛に致度き見込あるもの」(傍線筆者)と、それまでの各地の博覧会に出品された膨大な個人や寺社所蔵の「古代の瓦曲玉書画等の類」は内国勸業博覧会では排除され、「古器旧物」は博覧会での行き場を失ってしまった。

その後「古代の瓦曲玉書画等の類」は、明治12年(1879)にハインリヒ・フォン・シーボルトの『考古説略』、モースの“Shell Mounds of Omori”(『大森介墟古物編』)が刊行され、また同年に佐野常民、九鬼隆一らの古美術の鑑賞、品評会(後の「竜池会」)が開かれ、翌年から「観古美術会」が開催されるなど、内国勸業博覧会から除外された「古代の瓦曲玉書画等の類」は徐々に救済されていく。

しかしながらこの救済の主役はアカデミックな世界の専門家(プロ)であった。古物に対してその真贋が峻別され、真なる古物のみを時代順に配置していくことで「考古ノ徴証」とするもので、好古家ネットワークの中核にあった古物は専門家による研究対象として扱われる。いわば古物をめぐる人的ネットワークが好古家から専門家へと切り替わるスタートラインでもあったと考えられる。

## 4. 明治の図譜・図録

以上のような動向を踏まえながら明治の好古家の図譜・図録をみていきたい。

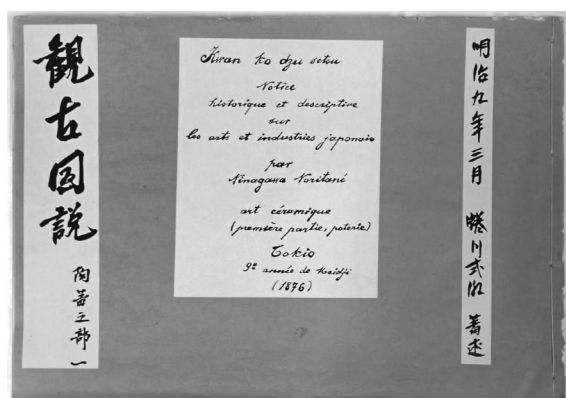
### (1) 尚古図録

横山由清は、明治4年(1875)3月に『尚古図録』第1冊(35.4センチ×25.1センチ)を刊行している。題字「尚古」は松平慶永(春嶽)の揮毫による。序は長江一廬、題歌は福羽美静、跋文は木村正辞、後跋は塩田松園(泰・順庵)による。刊記には「明治四年三月官許」とあり、発行人は東京・小石川伝通院前大門町青山幸二良と同京橋南伝馬町一丁目の吉川半七、同下谷池の端仲町斎藤兼蔵である。青山幸二良(鷹金屋)、吉川半七(近江屋)は、野里梅園『梅園奇賞』を発行した後継者と思われる。『尚古図録』は、『梅園奇賞』の制作環境をそのまま引き継いだものと考えられる。

内容は、柏木政矩蔵「山城国松尾山土中所獲古鈴 二枚」、板橋貫雄蔵「丹波国桑田郡出雲村獅子狛犬数種之内」に始まり三浦乾也、遊座千尋、社司金井某各所蔵の古墳から出土した鉄剣、松浦弘蔵の鉄銚、福羽家蔵駅鈴、長井十足蔵古鈴二枚、次いで自蔵の「桑原村主安麻呂尺牘案」、「右京戸籍断簡」と順不

同で古物が紹介されている。自蔵の古物もあるが、掲載された古物の多くは他人蔵で、なかでも柏木政矩、長井十足、松浦弘、塩田泰の所蔵品が多い。柏木政矩、板橋貫雄、松浦弘（武四郎）、長井十足、木村正辞は、大学南校物産会に出品者である。掲載の田中行氏蔵「鉄版铸像」は後に松浦武四郎の蔵品（現静嘉堂文庫美術館蔵）となる。また柏木政矩蔵土佐行光筆「室町院御牛夏引并弥王丸図」や辟邪絵のうち「鐘馗図」など絵画の模写図も含まれている。

なお明治9年(1876)8月に第2編が刊行されている。横山は、明治4年の大学南校物産会に「古玉一連」「金環并古玉一連」「石笛」「石銚」「勾玉管石々簪類一盒」を出品し、9月には町田久成、蜷川式胤と博覧会開催の計画を相談し、「文部省内元大成殿」を以て博物館と称したいとしている(註15)。会場が大成殿であることから明治5年の文部省博覧会を示すようだが、横山は文部省博覧会には出品していない。



『観古図説』陶器之部一 表紙

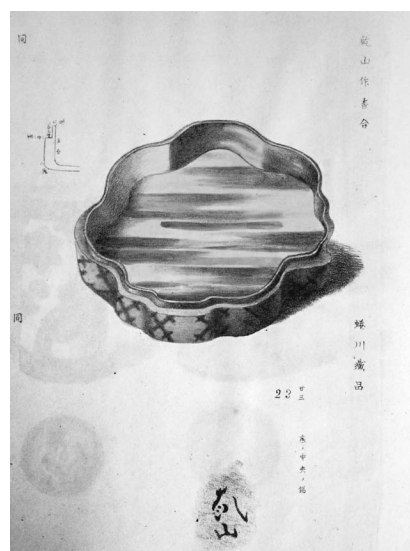
## (2) 観古図説 陶器之部

蜷川式胤が刊行した『観古図説』陶器之部(27.3センチ×38.8センチ)は、明治9年(1876)3月に第1冊、翌年1月に第2冊、5月に第1冊、第3・4冊、12月に第5冊が、明治12年(1879)に第6冊、明治13年に第7冊を刊行された。

第1冊の奥付は、「京都府下平民ノ東京辰ノ口■三丁二番邸寄留ノ著述者 出版人 蜷川式胤ノ代價壹円」  
「石版画師 亀井至一」  
「銅鉛木石諸版製造所 玄々堂」と記すが、第2冊以降の奥付は、小さく描いた茶入の図中に記している。また第4冊以

降は「売払所ノハーレンス社」が追加された。各冊にはドイツ語・フランス語の別冊解説を付属する。

「陶器之部」は、横綴りで片面のみの石版印刷である。各表紙中央には自筆による欧文表記などを記した題箋(石版印刷)が貼り付けてある(第1~5冊がフランス語、第6・7冊が英語)。各冊は本文と図版からなり、本文は冒頭に蜷川による序と7~10枚の陶器の略説や古窯の实地踏査記録等、後半の図版は18~19枚の各陶器の図からなり、いずれも石版印刷である。ただし第3冊は本文と図版の間に「附言」が入る。図版は石版印刷の上から手彩色を行っている。本文は、第1冊が「上古ノ陶器ノ説」、第2冊が「古ノ土器加銹ノ説」と時代順に記され、本文の内容に沿った土器・陶器の図が掲載されている。図の周囲には細部の法量が小さく記され、また第4冊所収の「乾山作交合」は、左傍に口縁部の断面図を記し、そこにも法量が記されている。第1冊は「大和国高市郡山本郷ノ内畝火山ノ東北ヨリ出土土器類」と出土地を記すが、第1冊以降は殆どが蜷川の所蔵品で、わずかに第2冊に東大寺伝来の陶器、第4冊に佐野常民「宗四郎作壺」が加わる。



陶器之部四 乾山作交合

「陶器之部」は、横綴り、本文と図版との分離、石版印刷手彩色による片面印刷、細部法量の記載など、従来の好古家の図譜・図録にみられない斬新なスタイルであるが、最大の特徴は殆どが自蔵の陶器といえ、年代順に土器・陶器を掲載している点である。土器・陶器に限定し「考古ノ徴証」の物差しとしての意義が大きいと思われる。

### (3) 撥雲余興

明治10年(1876)9月に松浦武四郎は『撥雲余興』第1集(49.0センチ×25.0センチ)を刊行した。表紙は「天平勝宝八歳具注曆抄写」、裏表紙は「嘉元五年具注曆抄写」を浮出し加工(エンボス)が施されている。序は明治9年12月に「薩摩なる藍嶋ニすめる」岩下方平、後跋は友人の小野長愿(湖山)による。

『撥雲余興』第1集は『尚古図録』と同じ木版多色摺であるが、画帖形式となっているために2丁分を図として用いることが出来る。



『撥雲余興』 武州比企郡大谷村掘出埴輪物

内容は、「田村將軍像」に始まり「山城国松尾山土中所獲古鈴」、「讃岐切」と項目を立てずに順不同のまま古物を掲載している。図のすぐあとに市河万庵、鷺津毅堂、小野湖山による由来や解説、松浦自身による入手経緯などが記されている。作図は渡辺小華や河鍋暁斎、柏木政矩などが行っている。図は、傍に細部の法量が記される(武州比企郡大谷村掘出埴輪物)もあるが、大半は「大如図」「長二寸三分質青琅玕(勾玉)」と旧来からの記載に準じている。なお第2集は明治15年(1882)に刊行された。

### おわりに

雑駁ながら近世・近代の好古家たちが、編さん作成した図譜・図録を近世から明治初期までみてきた。

近世において松平定信を中心に編纂された『集古十種』は「考古ノ徴証」たる古物を集大成したものであった。その後も好古家は、結社を背景に古物、図譜・図録を通した広範な人的ネットワークを構築、継承していった。図譜・図録は古物を通した人的ネットワークの証でもあるといえる。明治に入っても横山由清『尚古図録』や松浦武四郎『撥雲余興』は近世のネットワークをそのまま明治に引き継いだものと考えられた。また従来からの結社も明治以降引き続き継続していた。

1867年のパリ万国博覧会に出張した田中芳男と町田久成は、維新後に「博覧会」開催を計画する。博覧会は近世のネットワークを支えた限定的結社ではなく、広く一般の人びとを対象に文物を通して知識・知見を広げる教育の場としての役割を担った。明治4年の大学南校物産会に近代の好古家が出品している。次いで「古器旧物保存方」太政官布告や翌年の文部省博覧会で、「古物」に「考古ノ徴証」が与えられ、全国各地で展覧会が開催され多数の古物が出品された。しかしヨーロッパで評価を受けた器物は「考古ノ徴証」たる「古物」ではなく、「人々必用の物」であった。そのため内国勸業博覧会では「古物」が除外される。図譜・図録から見れば、蜷川式胤『観古図説』陶器之部は、陶器に限定し、体裁や時代順に配置した構成など、「人々必用の物」を目指した先駆的な図録であったと考えられる。

明治9年に『尚古図録』第2編、明治15年に『撥雲余興』第2集が刊行される。これらの図譜・図録は近世から途絶えることなく続いた古物を通した豊かな好古家の世界が、アカデミックの誕生によって駆逐されていくなかで最後の光芒であったといえる。

## 註

- (1) 鈴木廣之「変貌する明治の図録」神奈川県立 21 世紀 COE プログラム『国際シンポジウム・プレシンポジウム『版画と写真—19 世紀後半—出来事とイメージの創出』、2005 年。
- (2) 國學院大學日本文化研究所『近世の好古家たち—光圀・君平・貞幹・種信—』、雄山閣、2008 年。
- (3) 一戸渉「橋本経亮の蒐集活動—『香果遺珍』研究序説—」『近世文藝』93、日本近世文学会、2011 年。『香果遺珍』は慶應義塾図書館に収蔵されている。
- (4) 梅谷文夫「狩谷椽斎の西遊 其一 付、椽斎の出生地」(『言語文化』27、一橋大学語学研究室、1991 年) 4 頁。なお狩谷椽斎書入本『好古小録』『好古日録』は、2016 年 11 月 14 日から同年 12 月 19 に慶應義塾大学アート・センターで開催された『センチュリー文化財団寄託品展覧会 描かれた古—近世日本の好古と書物出版—』に展示された。
- (5) 福島県立博物館『あるく・うつす・あつめる 松平定信の古文化財調査 集古十種』、2000 年。
- (6) 前掲註(1)。
- (7) 多治比郁夫「野里梅園のこと」『随筆百花苑』10 月報 15(1974 年)。同「京阪文藝史料」3(青裳堂書店 2005 年)に所収。
- (8) 『梅園奇賞』、『標有梅』については、小玉道明「野里梅園『梅園奇賞』とその前後」『三重県史研究』29 三重県環境生活部文化振興課、2014 年)を参照した。
- (9) 『千とせのためし』に描かれた「漢古鏡」については、徳田誠志「描かれた三角縁神獸鏡—『千とせのためし』所収 狩谷椽斎旧所蔵品について—」(『関西大学博物館紀要』13、2007 年)に詳しい。
- (10) 前掲註(8)。
- (11) 比留間尚『江戸の開帳』(江戸選書 3)、吉川弘文館、1980 年。
- (12) 東京文化財研究所美術部編『明治期府県博覧会出品目録 明治四～九年』、東京文化財研究所、2004 年。
- (13) 吉田衣里「古物—江戸から明治への継承」『近代画説』12、明治美術学会、2003 年。
- (14) 前掲註(12)。
- (15) 米崎清実『蜷川式胤「奈良の筋道」』、中央公論美術出版、2005 年。

# 『尚古写生』と根岸武香の所蔵品について

徳田 誠志

## 1 はじめに

2018年3月、関西大学文学部長谷洋一教授より、1冊の和本を提示された。その和本は『尚古写生』(本書の表紙には旧字体で表題が記されているが、便宜上当用漢字で表記する。以下、同じ。)と題された簡易な和綴本である。大阪の某古書店から入手されたとのことであり、それ以上の来歴は不明とのことであった。

その内容を拝見したところ、古墳からの出土品や縄文時代の石器などが描かれた図録であり、資料の所蔵者として「根岸武香」の名前が記されているものもあった。一見して明治期の考古学を研究していく際に重要な史料であると思われることから、その内容を検討するために、一時借用させていただくこととした。

小稿ではこの『尚古写生』を紹介していくことを主眼とし、愛知県西尾市「岩瀬文庫」に同類の写本が所蔵されていることから、この両者を比較検討していくこととしたい。さらに本書に掲載されている考古品の中には、現在の埼玉県に居住した根岸武香の所蔵品がいくつか含まれていることから、根岸を中心とした明治10年代の考古学をめぐる様相にも言及していきたい。そして最後に、この『尚古写生』の史料的な価値について考えていくこととしよう。

## 2 『尚古写生』の概要

本章では長谷氏が入手した『尚古写生』と、西尾市「岩瀬文庫」が所蔵する『尚古写生』の概要を、それぞれ紹介していくこととする。紹介の便宜上前者を「長谷本」と表記し、後者を「岩瀬本」と記述していくこととする。

### (1) 長谷本『尚古写生』について

長谷本は冒頭で記したとおり、古書店を通じて入手されたものである。よって来歴についてはまったく不明であり、以前の所有者の情報は皆無であるので、本書の現状についてその概要を紹介しておく。

本書の寸法は、縦28.0cm、横19.2cmを測り、丁数としては10丁となる。ただ、末尾に別書体からなる数頁が併せて綴じ込まれている。表紙には「尚古写生」と記され、所蔵印として丸印と角印が捺印されている(写真1)。所蔵者としては裏表紙に「松谷山人須藤翠塙」とあり、表紙に押されていた角印と同様の所蔵印が捺されている(写真2)。この「松谷山人須藤翠塙」については、人物が特定できていない。後述するように、本書には根岸武香の所蔵品が掲載されていることから、根岸の近くにいた「須藤」という人物を探すと、該当する人物としては1名が候補に挙がる。その人物は、根岸とともに明治10年に黒岩横穴群の発掘調査をおこなった「須藤開邦<sup>さきくに</sup>」である。須藤家も戸長を務める旧家であり、根岸家とも婚姻関係にある家柄である。須藤も発掘に参加するだけでなく、郷土誌『桐窓夜話』の編者としても知られている。よって歴史には知識も関心もあり、根岸とは好古の趣味や実際の発掘作業を通じて密接に関わっていることから、『尚古写生』を书写していることは十分可能性がある。しかしながら、筆写年代も不明であることから、「松谷山人須藤翠塙」を「須藤開邦」と確定することは控えておきたい。そもそも一致するのは名字だけであり、「翠塙」という号を特定することはできていない。この点は、今後の課題としておき、ご教示を賜りたい。

さて、長谷本には末尾に書体の違う頁が綴じ込まれているので紹介しておく。正確には1丁と半分であり、袋とじとなっていない半丁が最後にのり付けされている。この部分は岩瀬本には存在しないことから、



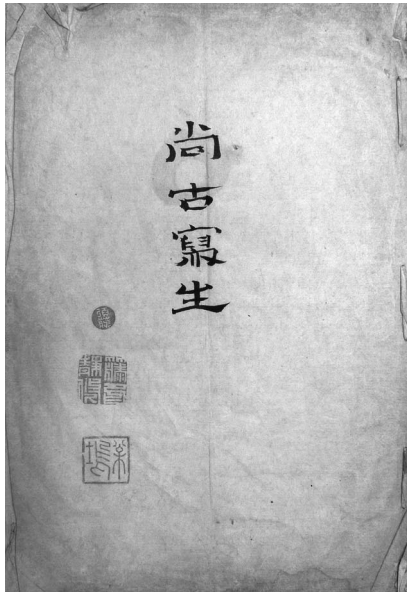


写真1 『長谷本』表紙

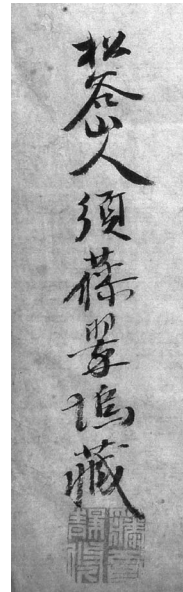


写真2 『長谷本』所蔵者

ここで紹介しておきたい。その内容は、写真3・4・5に示したとおりである。

写真3は、「矢根石」「勾玉」「雷斧」「管玉」「雷槌」という遺物の名称とともに、その図が添えられている。後述する本文の図とはかなり様相が異なり、墨一色で描かれており、しかも陰影をつけて、立体感を出している。このように陰影をつけて考古資料を描くということは、明治10年代までの好古図譜には類例の少ないものである。

続く写真4は「日本古代の略説」とした、文章が記されている。その文章は、次の通りである（句読点は、便宜上筆者が付加した。）。

「吾国古代の事は明に知るべからず。古き記録も人々の話し伝えたる事を書き集めたる者なれば、其話を伝ふる間には洩れたる事もあるべく。又無き事を加えたるも無きにあらざるべし。されば古代の記録は悉く信ずべき者とは言い難からん。

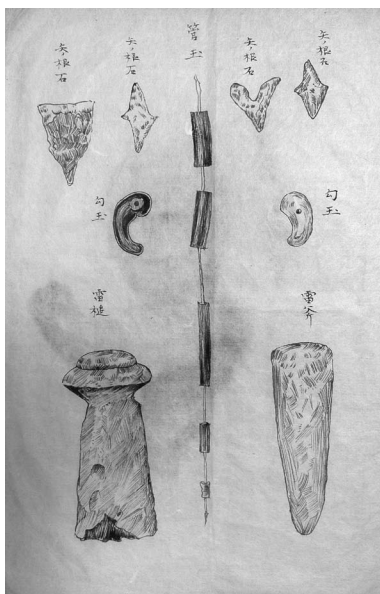


写真3 『長谷本』附1

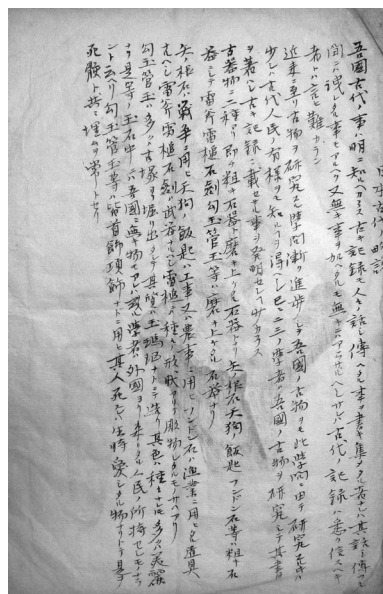


写真4 『長谷本』附2



写真5 『長谷本』附3

近来に至り古物を研究する学問漸く進歩して、吾国の古物をも此学問に由て研究するときは少しは古代人民の有様をも知る事を得べし。已に二三の学者は吾国の古物を研究して其書を著わし、古き記録に載せざる事を発明せし事少なからず。

古器物に二種あり。即ち粗き石器と磨き上げたる石器となり。矢ノ根石天狗ノ飯匙ふんどん石等は粗き石器にして、雷斧雷槌石剣勾玉管玉等は磨き上げたる石器なり。

矢ノ根石は戦争に用い、天狗ノの飯匙は工事又は農事に用い、ふんどん石等は漁業に用いたる道具なるべし。雷斧雷槌石剣は武器なるべし。雷槌には種々の形状ありて、彫物しとるものさえあり。

勾玉管玉は多くは古塚より掘り出たれて、その質は玉瑪瑙などにて造り、その色は種々なれども多くは美麗なり。是等の玉石中には吾国に無き物もあれば、或る学者は外国より来りたる人民の所持せしものならんと云へり。勾玉管玉等は皆首飾頭飾などに用い、其人死すれば生時愛したる物なりとて、是を死骸と共に埋むを常とせり。」

この文章は、本書を所持していた須藤自身が記述したものか、何かを筆写した文章であるかは判然としない。前頁に図のあった「矢根石」「勾玉」「雷斧」「管玉」「雷槌」に触れた記述があることから、須藤自身の覚書のような文章である可能性が高い。いずれにせよ「古物」(=考古資料)から歴史を明らかにしていくという学問が、すなわち「考古学」という学問が芽生えつつある様子を読み取ることができ、この『尚古写生』が筆写された時期の状況をよく示している文章といえる。

最終頁は写真5に示した「埴輪之図」が掲載されている。その下に「亦立物とも云う」と記されている。この絵が人物形埴輪を描いていることは間違いなく、右腕を上げ、胴部において欠損した状態が描かれている。この埴輪の現物は、見つかっていない。しかしながら早稲田大学の初代図書館長を勤めた市島春城が残した記録の中に、よく似た埴輪が描かれている(図1)(註1)。埴輪の横に記された注記によれば、出土地は「武蔵国埼玉郡上中条町字沼窪」とあり、出土年月日は「明治9年12月2日」とある。そして所蔵者は「柏木探古」である。この出土地と出土年月日は、根岸が所蔵していた武人埴輪のそれと一致しており、長谷本に掲載された埴輪についても、根岸の近くに存在していた可能性は高い。所蔵者として記されている「柏木探古」は「柏木貨一郎」であり、この時期に活躍した好古家の一人である。根岸との交流も活発であり、埼玉県で出土した埴輪を所蔵していることも理解できる。

ここに描かれた埴輪についても、前頁の石器類と同様、陰影をつけた描き方になっており、同一人物の手によるものであろうと想定できる。その人物が「須藤」か否かを判断できないものの、描かれている埴輪から推測すると根岸の近くにいた人の可能性は考えてもよいであろう。

## (2) 西尾市岩瀬文庫所蔵『尚古写生』について

続いて、西尾市岩瀬文庫が所蔵する『尚古写生』の概要を記述していく。岩瀬文庫は地元の実業家である岩瀬弥助によって私設の図書館として設立され、現在は「古書の博物館」としてリニューアルされた博物館である。8万点を超える古典籍を所蔵していることでよく知られている施設であり、『尚古写生』を所蔵している唯一の公的機関である。

さて、本書の寸法は縦27.5cm、横19.5cmを測り、丁数としては6丁となる。表紙には「尚古写生」という題字が記され、その下に「野村彰題」とある。さらに「埜彰」と「子常」との印が捺されている(写真6)。この「野村彰」は、表題のみを記



図1 『成山帖』所収埴輪図  
(早稲田大学図書館所蔵)

述した人物と思われるが、特定するには至っていない。この点についても、今後の課題としてご教示を願いたい。

表紙以外の部分を書写した人物は、最終頁に「明治辛未夏四月望於千五百秋酒屋写 西毛 有所山本信」とある（写真7）。ここに記された「明治辛未（かのとひつじ）」は、明治4（1871）年にあたる。この記述によって岩瀬本については、書写した人物と書写年代が明確にでき、その人物は「山本有所」である。山本は天保8（1837）年に群馬県碓氷郡原市村に生まれ、明治34（1901）年に逝去している。有所の本名は「誉吉」であり、篆刻、書画、俳諧、茶道、楽器などの諸芸に秀でており、「有所」の他に「十品散人」「石門山人」などとも号した人物である。好古（考古）にも造詣が深く、特に群馬県安中市にある梁瀬二子塚古墳を発掘した小森谷柳造とは懇意であったらしく、小森谷の肖像画に小伝を記述している（註2）。山本自身も考古遺物を収集しており、明治19（1886）年に著わした『磯部鉦泉繁盛記』には、古墳時代遺物から縄文時代の石器を含む遺物の図を掲載している。このように山本は好古（考古学）にも興味をもっていたことは間違いなく、よって『尚古写生』を筆写することは十分にありうる。そしてまた彼の多芸な才能において書画をよくしていたことから、書写した考古資料の絵が上手であることも理解できる。内容については次の章で詳述していくが、絵の具も上質であるように見受けられる。

小森谷柳造が梁瀬二子塚古墳を発掘した年は明治12年であり、明治10年には先述した黒岩横穴群が根岸等によって発掘されている。よって、この時期に埼玉県から群馬県にかけての北関東地域にあって、古墳の発掘や出土遺物への関心が高まっていたことは事実である。

ただ、岩瀬本の筆写された「明治辛未（かのとひつじ）」は明治4（1871）年であり、現在指摘されている根岸等が活発に考古学の活動を始める時期よりもやや先立つ時期といえる。筆写の時期についてはやや早いのではないかと疑問は残るが、岩瀬本には、ところどころに「千五百秋酒屋」という細長い小さい印鑑が捺されていることから、山本有所によって書写されていることは疑いなく、この成立年代を了としておく。

以上、長谷本と岩瀬本の概要を記述してきた。現在確認しているところでは『尚古写生』と題された史料はこの2冊のみであり、他に書写された同書が存在するか否かは不明である。

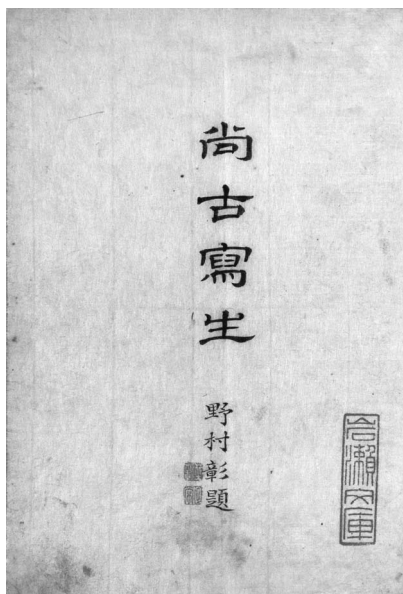


写真6 『岩瀬本』表紙

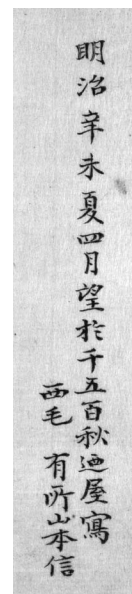


写真7 『岩瀬本』所蔵者

### 3 『尚古写生』の長谷本と岩瀬本の比較

前章において、長谷本と岩瀬本の概要を記述した。本章では頁毎に両本を比較していきたい。しかしながら岩瀬本には落丁があり、両方を比較する際には長谷本の1頁目から①として、両書において同一の個体が描かれている頁に同じ丸番号を付して呼称していくこととする。すなわち①は長谷本にしかなく、岩瀬本の①は不在ということになる。このように番号を付して、以下順に各頁の比較を記述していく(写真8・9)。

①は、長谷本にしかない。この図の裏は白紙であり、このことから岩瀬本は1丁が欠落していることとなる。記載されている図は、円形を呈するドーナツ状の遺物である。まったく説明文がないため、正確に何であるかに言及できない。ただ、この図から類推できる考古遺物として、古墳時代の「耳環」を候補に挙げておく。その可能性として長谷本の着色は、青灰色からやや緑がかかった色調となっており、見ようによっては銅が錆びた結果として緑錆が表面を覆っている状態に見える。そう考えると銅に鍍金を施した、「耳環」の可能性が高いといえる。しかしながら描かれている円形は極めていびつであり、太さも先端が細くなっており耳環としては問題も残す。岩瀬本にはこの図がないことから、両者を比較することもできないため、長谷本は総じて絵が稚拙であることからすれば、ひとまずは「耳環」としておきたい。

②は、岩瀬本の1頁にあたる。この頁によって両者を比較した際に、長谷本の絵が稚拙であることは理解できよう。描かれている遺物は「古鈴之図」であり、「形如図」とある。遺物は鈴付の銅釧であることは間違いなく、5つの鈴のうち1個が半分ほど欠損している。この特徴によって、他の史料に描かれた鈴釧と同定する際の根拠となる。絵は鈴について側面図と下から見た図を描き、中子である小石も描いている。

説明文として「武蔵国大里郡冑山村(岩瀬本は「邨」) 根岸武香」とある。この記述の下に、岩瀬本には「平朝臣武香印」という朱印が認められる。この印影は描いたものではなく、実際に捺印されたものである。しかもこの名前の筆跡は、ほかの書き込みの筆跡とは異なっており、このことから根岸自身が署名したのち、捺印したことが考えられる。山本有所と根岸の具体的な交流は定かではないが、『尚古写生』が根岸の近くにあったことを示す根拠といえよう。

③はまったく説明文がなく、何であるかを正確に指摘できない。可能性としては、茶色の色調から、縄文土器の破片が考えられる。あるいは石棒の先端とも考えられるが、これほど加飾された石棒が存在するか否か確信が持てない。

なお、長谷本においては資料が画面のほぼ中央に描いており、一方、岩瀬本では右上に寄った位置に描かれている。この位置に描いた意図は、不明である。

④は、石棒が3点描かれている。この頁に描かれた両者の図を比較すると長谷本の絵が稚拙であることを確信する。また、色調も長谷本は青みが強く、にじみがある。このことは着色にあたって日本画の絵の具ではない顔料が使用されている可能性もあろう。但し、肉眼観察では、顔料の種類を特定することは難しい。

⑤は、石棒と独鈷石、石槍を描いているものと思われる。説明文は全くないが、後述するように下段中央に描かれている石棒については根岸武香の所藏品と考えている。

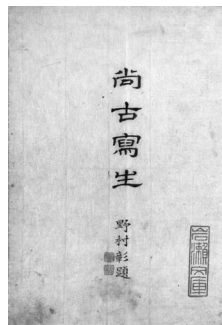
⑥は、子持勾玉2点と石斧が1点、もう一つ描かれている遺物ははっきりしない。中央に穿孔されていれば、管玉もしくは土錘の可能性があろう。

⑦は、石匙、石錐、石槍など、縄文時代遺物であろうか。実際、図から考古資料と判断できるものは右上の石匙だけであり、その他は石器の可能性があろうと判断できる程度である。

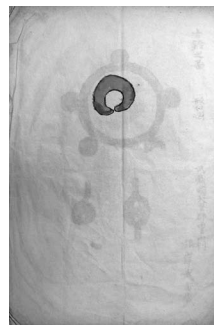
⑧は長谷本にしかない。すなわち岩瀬本は⑧と次の⑨が欠落しており、落丁であると判断できる。この頁には「雷斧」「大如図」とあり2点描かれている。絵は稚拙であるが、磨製石斧であることは判断できる。



長谷本表紙



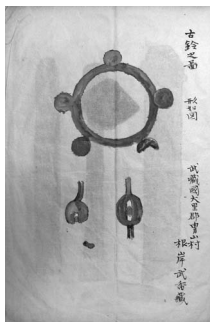
岩瀬本表紙



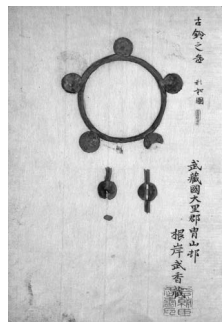
長谷本①



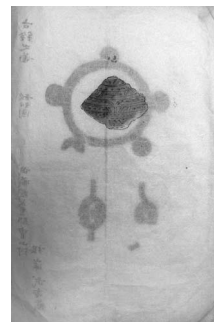
岩瀬本①



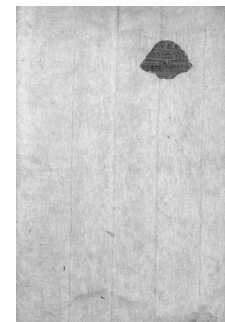
長谷本②



岩瀬本②



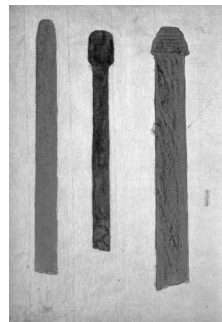
長谷本③



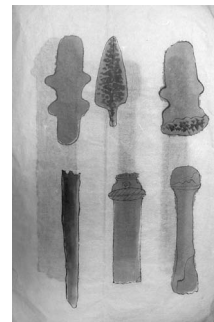
岩瀬本③



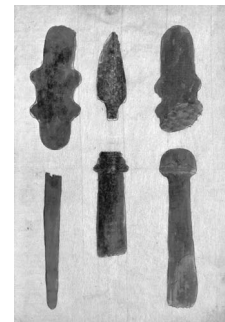
長谷本④



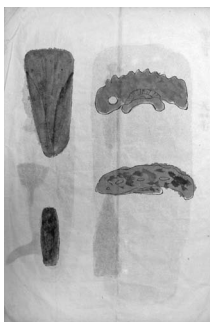
岩瀬本④



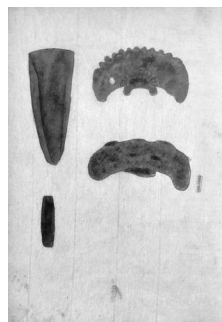
長谷本⑤



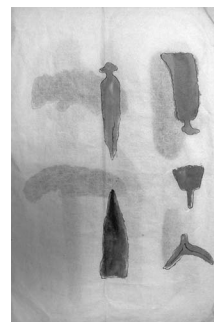
岩瀬本⑤



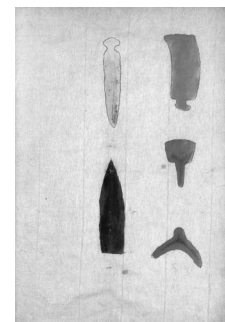
長谷本⑥



岩瀬本⑥

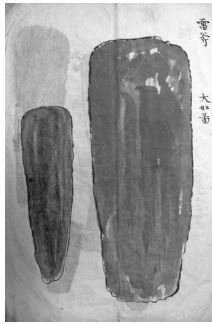


長谷本⑦

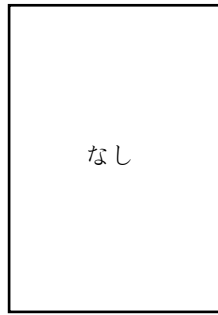


岩瀬本⑦

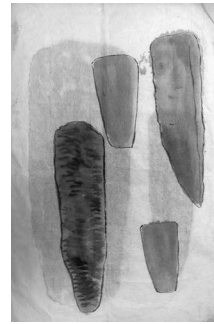
写真8 『長谷本』と『岩瀬本』の比較 その1



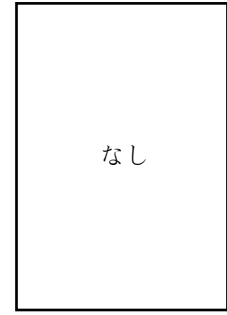
長谷本⑧



岩瀬本⑧



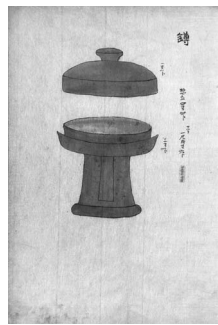
長谷本⑨



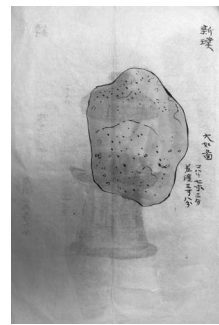
岩瀬本⑨



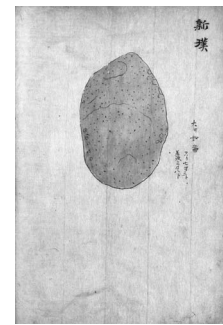
長谷本⑩



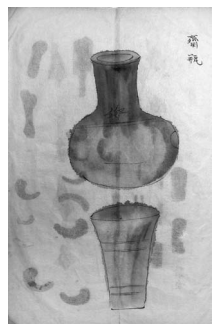
岩瀬本⑩



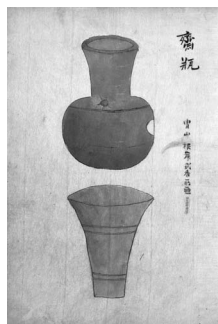
長谷本⑪



岩瀬本⑪



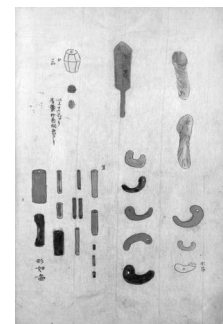
長谷本⑫



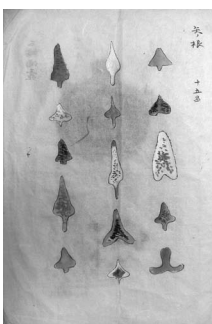
岩瀬本⑫



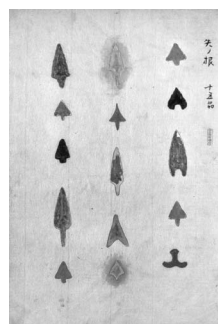
長谷本⑬



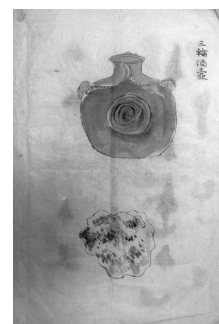
岩瀬本⑬



長谷本⑭



岩瀬本⑭



長谷本⑮



岩瀬本⑮

写真9 『長谷本』と『岩瀬本』の比較 その2

これまで見てきたように長谷本が『尚古写生』の原本とは思われないので、この⑧・⑨が描かれている、別の写本、あるいは原本が存在していることが考えられる。

⑨も長谷本にしかなく、石斧が4点描かれている。説明文は全くなく、磨製石斧と思われる個体が2点、その他2点は明確な名称を指摘できない。

⑩は、「罇」として描かれている。「そん」と読むのであろうか、意味としては「かめ」の意味があるとされる。しかし、絵から見る限り古墳時代の須恵器であって、蓋付きの高坏と判断できる。大きさが記述されており、その数値は両者とも一致している。但し岩瀬本は「マワリ」とカタカナ表記であり、長谷本は「周囲」と記されている。

⑪は、「新璞」とある。漢字の意味からすると、「あらたま」と読み、「磨かれていない玉」のこととある。実際のところ、考古遺物としてよいのか判断できない。長谷本と岩瀬本では、この頁に描かれている図の形状は大きく異なり、別に第3の史料が存在している可能性が考えられよう。

⑫は、「齊瓶」とあり、描かれている図から判断すると須恵器であって、上半に描かれている図には胴部に穴が空いており、「はそう」と判断できる。長谷本も絵としては同様に描いているものも、この穴の部分まで着色しており本来の形状が理解できていないことがわかる。

この須恵器について岩瀬本には「冑山 根岸武香所蔵」という書き込みがある。この字体は②に示した字体とは大きく異なっている。このことから②は、根岸本人が署名し捺印した可能性を考えたものである。長谷本には、この記述は認められない。

⑬は、玉類と銅鏃が確認できる。右上の図は、不明である。1個体を2方向から描いているようであり、形状としては男根のようにも見える。考古遺物として実在するかについては疑わしい。玉類については勾玉、管玉、切子玉が確認できる。長谷本の一番右列と2列目に描かれている勾玉に小さな丸をつけ、下にも同じ丸をつけてもう一度描いている勾玉が2点認められる。岩瀬本にはない、書写方法である。意図は不明である。その他、描かれている玉の数量は一致する。但し、中央付近に描かれている管玉に岩瀬本には「金」との書き込みがある。金色を呈する管玉が古墳時代の遺物であるか不明である。

⑭は、「矢ノ根 十五品」である。石鏃が5点ずつ、3列に描かれている。無茎石鏃、有茎石鏃等様々であり、色調もそれぞれである。ある程度石材を反映しているようにも思われるが、すべて縄文時代に製作された個体であるかの判断はつかない。

⑮は最終頁となるが、「三輪酒壺」との書き込みがある。図を見る限り須恵器の「提瓶」を描いているものと判断できる。両肩に把手となる耳が付いており、そこには紐がかけられている。当然この紐は、後世のものであろう。須恵器の図としては轆轤によって製作された際の回転痕まで丁寧に描いており、その中心部分がやや紫色に着色されていることは、須恵器の焼成がやや甘くセピア色を呈している状況を描いているものと判断できる。

一方、「提瓶」の下に描かれている個体については、不明である。「三輪酒壺」に関係するものとして描いているかどうかの判断もできない。考古遺物としての可能性は、低いと判断している。

岩瀬本の⑮のみに、先述したとおり「明治辛未夏四月望於千五百秋迺屋写 西毛 有所山本信」という書き込みがある。長谷本には、この後先述した3頁にわたって、「石器・玉類の図」と「日本古代の説略」「人物形埴輪の図」が付属する。

以上、長谷本と岩瀬本の各頁を比較してきた。岩瀬本には①・⑧・⑨頁が存在しておらず、両者が直接親子関係にないことは確実である。すなわちどこかに原本か、あるいは書写された第3の史料が存在すると考えるべきであろう。

#### 4 『尚古写生』に描かれた根岸武香の所蔵品

すでに述べてきたようにこの『尚古写生』には、現在の埼玉県熊谷市に居住した根岸武香の所蔵品が掲載されている。本章では『尚古写生』の史料的価値を考えていく意味においても、本書と根岸の関係をまとめておくこととしたい。

根岸武香については多くの先行研究があるので、それらに導かれながら記述を進めていく（註3）。根岸の略歴を記すと天保10（1839）年5月に武蔵国大里郡青山で生まれ、明治35（1902）年に逝去している。実家である根岸家は地元の豪農であり、父友山と共に幕末期から地元の名士として活躍する。嘉永3（1850）年には、十代で名主職を継いでいる。その間にも国学、儒学、剣術など諸学を学び、その中には後述するように横山由清から国学を学んだとされる。明治維新後は、明治13（1880）年に埼玉県議会議長、同27年には貴族院議員にも推挙されている。

このように地元の名士、政治家として地方自治において活躍する一方、文化活動にも積極的に取り組み、特に古物の収集や遺跡の調査保護にも大きな足跡を残す。そのなかで考古資料の収集も開始したようであり、明治一桁代には収集活動を始めたとされている。その根拠としては現在東京国立博物館が所蔵し、根岸が旧蔵者である短甲武人埴輪は、明治9年12月に北埼玉郡上中條村で出土しており、その際に放置されていた埴輪を保存のために収集していたことが知られている。

さらに明治10年には大森貝塚の発掘に刺激され、黒岩横穴墓群の調査を実施しており実際の調査活動もおこなっている。後日になるが、東京帝国大学の坪井正五郎が吉見百穴の調査を実施した際には積極的に支援し、その保護活動にも尽力している。このような活動を進める中、多くの好古家とも交流しており、大森貝塚を調査したE・S・モース、ハインリッヒ・シーボルトなどの外国人から、神田孝平、柏木貨一郎、松浦武四郎などこの時期に好古家として知られている人々が含まれている。このような好古家のネットワークの中で、根岸が埼玉県出土の埴輪を斡旋したことが知られており、現在関西大学博物館が所蔵する神田孝平旧蔵の人物形埴輪（頭部）も、根岸からもたらされたものである（註4）。

このように根岸は多くの考古資料の収集をおこなっていたようであり、現在の根岸家にもいくつかの資料が残されている。しかしながら、武香が収集した全容は不明である。このような中、今回紹介している『尚古写生』は、根岸家所蔵資料の一端を知る史料と考えられる。

それでは『尚古写生』において、根岸武香の所蔵品と明記されている資料を見ていきたい。先章に示したように、②に描かれている「鈴釧」には「根岸武香」の署名と印が残されている。よって、まずはこの鈴釧が、他の史料に描かれていることを見ていきたい。この鈴釧は、鈴の1個が半分ほど欠損しており、この特徴から同定することができる。

結論を先に記すと、この鈴釧が掲載された書物は2冊確認できた。その1冊は、先に根岸が国学を学んだとされる国学者の横山由清が著わした『尚古図録』である。横山は文政9（1826）年に生まれ、幕末に和学講談所の教授となり、明治維新後は政府に出仕し、元老院書記官などを歴任した人物である。『尚古図録』は全2巻、65丁からなる大形の古器物図録であり、第1冊が明治4（1871）年に、第2冊が明治8（1875）年に刊行されている。鈴釧は第2冊に掲載されており、次の通り記載されている（図2）。

「武蔵国大里郡青山村土中所獲古鈴 質銅青錆 同（根岸武香）蔵」

先述したように根岸は横山に師事したことがあり、旧知の間柄であったから所蔵品の掲載を承知したものであろうが、明治8年の本書刊行以前に根岸の手元に存在していたことは間違いのない。このことから根岸が明治一桁代には、考古資料の収集を開始していたことがわかる。

もう1冊は、『東京人類学雑誌』18巻第207号である。本誌は根岸の没後、追悼記念号として刊行されたものであり、明治36（1903）年に出版されている（註5）。この特集号の中に、「図版考説」として根



岸家所蔵資料のカラー図版とその解説が掲載されている。執筆者は大野雲外と柴田常恵であり、生前から根岸家の資料に接していた両名が最もふさわしい執筆者であったと考えられる。

鈴釧は「第一三版」の「し」に「鈴環」として掲載されており、その説明文は下記のとおりである（図3）。「此物の出所は君が居村青山にて発見する所にして、鈴は五個あり、其一は半ばを欠損し、環の径は二寸六分あり、図は二分の一大に縮写せるなり。」

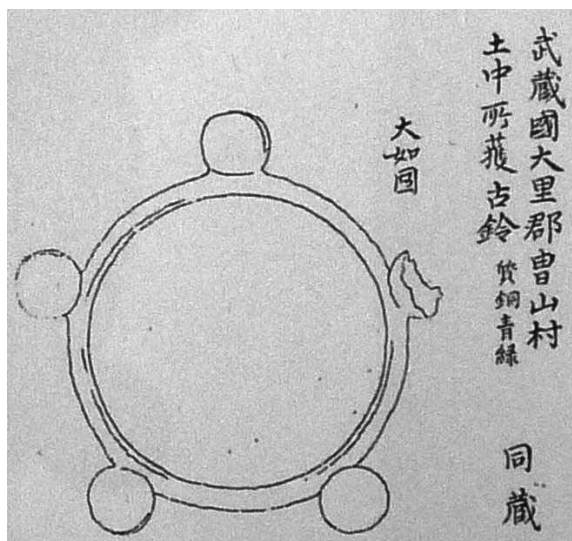


図2 『尚古図録』所収鈴釧図（国会図書館所蔵本より転載）

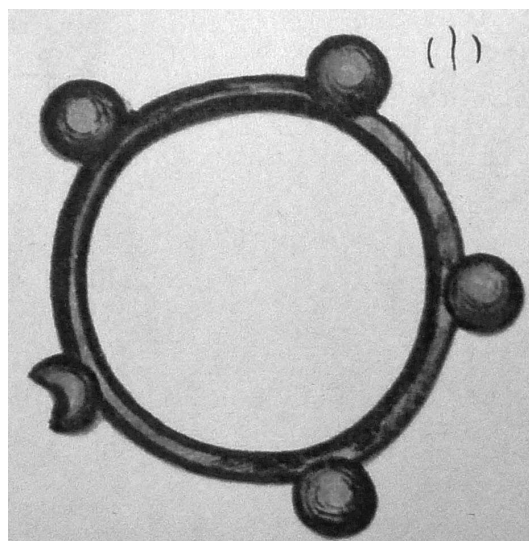


図3 『東京人類学雑誌』所収鈴釧図（註5より転載）

ここにも記されているように鈴の一つが欠損している状況から、『東京人類学雑誌』に掲載されている鈴釧が、横山由清の『尚古図録』と、さらには今回紹介している『尚古写生』に掲載されているものと同一であることが判断できる。すなわち、根岸はこの鈴釧を少なくとも明治8年から、逝去するまで手元に置いていたことがわかる。

このように『東京人類学雑誌』の「図版考説」には、根岸家所蔵の考古資料が多数掲載されているため、ここに掲載されている資料と『尚古写生』に描かれている掲載品とを照合することが可能である。その結果、もう1点両方の書物に同一個体と思われる資料を発見することができた。その資料は、⑤の下段中央に描かれている石棒である。この石棒は『東京人類学雑誌』の「第十五版 石器時代土偶・石剣」の「ル」に示されている石棒のうち、右側に描かれているものと判断できる（図4）。さらにこの石棒は、先に埴輪が掲載されていた市島春城の貼込み帖である『成山帖』にある「根岸武香氏藏品石器図」にも同一と思われる石器が掲載されている（図5）。その図の解説には「長三寸壺分大サ如図石質固ク如図彫アリ先キ折タリ」とある。『成山帖』にはこの他にも『尚古写生』に掲載されている石器とよく似たものを確認することができ、石器には所蔵者として「根岸武香」の名前が記されていないものの、その多くは根岸が所蔵していたものと考えられる。

また『東京人類学雑誌』の図版（ヌ）として描かれている遮光器土偶は、大野と柴田の解説に江戸時代に出版された『耽寄漫録』にも掲載されているとあり、同書に「津軽亀ヶ岡にて掘出たる土偶人」として掲載されている。この土偶は横山の『尚古図録』に鈴釧と同一箇所にも掲載されており、この土偶も少なくとも明治8年以降から逝去に至るまで、根岸の手元に存在していた資料となる。

この土偶の存在から判断できることは、根岸の収集方法は地元から出土した資料だけではなく、江戸時代に出土し伝世した資料についても、好古趣味を持つ人々との間で資料の交換や購入によって資料収

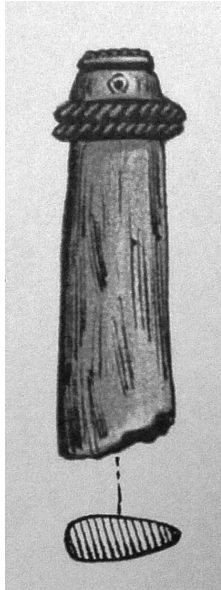


図4 『東京人類学雑誌』所収石器図  
(註5より転載)



図5 『成山帖』所収石器図  
(早稲田大学図書館所蔵)

集を図っていたと判断できる。

このように『東京人類学雑誌』、『尚古図録』の両書に掲載された考古資料と、『尚古写生』掲載資料を比較した結果、本書が根岸の所蔵品を中心に描いている可能性がますます大きくなってきた。

しかしながら『尚古写生』の⑫に描かれている須恵器「はそう」は、岩瀬本に「根岸武香所蔵」とあるものの、『東京人類学雑誌』や『尚古図録』には見いだせない。その他石鏃類や玉類・耳環については、『尚古写生』の中に同様の個体が散見されるものの特徴が無く、同定は難しい。さらには根岸が多数所蔵していた人物形を含む埴輪はまったく掲載されておらず、根岸の所蔵資料をすべて掲載しているともいえない。もちろん本書は山本有所が明治4年に筆写したとすれば、埴輪が出土した時期は明治9年以降であるので、この時点ではまだ根岸が埴輪を所持していなかった可能性もある。

いずれにせよ現在、根岸家に保管されている考古資料のうち、『尚古写生』に掲載されているものは存在していない。よって、これ以上言及することは難しいが、『尚古写生』と根岸の所蔵資料の関係を記述しておく。

## 5 まとめ

以上、長谷氏が入手された『尚古写生』について、西尾市岩瀬文庫所蔵本と比較しながら、その内容に言及してきた。その結果、根岸武香の所蔵品が複数個含まれていることを記述してきた。最後にまとめとして、この史料の意義を考えておく。

埼玉県立博物館長を勤めた小金井良一によれば、根岸武香の所蔵品については、根岸自身が編集した『図録』が存在したという(註6)。昭和30年代にその『図録』を実見したことがあるという小金井によれば、『東京人類学雑誌』第207号の図は、この『図録』を原図として作成された可能性が高いことを記述している。この図録は現在行方不明となっているためその内容を知ることもできないし、いつ製作されたかもあきらかにすることはできない。しかしながら、根岸武香は自らの所蔵資料をまとめた図録を作成する意思があったことは間違いなく、この『尚古写生』はその原形であった可能性も考えられよう。

山本有所が明治4年にどこかにあった写本、あるいは根岸自身の手元にあった原本を書写したとすれば、それ以前に原本はまとめられていたことになる。現在、西尾市岩瀬文庫が所蔵する『尚古写生』には、

根岸自身の署名と捺印があることから、岩瀬本は根岸の近くで書写されたことは間違いなく、描かれている各資料の絵図も丁寧であることから原本に近いところで製作されたと考えられる。この想定が許されるなら、根岸は幕末頃には考古資料の収集を開始していたこととなる。現在のところ根岸は、明治9年の上中條町から出土した埴輪や、明治10年の大森貝塚の発掘に刺激を受けて考古学への興味を持ったと考えられているが、それ以前から好古（考古）への興味を抱いていたことになろう。

今回は『尚古写生』を紹介することを主目的としながら、明治前半期の好古家として著名な根岸武香の活動を見てきた。今後一層、本書に掲載された資料の現物が他の史料に描かれていないか、あるいは考古資料そのものが残されていないかを探索していくことを誓って擱筆したい。

## 註

- (註1) この埴輪の図は、市島春城が残した貼込み帖である『成山帖』乾・坤（早稲田大学図書館所蔵 請求番号チ01 02363）に掲載されているものである。本書の存在については、宮内庁書陵部加藤一郎氏よりご教示を得た。記して感謝申し上げます。市島春城と好古家とのつながりについては、山口昌男の記述が参考となる。山口昌男「図書の通人の交わり—市島春城」『内田魯庵山脈（上）—（失われた日本人）発掘』岩波現代文庫学術245 岩波書店 2010年11月16日。
- (註2) 山本有所については、次の展示会図録を参照した。安中市学習の森ふるさと学習館『梁瀬二子塚古墳の世界』平成28年10月29日
- (註3) 根岸武香についての研究成果は、次の論文等を参照した。
- 根岸友憲「根岸友山と根岸武香」『立正大学地域研究センター年報』第22号 立正大学地域研究センター年報編集室 1999年（平成11年）1月30日
- 宮瀧交二「大里町青山・根岸家の「菟古舎」について—埼玉県博物館発達史の研究・1—」『埼玉県立博物館紀要』29 埼玉県立博物館 平成16年3月25日
- 根岸友憲監修『根岸友山・武香の軌跡—幕末維新から明治へ—』根岸友山・武香顕彰会 2006年5月20日
- 三浦泰之「武蔵国「好古家」根岸武香と松浦武四郎」『松浦武四郎研究序説—幕末維新时期における知識人ネットワークの諸相— 北海道出版企画センター 2011.3
- 大沼宣規「ある好古家のコレクション 根岸武香と青山文庫—「国立国会図書館デジタル化資料」登載を契機として—」『国立国会図書館月報』第620号 2012.11
- (註4) 現在関西大学博物館が所蔵する旧神田孝平所蔵の人物形埴輪頭部についても、先述した市島春城『成山帖』に掲載されている。この時期に根岸武香から各地の好古家に向けて人物形埴輪の売買斡旋がなされたことについては、次の論文に詳しい。
- 内川隆志・宇野浩子「明治前期における好古家の実相 —松浦武四郎と柏木貨一郎の土偶人の斡旋をめぐる—」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第五号 平成25年3月31日
- (註5) 根岸武香の所蔵品については、根岸が逝去した後に東京人類学雑誌が刊行した次の冊子に特集が組まれており、主な収集資料の図面が掲載されている。
- 『東京人類学雑誌』18巻207号（根岸武香記念号）東京人類学会 明治36年6月
- (註6) 根岸武香の所蔵品を描いた『図録』が存在していたことについては、金井塚良一氏が、次の文献で指摘している。
- 金井塚良一「県立博物館が収蔵・保管する比企郡出土の形象埴輪について」『埼玉県立博物館紀要』10 埼玉県立博物館 昭和59年3月25日

# 古銭蒐集をめぐる明治期好古家の様相 ——根岸武香の蒐集とその交友——

鎌形慎太郎

## はじめに

根岸武香は、埼玉県出仕以降、県会議員、貴族院議員として活躍する傍ら、明治10年代から「好古家」としての活動の幅も広げていった。明治35年(1902)12月に武香は亡くなるが、古物を介した交友は晩年まで続いた<sup>(1)</sup>。

明治10年前後の武香は、埼玉県大里郡青山から出土した人物埴輪類を実見する機会に恵まれ<sup>(2)</sup>、松浦武四郎より「土偶人」の調達を依頼される<sup>(3)</sup>等、同時代の「好古家」から既に一目置かれた。特に青山周辺の開墾や耕作の際に発見された古墳への関心は強く、大谷村(三千塚古墳群=現東松山市)出土の副葬品の数々は武香の考古遺物蒐集の中核をなした<sup>(4)</sup>。蒐集した考古遺物は、邸内の長屋門東側に「蒐古舎」という回廊型陳列室を設け<sup>(5)</sup>、来訪者に公開された。明治10年(1877)11月には、黒岩横穴群を発掘し、16基の横穴群を開口させ<sup>(6)</sup>、ヘンリー=シーボルトやモースをはじめ、多くの学者の注目を受けた。さらに、明治20年(1887)には坪井正五郎らの吉見百穴発掘を現場で指導したのも武香であり、発掘調査で237基の横穴を坪井らが発見する手助けをした<sup>(7)</sup>。

「好古家」根岸武香の関心対象は、考古遺物(埴輪・土偶・刀・鏡・石器・銅鏃・玉類・古瓦類)だけでなく、印譜<sup>(8)</sup>・地図<sup>(9)</sup>・古文書<sup>(10)</sup>・郵便切手<sup>(11)</sup>に至るまで幅広く、明治30年代前半まで続いた。古銭蒐集に関しても同様であり、目前にして出版を見なかったものの古銭譜稿本類が国立国会図書館所蔵青山文庫<sup>(12)</sup>に蔵されている。

本稿では、「好古家」根岸武香の古銭蒐集実態に焦点をあて、武香の遺した稿本類を基底に蒐集内訳・入手動向・その動機を解明してみたい。これまで武香の古銭蒐集に関しては、柏木貨一郎旧蔵皇朝十二銭を譲り受けた点や大坂地方裁判所保管福永銀行蔵・古金銀貨幣の購入については一部言及がある<sup>(13)</sup>ものの、コレクションの全貌把握はもとより、資料化の目的解明はなされてこなかった。近年、明治初期の代表的な好古家、松浦武四郎による古銭収集の輪郭が明らかにされ<sup>(14)</sup>、松浦を取り巻く好古家の間にも古銭にまなざしを向ける者がおり、それは武香とも深い親交があった点が浮かび上がってきた。とりわけ、武香の蒐集銭のうち、皇朝十二銭の蒐集は「好古家」としての人脈を生かした側面が強いことが調査過程で判明した。明治期「好古家」の多面的な様相を捉えるための一助として武香の古銭蒐集に注目したい。

## 1 明治期古銭蒐集界と「好古家」根岸武香

武香が古銭蒐集に没頭した明治20年代後半には、蒐集家同士が集い、所蔵銭を持ち寄って品評し、それを撮摸(原品上に紙を置いて写す)した上で集成を発行する会が結成されるようになる。全国最大にして中央の古銭会といえば東京古泉会であり、明治26年(1893)2月に結成された。

国立国会図書館青山文庫には、東京古泉会の月刊誌『東京古泉会報告』1号(明治28年1月)～28号(同30年12月)までは各号揃っている。会員の武香も月に一度神田仲町青柳亭で実施される定例会に参加しており、確認されるだけでも同誌20号(同30年4月)～26号(同年10月)には出席者に名を連ねていた点が判明した。まず、同誌から当時の古銭会の動向を簡単に把握しておきたい。

## 【1】明治20年代後半～30年前後の古銭会の動向—『東京古泉会報告』記事を素材に—

### (1) 東京古泉会設立とその機運

設立目的は「会員相会シ各自所蔵ノ古銭ヲ出品品評シ、若クハ論説意見ヲ報告シ総テ古銭ニ関スル智識ヲ交換スル」ことに主眼を置いた（『東京古泉会報告』2, 1895年）。会の役員としては、会頭に守田寶丹、そして委員に馬島杏雨・岡田村雄・亀田一恕がおり、編集主任は中川近禮であった。加えて、事務員の鷺田信詮（寶泉舎・東京神田区田代町の古銭商）が会務を補佐した。

会頭の守田寶丹（治兵衛）は上野池之端仲町の「守田寶丹」という菓舗の9代目に当たり、19歳で家督を継いだ。家業の傍らに書を江馬東岡に、絵を狩野派より学び書画を得意とすると共に、東京府会議員・市議員などを歴任した。当時、古銭の鑑定家としても一目置かれおり、蒐集家の成島柳北らと親交が深かった。委員の亀田一恕は泉号を考古堂といい、『皇朝金石年表』（1909年）は西田直養の編集を補助し、さらに自ら『古銭価格図鑑』（1909年）を撰じる等、古銭書の刊行に尽力している。同じく委員の馬島杏雨（養真亭）は会津出身の漢方医であり、書道家でもあった人物で、後に一時期、同会の会頭も務めた。馬島は、亀田一恕を出版元として刊行された絵銭譜である『画銭譜』（1899年）の編集も手掛けた。会誌の編集主任中川近禮（春布庵）は、亀田一恕・榎本文城と協力して『新撰寛永泉譜』（1894年）を著した。当時あっては一大研究者として斯界に知られた人物であった。なお、明治29年（1896）時点で中川の同会での役割は委員兼幹事となっている（『東京古泉会報告』12号）。

同会結成の運びは、中川近禮が記した方針にみえ<sup>(15)</sup>、ここには、

古泉会の性質は天明の昔しに形作られてあると毎度申しますが、進むて賛成者を募り会員を集め各交誼を厚くして見聞と智識を交換し斯道の発達を企図すると言ふような進取主義で無く、つまり自家の蔵泉を持出して他の蔵泉と優劣を競ふといふことを大体に置く愛玩的時代でありました（中略）。

明治以来の月旦会は盛大に永き年月を継続せられたれど始めより終りまで更に体勢を改めず進みたる事も無く退きたる事も無く会の義務として尽した事跡は一向に遺りませぬ、只、古銭の売買は今日より数層活発なる取引がありましたらうが、つまり、銭商に事務を一任したる結果で有って東京は東京だけの結合とし地方は是に閑渉せず僅々十数人の交際を堅めて狭隘なる愉快を守られたのである。されば此頃は三府を除くの外熱心なる愛泉家も無く古泉会の設立もなく月旦会中絶の後は全国に一の古泉会無く衰頹の極点に達しました、我々は此時代より斯道に志さして参ったのですが明治廿一年より廿三四年に至る頃は都下に於て熱心に古銭を蒐集した人は寔に少なく或る関係よりして先輩と後進との間は常に離隔して銭事上一般の研究が甚だ困難でありました（以下略）。

とみえる。会を結成して会員同士の相互交流を図り、古銭の研究を深化させようとする意図が窺えよう。この文脈に登場する月旦会とは、西南戦争のさなかの明治10年（1877）6月に成島柳北<sup>(16)</sup>が発起した東京月旦古銭会のことである。28名の古銭家から成る月旦会には明治前期を代表する好古家・松浦武四郎も名を連ねていた<sup>(17)</sup>。月旦会の会主は会員当番制であり、開催会場は東両国の青柳楼・柳橋の万八楼・葉研堀の可愛楼・池之端の大茂楼が選ばれた。出品物を搦摸し、『東京月旦衆評泉譜』を作ることが主な活動内容であった。中川は、月旦会のような、東京在住のごく限定された会員同士の閉ざされた会合から一早く脱却し、全国に会員を擁する古銭会を組織化しようとしていた点が看取される。それは続けて中川が、「何れにしても墮る所は斯道の発達と言ふ一点なれば其会の事務に当るの人は能く他の会と気脈を通じて相互誘掖することは最も肝要」と述べていることから窺われる。こうした全国会員組織化の推進背景には、東京に先駆けること明治24年（1891）、今井風山軒（貞吉）・尾崎屋山堂・岡田対青山房・守田寶丹・中川近禮らが結成した備後地方における薇松泉会という古銭会結成の動き<sup>(18)</sup>とも連動してい

たことも把握しておきたい。

## (2) 東京古泉会の活動内容

古泉会の活動は通常会毎月一回（神田仲町青柳亭）、臨時会年一回とされ、月刊誌『東京古泉会報告』の他、『東京古泉会搦摸集』・『臨時東京古泉会搦摸集』の発行が当初打ち出されていた。しかし、会員が増加したことで搦摸銭が急増してきたため、編修担当者の負担を軽減するためにそれらは中止せざるを得なくなり、代替策として年一回大会の開催と鑑識に有用な泉譜を発行する方針に舵を切った<sup>(19)</sup>。

同会は、単なる加入会員による古銭品評会だけでなく、明治10年代の一大古銭蒐集家を偲んだ追悼古銭会の開催も企画された。中でも成島柳北13回忌追悼古銭会は、守田寶丹を発起人として中川近禮が幹事となり、明治29年（1896）11月30日に神田仲町青柳亭で開催された。幹事中川近禮は追悼会を代表して菩提寺・本所大平町本法寺墓前で香花を供し、追悼出品者は117名、点数500以上に及んだという<sup>(20)</sup>。この会の賛同者には柏木貨一郎もいた。

## 【2】明治期古銭番付にみる根岸武香の位置

【参考1】は明治13年（1880）の古銭家番付<sup>(21)</sup>である。根岸武香は東の2段目に記載が確認され、東前頭21枚目にあたる。東の大関は成島柳北（松菊莊）である。

興味深いことに、東前頭の筆頭に神田佐久間町居住の柏木貨一郎（探古楼）の名がある。古銭をめぐる柏木と武香の関係については後述する。さらに、東の欄外に神田五軒町居住の「多気志楼」の名がある点も看過できない。その名こそ松浦武四郎である。松浦は、慶應元年（1865）発行古銭番付でも東前頭29枚目の位置にあり、『多気志楼蔵泉譜』『外国貨幣誌』及び実家宛ての手紙等により古代銭及び大判小判、縁起物の貨幣、西洋の古銭を集めていたことが判明している。だが、その殆どを明治10年（1877）3月に大蔵省に寄贈している<sup>(22)</sup>。それにも関わらず、松浦が番付欄外に記されているのは一大蒐集家として古銭界で知られていたからと考えるのが妥当であろう。

番付は、発行者（編集出版人）が東京神田区外神田元御成道亀住町の千足軒鬼頭久吉という人物である。小槌義雄によれば、江戸時代の番付の場合、発行者は勸進元といい、勸進元になるということはその世界を牛耳り、また行司は泉書を発行、販売している書肆を指し、頭取には発行者にとって自分より格上の者を充てるという<sup>(23)</sup>。この番付では、東京下谷萬香亭・浅草観中室が行司と記載がある。一方、京都の古銭商（中島）泉貨堂や東京浅草の集古堂らが頭取に記載され、二者ともに武香の古銭入手に関与している人物である。このうち、集古堂は佐藤祐誠といい、浅草本願寺別院中正行寺の住職で武香による『榎園泉貨譜稿本三、四』所収「榎園貨譜」古銭入手先末尾にその名がみえる。佐藤祐誠は明治18年（1885）に守田寶丹が成島柳北亡き後に柳北の遺稿をもとに編集した『明治新撰泉譜第三集』掲載古銭の所有者の一人としても名が挙がっている程、古銭蒐集家の間ではよく知られた人物であったようである。

番付表の存在は、東前頭21枚目という位置の武香にとって、同時期の古銭界で頭角を顕していた番付記載古銭蒐集家とコネクションを築きながら古銭の蒐集したことを物語ると同時に、古銭蒐集家の武香の位置を端的に表し、かつその周辺に錚々たる古銭家がいたことを示唆する資料と言えよう。

## 2 根岸武香の蒐集古銭対象

根岸武香は「榎園」という泉号を名乗った。青山文庫には晩年に編じた古銭譜稿本類『榎園泉史稿本』・『榎園泉貨譜稿本』（ともに未定稿、請求記号842—10）がある。中でも『榎園銭貨譜稿本一二』『同三四』という標題が付された冊帖には古代銭の乾拓や解説が付され、入手先の人物が記されている場合も見られた。



## 【1】明治16年における埼玉県入間郡塚越村出土中国銭の入手

武香にとって、比較的早い時期の入手機会は、明治16年(1883)11月に与えられた。それは、埼玉県入間郡塚越村居住・農林銀三郎が甘藷の寒中貯蔵室設置のために私有地を掘削していた際に総数17875枚の宋・明代を中心とする古銭を掘り当てた際であった。発見者は、「官ニ届ケ出」たが、「数日ニシテ下附セラレ、又時ニ予ノ好古癖アルヲ知り悉皆予ニ贈ラレ」、武香が所有することとなった<sup>(27)</sup>。総数17875点のうち、完全銭数7026点(39,3%)、摩滅破損数10849点(60,7%)であり、宋・明代を中心とする中国銭57種類が出土した。特に多いのは永楽通寶(3413点)・洪武通寶(1553点)、元豊通寶(1347点)・皇宋通寶(1203点)・開元通寶(1088点)である。永楽通寶は永楽9年(1411)より鑄造され始めた銅銭で、日本では室町期に日明貿易や倭寇によって大量に輸入され、江戸初期まで流通している。洪武通寶は明朝初期の洪武年間(1368～98)に鑄造された銅銭で、日本では室町末期に流入される。元豊通寶・皇宋通寶は北宋時代の銭貨で、当時あっては最も多く鑄造されている。開元通寶の初鑄は武徳4年(681)であるから唐代にまで遡るが、宋代になっても中国では流通しており、日本でも渡来銭として使われていた。情報のキャッチに端を発する武香の古銭との関わりは、夥しい量の実物を目の当たりにすることで、以後、一層蒐集として開花することに繋がったと考えられる。

## 【2】明治34年における近世貨幣その他の一括購入

明治20年代における蒐集実態は判然としないが、武香が幅広い時代に亘る古銭を入手する機会は、晩年の明治30年代前半に集中していることが確認できた。武香は、明治34年(1901)12月、近世鑄造貨幣121点、及びその他銭貨37点(明治銀貨11枚・外国銭貨18枚・萬金貨5枚・永楽金銀3枚)を大阪地方裁判所内福永銀行破産管財事務所角谷大三郎・若林治らより一括購入した。近世鑄造金銀だけでも1801円を支払って購入した受領証があり、大里郡吉見村青山の自邸までの送料として11円68銭(荷造費用59銭・通常運賃2円64銭・特別運賃保険料8円45銭)負担している。福永銀行旧所有貨幣の中でも特に大判の単価は高く、天正大判281円・慶長大判215円・元禄大判175円・享保大判196円30銭とみえ、自邸への送付に際しては「大判墨書文字薄脱無之様御注意御荷作奉願上候」と念を押して注意を促している<sup>(28)</sup>。

福永銀行旧蔵近世鑄造貨幣は、A金貨73点(60,3%)、B銀貨48点(39,7%)という内訳であり、以下に金銀の種別個数を示す。

### A 金貨73点

大判金5点…天正・慶長・元禄・享保・新大判金(万延)

小判金32点…慶長(佐渡・徳乗・江戸座・荒目・駿河含む)・元禄・乾字小判金・享保・元文・文政・天保・天保五両判・安政小判金・新小判金・秋田一両判・朝鮮小判金

一分金15点…慶長・元禄・享保・元文・文政・天保・安政・万延・乾字一分金・甲州一分金・甲州裏無地一分金

二分金9点…元文・文政・安政・徳川二分金・徳川逆二分金

一朱金5点…甲州一朱金

二朱金7点…元禄・古二朱金・徳川二朱金・甲州二朱金

近世の金銀貨の鑄造は、慶長・元禄・宝永・正徳・享保・元文・文政・天保・安政・万延の10回にわたって実施された<sup>(29)</sup>。大判は、豊臣家が金細工師の後藤四郎兵衛家に鑄造を命じた天正大判も武香の所蔵となっている。慶長大判の後、江戸時代に大判は四度鑄造されているが、蔵品に天保大判は見られない。



新大判とは万延元年(1860)に発行された日本最後の大判であり、通貨としての目的もあった。

慶長小判は、江戸に次いで京都・駿河・佐渡でも鑄造されており、藏品中にはそれらが一堂に会している点は注目される。乾字小判金は、裏面に「乾」という年代印が刻まれ、宝永7年(1710)～正徳4年(1714)まで鑄造されている。同時期に鑄造された乾字一分金も揃いで入手している。天保五兩判は、天保8年(1837)に鑄造が開始され、同年11月末に発行された五兩としての額面を持つ金貨で、発行が天保年間のみであったための名称に因む。

一分金は、小判一兩の四分の一にあたる短冊形金貨で、初鑄は慶長6年(1601)の慶長一分金で、改鑄の度に鑄造された。甲州金は、武田氏の作った地方通貨だが、江戸時代になっても文政年間まで甲州の金座で鑄造された。二分金・一朱金・二朱金も短冊形の金貨で、方金と呼ばれており、藏品中では合計36枚を数える。

## B 銀貨 48 点

小判銀 10 点…朝鮮小判銀・秋田半兩銀

五匁銀 2 点…明和五匁銀

一分銀 5 点…古一分銀・中古一分銀・但馬南鐐一分銀

一朱銀 2 点…金入古一朱銀・新一朱銀

二朱銀 3 点…安永・文化・安政大形

丁銀 9 点…慶長・元禄・元文・文政・天保・安政・三宝丁銀・四宝丁銀

豆板(両面大黒含む) 17 点…慶長・元禄・元文・文政・天保・四宝豆板

小判銀のうち、朝鮮小判銀は、宝永7年(1710)9月から高麗人参貿易取引専用として鑄造された丁銀の一つである人參代往古銀と判断される。秋田半兩銀は、文久3年(1863)11月に発行された秋田銀判であり、これには9匁2分・4匁6分・1匁1分5厘の量目が表された三種がある。

明和五匁銀は、金銀錢貨の比価を実勢価格に委ねる原則に変革を加えようとして鑄造されたものだが、鑄造高は少なく、丁銀・豆板銀との併用が建前であったため、世間的には殆ど関心を示さず、時々上納の際に利用される程度であったという。

一分銀は一分の額面を持つ計数銀貨であり、江戸後期から幕末に鑄造された。古一分銀とは天保8年(1837)から鑄造が始まった天保一分銀のことで、安政一分銀は新一分銀と称する。藏品中の中古一分銀とは新一分銀を武香がこのように称したのであろうか。地方貨幣の但馬南鐐一分銀も藏品に含まれる。

一朱銀は1分の4分の1、1兩の16分の1にあたり、短冊形の計数貨幣である。藏品中、金入古一朱銀とは、文政7年(1824)から通用が始まった文政一朱判と判断される。なお、文政一朱判は、金品位が低かったために不評であり流通せず、文政12年(1829)から南鐐(上銀)を素材とする文政南鐐一朱銀が再度鑄造されている。新一朱銀は、嘉永7年(1854)に通用が開始された嘉永一朱銀とみられる。

二朱銀は1兩の8分の1、1分の半分に相当する二朱の額面を持つ長方形短冊形の計数貨幣である。藏品中の安永二朱銀は南鐐二朱銀(古二朱銀・安永南鐐銀とも呼ぶ)のことである。品位は良好で、額面が適当なことから徐々に重宝されたという。安永元年(1772)～文政7年(1824)にいたる58年間にわたって鑄造された。安政二朱銀は、日米和親条約による横浜開港に備えて、小判の海外流出を防止するために貿易取引目的で安政6年(1859)5月より鑄造された。だが実際には、より小型の一分銀の半分の額面価値で通用したにすぎなかった。武香の呼称が安政大形二朱銀となっているのはそのためである。銀貨は、定位貨幣としての金貨とは異なり、原則的に江戸期を通じて秤量貨幣であったが、明和五匁銀の鑄造を皮

切りに、一朱銀・二朱銀等の定位銀貨も作られており、数こそ多くはないものの武香の藏品にもみられる。

秤量貨幣の丁銀、豆板銀は江戸時代を通じて鑄造されているが、明和期以降、明和五匁銀・南鐮二朱銀等が作られ、その普及に伴い、徐々に貨幣としての重要性を失っていった。丁銀は、量目は一定せず、30匁～50匁程度のなまこ型銀貨である。藏品中の三宝丁銀は宝永7年(1710)4月に、及び四宝丁銀・四宝豆板銀は正徳元年(1711)8月より鑄造された。四宝銀貨は銀分が僅か20%であり、極めて粗悪なものであった。豆板銀(小玉銀)は円形が多いものの一定しておらず、量目も1匁～10匁位まで幅があり、5匁前後が最も多かった。品位は丁銀と同じに作られ、日常の小払いには錢とともにこの豆板銀が用いられた。藏品中には、丁銀・豆板銀が合計26点あり、銀貨の中では数量的に多い。

### 【3】明治金貨・銀貨・銅貨の蒐集

【参考2】は、『大日本貨幣研究会雑誌』38号(明治36年10月発行)に掲載された明治3年(1870)発行の明治20円金貨である。「遺愛品」の記載は、掲載誌が発行された年には武香は既に逝去したためである。武香は、A明治金貨6枚、B明治銀貨84枚、C銅貨50枚、合計140枚を購入した内訳が、『榎園泉史稿本二』に記録されている。発行年次の古いものが明治3年、最も遅いものが同34年(1901)であるが、各錢貨ともに全年次完全に揃っているわけではない。これらが完全無欠でない点からすれば、武香が好奇心を持って毎年発行されるのを待って集めたというよりは、ある時点(恐らく明治30年代前後)から発行を遡って集め始めたという見方が出来よう。武香藏品を以下に示す。

#### A 明治金貨6点

明治政府は、明治4年(1871)の新貨條例でもって金本位制を採用したので、金貨を本位貨幣、銀貨・銅貨を補助貨幣とした。條例で金貨は、20円・10円・5円・2円・1円の5種が定められ、そのうち1円貨が原貨とされた<sup>(30)</sup>。

- 1円1点…明治4年のみ
- 2円1点…明治3年のみ
- 5円4点…明治3～8年(5年除く)
- 10円1点…明治4年のみ
- 20円1点…明治3年のみ

藏品の金貨から、武香が発行年次の古いものに絞って蒐集した傾向が読み取れる。



【参考2】武香遺愛の金貨

#### B 明治銀貨84点

補助貨幣は、小額取引の便宜上、本位貨幣を補助する名目的なものとして鑄造された。條例で銀貨は、50銭・20銭・10銭・5銭の4種が定められた。これとは別に開港場貿易の利便性を図るため、貿易一円銀も條例で規定され、藏品中にも26点含まれる。だが早くも明治5年(1872)には、50銭・20銭・10銭・5銭が改正される。この時、20銭・10銭・5銭は発行されなかった。また、翌年(1873)にも50銭・20銭・10銭銀貨が改正されている。武香藏品を以下に示す。

- 5銭11点…明治3～10年(5年除く)
- 10銭17点…明治3～32年(5・10～17・19・23年除く)
- 20銭16点…明治3～31年(5・8・10～17・19・22～23年除く)
- 50銭14点…明治3～34年(5・8～9・11～17・19～20・23～29年除く)

1円26点…明治3～31年（5～6年除く）

傾向をみると、10銭・20銭・50銭とも明治10年代が多く抜け落ちている反面、蒐集対象期間も長い。また、1円銀の歯抜けは少ない。

### C 明治銅貨 50点

條例で銅貨は、1銭・5厘・1厘の3種が定められたが、まだ当時の造幣局には銅貨鑄銭場が完備されていなかった。鑄銭場が完成した明治6年（1873）には、2銭銅貨の新定と1銭銅貨以下の改正が実施されている。なお、5銭銅貨はサイズ過小のため、同13年（1880）に製造停止となり、同22年（1889）には代わりとなる5銭白銅貨が発行された。武香蔵品を以下に示す。

1厘6点…明治6～17年（9～14年除く）

2銭8点…明治6～15年（11～12年除く）

5厘12点…明治6～20年（9～11年除く）

白銅5銭10点…明治22～30年

1銭14点…明治6～31年（11～12・21～30年除く）

特徴として挙げられるのは、白銅5銭に限っては蒐集期間内の漏れが無いのに対して、1厘から2銭銅貨にあっては発行初年版こそ共通して揃えているものの蒐集対象時期の下限が異なり、蒐集としては不統一な感を否めない点である。この下限のずれや歯抜けからは、この分野に関しては蒐集の徹底ぶりは窺われず、副次的な興味本位から入手可能な範囲で取り揃えたと推測も出来よう。それは、銀貨についても同じことが言える。

## 3 『樞園錢貨譜稿本』にみる武香の皇朝十二銭蒐集

### 【1】皇朝十二銭の蒐集動機

考古資料調査や古銭を介して武香と面識のあった山中笑は、明治35年（1902）12月3日に64歳の生涯に幕を下ろした武香を偲び、辞世歌「何事もなしはせずして紅葉ばとともに散り行く我命かな」を引き合いに、完成を見ずに志半ばに終わった5点を列挙する。その一つが貨幣図誌の著述で、

君はこれが為に古金銀貨を集められしこと数十枚、資を投ぜられしこと頗多額、柏木探古君の遺物なる皇朝錢八十餘枚を六百有餘餘金を投じて購れしことなど、篤志の者にあらざれば能ぬことなり、君はこれらの古銭を図刻し、皇朝錢図を編し、刻も大略なりて試搦にせられしを見しに、是迄此類の書にて出版になりしものより勝りたるものなりし、君は又岡田村雄氏と共に皇朝泉貨志を著し好古類纂の貨幣部類中に加へられしが本邦貨幣の糸口のみにして完全せず、此等の書は君が計画されし本邦貨幣図誌中の一斑として出されしものと見ゆ

と回想する<sup>(31)</sup>。後者の記述部分は、岡田村雄・根岸武香1902「皇朝泉貨志」『好古類纂』7集のことである。渉獵したところ、本文は和同開珎の解説部分のみで後欠となっていることが判った。この稿本の存在も確認できなかったことから、山中の指摘通り、合綴された時点で未完成であったと考えられる。だが、「皇朝泉貨志」の凡例には、

一斯の編は、本朝に於て、古往今來行用せられたる貨幣の図象を示し、是か解説を加へ、初心門外の者の参考に資せんとするにあり、因て繁を去り、意を摘み、大概に通するを旨とす  
一泉貨を古代〈古文泉より足利時代までとす〉近代〈豊臣氏時代より徳川氏時代まで〉二部に別つ、

- こは幣制に大変革あればなり
- 一 所説ありて一定せざるものは私意を以て断定せず、古今諸家の説を参酌して是を注す
- 一 図象は凡て実物を以て搦摸したるも、未だ見ざるものあり、こは泉譜・図録に出たるを謄写し載す
- 一 同種の貨幣にして数様あるものは其の二三を録して、他は是を略す

とあり、著述方針のみ窺える。収録対象は第一部が皇朝十二銭から渡来銭、第二部が近世貨幣類であった。第一部の内容は前章【1】明治16年埼玉県入間郡塚越村出土中国銭、第二部は前章【2】福永銀行旧蔵近世貨幣類のコレクション等を基底に編集する予定だったと推定される。編集にあたり、専門家にしかわからないような煩雑な表記を避け、古銭初心者に向けて解説する等、配慮の形跡が窺われよう。

皇朝銭や渡来銭、及び近世貨幣に関わる図譜の編集過程で共通するのは、蒐集銭を基底に原物を二次資料化するとともに古文献にあたり鑄造背景や来歴を客観的に考証しようと努めた点である。そして、足りない他の関連資料があれば謄写して補い、世に公表する姿勢が看取される。晩年にそれを計画していたということは、自らの古銭コレクションの集大成として整理・記録化する意識とも捉えられ、単なる自己満足に終始した蒐集ではなかった証左とも言えよう。次節では、武香が最もコレクションの記録化に心血を注いだ皇朝銭の蒐集実態を辿ってみたい。

## 【2】根岸武香による皇朝十二銭の蒐集内訳と入手先

皇朝十二銭は、奈良朝から平安中期までの250年間に鑄造された12種の銭貨で、国家の鑄銭司がこれを担った。奈良時代に発行されたのは和同開珎・萬年通寶・神功開寶の3種で、その他は全て平安遷都後に鑄造された。鑄銭司は一カ所に定置されたのではなく、河内・長門・田原（大阪府四条畷市と奈良県生駒市の境付近）・岡田（京都府相楽郡加茂町）・周防（山口市）等に置かれた。律令政府が発行した貨幣は、官吏の俸給・賃金その他購入物資の支払い・皇族以下への賜与・寺社への奉獻等を通じて民間に流出した。だが銭貨の普及範囲に関しては注意が必要で、交易物資が豊富な都及び畿内中心に普及したことが指摘されている。養老6年(722)9月に定められた調銭という税金納制度が伊賀・伊勢・尾張・近江・越前・丹波・播磨・紀伊といった畿内近傍に限定され、その範囲が拡大されることはなかったことがそれを裏付けている<sup>(32)</sup>。律令国家は、銅銭に地金の銅よりも高い法定価値を付与して支払い手段として用いることで財政的利益を得ていたが、高い法定価値を維持することは出来ず、価値の下落と私鑄銭の横行が恒常的な課題であった。具体的には、皇朝銭は新銭発行のたびに新銭1に対し旧銭10をあてる法定比価で通用したが、実際には、新銭は発行後まもなく旧銭と同じ価値のものとして交換され、物価を混乱させる引き金になっていたのである。

末尾【表】は、根岸武香が記した二冊の未完稿本、すなわち『榎園泉貨譜稿本 一、二』所収(a)「榎園古代泉」・(b)「榎園古代泉之部」、及び『榎園泉貨譜稿本 三、四』所収(c)「榎園泉貨譜未定稿」を基に、搦摸された皇朝十二銭を書体・重量・寸法別に一覧化し、併せて備考として伝来や状態、古銭書掲載といった情報を付記して整理したものである。稿本(b)と(c)には一部重複銭が見られるため、(b)(c)間では同定作業を行った上で作表した。稿本は、専用の原稿用紙に手書きで草稿が綴られている。(a)は(b)(c)とは別系統の銭貨が収録されていた。銭貨に関わる情報を最も詳細に記述しているのは(c)であるが、(b)に記載されながらも(c)には漏れているものもあり、両者別冊記載の意図は不明瞭である。また、(a)の記載銭は(c)には見られない点から、入手系統によって稿本を書き分けていた可能性も考えられる。これらの稿本に収録された皇朝十二銭は230点を数える。なお、(c)には明治己亥晩夏(明治32年)に東京古泉会の役員(会誌編集委員)であった中川近礼(春布庵)による跋文が添えられ、

皇朝之錢貨世ニ存スル希也、其鮮明ノ物ヲ得ル容易ニ非ラス、嘗テ文政天保之後求古樓愛鷺堂等専ラ鮮美ノ錢ヲ求メ、蒐集多年遂ニ数多ノ名貨ヲ網羅セリ、維新ノ後チ其ノ錢皆探古樓ニ伝フ、愛泉家ノ常ニ流涎スル所ナリ、客歲樓主溘焉逝ク遺言ニ依テ其錢尽ク榷園ニ入ル（以下略、読点筆者）

とみえる。中川が(c)跋文を添えたのは明治32年(1899)であるが、さらに(c)の巻尾には「明治三四年七月三日脱 同五日一枚靈心生」とあり、脱稿は武香が亡くなる一年前ということになる。

以下、末尾【表】から窺われる武香が蒐集した皇朝錢総数230点の内訳(個数割合・書体・状態)を示すとともに、記載のある取得地にも目配りしたい。

#### A 和同開珎 (56点・24.3%)

和同錢は武香の皇朝錢で最も多く数量を占める(【参考3】:『榷園泉貨譜稿本』和同錢記載部分)。律令政府は慶雲5年(708)2月に多治比真人を催鑄錢司に任じ、5月より銀錢を鑄造し始めた。秩父から献上された銅を用いて鑄造が開始されたのは同年の7月末からで、以後、産銅の多かった長門を中心に周防・播磨・河内・筑紫等で作られるようになった<sup>(33)</sup>。字体・作りが異なり文字が歪んで個体差が大きいタイプを古和同、それとは対照的に文字が直線的に図案化されて唐代の開元通寶によく似たタイプ新和同と大別される。鑄造期間は52年間と長いものの鑄造技術は未熟なため、母錢(鑄型を取るための型錢)・錢範もまちまちであったことから、文字の異同・穿(中央の穴)や郭(穴の周囲)の広狭・縁(錢の外周)の広狭等の相違が生じ、蒐集家の中で書体が極めて多岐に分類されてきた<sup>(34)</sup>。こうした書体の様式分類は皇朝錢全てに共通している。和同開珎で最も多い書体は小様で10点を数える。小様とは、普通品に比べて錢径が小さく軽量で、穿下の文字が特に小さい様式を称す。小様のものは私鑄錢を除いて一般的に末鑄錢であるとされる。次いで正字・正画(標準書体)6点・美制(文字秀麗で肌もきめ細かい)5点・肥字(文字全てが太く肥えている)5点・大字(四文字とも大きい)5点・濶字(文字が大字よりも広く大きい)4点・小珎(珎の字が他の三字より小さい)4点・降和(和の字が外輪より離れて内郭に接する)3点と続く。その他、背広郭(背の内郭が広い)・中字(大字・小字の中間の文字体)が各2点ほどある。状態は青錆7点・鉄錆と銀錆が各4点みられ、他に朱錆・浅青という判定もある。

取得地が判明した和同開珎は20点ある。中でも最も多いのは滋賀琵琶湖瀬田川水中取得(以降、瀬田川水中錢と呼ぶ)<sup>(35)</sup>9点で、次いで明治27年(1894)2月大阪市城北綱島水道鉄管敷設時に水中より発見された錢貨、及び同30年(1897)6月の滋賀郡石山寺付近関之津出土錢が各4点を数え、さらには同時期に滋賀琵琶湖瀬田川河口鉄道橋梁架設時に水田より発見された錢貨も3点含む。その他、同20年(1887)京都鉄道線路開鑿時に朱雀野村御土居敷より出土し、京都の錢商中島泉貨堂より購入した1点、その翌年に奈良佐保山山麓堀地より出土した1点、丹波北之莊より出土した1点もそれである。

#### B 萬年通寶 (19点・8.3%)

和同開珎より52年後の天平宝字4年(760)3月、金銀銅の三貨の鑄造が始まった。直径も量目も和同開珎をやや上回る。

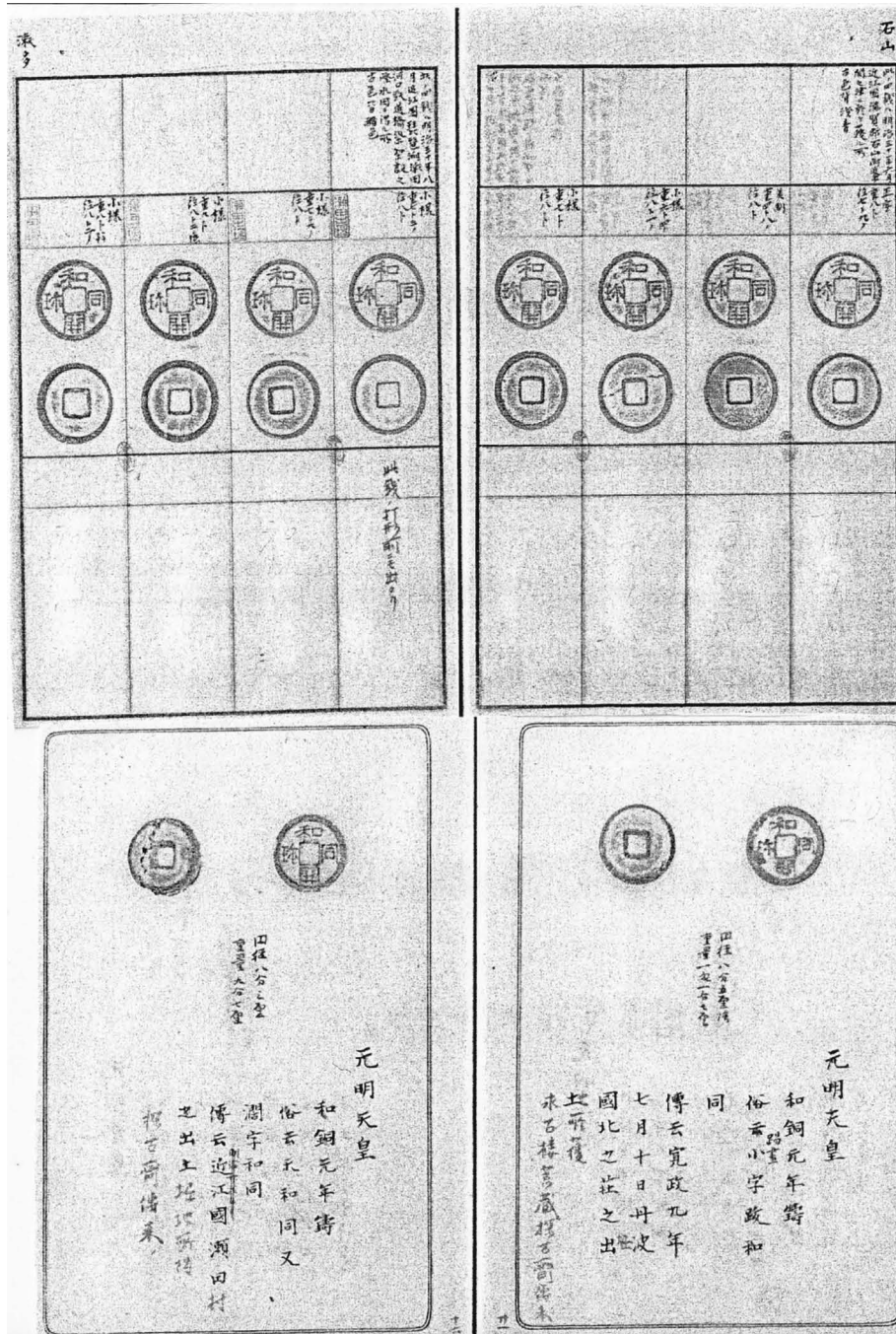
書体は前貨ほど細分化しておらず、大字(四文字とも大きい)11点・直通(通の字が縦に真っすぐ)4点、及び円点(年の字が丸っぽい)・横点(年の字の三画目の点が横に引いてある)が各1点見られるにすぎない。鑄造期間が5年と短かく、さほど多様な書体は生じていない。状態は青錆・青斑が5点ある。

取得地が判明した錢貨も5点と少ない。その内の4点は明治30年(1897)京都朱雀野堀地より出土したもので、他は瀬田川水中錢である。

C 神功開寶 (28点・12.2%)

萬年通寶より5年後の天平神護元年(765)9月より鑄造が始まった。鑄造にあたっては私鑄銭の罪人を鑄銭司に送って服従させたともいわれる。鑄造地の中心は周防・大和であった。この銅銭の発行をもって奈良時代の鑄銭は終わる。

書体のうち突出しているのは斜功(功の字が斜めに横たわっている)9点で、中様6点・大様5点がそれに次ぐ。その他、力功細縁(開の字が隸書ではなく門構え、功の字の旁が正しい力の字となっている)4点・力功潤縁(字体は力功細縁と変わらないが、銭貨の縁が高く幅広い)2点・縮力(功の字の力が短縮)



【参考3】上：『権園泉貨譜稿本一二』和同銭の頁  
下：『権園泉貨譜稿本三四』和同銭の頁

1点を数える。状態は鉄錆・青錆各が4点、朱錆・青斑が各2点ある。

判明した取得地は、明治30年(1897)京都朱雀野堀地出土3点、瀬田川水中銭3点である。蔵品割合では和同開珎に次ぐ量を占めるが、取得地が明確なものはわずかである。

#### D 隆平永寶 (20点・8.7%)

神功開寶鑄造後、平安京遷都までの30年以上新貨は鑄造されなかったが、延暦15年(796)より山城国岡田で鑄造が始まった。だが、この頃より銅の産出量が減少して新銭の量目・品位が劣り、民間に旧銭が蓄積されていった。私鑄銭も増えており、数度にわたって蓄銭禁止令を出している。

書体で最も多いのは潤字(大字の一つであり、特に字が大きい)5点、狭穿(銭穿が狭い)3点・小様3点・大字2点・広穿長平(中字の一つであり、穿が広く、平の縦棒が長い)2点・二水永大字(永の字の二画目が横に長く伸び、数字の二と水という字を組み合わせたように見える)2点がそれに次ぐ。状態は鉄錆9点・青錆青斑5点・青緑1点あり、錆発生割合は高い。

取得地の明確な銭貨は瀬田川水中銭が1点見られるだけである。

#### E 富寿神寶 (17点・7.4%)

隆平永寶より22年後の弘仁9年(818)に長門を中心に鑄造が始まった。皇朝銭中で鑄造高が唯一判明しており、承和元年(834)までの15年間に11万1千貫文が作られた記録がある。鉛分が多く含まれ品位は低下し、大きさや量目も減った。

書体のうち突出しているのは小字7点で、次いで各2点ほど大様・潤縁(縁の部分が幅広い)寿貫(寿の字の縦棒が上から下へと真っすぐ)・狭穿(銭穿が狭い)が含まれる。状態は鉄錆・青錆・銀錆・浅青等がある。

取得地の明確な銭貨は瀬田川水中銭が2点見られるだけである。

#### F 承和昌寶 (12点・5.2%)

富寿神寶より17年後の承和2年(835)より鑄造が開始されたが品質の劣化が著しくなった。大きさ・量目ともに格段に落ち、鉛の混入度が増えた。このため私鑄銭の横行に歯止めがかからなかった。

書体で多いのは小様5点で、他には斜寶(寶の字が少し傾斜)2点・細縁(銭周辺の高い部分が狭い)1点、加えて大様・中様も各1点含む。状態は青緑1点・青錆1点がある程度で、全体的には良好な方である。

取得地の明確な銭貨は瀬田川水中銭が1点見られるだけである。

#### G 長年大寶 (17点・7.4%)

承和昌寶より13年後の嘉祥元年(848)より作られ始めた。形は更に小さくなり、大きいものでも皇朝銭初期に比べて半量程度になった。

書体のうち突出しているのは小様12点で、他には大字大様・俯長(長の字が傾斜)が各2点ある。状態は青緑5点・青錆3点・鉄錆1点あり、半数に錆が発生している。

取得地の判明する銭貨は、京都紀伊郡深草任明天皇御陵近傍出土銭が2点、瀬田川水中銭が1点である。

#### H 饒益神寶 (10点・4.3%)

長年大寶より11年後の貞観元年(859)より周防・京都岡田で鑄造されたが、皇朝銭中で最も量目が軽重とされる。

蔵品中の書体全てが小様である。状態は青錆・浅青・鉄錆が各2点、青斑1点あり、良好ではない。

取得地の判明する銭貨は、京都深草観禪原竹林出土銭1点と瀬田川水中銭1点を数えるのみである。

#### I 貞観永寶（11点・4.8%）

饒益神寶より11年後の貞観12年（870）に铸造されたが、前貨同様、形は小さく、質も銅分が半分近くになるまで劣化した。それは鉛や不純物を混入したためである。

書体は、異永（永字の三画目と四、五画目が二画目の縦棒を挟んで上下に大きく食い違う）6点・大字大様5点見られる。状態は青錆3点・鉄錆2点である。

取得地の明確な銭貨は瀬田川水中銭が1点見られるだけである。

#### J 寛平大寶（15点・6.5%）

貞観永寶より20年後の寛平2年（890）より周防にて铸造が開始された。

書体は、正様（標準書体）5点が最多で、広穿（銭の穿が広い）・延冠（寶の字の冠が長く伸びている）・潤縁が各2点ある。状態は青錆3点・鉄錆2点あるが、錆の割合は少ない。

取得地の明確な銭貨は瀬田川水中銭が1点見られるだけである。

#### K 延喜通寶（13点・5.7%）

寛平大寶より17年を経た延喜7年（907）周防にて铸造が始まった。鉛の混入が増えたために銭文は摩滅しやすくなり、判読できない銭貨が増えた点が指摘されている。

書体は、正字4点・小字3点・俯延（延の字の末画が長い）3点・大様1点見られる。状態は古火中1点・浅青3点・鉄錆2点の他、青斑・銀錆が各1点あり、半数以上に錆が生じている。

取得地の明確な銭貨は瀬田川水中銭が1点見られるだけである。

#### L 乾元大寶（14点・5.2%）

延喜通寶より51年後の天徳2年（958）より铸造され、これが皇朝銭の最後となった。鉛銭を混ぜた質の劣化が撰銭の風潮を激化させ、応和3年（963）には新旧両銭の並行を止めて新銭のみを通用させる旨の公卿論奏が行われている。

書体は、昂元（元の字が他の三字よりも上方に昂って書かれる）7点・長元（元の字が縦に長い）6点・接郭（文字が内郭に近接）1点から成る。状態は青錆2点・鉄錆1点・銀錆2点・浅青2点であり、錆の発生は半数にのぼる。

取得地の明確な銭貨は、京都堀川より発見された1点と瀬田川水中銭1点だけである。

皇朝銭内訳を俯瞰すれば、和同銭の情報収集にも積極的であった<sup>(36)</sup>武香らしく、和同開珎が突出しておりその関心の高さが窺われる。次いで神功開寶、萬年通寶の順に多く、第3位までは全て奈良時代の铸造銭が占めていた。三者ともに相対的には錆の発生点数も少なく、良好な状態の銭貨が武香のもとに集められたことになる。その一方で、平安期のそれは、銭貨によって入手時点で錆の割合が目立っている。加えて、武香が入手した時点で出土地が明らかな銭貨の割合の高いのは和同開珎だが、他二銭も若干は判明した。平安時代に作られた皇朝銭のうち、取得地が判明するケースは僅かだが、いずれも瀬田川水中銭が多いことがわかった。



#### 4 皇朝十二銭の旧蔵者と好古家柏木貨一郎との交流

##### 【1】判明した皇朝銭個々の旧蔵者内訳

次に、末尾【表】備考欄で表示した皇朝銭の旧蔵者・購入先に注目したい。

和同開珎は、探古楼（柏木貨一郎 1841～1898）旧蔵銭 11 点中で 9 点は求古楼（狩谷掖斎 ないしその息子の懐之）から柏木の手へ渡っている。その場合、求古楼の前所蔵者が判明することもあり、西川氏・撰津伊丹の八尾寛満から譲渡されている。八尾寛満は泉号を傲霜堂といい、別名紙屋与作といった。西川氏については『榎園泉貨譜稿本三四』巻末の旧蔵者名簿に「尾張国」あるものの詳細は不明である。その他の和同銭旧蔵者に清虚齋・集古齋がいる。前者は不明だが、集古齋は浅草本願寺別院中正行寺住職・佐藤祐誠を指すとみられる。求古楼から柏木に至る間に愛鷺堂（服部中・通称直之助）を経由するケース（No.28）もみられる。愛鷺堂（服部中）は江戸牛込土取場に居住する 3000 石の旗本であり、代々御徒目付を務める家柄に生まれた。文化文政頃より愛泉家として頭角をあらわし、「此人一生中に蒐集したる古泉の数多きのみならず、実に美麗なる銭のみにして世にありふれたる品といへども愛鷺堂の藏品に匹敵すべきものを得んとすれば甚だ難き事なりしと思ふに、此人の如きは古泉一方に熱中して他に何事も美醜を心に関せざりしものなるか」と評されるほどの人物であった<sup>(37)</sup>。

萬年通寶は、探古楼（柏木貨一郎）旧蔵銭 6 点中 4 点が求古楼から柏木の手へ渡っている。求古楼の前所蔵者が判明するケースは 1 点のみで、宣華堂から譲られている。『榎園泉貨譜稿本三四』巻末の旧蔵者名簿によれば、宣華堂とは丹羽昭陽とある。

神功開寶も、探古楼（柏木貨一郎）旧蔵銭 6 点中 4 点が求古楼から柏木の手へ渡っている。この他の探古楼（柏木貨一郎）の前所蔵者としては、愛鷺堂（服部中）・建皇堂の名が記載される。建皇堂とは宇都宮俊良（検校俊良・1811～1859）のことで、高崎藩士として生まれたが幼少の時に失明して以来、江戸で鍼術を取得し、高崎藩の医師格に抜擢されている。その一方で、古銭に関しては狩谷掖斎の子・懐之及び服部中に師事したとされる。この検校俊良は服部中・狩谷掖斎等の遺愛古銭を立て続けに譲り受けたとされており、古銭界ではよく知られた人物であった。

隆平永寶は、探古楼（柏木貨一郎）旧蔵銭 9 点中 4 点が求古楼から柏木の手へ渡っている。この他の探古楼（柏木貨一郎）の前所蔵者としては、建皇堂（宇都宮俊良）・宣華堂（丹羽昭陽）、他に河野宇斎・混々齋の名がある。なお、『榎園泉史稿本五』によれば、明治 29 年（1896）12 月 5 日、東京の古銭商・鷺田信詮（寶泉舎）による二水永代金 3 円受領証がみえ、表 No.19・20 がそれに該当する。

富寿神寶は、探古楼（柏木貨一郎）旧蔵銭 6 点中 2 点が求古楼から柏木の手へ渡っている。この他の探古楼（柏木貨一郎）の前所蔵者としては、建皇堂（宇都宮俊良）・愛鷺堂（服部中）がいる。なお、『榎園泉史稿本五』によれば、明治 29 年 12 月 25 日、古銭商・鷺田寶泉舎による水中古色大型寿貫代金 11 円受領証がみえ、No.12 がそれに該当する。

承和昌寶は、探古楼（柏木貨一郎）旧蔵銭 3 点のうち、前所蔵者は愛鷺堂（服部中）・建皇堂（宇都宮俊良）のみで求古楼伝来銭は無い。

長年大寶は、探古楼（柏木貨一郎）旧蔵銭 4 点のうち、1 点は求古楼、他 1 点は愛鷺堂（服部中）旧蔵銭である。

饒益神寶は、探古楼（柏木貨一郎）旧蔵銭 3 点のうち、1 点は愛鷺堂（服部中）旧蔵銭である。なお、『榎園泉史稿本五』によれば、明治 31 年（1898）3 月 30 日、東京神田田代町の古銭商・鷺田寶泉舎による代金 9 円受領証がみえるが、どの饒益銭に相当するのかは特定できない。

貞観永寶は、探古楼（柏木貨一郎）旧蔵銭 2 点のうち、1 点は愛鷺堂（服部中）旧蔵銭である。

寛平大寶は、探古楼（柏木貨一郎）旧蔵銭 5 点中で 1 点は求古楼から柏木へ、この他の探古楼（柏木貨一郎）の前所蔵者としては、愛鷺堂（服部中）1 点・不肅齋 1 点が確認される。入手先として判明するのは、

No.14・15で、京都三条通麩屋町の錢商・中島泉貨堂、及び東京神田田代町の鷺田寶泉舎であった。不肅齊（福田循誘 1849～1915）は嘉永2年に江戸に生まれ、江戸伝通印院の福田行誠に師事したのち、深川本誓寺の住職を務めた。明治期には成島柳北と並ぶ古錢蒐集家として一目置かれていた。No.13は包紙書付記載があり、明治11年（1878）3月に福田循誘が手放したものであった。なお、福田循誘は柏木貨一郎と松浦武四郎との「好古家」としての対抗関係を赤裸々に集古会発起人・林若樹に語ったことが明らかにされている<sup>(38)</sup>。

延喜通寶は、探古楼（柏木貨一郎）旧蔵錢2点中、1点が愛鷺堂（服部中）旧蔵錢である。入手先が判明するケースNo.6のみで、『榎園泉史稿本五』には、明治32年（1899）5月17日付・京都中島泉貨堂による青錆代金5円受領証がある。

乾元大寶は、探古楼（柏木貨一郎）旧蔵錢4点のうち、求古楼・建皇堂（宇都宮俊良）・愛鷺堂（服部中）が前所蔵者となり各1点ずつ柏木の手に移っている。『榎園泉史稿本五』には、明治32年（1899）5月17日付・京都中島泉貨堂による青錆点斑代金5円受領証があり、No.2がそれに該当する。

多くの所蔵錢の入手先は、古錢商からの購入と見られる点に留意する必要もある。だが、ここまで、記載がある限りにおいて武香の所有に帰する以前の旧蔵者を辿ってきた。皇朝錢旧蔵者から、明治期に活躍する好古家としての名前を挙げれば、突出して多いのは探古楼（柏木貨一郎）ということになる。皇朝錢総数230点のうち、柏木旧蔵錢は実に61点（約3割）を数えることが判明した。そして、柏木の前旧蔵者として最も多く登場するのは求古楼（狩谷榊斎ないし懐之）であった。次に、古錢伝来をめぐる狩谷と柏木、さらに柏木と武香との関係性に言及したい。

## 【2】 求古楼（狩谷榊斎ないし懐之）所蔵皇朝錢の柏木貨一郎への譲渡

『榎園泉貨譜稿本三四』所収「榎園貨譜」掲載錢の皇朝錢には「求古楼狩谷懐之蔵」とある。求古楼は、狩谷家代々の号であった。

狩谷榊斎は、安永4年（1775）、神田明神石坂下に生まれた。父親は書物問屋仲間南組所属・高橋与惣次高敏で、実家が本屋だったことから榊斎も幼少期より書物に親しんでいたと考えられている。10歳頃、乾綱正に国史の素読、泉豊洲に儒学を、20歳前後から屋代弘賢に学んだとされる。寛政11年（1799）榊斎は津軽屋の婿養子になる。津軽屋は代々弘前藩の江戸の御蔵元を勤めた米問屋で、その下で榊斎の学問は大いに進展したとされる。上代文化・中国の古代文化の研究に傾倒した榊斎は、文献だけでなく、遺物の考証にも努めた。「六漢老人」をも号した榊斎は、漢錢・漢鏡・王莽の威斗・中平の双魚洗・三耳壺等を愛蔵する「好古家」でもあった。古錢著も手がけ、久野克寛との共著『錢幣考遺』や、『本朝度量權衡攷』・『涉貨漫抄』等がある<sup>(39)</sup>。

榊斎は初老に達したというので文化12年（1815）41歳で隠居し、当時12歳の息子・懐之に御蔵元を相続させた。同年刊『新校正孔方図鑑』は榊斎の著作だが、懐之の名を借りて発刊している。榊斎が天保6年（1835）に逝去するが、懐之は宇都宮俊良らに古錢の手ほどきしたり、明治13年（1880）「愛泉家番附」に年寄として名を連ねている点から、父親榊斎の蒐集古錢を明らかに引き継いでいる。『榎園泉貨譜稿本三四』巻末旧蔵者名簿では求古楼を「武蔵国江戸之人狩谷氏号榊斎名曰懐之」と記しているが、榊斎の号は望之であり、これは武香の誤記である。だが「榎園貨譜」には「求古楼狩谷懐之蔵」と見えることから、榊斎の蒐集古錢が懐之を経て柏木へ、または懐之自身の蒐集錢を柏木が入手した可能性も考慮する必要がある。

## 【3】 古錢をめぐる柏木貨一郎と根岸武香との交流の一端

天保12年（1841）加賀加州家の用達を勤めていた辻又四郎の第6男として誕生した柏木貨一郎（探古

楼)は、安政5年(1858)幕府小普請方棟梁・柏木因幡の養子となった。柏木家第9代として家督を継いだのが明治元年(1868)で、諱は政矩と称した。柏木が携わった主な建築には、品川御殿山の益田孝邸及び禅居庵(1880年)・三井有楽町集会场(1894)・飛鳥山の渋沢男爵邸無心庵(1900)等が挙げられ、数寄屋建築を得意とした。博物館行政に参画したのは明治7年(1874)~同16年(1883)にかけてであり、博覧会事務局・内務省・農商務省時代の博物館に勤めた。文部省博物館が行った古社寺調査、及び同8年(1875)の正倉院宝物調査に蜷川式胤らと携わったことが知られている。「好古家」としても、明治4年(1871)の大学南校物産会、及び翌年(1872)の文部省博物館博覧会に古物を出品する等、早くからその活動が見られた<sup>(40)</sup>。蜷川式胤が入手していた地獄草紙4巻中2巻と源氏物語を買い取ったことも夙に知られている。古銭に関しては、美品の皇朝銭の蒐集で知られ、同10年(1877)に始まった東京月旦古銭会の会誌『月旦衆評泉譜』の誌上にその名がある。また、皇朝銭から近世貨幣までの銭貨の由来を米価と対応させた『米価年表上下』を著した。



【参考4】 柏木貨一郎  
(大川三雄論文より引用)

武香が柏木より入手した皇朝銭は、既述の『榎園銭貨譜稿本 三、四』所収(c)「榎園銭貨譜未定稿」春布菴(東京古泉会編輯役員：中川近禮)跋文で「維新ノ後チ其ノ銭皆探古楼ニ伝フ、愛泉家ノ常ニ流延スル所ナリ、客歳楼主焉逝ク遺言ニ依テ其銭尽ク榎園ニ入ル」という記述から、柏木の遺志により武香の手に渡ったことが判明する。

武香と柏木貨一郎の接点は、柏木が武香より比企郡大谷村出土「土偶人」を譲り受けた一件<sup>(41)</sup>から察するに、明治8年(1875)頃ではなかっただろうか。そして、同12年(1879)9月21日付と判断される武香宛柏木貨一郎書状が『骨董集 五』に所収されていることが筆者の調査で判った。長文なので全文引用は割愛するが、書状は二件の話題からなる。第一に、柏木貨一郎は神田孝平<sup>(42)</sup>の自宅に伺って石器の談笑をした際、神田は根岸邸訪問を希望し、「不日は非参上致一泊相願、一応藏品拜見之上拝借願模写致度由被申候、右ニ付何頃罷出以テ御差支無之哉御都合被仰越候様、同氏(=神田孝平)呉々モ小生(=柏木)へ伝言有之候間、此段小生より相伺候間、否御報知奉願候」と、柏木を通して武香の都合を伺うものである。第二に、同12年(1879)に島根県が会見郡尾高村在住・遠藤基十郎の私有地開墾中に出土した古金銀の対応について内務省に協議する公文書の雛形を武香が所持していたことは前述したが、出土板金の価値について柏木自身の見解を述べ、結局のところ板金1枚だけ武香が購入する意思があるか否か、回答を待つ内容である。

兼而御聞及ヒモ有之候哉、本年二月二十日嶋根県下伯耆国会見郡尾高村ヨリ別紙雛形ノ如キ古代板金四枚堀出申候、右ハ七月上旬東京ニ着致、昨今内務省へ買上ニ相成候テ、内二枚小生尽力致引受申候、此ノ大板金実ニ古金中希世ノ珍貨ニシテ、古金銀譜・金銀図品・金銀図録・三貨図彙・大日本貨幣史其他古金銀打形等ニ曾テ未タ見聞無之奇品ニ御座候、按ニ室町將軍家ノ時ノ大判金ナルコト疑ヒ無之、当時ノ古書ヲ按スルニ、天正前ハ小判小粒等ノ制ナク天下一般ニ砂金ヲ用イ、或ハ板金ヲ切遣ニ致相用候事明瞭ニ候、退進記杯ニモ足利氏大板金ノ事見ユ、然ルニ其真物ノ今日ニ不伝ヲ以テ甚タ遺憾ニ存候処、此度始テ真面目ヲ観ルコトヲ得、中世貨幣歴史ノ欠ヲ補申候  
小生彼ノ板金二枚引受候へ共、実ハ余程ノ金高ニモ相成候物故、二枚ノ内一枚ハ次第ニ依リ同

好人へ譲り可申哉ト相考居候間、一応現品ノ雛形量目金性等詳細ニ相認メ御廻シ申上候処、三日  
前洋人ニ亅人懇望致候者有之候へ共、同人へハ相見セ不申、如斯珍貨ヲ海外へ出候ハ甚タ心外ノ  
至リニ付、同人ニハ相断リ申候

大板金量目四十三匁六分、金性ハ大概慶長金ニ同シクシテ少ク劣ルカ、金位五十四五・本位乾  
金ト同位カ右価百八十円ニ候へ共、少々ハ何レトモ可仕候、甚タ高価ノ様ニ候へ共、此頃大坂ニ  
而出候元禄大判ノ価百五十円ト申事ニ御座候、但シ此金ハ同所ニ而売候由御承知ノ通り、元禄大  
判ハ百分中純金五十二分ノ悪性ニテ、造幣局ノ定価金六十円四十一銭ニテ其価地金代ニ殆ド一倍  
ニ御座候、如斯声価ハ是金ヲ其品ノ少キト購求ノ人ノ増加セシトニ由テ然ルナラン右ノ大判金ノ  
事ハ未タ松浦・横山久吉等ニ披露不仕品ニテ、多分来月ノ古銭会ニ披露可致ト存候、右古金思召  
有之哉否、郵書ニテ一寸御申越被下度、先者此段申進候

頓首

九月廿一日

柏木貨一郎

根岸武香様

内務省の博物館行政に身を置いていた柏木は、国家による出土品の買い上げを行う立場にあったことが下線部から窺い知られよう。だが、実態は柏木が管理していた板金2枚中1枚を民間の好古家に譲渡しようとしていた側面が見えてくる。文化財を払い下げ、国家収入を得ようを目論んでいたのだろう。その反面、柏木にとっては貨幣が海外に流出することを何としても阻止したいというジレンマを抱えており、武香の所有に帰することを願う心が文面から読み取れるのである。

なお、柏木は、明治31年(1898)、上根岸の自宅から王子の渋沢栄一郎に向かう途中、汽車に接触して急逝する。柏木貨一郎には実子がおらず、甥の辻祐三郎が養子となり、柏木家第10代目を相続した。柏木祐三郎は、不及庵と号し、古器物の鑑定・蒐集と工匠を業とし、昭和6年(1931)に逝去する。『榎園泉史稿本五』では、皇朝銭が武香に譲渡された受領証は確認できない。それでも『榎園泉史稿本二』所収「榎園泉貨帖」緒言には柏木貨一郎は生前、柏木の妻に対して武香に蔵品を譲渡するようにとの遺言を残し、明治32年(1899)9月29日に養子・祐三郎から武香へ譲渡された旨が記されている。その翌年(1900)には、2月27日付無字小判1枚代金35円譲渡証・7月10日付金貨28種・銀貨29種代金150円譲渡証が柏木祐三郎から武香に差し出されたことも『同稿本五』から知られる。柏木貨一郎所蔵銭貨が祐三郎から武香に渡ったのは柏木の没後一年を経て、数回に分けて譲渡されていったのである。

## 結びとして

武香の古銭蒐集は、明治16年(1883)における埼玉県入間郡塚越村出土中国渡来銭17875点の一括入手の後、明治20年代前半にかけては判然としない。皇朝十二銭230点をはじめ、福永銀行旧蔵近世貨幣他158点、明治銭貨140点といった日本古代から近代銭貨の入手は、明治30年代以降に集中していた。一方、武香は、集古会の会員と接触しながらの古銭関連情報の収集にも努めた。松浦武四郎と親交があり、古銭の魅力に取りつかれ好古の道を歩み始めたという山中笑が、武香が生涯成し得なかった点として、考古図録及び本邦古印史の出版・新編武蔵風土記の改訂増補・考古倶楽部建築計画とともに、“本邦貨幣図誌の著述”を挙げていることは前述した。明治30年代に購入した所蔵銭を記録化し、古銭の入門者に向けてその普及を目論んでいたのが武香であった。

武香は、数ある銭貨の中でも、皇朝銭をコレクションの中核として位置づけ、詳細に精査した上で体系化しようとしていた点が看取される。旧蔵者の判った武香皇朝銭の約3割は、明治前期から「好古家」として活動する中で親交の深かった柏木貨一郎旧蔵銭であり、中には狩谷氏伝来という箔付き銭も含まれていた。また、実物調査にも熱心で、東京博物館における古銭の搦摸からそれが垣間見られた。

自身の蒐集について、『榎園泉史稿本二』所収「榎園泉貨帖」緒言には次のように記される。

武香好古の癖あり、御国の泉貨を蒐集し、又家に伝へし物とを以て正史に照し、先哲の書に参し、旁ら名士の教を受け、古今物価の高低・文物の盛衰・治乱の沿革を考究するを以て樂とす、爰に友人柏木政矩ハ探古楼と号し、御国の古器書画文庫に充滿せり、また珍貨数枚を蔵し、曾て古今の物価を比較せし著書なり、久しく相交わること深かりしか、明治三十一年九月六日年五十八にて身まかられぬ、妻某氏予に語りて曰く、遺物の内古泉貨ハ悉く君に譲り参せてよと良人の遺言なりとて、その一周年の祭を過ぎ、三十二年九月廿九日になん養子祐三郎氏より譲り受たりける故なりて、其漢泉の部ハ守田寶丹氏に譲り分ち、御国の泉貨ハ全く予か所有となりぬ、ここに於て旧蔵の泉貨と合せ時代を正し、量度をはかり、來歴考証を附し、泉貨の形式を搦摸し、かく一帖と成しつるなり、抑この泉貨ハ子々孫々に伝へて永世の寶と為さん事を望むなり、仮令家道に盛衰あり、或ハ子孫に好まさる者なりとも泉商貨店に散鬻する勿れ、帝室博物館に納めて永く国宝と為さん事を冀ふと云

榎園のあるし武香

下線部は、武香の蒐集に対する考えが吐露されており注目される。武香は藏錢が古錢商の手に渡り、資料として散逸することを危惧しており、将来的には帝室博物館に古錢の一切を寄贈し、国が管理することを希望していたのである。

こうした武香の想いはむなしく、今となっては所藏錢は散逸したとされる。しかしながら、武香の蒐集の根底には明らかに資料を散逸させまいとする意識が見られる。古錢を搦摸し、記録化、集成を発刊するというプロセスもまた、資料を体系的に価値づけ、二次資料化する思考の道筋ともいえよう。蒐集した古物に文化財としての価値づけを行い、どのように保存すべきか方策を示す思考は何も武香だけのことではなく、明治前期の「好古家」の意識<sup>(43)</sup>とも共通するものであった。この一思考は、そうした意識が前期以降もなお継承された一面と捉えられるのである。

#### 註

- (1) 根岸友憲監修 2006『根岸友山・武香の軌跡 - 幕末維新から明治へ』さきたま出版会。なお、武香は明治 29 年 (1896) 結成の集古会の明治 32 年 (1899) 7 月 23 日第 22 回例会では会長として幹事・評議会を定め、会の規定を整えた (山口昌男 2001『内田魯庵山脈〈失われた日本人〉発掘』晶文社)。
- (2) 熊谷市教育委員会 2015『熊谷市史調査報告書第一集 青山根岸家資料報告 (1) 考古資料・古瓦』。
- (3) 明治 9 年 (1876) 1 月、武香は地元大谷村 (東松山市) の「塚」等を発掘し、松浦武四郎へ「土偶人」を贈った。武香の「土偶人」への関与については、内川隆志・宇野淳子 2013「明治前期における好古家の実相 - 松浦武四郎と柏木貨一郎の土偶人の周旋をめぐる」『國學院大學研究開発推進機構紀要』5 参照。
- (4) 明治 36 年 (1903) の『東京人類学会雑誌』207 は根岸武香の追悼記念号であり、「根岸家所蔵古物目録」が掲載され、考古資料の所蔵品が把握できる。追悼記念号については、塩野博 2004『埼玉の古墳 比企・秩父』さきたま出版会にも言及がある。
- (5) 宮瀧交二 2004「大里町青山・根岸家の「菟古舎」について - 埼玉県博物館発達史の研究 1」『埼玉県立博物館紀要』29。なお、「菟古舎」の名称をめぐる新井端は、『東京人類学雑誌』では「古器物陳列室」、小杉櫛邨 (歴史学者・古書籍蒐集家) の紀行では「稽照館」と表記があるが、「菟古舎」という名称こそ記録では未確認との指摘もある (新井端 2019「好古家根岸武香の文化活動とその交流 - 小杉櫛邨手記『千とせのあき』から」『熊谷市史研究』11)。
- (6) 黒岩樞穴群発掘の経過は、重田正夫 2011「幕末・明治初期「好古家」たちのネットワーク」『埼玉の文化財』51、同 2014・2015「明治初期における武蔵の「好古家」根岸友山と武香 (上)・(下)」『熊谷市史研究』6・7 参照。

- (7) 『吉見町史 上巻』、金井塚良一 1975『吉見百穴横穴墓群の研究』校倉書房、同 1986『吉見の百穴 - 北武蔵の横穴墓』教育社。
- (8) 武香は、所有する古文書の印影をはじめ、印影集成『日本古印史稿本』を著した。
- (9) 江戸の古地図を蒐集していた武香は 47 種の所蔵目録を『榎園泉史稿本二』に掲載した。明治 33 年 (1900) 11 月には、集古会で所蔵の一部を持ち寄った (大沼宜規 2012「ある好古家のコレクション 根岸武香と青山文庫 - 「国立国会図書館デジタル化資料」搭載を契機として -」『国立国会図書館月報』620)。
- (10) 武香の主な収集史料は、平安時代の古文書・足利将軍の所領安堵状・豊臣秀吉朱印状・伊達政宗書状など 300 通を超えるという (前掲註 (9) 大沼論文)。
- (11) 『骨董集 八』には、「日本郵便切手并各地消印蒐集」として日本各地の消印切手 356 点・その他鉄道郵便切手 7 枚が貼付されている。消印切手は、関東 105 点と突出するが、北海道から沖縄・台湾まで貼付されている。
- (12) 根岸武香の収集書籍で、根岸家より昭和 6 年 (1931) に国立国会図書館に寄贈された。古写経・古文書・地誌類など約 950 点からなる。
- (13) 増尾富房 1994「近世古銭家列伝 第六回 根岸武香」『方泉處』6。
- (14) 山本命 2019「古銭蒐集家としての松浦武四郎」『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究Ⅱ』(平成 29 年度科学研究費助成事業 基盤研究 B 研究課題番号 17H02025) 報告書。
- (15) 中川近禮 1896「本会の発達と将来の目的」『東京古泉会報告』15。
- (16) 幕臣。歩兵頭並、騎馬頭並、外国奉行、会計副総裁等を歴任。明治 7 年 (1874) 9 月に『朝野新聞』局長就任、翌年言論弾圧の渦中に巻き込まれて禁獄 4 ヶ月・罰金 100 円という判決を受けて鍛冶橋監獄に送られたこともあった。古銭の鑑定家としては一流で、鷺田寶泉舎・今井風山軒・中川近禮・中島泉貨堂と並ぶ目利きとされた。柳北の古銭書としては『明治新撰泉譜』・『本邦現存古泉目録』・『群礦一塊』・『古銭鑑識訓蒙』等がある (増尾富房 1993「近世古銭家列伝 第 3 回 成島柳北」『方泉處』3)。
- (17) 増尾富房 1993「近世古銭家列伝 第 1 回 松浦武四郎」『方泉處』1。
- (18) 備後地方は元々、源平合戦で平家が逃亡したことや名族の館跡からの古銭発掘が多く、天保～嘉永期にかけて愛泉家らが「武人士豪医師僧侶等伝家ノ珍品ヲ庫中ヨリ出シテ愛玩」するため古銭家を多く輩出する地域である (高橋敏 1895「備後ニ愛泉家ノ多キ所以」『東京古泉会報告』3) という。
- (19) 守田寶丹 1896「本会ノ改革」『東京古泉会報告』12。
- (20) 成島柳北追悼古銭会の記事は、1896『東京古泉会報告』14 で準備状況が、『同』16・17 の「泉況」で詳細が報告された。
- (21) 国立国会図書館近代デジタルライブラリー「愛泉家一覧」明治 13 年 (1880)・同 16 年 (1883) の番付表画像参照。
- (22) 前掲註 (14) に同じ。
- (23) 小槌義雄 2000「江戸時代の古泉家と古泉書 - 対銭家 (宋銭の専門収集家) の誕生」『アジア遊学』18。
- (24) 公文書の写しは、①島根県令代理少書記官星野輝賢が内務卿伊藤博文に宛てた「埋蔵金掘得候儀ニ付伺」(明治 12 年 2 月 28 日)、②九等属大場長喜が島根県令に下した「嶋根県下埋蔵金掘出之儀ニ付御指令按伺」(同年 3 月 10 日)、③島根県令が博物局長内務大書記官町田久成に宛てた「(掘出品博物局へ差出ニ付上申書)〔これのみ筆者仮標題〕」から成り、いずれも『榎園泉史稿本一』所収。
- (25) 前掲註 (4) 塩野著に同じ。
- (26) 武香は、明治 34 年 (1901) 6 月 15 日に、山中笑・岡田村雄らと一緒にパリ万博出品後に返却された帝室博物館「帰朝品第二回展覧」出品中の板銀 (島根県会見郡尾高村出土)・丁銀 (群馬県利根郡沼田町・愛知県知多郡奥田村出土) をそれぞれ掲摸している (『榎園泉史稿本二』)。キリスト教メソジスト派の牧師山中笑 (共古 1850～1928) は、好古家として武香とも面識があり、『東京古泉会報告』に論考多数、「古銭の話」(芳賀矢一編 1924『日本趣味十種』國學院大學叢書第一編) 等、古銭関係への言及も多い。山中が古銭の魅力に取り憑かれるきっかけは松浦武四郎との出会いによるという (山口昌男 1998『知の自由人たち』日本放送出版協会)。

さらに武香は同年11月25日、清水晴風が持参した豆板銀9種・丁銀2種・和同開珎2種・永楽通寶2種等を搦摸した(『同上』二)。玩具研究家の清水晴風(1851～1913)は、三村竹清・林若樹らが主催していた集古会に参加し、世話人を務めた。集古会は山中も会員であった。

- (27) 根岸武香 1896「明治十六年入間郡塚越邨発掘古銭之記」『東京古泉会報告』7。その原稿は『骨董集二』所収。
- (28) 『榎園泉史稿本五』。
- (29) 近世貨幣の鑄造に関しては、久光重平 1976『日本貨幣物語』毎日新聞社、及び滝沢武雄 1996『日本の貨幣の歴史』日本歴史叢書 吉川弘文館、を参照。
- (30) 明治銭貨の鑄造に関しては、前掲註(29)久光著書を参照。
- (31) 山中笑 1903「故根岸武香君の辞世に就て」『東京人類学会雑誌』207。
- (32) 前掲註(29)久光著書に同じ。
- (33) 皇朝銭個々の鑄造に関しては、瀬戸浩平 1957『貨幣の文化史』春秋社、日本学術協会編 1991『図説日本貨幣史』展望社、参照
- (34) 和同銭の書体と鑄造との関係は、前掲註(29)久光著書、松村恵司 2009『日本の美術 512 出土銭貨』至文堂、参照。また、個々の書体に関しては、小川浩 1963『古銭の蒐集』徳間書店、大鎌淳正 1997『改訂増補 古銭語辞典』国書刊行会、参照。
- (35) 発見された銭貨を武香が京都の銭商・中島泉貨堂を通じて入手したのは明治31年(1898)4月以降であった。皇朝銭が瀬田川で発見される理由を武香は、瀬田に龍宮に通じるという迷信があり龍神を手向けるために投じる風習と捉え、長者が橋の下に銭を埋めた説や転覆船の存在説を退けた(根岸武香 1901「瀬田川発見の皇朝十二銭」『考古界』1-2)。
- (36) 武香は明治30年(1897)7月、東京博物館所蔵古瓦・古銅器模写をして十数部の冊帖を作ろうと中川近禮・山中笑らと館を訪問した。その際、明治7年(1874)に興福寺金堂須弥壇下から発見された和同銭114枚を実見しており、その書体を12種に分類した(根岸武香 1897「興福寺出土和同銭の種類」『東京古泉会雑誌』23)。
- (37) 二世叢柏居 1895「愛鷺堂逸話」『東京古泉会報告』2。
- (38) 三浦泰之 2019「好古家松浦武四郎のネットワークと人物像」『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究Ⅱ』(平成29年度科学研究費助成事業 基盤研究B 研究課題番号17H02025) 報告書。
- (39) 増尾富房 1994「近世古銭家列伝 第四回 狩谷掖斎」『方泉處』4。
- (40) 大川三雄 1994「工匠・柏木貨一郎の経歴とその史的評価について」『日本建築学会計画系論文集』459。
- (41) 前掲註(3)内川・宇野論文に同じ。
- (42) 天保元年(1830)岐阜の旗本竹中家の家臣・神田孟明の子として生まれた神田孝平は、文久2年(1862)蕃書調所の数学教授に登用、それが明治政府に移管されると政府に出仕した。明治4年(1871)兵庫県令、同10年(1877)には文部少輔として大森貝塚出土品の天覧に従事した。同13年(1880)に同職から離れ、元老院議員となる。「好古家」としての活動はこの頃から活発になるとされ、明治21年(1888)頃まで顕著であるという(徳田誠志 2019「静嘉堂文庫所蔵 松浦武四郎旧蔵の鋏形石について」『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究Ⅱ』(平成29年度科学研究費助成事業 基盤研究B 研究課題番号17H02025) 報告書)。
- (43) 例えば、松浦武四郎『撥雲餘興』二集(明治15年刊)跋文には、「たいたつらに古物好ミすと言にはあらず、我後たらんもの能我か志を汲ミ、我か亡らん後一品たりとも買求ることなく残し置る物を始、宮寺杯の什物なりしハ其宮寺にて保護なるへき時至らばをしますもとの宮寺に納めまいらすへし」とある。蒐集の意義を資料の一時保管に置き、今後どう保存すべきかが言及される。(内川隆志編 2013『静嘉堂文庫蔵松浦武四郎蒐集古物目録』)。

【表】根岸武香泉貨譜稿本（未定稿）にみる皇朝十二銭

(1) 和同開珎

No	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来／備考
1	正画	9分	8分1厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	青斑
2	正画	6分8厘	8分2厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収) 「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	清虚齋旧蔵
3	正画	1匁3厘	8分1厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
4	正画	8分5厘	8分4厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	近江瀬田川水中取得
5	正画	9分5厘	8分5厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	青錆
6	正画	8分9厘	8分2厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	鉄錆
7	正字	9分6厘	8分3厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
8	正字	9分7厘	8分4厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
9	正字	1匁1分	8分2厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	愛鷲堂→求古楼→探古楼旧蔵、孔方図鑑掲載原品
10	正字	8分5厘	8分2厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	清沢あり、孔方図鑑・皇朝錢譜掲載原品
11	正字	8分	7分9厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	明治30年6月 近江滋賀郡石山付近字関之津取得
12	正字	6分8厘	8厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	浅青
13	美制	5分4厘	7分7厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	青錆
14	美制	7分7厘	8分6厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	鉄錆、探古楼旧蔵
15	美制	9分1厘	8分1厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	求古楼→探古楼旧蔵
16	美制	4分8厘	8分	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	明治30年6月 近江滋賀郡石山付近字関之津取得
17	美制	1匁4分9厘	8分	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	鉄色、柏木政矩模造
18	肥字	9分2厘	8分2厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	朱青錆
19	肥字	8分2厘	8分	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	青色
20	肥字	8分	8分2厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	古火中
21	肥字	7分6厘	8分	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	朱青錆
22	肥字	1匁1分3厘	8分2厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	青錆、「珍字郭ニ接す」「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)
23	大字	1匁7分	7分9厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	銀錆、集古齋旧蔵
24	大字	1匁4分8厘	8分7厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	寛政年間摂津伊丹・八尾寛満所蔵→求古楼→探古楼旧蔵、奇品図録・明治泉譜掲載原品
25	大字大様	1匁7分6厘	8分5厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	古色鉄錆、愛鷲堂→探古楼旧蔵
26	大字	1匁1分5厘	7分8厘	「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)、「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	古色紫黒
27	大字	7分6厘	7分6厘	「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)、「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	古色濃緑、求古楼→探古楼旧蔵
28	中字	2匁2分7厘	8分	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	銀錆、尾州西川氏→求古楼→愛鷲堂→探古楼旧蔵、「和字降り開字短縮ナルモノ」(『橿園古代泉之部』(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)
29	中字	1匁3分8厘	7分5厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	銀錆、探古楼旧蔵
30	小様	4分7厘	8分2厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	青錆、近江瀬田川水中取得
31	小様	7分3厘	8分	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	朱錆、近江瀬田川水中取得
32	小様	8分4厘	8分	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	明治27年2月 大阪市城北字綱島にて水道鉄管敷設時、水中取得
33	小様	8分4厘	8分	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	明治27年2月 大阪市城北字綱島にて水道鉄管敷設時、水中取得
34	小様	8分	8分	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	明治27年2月 大阪市城北字綱島にて水道鉄管敷設時、水中取得
35	小様	6分4厘	8分1厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	明治30年6月 近江滋賀郡石山付近字関之津取得
36	小様	7分	8分	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	明治30年6月 近江滋賀郡石山付近字関之津取得
37	小様	7分9厘	8分	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	明治30年8月 近江琵琶湖瀬田川河口鉄道橋梁架設時、水田取得
38	小様	9分	8分2厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	明治30年8月 近江琵琶湖瀬田川河口鉄道橋梁架設時、水田取得
39	小様	8分	8分2厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	明治30年8月 近江琵琶湖瀬田川河口鉄道橋梁架設時、水田取得
40	小珠	6分	8分	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	鉄錆、近江瀬田川水中取得
41	小珠	4分2厘	8分	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	浅青
42	小珠	6分2厘	8分	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
43	小珠	8分7厘	8分1厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	白錆、近江瀬田川水中取得
44	小字	1匁5分6厘	7分5厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	明治21年 大和佐保山麓掘地取得11枚の内、「銀色著古其の錆拾鉄錆のごとし」(『橿園泉貨譜未定稿』(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)



45	小字	1匁1分7厘	8分5厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	青錆、求古楼→探古楼旧蔵寛政9年7月丹波北之莊土中取得
46	背広郭	6分7厘	8分1厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	浅青滑沢、近江瀬田川水中取得
47	背広郭	7分5厘	8分	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	明治27年2月大阪市城北字網島にて水道鉄管敷設時、水中取得
48	降和	1匁1分8厘	8分	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	探古楼旧蔵
49	降和	5分8厘	7分6厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	近江瀬田川水中取得
50	降和	7分9厘	8分	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	青錆、清虚齋旧蔵
51	調字	9分7厘	8分3厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	探古楼旧蔵、近江瀬田川水中取得
52	調字	1匁7厘	8分2厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	明治29年近江瀬田川水中取得
53	調字	1匁7厘	8分	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	明治20年京都鉄道線路開墾時朱雀野村御土居敷取得(中島泉貨堂談)
54	調字細縁	7分3厘	7分8厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	銅色青緑、丹波北之莊土中取得、求古楼→探古楼旧蔵
55	後鑄	7分8厘	7分2厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	寛永銭座鑄造
56	後鑄	5分4厘	7分	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	鋳銭とあり

## (2) 萬年通寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来/備考
1	大字	7分5厘	8分7厘	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	青錆
2	大字	1匁2分5厘	8分7厘	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	青斑
3	大字	1匁1分5厘	8分4厘	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	青錆
4	大字	1匁3分2厘	8分3厘	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	
5	大字	9分5厘	8分4厘	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	青錆
6	大字	8分4厘	8分2厘	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	明治30年京都朱雀野堀地取得
7	大字	1匁2分	8分	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	明治30年京都朱雀野堀地取得
8	大字	1匁2分3厘	8分4厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	明治30年京都朱雀野堀地取得
9	大字	8分	8分7厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	明治30年京都朱雀野堀地取得
10	大字	1匁6分7厘	8分7厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	
11	大字	9分9厘	8分6厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	鉄錆
12	直通	1匁6厘	7分9厘	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	探古楼旧蔵
13	直通	8分5厘	8分6厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	近江瀬田川水中取得
14	直通	1匁3分6厘	8分8厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	青錆
15	直通	9分5厘	8分5厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	探古楼旧蔵、明治泉譜一集掲載原品
16	円点	9分3厘	8分5厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	求古楼→探古楼旧蔵
17	円点直通	1匁2分7厘	8分5厘	「橿園銭貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	求古楼→探古楼旧蔵
18	横点	1匁4分7厘	8分5厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	求古楼→探古楼旧蔵、奇品図録掲載原品
19	横点	9分8厘	8分5厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	宣華堂→求古楼→探古楼旧蔵

## (3) 神功開寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来/備考
1	大様小字	1匁1分7厘	8分5厘	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	
2	大様小字	1匁3分7厘	8分2厘	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	鉄錆
3	大様小字	1匁1分2厘	8分6厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	近江瀬田川水中取得
4	大様	1匁1分4厘	8分8厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	求古楼→探古楼旧蔵、孔方図鑑掲載原品
5	大様	8分7厘	9分	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	愛鷲堂→探古楼旧蔵
6	中様	6分	8分1厘	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	
7	中様	8分4厘	8分2厘	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	
8	中様	8分5厘	8分	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	鉄錆
9	中様	9分8厘	8分4厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	

10	中様	1匁1分4厘	8分5厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	近江瀬田川水中取得
11	中様	1匁2分5厘	8分4厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	鉄錆
12	斜功	8匁7厘	8分2厘	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	青錆
13	斜功	1匁5分8厘	8分2厘	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	青斑
14	斜功	9分6厘	8分5厘	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	青斑
15	斜功	7分7厘	8分	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	青錆
16	斜功	6分5厘	7分8厘	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	
17	斜功	9分2厘	8分2厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	明治30年 京都朱雀野堀地取得
18	斜功	8分6厘	8分3厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	明治30年 京都朱雀野堀地取得
19	斜功	7分5厘	8分	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	建皇堂→探古楼旧蔵
20	斜功大字	8分7厘	8分4厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	青錆
21	縮力	1匁3分1厘	8分6厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	黒色、求古楼→探古楼旧蔵
22	力功不力	8分	8分4厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	青錆
23	力功細緑	8分6厘	9分2厘	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	朱錆、近江瀬田川水中取得
24	力功細緑	7分3厘	8分	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	
25	力功細緑	8分5厘	7分8厘	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	鉄錆
26	力功細緑	1匁8厘	8分5厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	求古楼→探古楼旧蔵
27	力功調緑	1匁3分	8分6厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	求古楼→探古楼旧蔵
28	力功調緑	1匁4分4厘	8分5厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	朱青錆、明治30年 京都朱雀野堀地取得

#### (4) 隆平永寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来／備考
1	大字	1匁4分	8分8厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	青斑、求古楼→探古楼旧蔵、孔方図録掲載原品
2	大様大字	1匁1分2厘	9分	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	松栗園→混々齋→探古楼旧蔵
3	大様小字	9分5厘	8分6厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	宣華堂→探古楼旧蔵
4	長頭永	1匁1分1厘	9分	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	青錆、河野宇齋→求古楼→探古楼旧蔵
5	反郭	9分5厘	8分4厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	青錆
6	調字	8分7厘	8分2厘	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	
7	調字	8分8厘	8分2厘	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	
8	調字	9分1厘	8分3厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	青緑、求古楼→探古楼旧蔵
9	調字	8分4厘	8分	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	鉄錆
10	調字細緑	6分5厘	8分弱	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	銅色青斑
11	広穿長平	1匁8厘	8分	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	古色淡黒
12	広穿長平	7分2厘	8分1厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	近江瀬田川水中取得
13	狭穿	8分7厘	7分8厘	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	探古楼旧蔵
14	狭穿	7分4厘	8分	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	建皇堂→探古楼旧蔵
15	狭穿	8分5厘	8分	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	
16	小様	8分6厘	8分	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	
17	小様	5分6厘	8分8厘	「橿園古代泉」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)	浅青
18	小様	7分7厘	8分	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	青錆
19	二水永 大字	9分2厘	8分弱	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	探古楼旧蔵
20	二水永 大字	7分4厘	8分弱	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	求古楼→探古楼旧蔵、奇品図録掲載原品

#### (5) 富寿神寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来／備考
1	大様	1匁1分7厘	8分3厘	「橿園古代泉之部」(「橿園泉貨譜稿本一、二」所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(「橿園泉貨譜稿本三、四」所収)	浅青、方円齋→愛鷺堂→探古楼旧蔵、奇品図録・明治泉譜掲載原品

2	大様細線	7分5厘	7分	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	探古樓旧蔵
3	小様	7分5厘	7分6厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	「小様ハ富字冠流ルモノ」(『橿園古代泉之部』同右所収)
4	小字	8分5厘	7分8厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
5	小字	6分4厘	7分4厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	探古樓旧蔵
6	小字	8分8厘	7分6厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	白錆
7	小字	7分	7分6厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
8	小字	9分4厘	7分5厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	建皇堂→探古樓旧蔵、明治泉譜掲載原品
9	小字	7分5厘	7分5厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	近江瀬田川水中取得
10	小字	7分3厘	7分2厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	鉄錆
11	寿貫	8分	8分3厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	緑欠、求古樓→探古樓旧蔵
12	寿貫	9分6厘	8分3厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	銅色浅青、近江瀬田川水中取得
13	調緑	9分9厘	7分5厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	青錆
14	調緑	8分5厘	7分8厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	
15	狭穿	7分9厘	7分9厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	青緑、求古樓→探古樓旧蔵
16	狭穿	5分5厘	7分4厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
17	仰冠	7分	7分5厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	青錆

## (6) 承和昌寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来／備考
1	大様	9分4厘	7分8厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	塙根堂→愛鷲堂→探古樓旧蔵、近江堅田山中取得、明治泉譜二集掲載原品
2	中様	5分5厘	6分9厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	青錆
3	小様	5分2厘	6分8厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	青緑
4	小様	6分5厘	6分8厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	建皇堂→探古樓旧蔵、明治泉譜一集掲載原品
5	小様	5分1厘	6分8厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	近江瀬田川水中取得
6	小様	5分5厘	7分	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
7	小様	5分4厘	6分8厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
8	不明	6分3厘	6分9厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
9	不明	4分6厘	5分8厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
10	斜寶	8分2厘	6分7厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	探古樓旧蔵
11	斜寶	5分5厘	6分8厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	
12	細線	5分5厘	7分8厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	

## (7) 長年大寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来／備考
1	大字	8分8厘	7分弱	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	青緑、求古樓→探古樓旧蔵、山城紀伊郡深草任明天皇御陵近傍取得
2	大様	6分6厘	6分9厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	古色青白、探古樓旧蔵、山城紀伊郡深草任明天皇御陵近傍取得
3	小様	5分7厘	7分4厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	青緑
4	小様	5分2厘	6分4厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
5	小様	4分7厘	6分3厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	探古樓旧蔵
6	小様	5分	6分4厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	青緑
7	小様	5分7厘	6分5厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	青緑
8	小様	4分	6分3厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
9	小様	6分4厘	6分5厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	青錆、愛鷲堂→探古樓旧蔵
10	小様	4分	6分4厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
11	小様	5分5厘	6分5厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	近江瀬田川水中取得
12	小様	6分	6分5厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	青錆

13	小様	5分8厘	6分6厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	鉄錆
14	小様	4分8厘	6分4厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	明治23年 鷺田寶泉舎より入手
15	不明	4分5厘	6分6厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
16	筒長	5分	6分4厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	青緑
17	筒長	4分8厘	6分6厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	青錆

### (8) 饒益神寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来／備考
1	小様	5分4厘	6分1厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	浅青
2	小様	4分5厘	6分2厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
3	小様	3分5厘	6分	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
4	小様	5分5厘	6分3厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
5	小様	5分5厘	5分8厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	青斑、探古楼旧蔵
6	小様	6分3厘	6分5厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	青錆、愛鷺堂→探古楼旧蔵、明治泉譜一集掲載原品
7	小様	5分6厘	6分1厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	浅青、探古楼旧蔵、京都深草観禪原竹林取得
8	小様	3分	6分2厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	近江瀬田川水中取得
9	小様	6分	6分5厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	青錆
10	小様	5分4厘	6分2厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	鉄錆

### (9) 貞観永寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来／備考
1	大字	7分5厘	7分4厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
2	大字	5分5厘	6分2厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
3	大字	3分3厘	6分	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	鉄錆、探古楼旧蔵
4	大字	7分8厘	6分5厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	青錆
5	大様	6分4厘	6分6厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	愛鷺堂→探古楼旧蔵、明治泉譜一集掲載原品
6	異永	6分5厘	6分2厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
7	異永	5分5厘	6分3厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	
8	異永	4分1厘	6分2厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	青錆
9	異永	6分4厘	6分2厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	近江瀬田川水中取得
10	異永	4分7厘	6分5厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	深青、青錆
11	異永	8分	6分6厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	鉄錆

### (10) 寛平大寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来／備考
1	正様	3分4厘	6分2厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	鉄錆
2	正様	7分2厘	6分4厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	古火中
3	正様	5分2厘	6分5厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	愛鷺堂→探古楼旧蔵
4	正様	5分5厘	6分2厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	近江瀬田川水中取得
5	正様	5分5厘	6分2厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	鉄錆
6	広穿	5分5厘	5分8厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	青斑、探古楼旧蔵
7	広穿	7分8厘	6分4厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	浅青
8	起延	5分5厘	5分8厘	「橿園古代泉」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)	鉄錆、探古楼旧蔵
9	延冠	5分1厘	6分3厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	浅青朱斑、求古楼→探古楼旧蔵
10	延冠	6分5厘	6分4厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	「皇朝泉志二大冠寛と称ふ」(『橿園泉貨譜未定稿』同右所収)、青錆
11	濁縁	5分2厘	7分4厘	「橿園古代泉之部」(『橿園泉貨譜稿本一、二』所収)、「橿園泉貨譜未定稿」(『橿園泉貨譜稿本三、四』所収)	

12	調緑	4分8厘	6分4厘	「榊園銭貨譜未定稿」(「榊園泉貨譜稿本三、四所収)	浅青
13	不明	5分2厘	6分6厘弱	「榊園古代泉之部」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)、「榊園泉貨譜未定稿」(「榊園泉貨譜稿本三、四所収)	銀錆、不潔齋→探古楼旧蔵、包紙書付「摂津国阿弥陀池境内桶木ノ際ヨリ掘出」7品の内、明治11年3月不潔齋手放す
14	狭平	5分7厘	6分7厘	「榊園古代泉之部」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)、「榊園泉貨譜未定稿」(「榊園泉貨譜稿本三、四所収)	明治33年12月25日(鷺田) 寶泉舎より10円にて入手
15	不明	6分5厘	6分2厘	「榊園古代泉」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)	明治34年1月 泉貨堂より入手

### (11) 延喜通寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来/備考
1	大様	8分4厘	6分5厘	「榊園古代泉之部」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)、「榊園泉貨譜未定稿」(「榊園泉貨譜稿本三、四所収)	探古楼旧蔵
2	小字	6分2厘	6分1厘	「榊園古代泉之部」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)、「榊園泉貨譜未定稿」(「榊園泉貨譜稿本三、四所収)	「延字殊ニ狭少ニシテ未画隠起スル」(「榊園古代泉之部」同右所収)
3	小字	5分5厘	6分1厘	「榊園古代泉之部」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)	近江瀬田川水中取得
4	小字	5分	6分2厘	「榊園古代泉」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)	古火中
5	正字	7分6厘	6分5厘	「榊園古代泉之部」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)、「榊園泉貨譜未定稿」(「榊園泉貨譜稿本三、四所収)	浅青、愛鷺堂→探古楼旧蔵、「延通ノ二字広く喜寶ノ二字長し」(「榊園古代泉之部」同右所収)
6	正字	5分6厘	6分2厘	「榊園古代泉之部」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)	青錆
7	正字	8分3厘	6分3厘	「榊園古代泉之部」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)、「榊園泉貨譜未定稿」(「榊園泉貨譜稿本三、四所収)	銀錆
8	正字	5分7厘	6分2厘	「榊園古代泉」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)	
9	俯延	7分3厘	6分1厘	「榊園古代泉」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)	青斑
10	俯延	7分1厘	6分1厘	「榊園古代泉之部」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)、「榊園泉貨譜未定稿」(「榊園泉貨譜稿本三、四所収)	浅青、「延字ノ未画殊ニ長ク通斜メナリ」(「榊園古代泉之部」同右所収)
11	俯延	5分7厘	6分	「榊園古代泉之部」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)	鉄錆
12	起延	6分5厘	5分9厘	「榊園古代泉」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)	鉄錆
13	起延	7分	6分2厘	「榊園古代泉」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)	浅青

### (12) 乾元大寶

No.	書体	重量	直径	記録掲載稿本	伝来/備考
1	接郭	6分1厘	6分3厘	「榊園古代泉之部」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)、「榊園泉貨譜未定稿」(「榊園泉貨譜稿本三、四所収)	求古楼→探古楼旧蔵
2	昂元	9分2厘	6分9厘	「榊園古代泉之部」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)、「榊園泉貨譜未定稿」(「榊園泉貨譜稿本三、四所収)	青錆黒斑
3	昂元	1匁6厘	7分2厘	「榊園古代泉之部」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)、「榊園泉貨譜未定稿」(「榊園泉貨譜稿本三、四所収)	建皇堂→探古楼旧蔵
4	昂元	9分3厘	6分7厘	「榊園古代泉之部」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)	近江瀬田川水中取得
5	昂元	5分5厘	6分4厘	「榊園古代泉」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)	鉄錆
6	昂元	1匁5厘	6分5厘	「榊園古代泉」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)	青錆
7	昂元	6分9厘	6分3厘	「榊園古代泉」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)	浅青朱斑
8	昂元	5分9厘	5分6厘	「榊園古代泉」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)	浅青、探古楼旧蔵
9	長元	6分3厘	6分4厘	「榊園古代泉」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)	白錆、堀川取得
10	長元	3分9厘	6分4厘	「榊園古代泉」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)	
11	長元	6分9厘	6分6厘	「榊園古代泉之部」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)、「榊園泉貨譜未定稿」(「榊園泉貨譜稿本三、四所収)	愛鷺堂→探古楼旧蔵
12	長元	5分9厘	6分3厘	「榊園古代泉之部」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)、「榊園泉貨譜未定稿」(「榊園泉貨譜稿本三、四所収)	銀錆 (=白錆とも記載)
13	長元	8分	6分5厘	「榊園古代泉之部」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)	
14	長元	5分8厘	6分6厘	「榊園古代泉之部」(「榊園泉貨譜稿本一、二」所収)	

# 報告：大英博物館所蔵の H. v. シーボルト蒐集 日本考古資料について

内川 隆志・サイモン・ケーナー・伊藤 大祐・堅田 智子

## 調査に至る経緯

本稿は、科学研究費基盤研究 (B) 「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究」(代表内川隆志) の助成を得て、平成 30 (2018) 年 2 月、内川隆志 (國學院大學)、伊藤大祐 (現職 株式会社パスコ)、堅田智子 (現職 流通科学大学専任講師) で実施した大英博物館が所蔵する H.v. シーボルトコレクションの内容について資料紹介を行うものである。

調査に際しては、大英博物館アジア部門・日本セクション長のティム・クラーク博士、大英博物館アジア部 IFAC ハンダ日本美術キュレーターのニコル・クーリジ・ルマニエール博士、同日本コレクション担当キュレーター矢野明子氏、同アジア部門客員研究員定村来人氏、研究協力者でもあるセインズベリー日本藝術研究のサイモン・ケーナー博士にご対応頂いた。また、調査時には新潟県立歴史博物館専門研究員宮尾亨氏に実測作業の補助をお願いした。資料整理は、内川隆志を中心に、伊藤大祐、富山悠加 (國學院大學資料室員)、高橋桃子 (茅ヶ崎市教育委員会嘱託職員)、日下部旭祐 (國學院大學卒業生) が実施し、鳥越多工摩 (國學院大學客員研究員) が補佐した。縄文時代関連遺物のトレースに関しては植田真氏 (國學院大學兼任講師) の全面的な協力を得、同資料評価については関根達人博士 (弘前大学人文学部教授) の詳細に至るご教示を反映させて頂いている。ここに記して謝する次第である。なお、今回の調査においては、須恵器類についても調査を実施したが、平成 6 (1994) 年度に池上悟博士 (立正大学文学部教授) がイギリス在外研修期間中にマンローコレクション、シーボルトコレクションを調査され、すでにその成果を公表しており<sup>1)</sup>本稿では、先学である池上教授の示された須恵器実測図を再録させていただき、未掲載の須恵器については新たに実測図、写真を掲載した。個々の遺物の分量や観察、注記などについては一覧表を付した。池上先生には、心よりお礼申し上げる。

## 大英博物館の H.v. シーボルトコレクションについて

イギリスに所在する日本考古学資料について、大英博物館のゴーランドコレクション、ジョン・ミルンコレクション、H.v. シーボルトコレクション、王立スコットランド博物館のマンローコレクションが知られており、これまで幾人かの考古学者や博物館による特別展示等によってその具体的な内容が紹介されている<sup>2)</sup>。

J. クライナー博士によると<sup>3)</sup>H.v. シーボルト (1852-1908) は、嘉永 5 (1852) 年、P.f.v. シーボルト (1796-1866) の次男として生まれ、少年時代をボンで過ごし、ヴェルツブルグの高等学校に入学するも兄 A.v. シーボルト (1846-1911) を追って、明治 2 (1869) 年に来日した。明治 5 (1872) 年オーストリア・ハンガリー帝国公使館で通訳官として採用され、一等書記官まで昇進する。明治 6 (1873) 年のウィーン万国博覧会では日本代表の連絡員として多大なる貢献を果たした。明治 7 (1874) 年オーストリア帝国大使館の通訳官に昇進し、明治 10 (1877) 年には日本の大蔵省にも勤務した。父の衣鉢を継いだ日本研究は、考古学への情熱として開花し、当時活躍していた多くの好古家との交流を通して黎明期の斯学にも多大なる貢献を果たした。自身が開催した「古物会」には多くの好古家が参加し、直接的なネットワークを築いて自らも多数の古物を蒐集したのである。明治 8 (1875) 年 12 月 6 日、H.v. シーボルトが会主として初めて開催した「古物会」の広告には、肥前国島原藩の松平主殿頭の屋敷を会場に蜷川式胤、松浦武四郎、柏木貨一郎、横山由清、大槻磐溪などの好古家や国学者が名を連ねている。日本での考古学研究

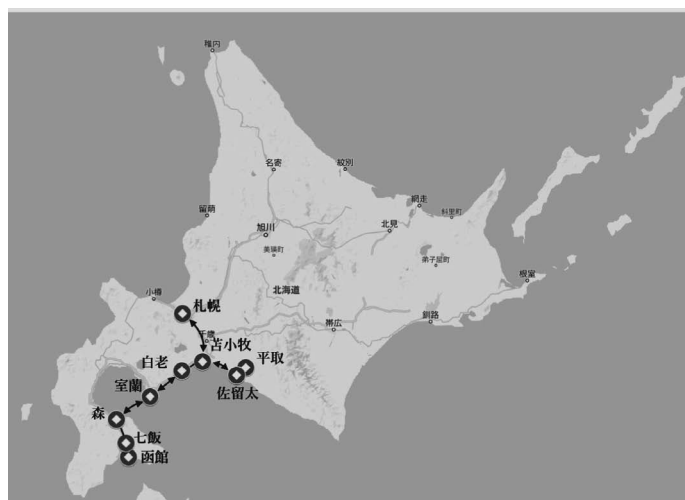
の成果は、明治 12 (1879) 年に出版した英文の『Notes on Japanese Archeology』、邦文の『攷古説略』として刊行され、その後の日本考古学の発展に寄与した事は有名である。

彼が蒐集した日本コレクションの一部は、明治 21 (1888) 年に、オーストリア皇帝に 5,200 点が献上され、明治 22 (1889) 年に創設された帝室自然科学博物館民族学部門の基礎となった。この貢献によってオーストリア貴族の称号を得、オーストリア国籍を取得したのである。その後、明治 26 (1893) 年から 1 年間、オーストリア・ハンガリー帝国領事代理として横浜領事館で勤務したが、明治 29 (1896) 年に病を得てヨーロッパに戻った後、兄 A.v. シーボルトとともに父の大著『日本』の再販をまとめるなどし、オーストリアチロル州のフロイデンシュタイン城での生活を最後に、明治 41 (1908) 年に逝去した。残されたコレクションは翌年、ウィーンで競売にかけられ、その多くは不明となっている<sup>(4)</sup>が、コレクションの一部は、今もヨーロッパのいくつかの博物館に保存されていることが知られており、現在国立歴史民俗博物館によって精力的な調査が実施されている<sup>(6)</sup>。

大英博物館が所蔵するシーボルトコレクションの中で、今回紹介した縄文土器の内、4 点については父である P.f.v. シーボルトが蒐集したものとされるが、今回報告した 7 点 (1・2・3・4・5・6・9) の内、4 点 (1・2・3・9) には「ホウカヒドウ」の朱書きが認められ、1 点 (5) には「ヒタチ」の朱書きが認められる。「ホウカヒドウ」の朱書きについては池上教授も指摘しているように蝦夷地が北海道と命名された明治 2 (1869) 年を廻り得ないため、P.f.v. シーボルトの蒐集の事実関係に疑問を生じさせる<sup>(6)</sup>。H.v. シーボルトと北海道との関係は、明治 11 (1878) 年 8 月から約 1 カ月間、北海道開拓の現状を調査するため、大蔵卿大隈重信から委託され、駐日フランス公使館三等書記官ディースバッハ伯爵とオーストリア・ハンガリー帝国陸軍中尉グスタフ・フォン・クライトナーの 3 名で同地の視察旅行を敢行している事実がある。H.v. シーボルトは、アイヌ研究を目的として、アイヌコタンがあった平取に一週間ほど滞在し、帰京後、すぐさま旅行の成果をまとめ、大隈に「北海道歴観卑見」を提出した。さらに、ベルリン人類学民俗学先史学協会の紀要に、欧米人による最初の民族学的なアイヌ研究であったといわれる論説「アイヌの毒矢」「蝦夷島におけるアイヌの民族学的研究」を発表した<sup>(7)</sup>。明治 22 (1889) 年 4 月には、蝦夷旅行中に収集したアイヌコレクション全 80 点を帝室自然史博物館（のちにウィーン帝室民族博物館、現ウィーン世界博物館に移管）に寄贈しており、この他に北海道に出自を辿れる縄文土器や今回報告したオホツク式土器などを有していた可能性は大いに考えられよう。石器としては、粘板岩製の石棒 (12) や縄文時代中期末から後期前葉に比定される青竜刀形石器 (11) が認められる。

須恵器 19 点の内、7 点 (16・17・20・21・26・27・28) には、「Franks」の注記が認められる。この A.W. フランクス (1826-1897) は大英博物館功労者の一人で日本部門の資料の受け入れに貢献した人物である。

また、一覧表に記したとおり、須恵器類では坏類では蓋に「ムサシ」と記載される資料や「コウツケ」と朱書きされる資料 (15)、坏身で「ヤマト」と記される資料 (18)、碗で「ヤマト」と記される資



H.v. シーボルトの明治 11 (1878) の北海道探査 (堅田 2019 より)

料 (20)、同じく「カワチ」と記される資料 (19) 短頸壺で、「ヤマト」と記される資料 (23・24) 同じく「オヲミ」と記載される資料 (22)、提瓶で「オヲミ」と記載される資料 (28)、同じく「イツミ」と記載される資料 (29)、壺で「ヒダチ」と記載される資料 (25)、台付壺で「シモヅケ」と記載される資料 (26)、平瓶で「三河口」と記載される資料 (27) などが認められるが、具体的な場所の特定は定かではないが須恵器類に関しては関東以西の地域で入手していることが理解できる

## おわりに

以上、報告したとおり大英博物館に収蔵されている H.v. シーボルト蒐集日本考古学資料について述べた。実際、H.v. シーボルトがどのような経緯でこれらの遺物を大英博物館に納めたのか具体的な点は不明であるが、博物館サイドの受け入れ担当者であった A.W. フランクスが受け入れに関係したことが、その記録によって明らかである。何れにしても、H.v. シーボルトの事績と一致する北海道関連の考古資料等が含まれていることから H.v. シーボルトの蒐集による考古遺物として相違ないものと判断するところである。

(文責 内川 隆志)

## 註

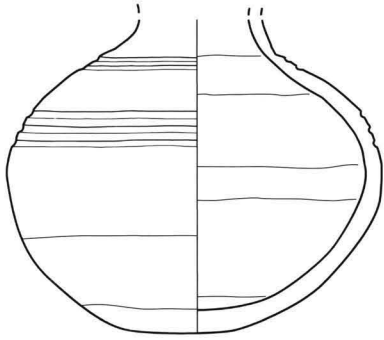
- (1) 池上 悟 1996 「英国所在の日本考古学資料 —マンローおよびシーボルトコレクション中の須恵器—」『立正大学文学部論叢』第 103 号
- (2) 桑原知代子 1983 『わがマンロー伝 —ある英国人医師・アイヌ研究家の生涯』新宿書房  
小林達雄 1984 「ニール・ゴールドン・マンロー論」『縄文文化の研究』第 10 巻 雄山閣  
関 俊彦 1985 「ハインリッヒ・シーボルトと日本考古学」『考古学の先覚者』中央公論社  
石川日出志 1992 「スコットランド国立博物館所蔵 N.G. マンロー資料中の有孔石剣と石包丁」『考古学雑誌』第 78 巻第 1 号  
池上 悟 1995 「明治期に考古学研究を果たした英国人達」『立正大学文学部論叢』第 101 号  
横浜市立博物館 N.G. マンロー生誕 150 年記念特別展 2013「N.G. マンローと日本考古学：横浜を掘った英国人学者」  
明治大学博物館 2018 特別展 「ウィリアム・ガウランドと日本の古墳研究」
- (3) J. クライナー編 2011 「もう 1 人のシーボルト—日本考古学・民族文化起源論の学史から—」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』同成社
- (4) J. クライナー編 1998 『黄昏のトクガワ・ジャパン』41 頁 日本放送出版協会
- (5) 日高薫編 2019 『異文化を伝えた人々 19 世紀在外日本コレクション研究の現在』臨川書店
- (6) 註 (1) 104 頁
- (7) 堅田智子 2019 「シーボルト兄弟の明治蝦夷見聞—日本民族アイヌ起源説と蝦夷植民地化計画をめぐる—」『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究Ⅱ』(平成 29 年度科学研究費助成事業 基盤研究 B 研究課題番号 17H02025) 報告書。48-49 頁



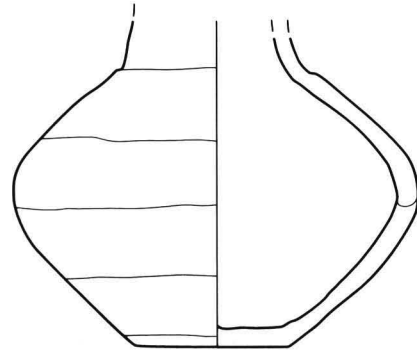


1

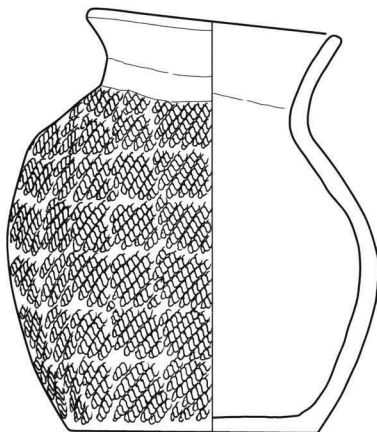
2



3



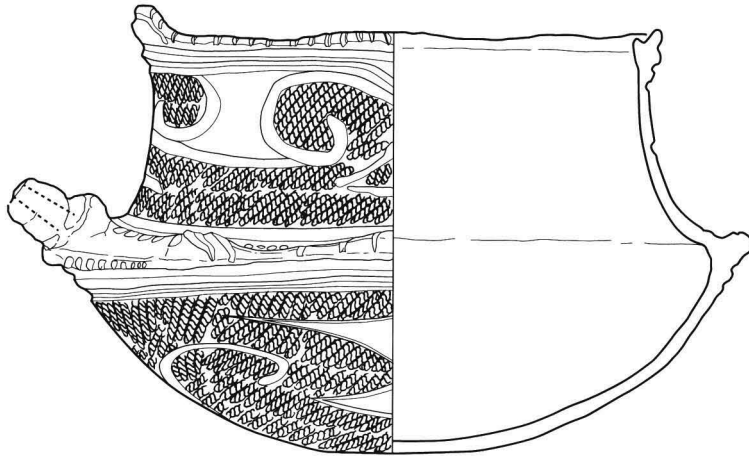
4



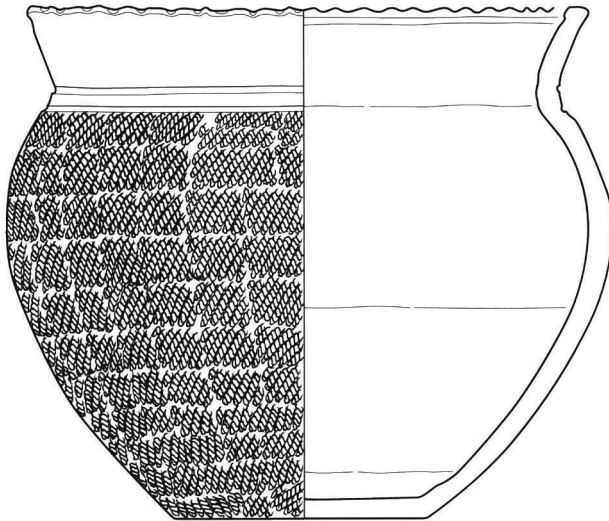
5

0 (S=1/2) 5 cm

图1 縄文土器



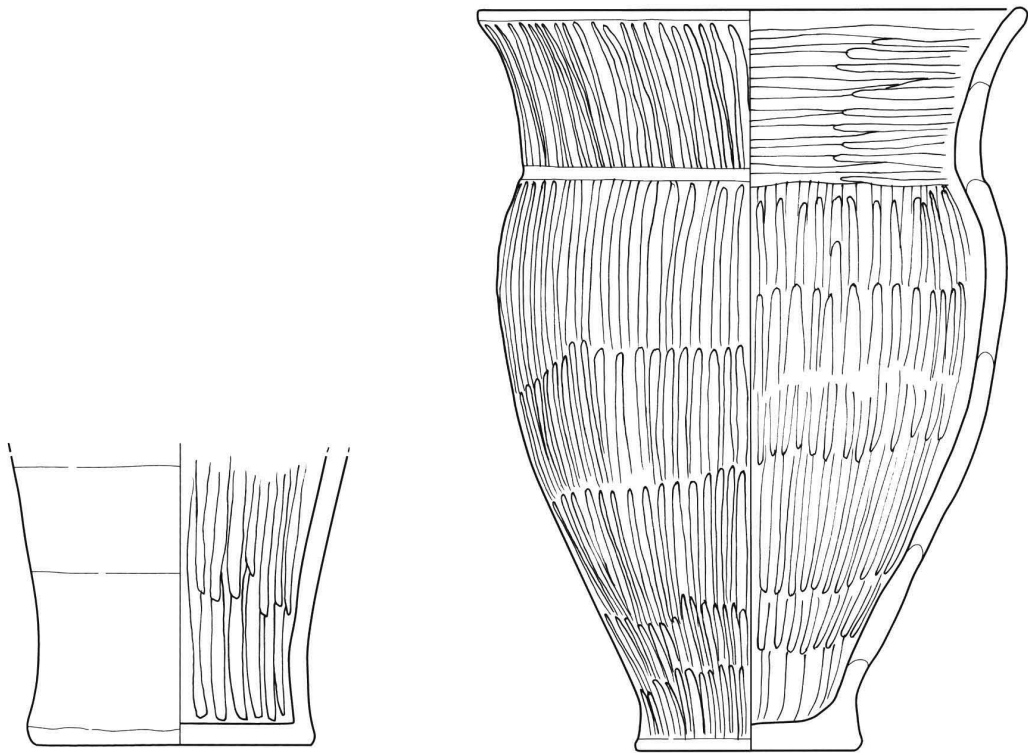
6



7

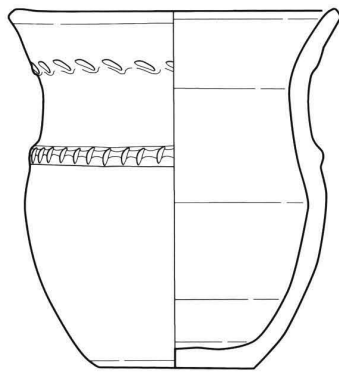
0 (S=1/2) 5cm

图2 縄文土器・北大式土器



8

9



10

0 (S=1/2) 5 cm

図3 縄文土器・北大式土器・オホーツク式土器

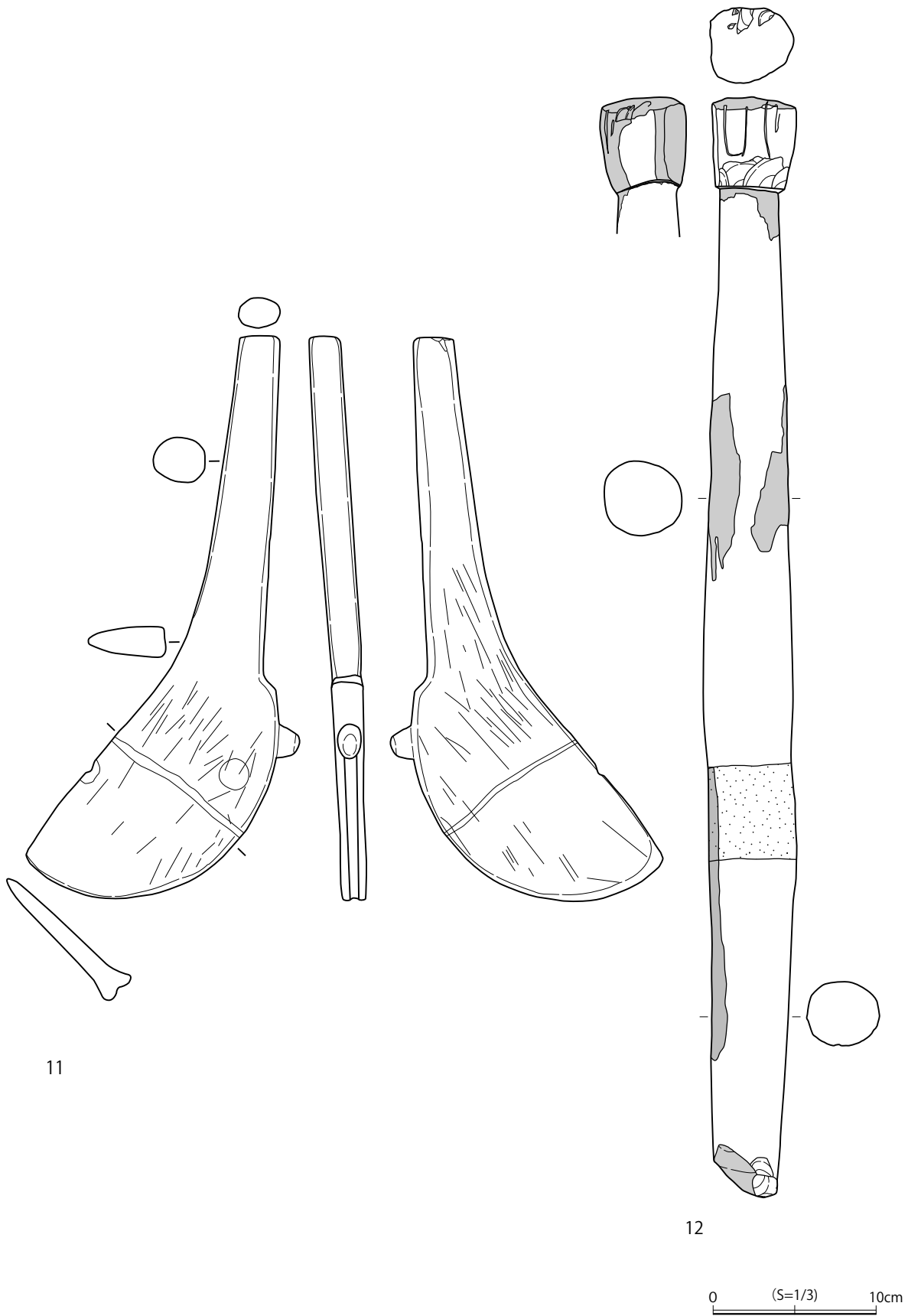
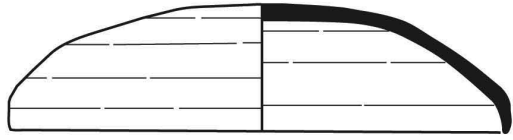
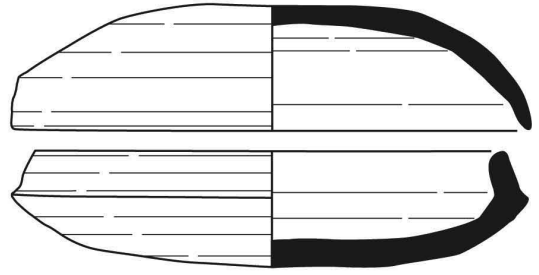


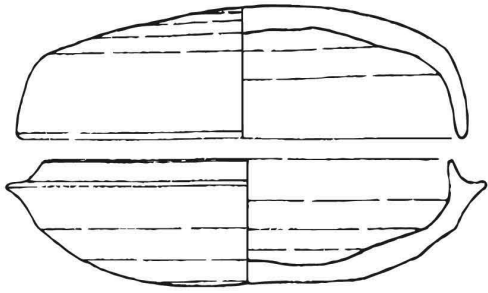
图4 石棒·青龍刀形石器



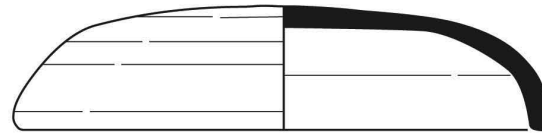
13



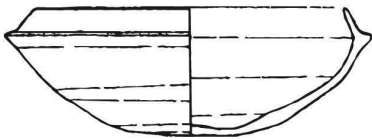
14



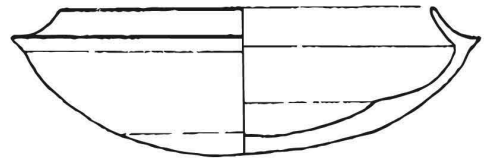
15



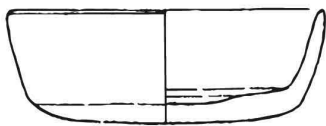
16 (写真なし)



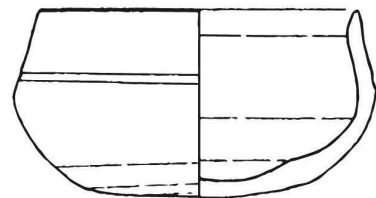
17



18



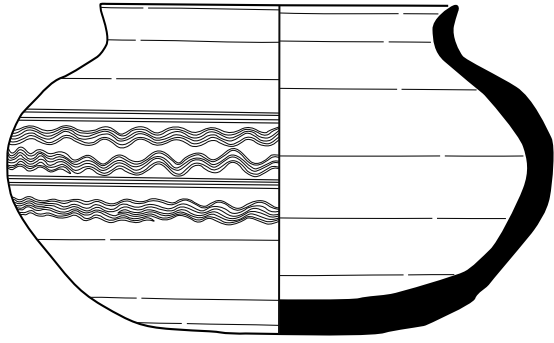
19



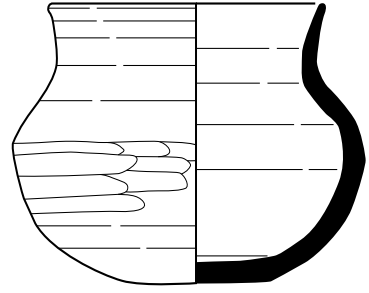
20

0 (S=1/2) 5 cm

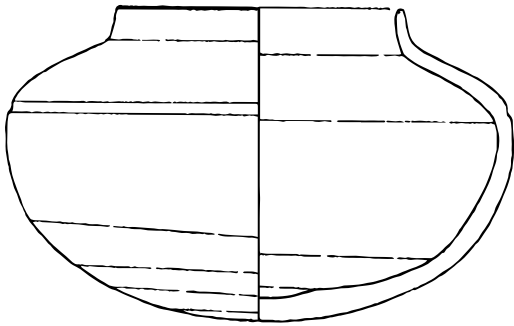
図5 須恵器 (1)



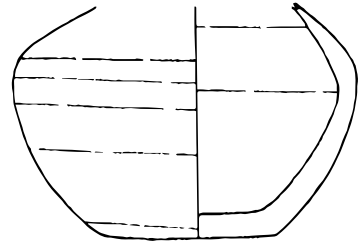
21



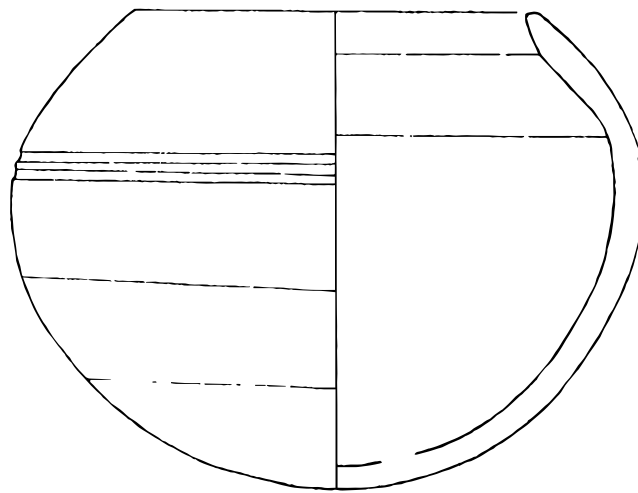
22



23



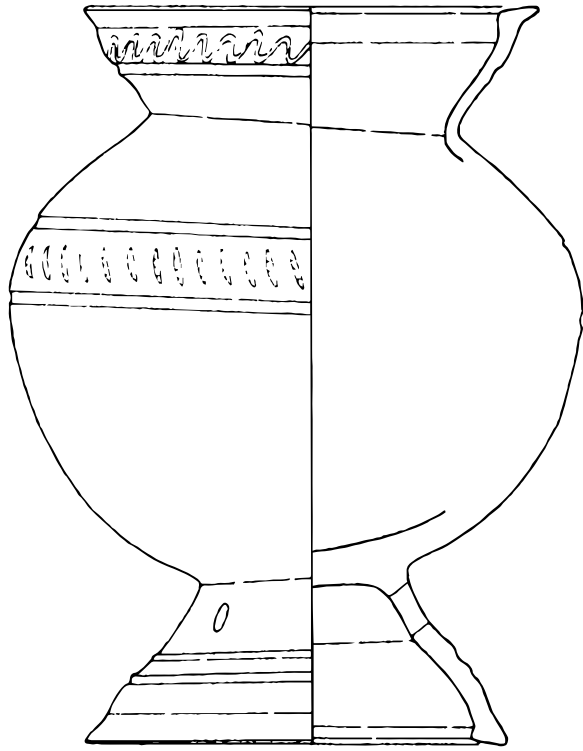
24



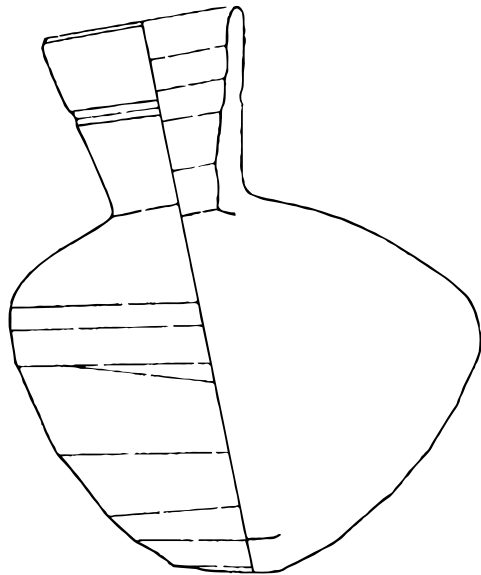
25

0 (S=1/2) 5 cm

图6 須惠器 (2)



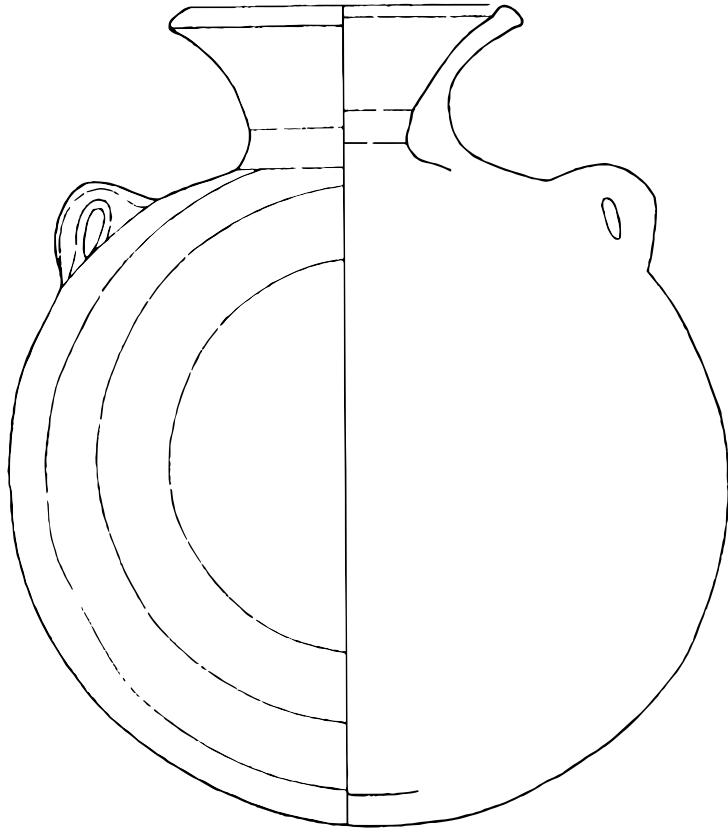
26



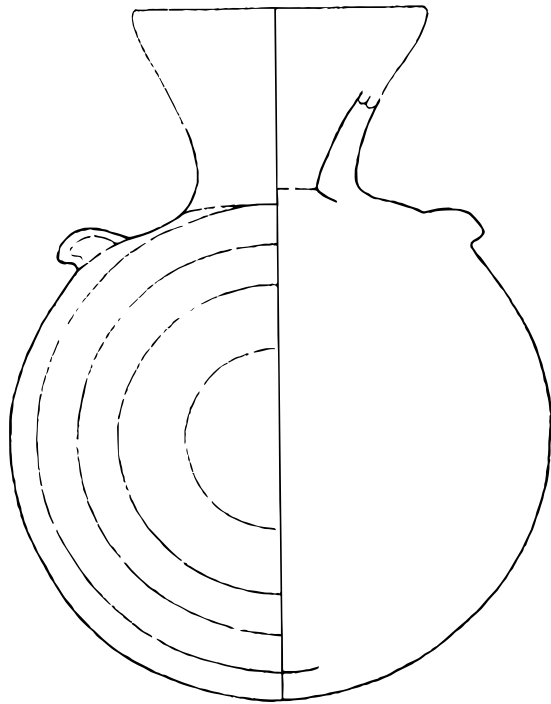
27

0 (S=1/2) 5 cm

图7 須惠器 (3)



28

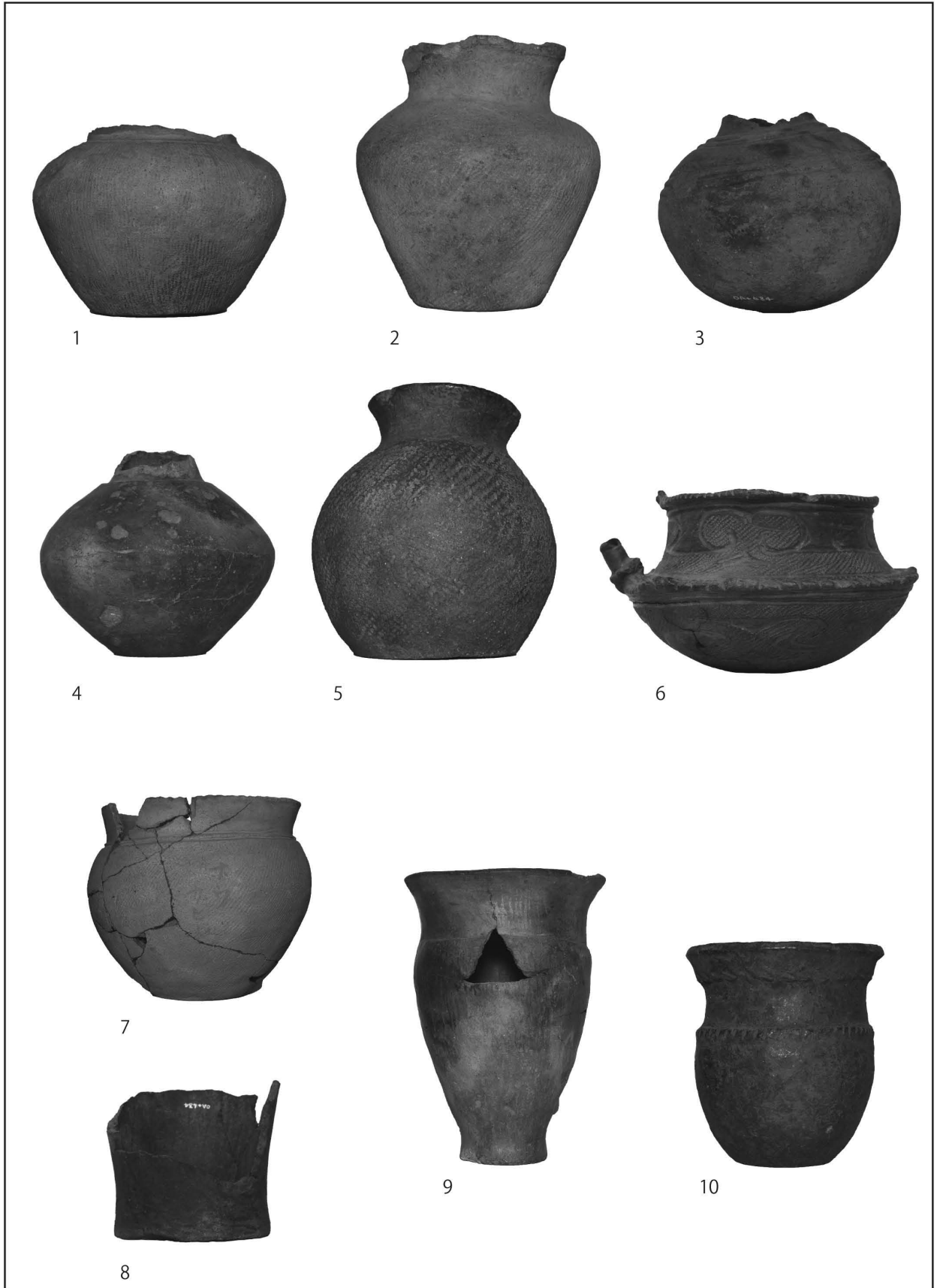


29

0 (S=1/2) 5 cm

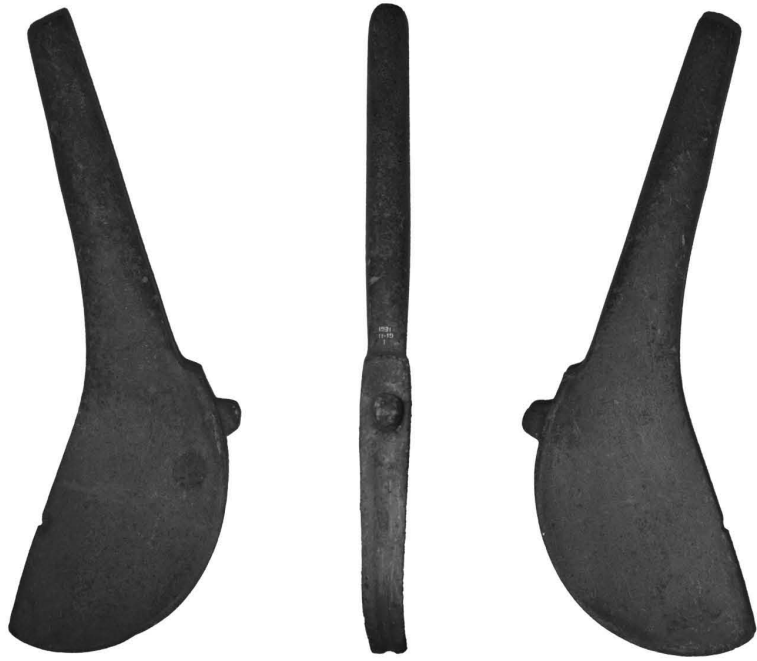
图8 須惠器 (4)





写真図版1 縄文土器・北大式土器・オホーツク式土器

(縮尺不同)



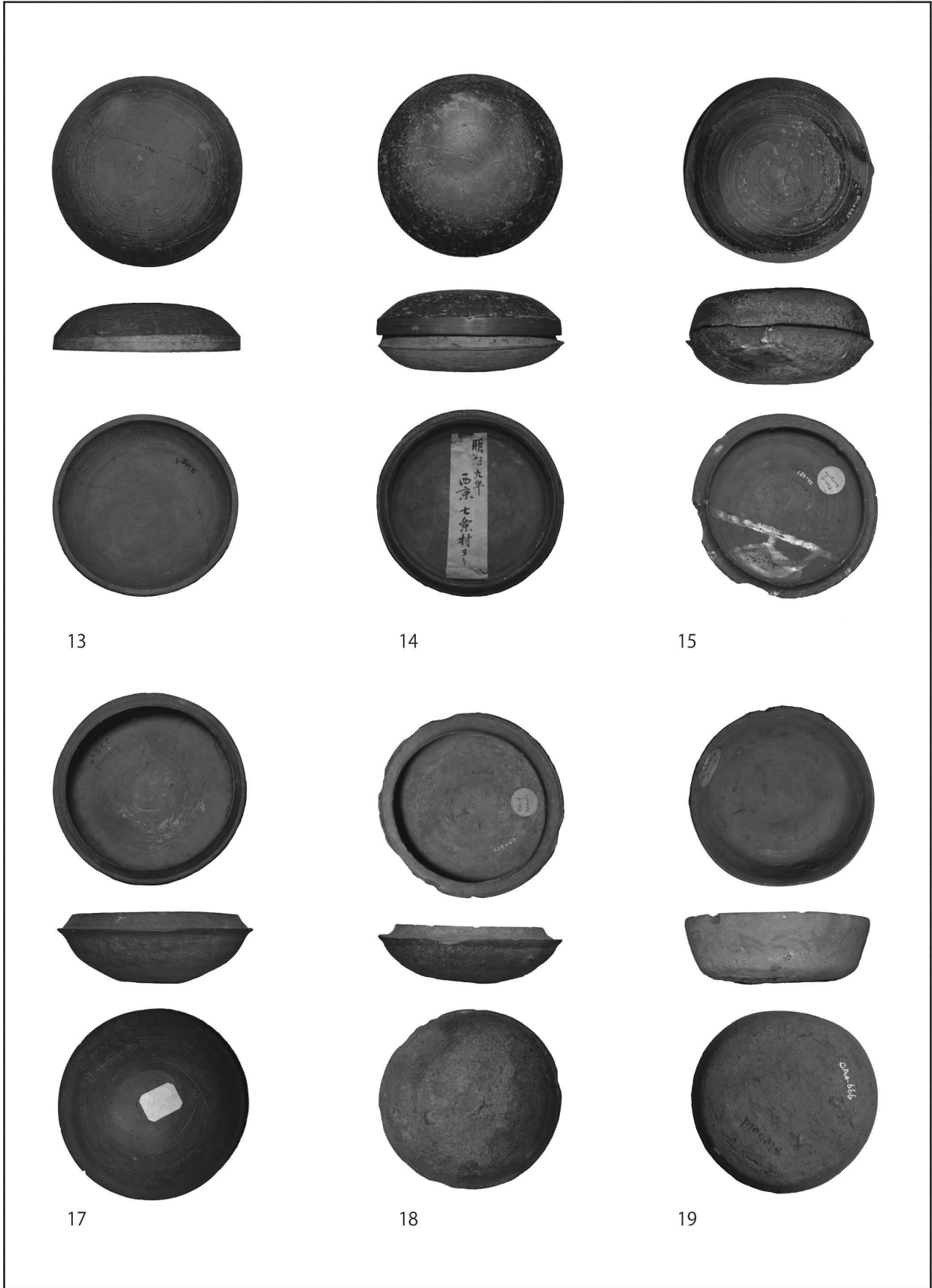
11



12

写真図版 2 石製品

(縮尺不同)



13

14

15

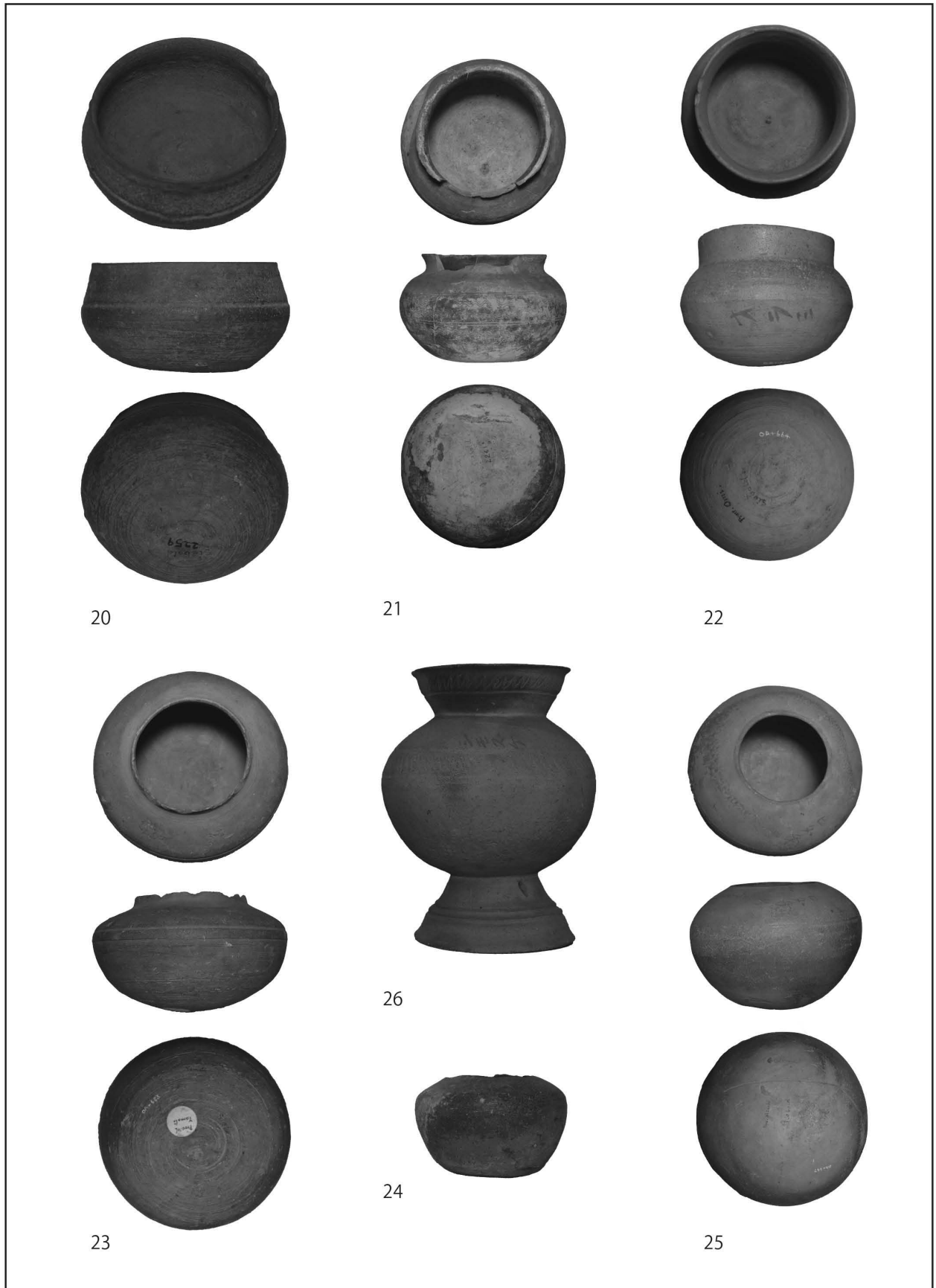
17

18

19

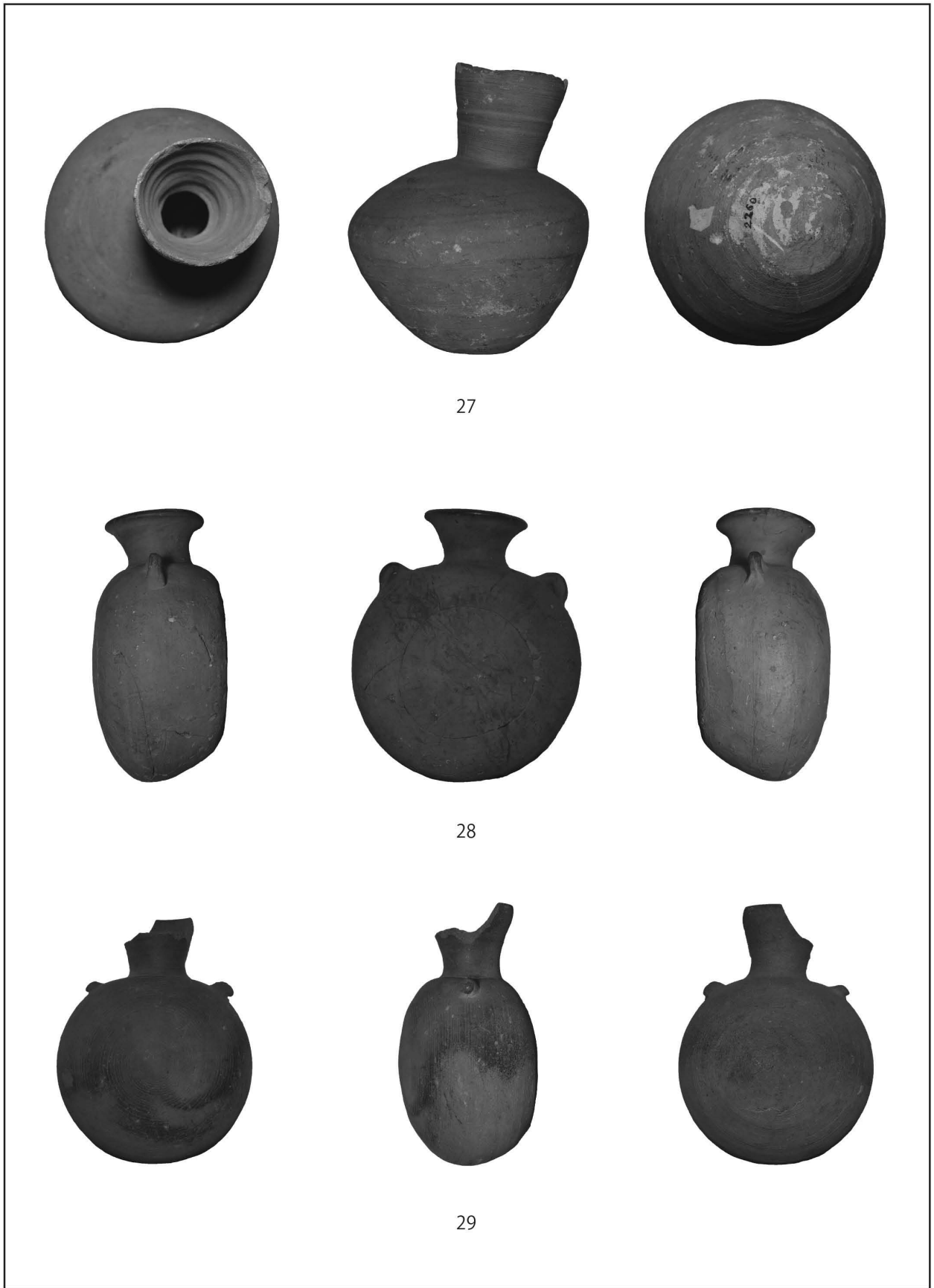
写真図版3 須恵器 (1)

(縮尺不同)



写真図版4 須恵器 (2)

(縮尺不同)



写真図版 5 須恵器 (3)

(縮尺不同)

表 1 縄文土器・北大式土器・オホーツク式土器観察表

図 No.	資料名	器種	型式 (時期)	法量					色調	調整	備考
				口径 (cm)	幅 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)			
1	OA654	注口土器	大洞 C 2 式	13.6			11.2	510	暗褐色		東北中部 底部上面に径 0.7 mm のあり 朱書きで「ホウカヒドウ」と記載
2	JA54	壺型土器	大洞 C 2 式	-	10.1	5.7	8.0	212			北海道・青森 朱書きで「ホウカヒドウ」と記載
3	OA635	壺型土器	大洞 C 2 式～A 式	7.2	10.9	5.2	12.0	400	灰褐色		北海道・青森 朱書きで「ホウカヒドウ」と記載
4	OA+684	壺型土器	大洞 A 式	3.2	9.7		8.4	243	赤褐色	ミガキ	北海道・東北地方 上部欠損
5	OA+647	壺型土器	大洞 A 式	2.8	10.5	4.0	9.4	228	暗褐色		北海道・東北地方 上部欠損 朱書きで「ヒタチ」
6	OA668	壺型土器	縄文晩期前半	6.5	10	6.6	11.2	319	暗褐色		北海道・東北地方
7	OA+634	深鉢?	北大式?	-		7.8	8.5	255		ミガキ	北海道 上部欠損、底部に網代痕あり 朱書きで「ホウカヒドウ」と記載
8	OA659	深鉢	北大 3 式 (7 世紀)	15.5	14.4	6.3	21.0	748	赤褐色	ミガキ	北海道石狩低地帯
9	OA662	鉢	大洞 C 2 式	14.6	15.0	6.6	13.6	590			北海道 朱書きで「ホウカヒドウ」と記載
10	OA640	小甕	オホーツク式土器 (オ ホーツク文化中期)		8.8		10.3	274	黒褐色		北海道・道東 7 世紀

表 2 石製品観察表

図 No.	注記	器種	時期	石材	法量			備考
					最大長 (cm)	最大径 (cm)	重量 (g)	
11	1931	青龍刀形石器	縄文中期末～後期前葉	閃緑岩か	33.3 (刀身部)	9.6 (刀身部)	842	全体的に新しめの擦痕あり 北海道・東北地方
					19.2 (柄部)	5.5 (柄部)		
12	OA +1230	石棒	縄文後期末～晩期	粘板岩	67.2	5.4	-	頭頂部に鼓打痕あり 中央部に接合の痕跡あり 北海道・東北地方

表 3 須恵器観察表

図 No.	注記	器種	推定年代	法量 (cm)			成形・調整	色調	備考
				口径	底径	器高			
13	2215 A	杯蓋	6世紀中～後期	14.4	-	3.8		実測図なし、写真のみ	
14	O A +651	杯蓋	6世紀中～後期	14.8	-	3.6	糸切り	朱書きで「ムサン」と記載 「明治九年西京七条村ヨリデル」のラベルあり	
		杯身		13.4	-	3.3	へら切り		
15	O A +687	杯蓋	7世紀初頭頃	12.6	-	3.8	へら削り	第5図11・12(池上1996)より引用 身・蓋ともに金漆での補修痕あり 蓋に朱書きで「コウツケ」と記載	
		杯身		11.6	-	2.6	へら切り へら削り		
16	Franks2257	杯蓋	6世紀中～後期	15.2	-	3.5	灰褐色	粗い砂粒子を含む 写真なし	
17	Franks2259A	杯身	6世紀中～後期	8.8	-	3.6	へら削り	第4図18(池上1996)より引用 底部粘土貼り付け 朱書きで「新羅味鄒王陵昨年為雨 / 所壊之此器出 焉真的 / 二千年古物不亦實乎 / 浣西職」と記載	
18	O A +677	杯身	7世紀前半	10.6	-	4.2	へら切り	(外面) 灰黒色 (内面) 淡灰褐色 第4図2(池上1996)より引用 外面の大半に自然釉 朱書きで「ヤマト」と記載	
19	O A +666	杯身	7世紀後半	9.0	-	3.2	へら切り	灰暗色 第4図8(池上1996)より引用 朱書きで「カワチ」と記載	
20	Franks2259	碗	7世紀前半代	9	(推定) 5.0	5.4	へら削り	第4図3(池上1996)より引用 朱書きで「ヤマト」と記載	
21	Franks2261A	短頸壺	6世紀中～後期	10.8	8.8	9.8			
22	O A +664	短頸壺	6世紀中～後期	8.4	(推定) 3.8	8.0	へら削り	明灰色 肩部に自然釉 朱書きで「オヲミ」と記載	
23	O A +683	短頸壺	7世紀初頭頃	8.6	-	9.0	へら削り	黒灰色 第4図5(池上1996)より引用 朱書きで「ヤマト」と記載	
24	O A +669	短頸壺	8世紀	-	5.2	(残存) 6.6		第4図4(池上1996)より引用 口縁部欠損、肩部に自然釉 朱書きで「ヤマト」と記載	
25	O A +667	壺	8世紀	-	-	(残存) 13.8	灰褐色	第5図17(池上1996)より引用 頸部を打ち欠いて平滑に仕上げる 外面上半部に自然釉 朱書きで「ヒダチ」と記載	
26	Franks2263	台付壺	6世紀末頃	12.6	-	21.7	灰褐色	第5図16(池上1996)より引用 朱書きで「シモツケ」と記載	
27	Franks2260	平瓶	7世紀後半	5.7	-	16.6	へら切り	暗灰褐色 第5図14(池上1996)より引用 朱書きで「三河口」と記載	
28	Franks2264	埴瓶	6世紀中～後期	10.2		24.1		第5図10(池上1996)より引用 胎土に古砂利を多量に混入 朱書きで「オヲミ」と記載	
29	O A +661	埴瓶	7世紀初頭頃	(推定) 7.0		(推定) 19.2	カキ目	黒灰色 第4図9(池上1996)より引用 朱書きで「イツミ」と記載	





平成 29 年度 科学研究費助成事業 基盤研究 B 研究課題番号 17H02025

「好古家ネットワークの形成と  
近代博物館創設に関する学際的研究」Ⅲ

令和 2 年 2 月 28 日発行

編集 内川隆志

連絡先 〒150-8440 東京都渋谷区東 4-10-28

國學院大學学術資料センター研究室

WEBサイト <http://hcra.sakura.ne.jp/hvsiebold/>

印刷 株式会社 小葉印刷所